

人文系学士課程教育における 卒業論文がもたらす学習成果の検証

「人文系学士課程教育における卒業論文がもたらす学習成果の検証」編集委員会編

神田 龍身 鶴間 和幸 佐藤 学
小島 和男 篠田 雅人 日下田 岳史
谷村 英洋 中世古 貴彦 中野 啓太

人文叢書 5
学習院大学人文科学研究所

人文系学士課程教育における卒業論文がもたらす学習成果の検証

目 次

1	はじめに	神田 龍身	1
2	「全国学科長調査」実施概要	篠田 雅人	2
3	人文科学系学士課程教育における卒業論文の意味付け	篠田 雅人・日下田 岳史	4
4	卒業論文の意味付けにみる人文科学系学科の現状－全国学科長調査の結果から－ (日本高等教育学会第 15 回大会発表資料)	篠田 雅人・日下田 岳史	15
5	日本語日本文学科の卒業論文・卒業試験について	神田 龍身	23
6	エビデンス無きものへのエビデンス	小島 和男	25
7	多彩な人文系諸学問と卒業論文	谷村 英洋	30
8	「学習院大学在学生調査」実施概要	谷村 英洋	34
9	文学部での学びと成長－卒業論文に着目して－	谷村 英洋	36
10	人文科学系の卒業論文と学説の成長感－学習院大学文学部における事例研究－	中世古 貴彦	45
11	人文科学系学科の卒業論文と学習成果－A 大学文学部における事例研究－ (日本高等教育学会第 16 回大会発表資料)	中世古 貴彦	50
12	卒業論文を書くことと読むこと	鶴間 和幸	54
13	学士課程教育の「出口」としての卒業論文－文学部における学びが学習成果に 与える影響－	中野 啓太	56
14	大学教育における卒業論文の意義－研究を始める前提－	佐藤 学	67
15	「学習院大学卒業生調査」実施概要	篠田 雅人	70
16	人文科学系学士課程教育の成果－学習院大学卒業生調査の結果から－ (日本高等教育学会第 17 回大会発表資料)	篠田 雅人・中世古 貴彦・谷村 英洋・日下田 岳史	72
17	卒業生調査報告－自由回答からみる卒業論文の執筆効果－	日下田 岳史	84
18	卒業生調査から得られたサンプルの一般的意義について	日下田 岳史	94
19	職業生活に寄与する文学部での学び	中世古 貴彦	96
20	「就活で忙しいから卒論どころではなかった」は本当か？	篠田 雅人	100
21	平成 23 (2011) 年度 共同研究プロジェクト活動報告		104
22	平成 24 (2012) 年度 共同研究プロジェクト活動報告		108
23	平成 24 (2012) 年度 人文科学研究所講演会「文学部で学んでなんになる!？」 実施概要	篠田 雅人・日下田 岳史・中世古 貴彦・谷村 英洋	114
24	平成 25 (2013) 年度 共同研究プロジェクト活動報告		116
25	平成 25 (2013) 年度 人文科学研究所講演会「文学部で学んでどうなった!？」 実施概要	篠田 雅人・日下田 岳史・中世古 貴彦・谷村 英洋	122
26	おわりに	鶴間 和幸	124

【付録】

付録1	学科長調査依頼状	125
付録2	学科長調査単純集計表	126
付録3	学科長インタビュー① 西南学院大学	130
付録4	学科長インタビュー② 福岡国際大学	151
付録5	学科長インタビュー③ 藤女子大学	170
付録6	在学生調査単純集計表	185
付録7	在学生調査クロス表	189
付録8	卒業生調査依頼状	195
付録9	卒業生調査単純集計表	196
付録10	卒業生調査クロス表	202

執筆者（所属・呼称は平成27年3月1日現在）

神田 龍身	学習院大学	文学部	日本語日本文学科	教授
鶴間 和幸	学習院大学	文学部	史学科	教授
佐藤 学	学習院大学	文学部	教育学科	教授
小島 和男	学習院大学	文学部	哲学科	准教授
篠田 雅人	学習院大学	人文科学研究所	客員所員	
	学習院大学	学長室	経営企画課	主事
日下田 岳史	大正大学	教育開発推進センター	総合IR室	助教
谷村 英洋	立教大学	大学教育開発・支援センター		学術調査員
中世古 貴彦	独立行政法人国立美術館		本部事務局	
中野 啓太	東京大学大学院	教育学研究科		修士課程

はじめに

学習院大学人文科学研究所共同研究プロジェクト

「人文系学士課程教育における卒業論文がもたらす学習効果の検証」

研究代表者 神田 龍身

日本における文学部教育は、文献講読を進めながら先行研究の検証を行うことをベースとしており、学生はその集大成として、卒業年次に「卒業論文」を仕上げる、というのが伝統的なスタイルである。この教育スタイルは、我々教員が学生だった頃も同様であった。そのため、「卒業論文」を作成すること、させることそのものに何ら疑問を抱いてこなかった。

一方、社会の文学部教育に対する目が厳しいという現実もある。その論拠は、概ね「文学部での学びは、特に学生の就職という点において役に立たない」というものである。確かに、就職という点においては、社会科学系や理工系学部の卒業生はレリバンスが明確であり、伝統的な学問である「文学」を扱っている文学部は、いつしか社会から「役に立たない学部」と位置づけられてしまったと考えるのは、ある意味自然なことなのかもしれない。

しかも、近年の「大学教育の質保証」をめぐる議論の中では、多様な学生の教育課程のプログラム化の推進や、学生の大学教育における学習成果を可視化等が要求され、いわゆる学生の学力低下問題への対応を含め、従来型の文学部教育の在り方を検証することが不可避になった。学習院大学文学部としても、「卒業論文を書かせることが困難な学生が増えた」や、「他大学の文学部では、カリキュラム上、卒業論文をどのような位置づけにしているのかを知りたい」といった声があがっていた時期にあった。

そこで、平成 23 (2011) 年度に学習院大学文学部の付置研究機関である人文科学研究所の共同研究プロジェクト「人文系学士課程教育における卒業論文がもたらす学習効果の検証」を立ち上げ、調査研究を行うこととした。平成 25 (2013) 年度までの3年間で、全国の国公立大学・私立大学の人文科学系学科を対象とした「全国学科長調査 (機関調査)」、学習院大学文学部を卒業予定の4年生を対象とした「在学生調査」、学習院大学文学部を卒業して一定程度経過した卒業生を対象として実施した「卒業生調査」の3つの質問紙調査を実施した。実際に卒業生を送り出す経験を持つ一教員としては、「卒業論文を書いて良かった」、「卒業論文を仕上げたことが非常に良い経験になった」という卒業生の声が届くことも多く、卒業論文執筆の意義を感じてはいた。しかし、学習院大学文学部としては、少なくとも卒業論文に関する教育・学習成果についてこれまで実証的な検証をしたことがなかったわけだが、これらの調査の結果、卒業論文をカリキュラムとしていることの意義を確信するに至った。本書は、これらの研究成果について、プロジェクトメンバー等が様々な観点から分析・報告するものである。

実証的な検証という意味では、本プロジェクトが行ってきたのは、最近注目を集めている大学におけるIR (インスティテューショナル・リサーチ) に期待される機能そのものであり、今後のIR活動の一助となるものと確信している。

「全国学科長調査」実施概要

篠田 雅人

学習院大学人文科学研究所の共同研究プロジェクト「人文系学士課程教育における卒業論文がもたらす学習効果の検証」では、平成 23 (2011) 年度から平成 24 (2012) 年度にかけて 3 つの質問紙調査を実施した。本節では、その中で一番最初に実施した「人文科学系学科の卒業論文についての調査」(以下、「全国学科長調査」)の実施概要について報告する。

1. 問題意識・研究の背景

中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」や、日本学術会議回答による「大学教育の分野別質保証の在り方について」等、「大学教育の質保証」をめぐる議論の中で、工学をはじめとする理工系学科については、その教育課程・内容と卒業後の進路とのレリバンスが先行研究によって明らかにされつつある。しかし、人文科学系学科においては、先行研究による明確な研究成果がない状態であった。

そのため、本研究プロジェクトでは、学士課程教育における「卒業論文・卒業研究というカリキュラムの存在が教育成果として有効に機能する可能性」を指摘した先行研究¹を踏まえ、人文科学系学科に特徴的とされる「卒業論文」(卒業研究等を含む)の教育課程上の位置付け、期待される学習成果などを検証することにより、「卒業論文」を必修としている人文科学系の学士課程教育の有効性を検証することを目指し、全国の国公立大学・私立大学の人文科学系学科長を対象に質問紙調査を実施することとした。

2. 調査対象

対象学科の抽出は、以下の手順に拠った。

- ① 「平成 22 年度 文部科学省・学校基本調査」の「学科系統分類表」上の大分類「人文科学」の全学科および大分類「その他」のうち、中分類「人文・社会科学関係」に該当する学科名称を全て抽出した。
 - ② 国立・公立大学については、財団法人文教協会(当時)が発行している『全国大学一覧』(平成 23 年度)から、当該名称を持つ学科を抽出した。
 - ③ 私立大学については、独立行政法人日本私立学校振興・共済事業団の協力により、「学校法人情報検索システム(平成 22 年度データ)」の提供を受け、当該名称を持つ学科を抽出した。
 - ④ ①と②・③の結果から、調査対象となる全国の国公立大学・私立大学・学科を特定した。
- 以上の結果、調査対象は、表 1 のとおり、計 1,106 学科となった。

表 1 「全国学科長調査」対象学科

	国立大学	公立大学	私立大学	合計
対象学科数	77 (7.0%)	54 (4.9%)	975 (88.2%)	1,106 (100.0%)

3. 実施方法・時期

平成 23 (2011) 年 11 月から平成 24 (2012) 年 1 月にかけて、全て郵送法により実施した。なお、当初期日までに回答いただけなかった学科長には、督促を兼ねた質問紙の再送付を平成 23 (2011) 年 12 月に行った。

4. 回答状況

督促を行ったこともあり、回答学科数は、国立大学 47 学科、公立大学 28 学科、私立大学 475 学科の計 550 学科、回答率は 49.7%と、想定以上の回答を得ることができた。

なお、実際の分析に使用した有効回答数は、国立大学 45 学科、公立大学 28 学科、私立大学 414 学科の合計 487 学科であった。回答学科数との差 (63 学科分) は、調査時点が学科の新設・改組・廃止の直後または直前に当たるため、分析に適さないと判断した学科を除外したために生じたものである。

表 2 「全国学科長調査」回答学科数・有効回答学科数

	国立大学	公立大学	私立大学	合計
回答学科数	47 (8.5%)	28 (5.1%)	475 (86.4%)	550 (100.0%)
有効回答学科数	45 (9.2%)	28 (5.7%)	414 (85.0%)	487 (100.0%)

5. 学科長インタビュー調査の実施

質問紙調査の結果、卒業論文の必修・選択の履修制度変更をはじめとした特徴的な回答をいただいた学科のうち、より詳細に内容確認することが必要と判断した学科については、学科長インタビュー調査を実施することとした。検討の結果、平成 24 (2012) 年から平成 25 (2013) 年にかけて、訪問調査をご承諾いただいた計 5 学科の学科長先生に対して、インタビュー調査を実施することができた。ご多忙の折、長時間にわたるインタビュー調査をお受けいただいた先生方に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

なお、インタビュー調査を実施した 5 学科のうち、西南学院大学文学部英文学科、福岡国際大学国際コミュニケーション学部国際コミュニケーション学科、藤女子大学文学部文化総合学科の 3 学科の学科長先生からは、インタビュー記録の本報告書への掲載にも同意いただいた。掲載内容の確認等にも全面的にご協力いただき、感謝の念に堪えない。このインタビュー記録には、学科長先生の人文科学系学士課程教育に対する想いが詰まっている。本報告書の後半に付録として掲載しているので、是非ご覧いただきたい。

¹ 日本私立大学協会付置私学高等教育研究所プロジェクト「学士課程教育の改革状況と現状認識に関する調査」(プロジェクト代表: 濱名 篤 関西国際大学学長)

人文科学系学士課程教育における卒業論文の意味付け

篠田 雅人・日下田 岳史

1. 研究の背景と目的

2008年12月に公表された中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」（以下、「学士課程答申」）は、「今後の少子化の進行に伴い、（中略）過度の受験競争が大きな社会問題とされた時代と異なり、入試を通じた入口の質保証の機能は大きく低下している」ものの、「大学が幅広く多様な学生を受け入れ、学士課程教育を通じて、自立した市民や職業人として必要な能力を育成していく」ため、「教育の質的な転換・革新と、教育力の飛躍的向上が求められる」とし、「ユニバーサル段階」に達した大学教育における質的変化の必要性について触れられている。確かに、学士課程教育の質保証を推進するに際しては、教育課程の「体系化・構造化」が必要だろう。しかし、学士課程答申は、「かねて我が国の学士課程の教育課程については、科目内容・配列に関して個々の教員の意向が優先され、必ずしも学生の視点に立った学習の系統性や順次性などが配慮されていない、あるいは、学生の達成すべき成果として目指すものが組織として不明確である、などの課題が指摘されてきた」とし、中でも、「学士課程の学生の約半数を占める人文・社会系の学科での教育課程の体系化・構造化に向けた取組が十分でない」と、人文・社会系の教育課程の見直しの必要性を指摘している。

人文科学系については、卒業論文を重視する教育課程に特徴があると言われている。私学高等教育研究所（2011）の調査結果が、それを裏付けている。卒業論文の意義について、関（1982）は、「学生の主体性を尊重した最も能動的な教育プロセス」、「学問研究の原体験、追体験の場」、「専門教育の主要各科目の内容を総合的に深く理解させうる場として機能しうる可能性を有する」、「基本的諸知識の応用力および問題解決能力の育成に寄与する点が多い」、「一つ一つ解決」していくという「達成体験は学生の『学び問う姿勢』の回復のみならず、人格形成にも寄与する点が少ない」とまとめている。

黒河内（2008）も、卒業論文を、教育課程の体系的な編成を可能ならしめ、かつ、社会が必要とする人材を育成するための手段として位置付けている点で注目している。しかし、黒河内（2008）も課題として挙げているように、卒業論文の意義や目的、必要とされる知識や技能、卒業論文を必修科目とする学科の数、単位数といった、学士課程教育上の卒業論文の位置付けの今日的な全体像は明らかでない。

関（1982）および私学高等教育研究所（2011）の指摘から推測されるように、人文科学系の学科には、卒業論文を学士課程教育の集大成として見なそうとする強い信念がありそうである。他方、政府の審議会の立場からは、人文科学系の教育課程はそもそも「体系性」に課題があるものと見なされている。「体系性」に欠けると見なされながらも、最終的に卒業論文の執筆が教育課程の中心に据えられているという点において統合性が確保されていると信じられているものが、人文科学系の学士課程であると言えるのではないかと。

一方、学士課程答申は、成績評価の厳格化に関連し、「各大学の実情に応じ、在学中の学習成果を証明する機会を設け、その集大成を評価する取組を進める」と提言している⁽¹⁾。

人文科学系学科からみれば、教育課程の集大成として位置付けているのは、まさに卒業論文である。卒業論文の位置付けの実情と、卒業論文の執筆経験による効果を検証する基礎的な実証研究には、卒業論文等の「教育課程の集大成」が大学教育の質保証を担保しうるか否かを問い、その解決に寄与するという可能性が秘められているのではないか。

2. 学士課程教育における卒業論文の位置付けとその変化

本節では、共同研究プロジェクトの一環として実施された「人文科学系学科の卒業論文についての調査」（以下、「学科長調査」）⁽²⁾に基づき、授業科目としての卒業論文の開設状況とその必修・選択制の変化について確認し、現在の人文科学系学士課程教育における卒業論文の位置付けを探索する。

2. 1 調査概要

学科長調査は、全国国公立大学の人文科学系学科を母集団とする機関調査である。調査票の配布は以下の手続きによった。第一に、『学校基本調査』（平成22年度）の「学科系統分類表」を用いて、「人文科学」に分類される学科名称を抽出した。第二に、『全国大学一覧』（平成23年度）等を用いて、当該名称を持つ学科を設置する全国の国公立大学名を特定した。第三に、当該大学の各学科長を対象に、2011年11月に郵送法により調査票を送付して回答を依頼した。調査対象の学科数および有効回収数等は表1の通りである。

表1 調査対象学科数・回答数および設置者別構成

	n	国立大学	公立大学	私立大学
対象学科数	1,106	7.0%	4.9%	88.2%
回答学科数	550	8.5%	5.1%	86.4%
有効回答学科数	487	9.2%	5.7%	85.0%

(注) 回答学科数と有効回答学科数の差は、調査時点が学科の新設・改組・廃止の直後または直前に当たるため分析に適さない学科を除外したために生じたものである。

2. 2 授業科目としての卒業論文の開設状況

学科長調査は、授業科目としての卒業論文の開設状況、単位数、必修・選択の別、卒業論文指導科目の有無等を質問している。卒業論文の授業科目としての開設状況についての回答は表2のとおりである⁽³⁾。

表2 授業科目としての卒業論文の開設状況

	必修	選択制	設置なし	n
国立大学	91.1%	8.9%	0.0%	45
公立大学	85.2%	14.8%	0.0%	27
私立大学	71.9%	26.2%	1.9%	413
合計	74.4%	23.9%	1.6%	485

独立性の検定（フィッシャーの正確確率検定） p=.045

国公立合計で見ると、卒業論文を必修として開設している学科は74%、選択制を含めると98%超である。また、設置者別に見ると、国公立よりも私立の方が、卒業論文を必修科目としている学科が少ない傾向にあることが判明した。

2.3 卒業論文の単位数

必修・選択制の別、大学設置者別に卒業論文の単位数を集計したものが表3である。平均単位数を見てみると、必修の場合、国立8.3、公立6.9、私立6.1となっている。選択制の場合は、国立7.0、公立7.0、私立5.6となっている。必修・選択制のいずれであっても、私立の単位数が少ない傾向にあることが判明した。各学科の卒業要件単位数そのものは直接の調査項目とはしなかったものの、大学設置基準で定められている最低の卒業要件である124単位を大幅に超過する要件を設定している学科が多いとは思われない⁽⁴⁾。少なくとも、人文科学系と社会科学系とで比較した場合、人文科学系学科の方が卒業論文の単位数が多いことが、私学高等教育研究所(2011)の調査によって明らかになっている。人文科学系学科では教育課程上卒業論文が重視される傾向が、単位数に現れていると解釈できる⁽⁵⁾。

以上の結果から、設置者によって差がないわけではないものの、卒業論文は人文科学系学科の教育課程を代表する授業科目の一つであることが確認できた。しかしながら、卒業論文の平均単位数に見る限り、国公立に比べ、私立の方が、卒業論文の位置付けが相対的に軽いと言えるかもしれない。

表3 卒業論文の単位数

	単位数	0	2	3	4	6	8	9	10	12	16	n
必修	国立大学				10.8%	16.2%	32.4%	2.7%	29.7%	5.4%	2.7%	37
	公立大学		5.0%	5.0%	15.0%	15.0%	45.0%		15.0%			20
	私立大学	0.7%	4.3%		34.2%	17.1%	39.5%	0.4%	1.1%	2.5%	0.4%	281
選択制	国立大学				50.0%		25.0%			25.0%		4
	公立大学				25.0%		75.0%					4
	私立大学		5.7%		41.9%	23.8%	25.7%		1.0%	1.9%		105

2.4 S/T比

学科の専任教員数と正規学生数の設置者別平均値と、その平均値から算出したS/T比をまとめたものが表4である。

表4 S/T比

	専任教員数	日本人学生数	外国人学生数	学生数計	S/T比
国立大学	43	492	7	499	11.60
公立大学	21	327	3	330	15.71
私立大学	16	489	16	505	31.56

私立は国立の約3倍、公立の約2倍の学生を指導していることになっており、その教育負担の差が大きいことが改めて明らかになったと言える。私立大学は、国公立大学ほど卒

業論文を教育課程上重視することが難しい環境に置かれていると解釈できるだろう。

2. 5 卒業論文指導科目の有無と当該科目の週当たり平均授業コマ数

「卒業論文を学生に書かせる」ということは、当然ながらそのための指導が必要になる。学科長調査では、4年生を対象とした、卒業論文の指導を行うための指導科目の有無、卒業論文指導科目がある場合の週当たり授業コマ数についても回答を得ている（表5）⁽⁶⁾。上述のS/T比および授業科目としての週当たり平均授業コマ数を見る限り、卒業論文が必修の場合は国立の指導が充実していると言える。

表5 卒業論文指導科目の有無と週当たり平均授業コマ数

【卒業論文が必修の場合】				【卒業論文が選択制の場合】					
	卒業論文指導科目		「あり」の場合の週当たり平均授業コマ数	n		卒業論文指導科目		「あり」の場合の週当たり平均授業コマ数	n
	あり	なし				あり	なし		
国立大学	82.1%	17.9%	1.8	39	国立大学	75.0%	25.0%	1.0	4
公立大学	85.7%	14.3%	1.1	21	公立大学	75.0%	25.0%	1.0	4
私立大学	83.7%	16.3%	1.1	288	私立大学	69.4%	30.6%	1.3	108
合計	83.6%	16.4%	1.2	348	合計	69.8%	30.2%	1.1	116

2. 6 卒業論文の開設状況の変化

大学設置基準の大綱化以降に教育課程改革等を行った大学が多いと予想されたことから、1990年以降の卒業論文の開設状況の変化について確認した（「わからない」「その他」という回答は除いている）。ケース数は少ないものの、卒業論文の開設状況が変化した学科の割合をみると、国立・私立の「必修→選択制」への移行が目立っている（表6）。

表6 卒業論文の開設状況の変化（1990年以降）

現在 変化	必修			選択制			開設なし		合計
	変化なし	選択制から変更	開設なしから変更	変化なし	必修から変更	開設なしから変更	変化なし	選択制から変更	
国立大学	30 85.7%	1 2.9%	0 0.0%	1 2.9%	3 8.6%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	35 100.0%
公立大学	20 83.3%	0 0.0%	0 0.0%	3 12.5%	1 4.2%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	24 100.0%
私立大学	254 69.6%	12 3.3%	3 0.8%	52 14.2%	29 7.9%	10 9.5%	4 1.1%	1 0.3%	365 100.0%

また、現在の卒業論文が「選択制」もしくは「開設なし」の場合に限り、1990年以降において卒業論文の開設状況が変化した理由を複数回答可で尋ねた（表7）。必修から選択制に変更した学科のうち、私立に注目すると、「学生の学力低下のため」（16学科）、「教員多忙化のため」（9学科）という理由が目立っている。その他の特徴的な理由を、自由記述の中から抽出した。すると、「資格取得や就職活動により力を入れるため」、「就職活動が長期化している」、「入学生が多様化しているため」というように、就職活動による影響や、進学率上昇に伴う多様な学生の入学を理由に、結果として教育課程上の卒業論文の位置付けを相対的に低下させたことをうかがわせる回答も見られた。中には、

「就職が決まっている学生の卒論が水準に達していなくても必修であるため、不本意ではあるが単位を認めることが出てきた」という回答もあった⁽⁷⁾。このような回答から、卒業論文を必修として課すことの意味が空洞化している現状もうかがわれる。

開設なしから選択制に変更した10学科については、「教育水準向上のため」「学生の学力向上のため」といった、教育・学習の面で積極的な理由を挙げているのが特徴的である。なお、卒業論文を授業科目として開設していない場合であっても、卒業論文に代わるものとして何かしらの指導を行っている学科が少なからずあることを付記しておく⁽⁸⁾。

表7 卒業論文の開設状況が変化した理由（1990年以降）

	必修 →選択制		開設なし →選択制
	国立	私立	私立
学生の学力低下のため		16	
教員多忙化のため	1	9	
学生多忙化のため		5	1
学生確保のため		1	
卒論以外が充実のため	1	6	
教育水準向上のため		3	5
学生の学力向上のため	1	3	6
卒業時満足度向上のため		6	5

2. 7 小括

わが国の大学の人文科学系学科は卒業論文を重視していると言われてきたが、データに基づき、改めて実証的に確認することができた。このことを象徴する言葉として、「人文科学系の学部・学科にとっては、卒論が、大学らしい教育の最後の砦」であるという趣旨の意見が、学科長調査への回答として少なからず寄せられている。このような卒業論文重視の姿勢は、もしかすると、研究大学出身の大学人が「大学らしさ」を守ろうとする強い信念の表れ、または、大学の歴史的な制度に由来する産物なのかもしれない⁽⁹⁾。しかし、「最後の砦」という言葉が示唆しているように、学士課程教育は、これまでのデータが示すように変化を余儀なくされ、卒業論文を重視したいとしてもそれが難しい状況に追い込まれている可能性がある。

他方、大学側の卒業論文重視の姿勢は、それを課すことで実際に得られる教育効果に裏付けられたものかどうか、明らかでない。卒業論文の執筆から期待される効果は、実際には学生の学力等に応じて、多様に謳うことができるためである。学科長調査の自由記述には、例えば、卒業論文は、学士課程教育の「創造性の指標」として位置付けられるという意見もあれば、書き言葉の習得のために欠かせない作業であるといった意見もみられる。その他、「学力低下のため、一部の大学を除いて卒業論文を課すことには無理があり学習効果に疑問がある」という意見もある。卒業論文の執筆から期待される効果として謳われる内容は、裏付けの有無はともかく、広範囲に渡る。

このことは、学士課程教育における卒業論文は重要だと見なされながらも、その意味が曖昧化していることを示唆している。

3. 推薦入試等の定員割合と大学設置者にみる、人文科学系学科の卒業論文の意味の探索

ここでは一つの試みとして、人文科学系学科における卒業論文の意味が曖昧化している様子を、募集定員に占める推薦入試等の定員の割合と、大学設置者という 2 つの視点から描き出してみたい。

わが国の人文科学系学科における卒業論文とは、歴史的に見て、そもそもどのように意味付けられたものだったのだろうか。東京大学文学部では、かなり早期の段階から卒業論文が課せられていた。しかし、卒業論文が課せられた理由についての記述は特にない（東京大学百年史編集委員会 1986: p. 415）。そこで一つの手がかりとなるのが、学問分野は異なるが、京都帝国大学法科大学の事例である。同大学は、「学生の研究心とその実地応用の能力を啓発し、独創力を涵養すること」を目的として、「毎年定められる複数の論題の中から1つを選択して論文を作成」（京都大学百年史編集委員会 1997: p. 244）させるという方法で、卒業論文を課していた⁽¹⁰⁾。人文科学系の卒業論文においても独創性が期待されたことは、想像に難くない。京都帝大文科大学の場合、「専攻科目に関する研究に従事せしめて論文を提出すること」（前掲書 p. 41）とされていた。ただし、当時の大学は、トロウ（訳書 1976: p. 129）の言うエリート高等教育であったことには留意する必要があるだろう。

それでは、現在のわが国の人文科学系学科では、独創性はどの程度重視されているのだろうか（表8）。

表8（度数分布） 卒業論文の評価時に重視する程度

	とても	ある程度	あまり	全く	n
問題設定の適切性	47.8%	48.7%	3.1%	0.4%	450
先行研究のレビュー	29.0%	61.2%	9.1%	0.7%	449
全体の体裁	46.1%	51.7%	2.2%	0.0%	447
一次データの利用	36.2%	52.8%	10.3%	0.7%	445
独創性	26.0%	54.4%	18.3%	1.3%	447
論理的な文章構成	50.0%	48.0%	2.0%	0.0%	450
文章の分かりやすさ	36.9%	59.8%	3.4%	0.0%	445
全体の分量	21.4%	55.5%	21.6%	1.6%	449

独創性をとても重視している学科は26.0%となっており、他の項目と比べて、それほど強調されているわけではないと言える。独創性をあまり重視していない学科は18.3%で、全く重視していないところも含めると約2割の学科は重視していない。とても重視していると回答している学科が多いのは、論理的な文章構成（50.0%）、問題設定の適切性（47.8%）、全体の体裁（46.1%）といった項目である。

このように、わが国の大学制度草創期において期待されていたかもしれない卒業論文の独創性は、今日ではそれほど重視されていないように見える。ただし、卒業論文の意味付けに関する詳細な分析にあたっては、今日の大学の多様性を考慮する必要がある。ここで

は、人文科学系学科の入学者の学力水準、教育環境という二つの視点から、各学科が与える卒業論文の意味を確認していく。

入学者の学力水準の代理変数として、当該学科の募集定員に占める推薦入試等（AO入試を含む）の定員の割合（以下、「推薦等定員割合」）を用いる⁽¹¹⁾。推薦入試はそもそも、受験生の評価尺度の多元化・複数化を目指す文部（科学）省により奨励されてきたものである。しかし近年に至っては、もちろん全ての学科に当てはまることではないものの、推薦入試等に対して「学力不問」という批判（中央教育審議会初等中等教育分科会、2008）が寄せられている。

入学者の学力水準の指標として、これまでしばしば、一般入試の偏差値が用いられてきた。本節では、偏差値は敢えて利用しない。なぜなら、第一に、偏差値は必ずしも一元的な変数ではないため、取り扱いが意外と難しいからである。例えば、予備校が提供する偏差値は、大学設置者ごとに尺度が異なっている。国公立大学で偏差値 60 の学科と、私立大学で偏差値 60 の学科が、入学者の学力水準において同等かどうか、自明ではない。第二に、学科によっては偏差値が欠測となることがあるが、これは偏差値が存在しないことを意味しているわけではないからである。偏差値が欠測となった学科を分析から除外すると、サンプルに偏りが生じてしまう。

これらの難点を回避するため、尺度の一元的な性質が確保され、欠測が生じづらい、推薦等定員割合を用いることとした。

操作的には、以下の定義を用いる。文部（科学）省が、募集定員に占める推薦入試の定員割合の上限の目安を 3 割（1995 年）から 5 割（2000 年）に引き上げたことを参考に、推薦等定員割合が 3 割以下⁽¹²⁾の学科と 4 割以上の学科という分類軸を設けた。後者の学科では、学力試験を課す一般入試を経た入学者が比較的少ないことから、入学者の多様化が進んでいると考えられる。

次に、教育環境の代理指標となるのは、大学設置者（国公立／私立）である。図 1 は、専任教員一人が受け持つ 4 年生の数（ST 比）を表現した箱ひげ図である。明らかに私立は国公立に比べて学生数が多く、私立の代表的な姿は国公立の統計的外れ値に相当するといふくらい、設置者別に教育環境が異なる様子がうかがわれる。

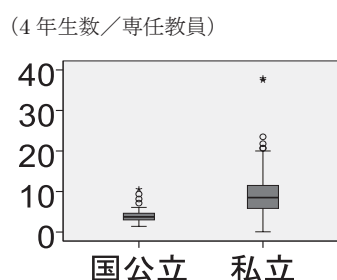


図 1 人文科学系学科の ST 比

以上の 2 つの指標を組み合わせて、学科の類型化を行う。具体的には、推薦等定員割合と大学設置者をクロスさせて、学科を 3 つに類型化した（推薦等定員割合が 4 割以上の国公立大学は 7 ケースに留まるため、「国公立」、「私立・推薦等割合【低】」および「私立・推薦等割合【高】」の 3 つに分類した）。

この学科類型を独立変数として、卒業論文の評価時に重視する観点および卒業論文執筆経験が持つ意義をそれぞれ従属変数とするクロス集計分析を行い、学科ごとに卒業論文の意味付けが異なる可能性について検討を行う。なお、従属変数は4件法からなる順序尺度変数だが、「全く重視していない」を選択した学科数は極めて少ないので、クロス集計分析時には3件法に縮約している。

卒業論文の評価時に重視する観点について、「先行研究のレビュー」(p=.062)、「独創性」(p=.002)、「論理的な文章構成」(p=.036)に有意差があった。紙幅の都合から全てを示すことは難しいので、前述の「独創性」について見てみたい(表9)。

重視していないと回答している学科数は、国公立の場合1.6%に留まるのに対して、私立は2割を超える。細かく見ると、私立・推薦等割合【低】は20.3%が重視しないとしているのに対して、私立・推薦等割合【高】は26.0%となる。総じて、「国公立」→「私立・推薦等割合【低】」→「私立・推薦等割合【高】」の順に、独創性の重視の程度が低下する様子が見られる。ただし、読み方によっては、国公立でも、独創性をとても重視している学科は34.4%(約1/3)に留まるという読み方も可能だろう。卒業論文の独創性は、大学全体を見る限りとても重視されているわけではないが、重視しない傾向は私立、特に推薦等割合【高】の学科で顕著だと言える。

表9 (クロス表) 評価時に独創性を重視する程度

	とても	ある程度	しない	n
国公立	34.4%	64.1%	1.6%	64
私立・推薦等割合【低】	22.2%	57.5%	20.3%	153
私立・推薦等割合【高】	24.5%	49.5%	26.0%	200
計	25.2%	54.7%	20.1%	417

代表値の差の検定(クラスカル・ウォリス検定) $\chi^2=12.767$ 、df=2、p=.002

次いで、卒業論文執筆経験が持つ意義について検討すると、「学術論文を書くという体験」(p=.081)、「学問の奥深さに触れる体験」(p=.000)、「自分の主張を分かりやすく伝える方法を学ぶ経験」(p=.017)、「主体的な学習態度の涵養」(p=.020)に有意差が見られた。先の場合と同様、「国公立」→「私立・推薦等割合【低】」→「私立・推薦等割合【高】」の順に、当該項目に係る意義が消極的になっていく様子が表れている(表10)。

このように、推薦等定員割合および大学設置者から学科を分類したところ、学科類型ごとに卒業論文の意味付けが異なるという可能性が示された。学科長の自由記述内容を踏まえると⁽¹³⁾、これらのクロス集計分析の結果は次のように解釈できる。

国公立は、学力低下や就職活動といった私立と共通の課題を抱えていることも確かだが、卒業論文を学術・研究に近いものとして意味付ける傾向がある。ただし、教育環境の悪化や入学者の学力水準の低下に伴い、卒業論文の意味付けは、学術・研究から遠ざかっていく。私立は、国公立ほど学術・研究色を卒業論文に求めているとは言えないし、推薦等割合にみる学生の多様化の影響を受けている。

表 10 (クロス表) 学問の奥深さに触れる体験

	とても	やや	あてはまらない	n
国公立	50.7%	49.3%	0.0%	67
私立・推薦等割合【低】	39.7%	48.1%	12.2%	156
私立・推薦等割合【高】	29.9%	54.5%	15.6%	211
計	36.6%	51.4%	12.0%	434

代表値の差の検定 (クラスカル・ウォリス検定) $\chi^2=15.591$ 、df=2、p=.000

4. まとめ

卒業論文が「教育課程の集大成」として、大学教育の質保証を担保するものと言えるのか。この問いに応えうるものとして、本研究を通じていくつかの基礎的知見が明らかになった。

第一に、卒業論文はまさに「教育課程の集大成」として信じられていながらも、卒業論文を課すことの意味が曖昧化している可能性が示唆された。

第二に、卒業論文の独創性は、大学制度草創期においては期待されていたのかもしれないが、今日においては実態として、とても重視されているとまでは言えない。さらに、入学者の学力および教育環境に基づいて学科を分類したところ、学生の多様化や教育環境の影響を受けて、学科における卒業論文の意味付けが異なってくる様子をうかがうことができた。

引用文献

- 天野郁夫 (2009) 『大学の誕生 (下)』 中公新書。
- 私学高等教育研究所、2010、「『学士課程教育の改革状況と現状認識に関する調査』 中間報告書」。
- 中央教育審議会 (2008) 「学士課程教育の構築に向けて (答申)」。
- 中央教育審議会初等中等教育分科会 (2008) 第 59 回配付資料「学士課程教育の在り方に関する小委員会高等学校と大学との接続に関するワーキンググループ (WG) 議論のまとめ」。
- 京都大学百年史編集委員会 (1997) 『京都大学百年史』 部局史編1。
- 黒河内利臣 (2008) 「大学教育における卒論の重要性に関する一考察—大学教育の学習効果を測定する卒論の機能について—」、『大学教育学会誌』 30-1、pp. 90-95。
- 文部科学省 (2012) 「学校基本調査」。
- 中村高康 (1997) 「大学大衆化時代における入学者選抜に関する実証的研究—選抜方法多様化の社会的分析」、『東京大学大学院教育学研究科紀要』 37: 77-89。
- 関正夫 1982 「一般教育における『学問研究』の役割—『研究論文』のすすめ—」 『大学教育学会誌』 4-1、pp. 27-32。
- 谷村英洋 (2013) 「文学部での学びと成長—卒業論文に着目して—」、『大学教育学会誌』35-1、

pp. 135-143。

寺崎昌男（1972）「帝国大学形成期の大学観」、『学校観の史的研究』 pp. 185-265。

東京大学百年史編集委員会（1986）『東京大学百年史』 部局史一。

中世古貴彦（2014）「人文科学系の卒業論文と学生の成長感—学習院大学文学部における事例研究—」『社会と調査』 12: 67-71。

マーチン・トロウ（1976）天野郁夫・喜多村和之訳『高学歴社会の大学—エリートからマスへ』 東京大学出版会。

潮木守一（1984）『京都帝国大学の挑戦』 名古屋大学出版会。

※ 1～2は篠田雅人・日下田岳史「人文科学系学科における卒業論文の意味するもの—学科における現状認識と、操作変数法による執筆効果の推定から—」『大学経営政策研究』4、pp.55-71 の篠田担当箇所に基づくものである。3は、篠田雅人ほか「卒業論文の意味付けにみる人文科学系学科の現状—全国学科長調査の結果から—」（日本高等教育学会第15回大会、東京大学、2012年）の日下田担当箇所に基づくものである。

(1) 学士課程答申はこのような取組の例として、「卒業論文やゼミ論文などの工夫改善や新規導入を実施したり、学部・学科別の、あるいは全学的な卒業認定試験を実施したりすることを検討、研究する」ことを挙げている（p. 27）。

(2) 在学生・卒業生に対して質問紙調査を別途実施している。在学生調査の結果の一部については、谷村（2013）、中世古（2014）が報告している。

(3) 学科長調査では、「卒業論文」と同等の論文の執筆を学生に課している場合、「卒業研究」等のように名称が異なっても、「卒業論文」と同じものとして回答を依頼した。

(4) 卒業論文が必修かつ単位数が10～16単位と回答があった学科を抽出し、各大学のホームページ等で卒業要件単位数を確認したところ、1学科を除き124～140単位であった。

(5) 私学高等教育研究所（2011）によるサンプリング調査結果によれば、例えば、人文科学系、社会科学系学科の平均卒業要件単位数はそれぞれ125.5、125.9、卒業論文を含む卒業研究科目の平均単位数は同様に6.2、5.1となっている。

(6) 本調査では、卒業論文指導科目の有無のみを尋ねており、卒業論文指導科目に単位が付与されているかは尋ねていない。しかし、卒業論文の単位数に当該指導科目の単位数が含まれているということは考えにくい。なぜなら、一般的には単位を付与する科目は、それぞれ独立した授業科目として学則に明示されるからである。

(7) この自由記述は、卒業論文を選択する学生が学年の約9割という学科による回答である。

(8) 自由記述には、例えば、「卒業論文ではないが、ゼミ論文としてまとめて提出する様指導しており、ゼミを通して指導教員が具体的な指導を行っており、今後もこの方向で行こうと考えている」などの回答が見られた。

(9) かつてわが国唯一の大学として範型的存在であった東京（帝国）大学（寺崎 1972）は、設置から2年後の1879年、文学部の学習課目として卒業論文を課すことになった。卒業論文を重視する文学部の伝統はこの時から始まる（東京大学百年史編集委員会 1986、

p. 415)。帝国大学文学部の機能と構造に着目した橋本（1996）は、「わが国の近代化過程における文学部は、社会的需要が少なく、かつ高等教育もエリート段階に止まっていたが故に、(中略) その研究と教育は、教授と学生との親密な関係の中で巧まずして統合され、人文主義的教養の創出に重要な役割を果たし得た」と述べている (p. 103)。東京（帝国）大学の範型性ゆえに、その文学部の機能的特徴は、後に設立された各大学人文科学系学科に内在する理念として引き継がれて今日に至るのかもしれない。この点については仮説的に提示するに留め、その論証は今後の課題としたい。

(¹⁰) しかし、1907年になると、卒業論文の提出が求められることはなくなったが、この理由については潮木（1984）に詳しい。一方、東京帝大法科大学で卒業論文は課せられていなかった（天野 2009: p. 33）。

(¹¹) 中村（1997: 79-80）は、大学入学難易度が低下するほど、大学入学定員に占める推薦入学定員の比率が高くなる傾向を示している。

(¹²) 調査票では、選抜方法別・入学定員数の割合を整数で記入するよう依頼したが、小数による回答も見られた。そのような回答も有効とみなして、3割以上4割未満の学科も「3割以下」に含めて分析した。

(¹³) 自由回答の内容をいくつか紹介すると、「1年次から研究の意味と意義を考え3年次までに研究そのものを理解する必要がある。4年次4月には研究にスムーズに入れる、積み上げが重要」(国公立)、「人文科学系の学生にとって卒業論文執筆はその学業の集大成として必須のものと思われる。しかし、一方で推薦系入試で入学する学生の学力低下は顕著で、選択制に移行することも考慮に値する。本学科でも議論は分かれなかなか一致しない」(私立・推薦等割合【低】)、「論理構成能力と日本語を正しく書く力を訓練できる最後の機会となっている。卒業論文を書くことは有効に機能しているが、それ以前の論理的思考力、明解で正しい日本語による作文力の向上が必要だと思う」(私立・推薦等割合【高】)といった意見が寄せられている。

平成24年6月2日(土)
日本高等教育学会第15回大会
(東京大学本郷キャンパス)

卒業論文の意味付けにみる 人文科学系学科の現状 — 全国学科長調査の結果から —

学校法人学習院
学習院大学人文科学研究所客員所員
篠田 雅人

研究の背景・問題意識(2)

平成23年度～25年度
学習院大学人文科学研究所共同研究プロジェクト
「人文系学士課程教育における卒業論文がもたらす学習効果の
検証」(研究代表者: 神田 龍身 学習院大学文学部日本語日本文
学科教授)

- ・「卒業論文」のキャリアム上の位置付け— 機関調査
- ・「卒業論文」執筆経験者の学習経験・意識・進路
— 学生調査・卒業生調査(学習院大学文学部の事例研究)

の双方のデータ収集を順に実施

研究の背景・問題意識(1)

・学士課程教育の質保証問題

- 教育キャリアムと卒業後の進路とのレリバンスの関係が
重要 例: 工学教育のレリバンス(矢野2005)
 - しかし、人文科学系学科については先行研究がほとんどない
 - 人文科学系学科のキャリアムの現状確認が必要
特に、学部4年次学生が、学修成果の評価を受けるために提出する
「卒業論文」に着目
- 日本私立大学協会付置私学高等教育研究所プロジェクト
「学士課程教育の改革状況と現状認識に関する調査」
(プロジェクト代表: 濱名 篤 関西国際大学学長)
の分析に基づく山田 礼子 同志社大学教授の発言
(大学教育学会課題研究会シンポジウム(2009年11月))

「全国学科長調査」の実施概要

- ・実施時期: 平成23年11月(期限までに回答のなかった学科については
平成23年12月に再度郵送により回答を依頼)
- ・実施方法: 郵送法による質問紙調査
- ・実施対象: 表1の①・②が合致した全学科の学科長

表1 調査対象学科の抽出条件と対象・回答学科数

	国立大学	公立大学	私立大学	合計
①対象学科名の抽出	平成22年度 文部科学省・学校基本調査の 上の大分類「人文科学」の全学科 中分類「人文・社会科学関係」に 該当する学科	平成22年度 文部科学省・学校基本調査の 上の大分類「人文科学」の全学科 および大分類「その他」のうち、 中分類「人文・社会科学関係」に 該当する学科	「学科系統分類表」 の「学科系統分類表」の「その他」のうち、 「学校法人情報検索システム(平成 22年度データ)」(日本私立学 校振興・共済事業団)	
②現在学科データ	平成23年度 (文教協会)	全国大学一覧		
対象学科数	77 (7.0%)	54 (4.9%)	975 (88.2%)	1,106 (100.0%)
回答学科数	47 (8.5%)	28 (5.1%)	475 (86.4%)	550 (100.0%)
有効回答学科数	45 (9.2%)	28 (5.7%)	414 (85.0%)	487 (100.0%)

回答学科数と有効回答学科数との差異: 学科新設・改組・廃止、キャリアム変更の直前直後のた
め、調査時点において回答に適合しないケースがあったこと
が主な理由

科目としての卒業論文の設置状況

表2 卒業論文の設置状況

	必修	選択制	設置なし	合計
国立大学	41 91.1%	4 8.9%	0 0.0%	45 100.0%
公立大学	23 85.2%	4 14.8%	0 0.0%	27 100.0%
私立大学	297 71.9%	108 26.2%	8 1.9%	413 100.0%
合計	361 74.4%	116 23.9%	8 1.6%	485 100.0%

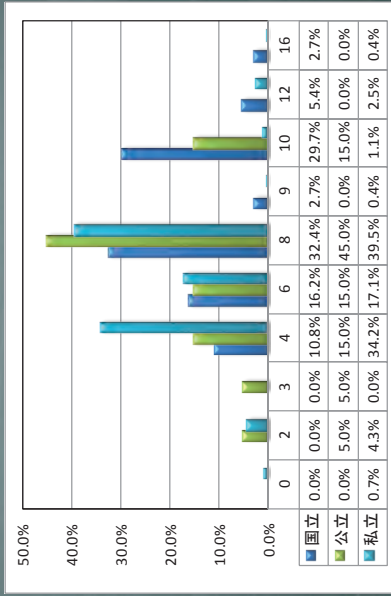
p<.05

・先行研究(私学高等教育研究所プロジェクト報告書・2011)と概ね一致した内容

→ 国公立大学よりも私立大学の方が必修の割合が低い傾向

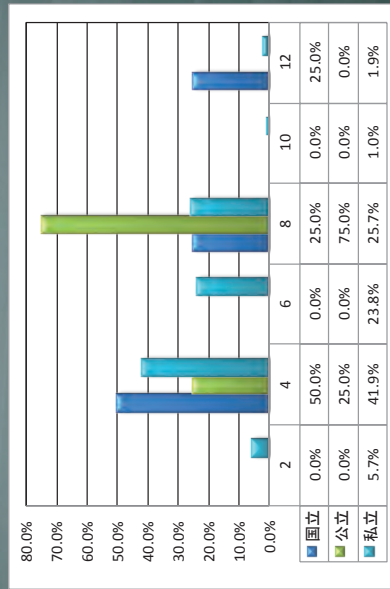
卒業論文の単位数(1)

表3 卒業論文「必修」の単位数



卒業論文の単位数(2)

表4 卒業論文「選択制」の単位数



→ 単位数に見る限り、教育カリキュラムにおける卒業論文の比重が、国立大学に比べ、私立大学の方が軽いと考えられる。

卒業論文の設置状況の変遷(1)

表5 1990年以降の卒業論文の設置状況の変遷

現在 変遷	必修		選択制		設置なし		合計	
	変化なし	から変更	変化なし	から変更	変化なし	から変更	変化なし	から変更
国立大学	30 85.7%	1 2.9%	0 0.0%	3 8.6%	0 0.0%	0 0.0%	30 85.7%	4 11.1%
公立大学	20 83.3%	0 0.0%	0 0.0%	1 4.2%	0 0.0%	0 0.0%	20 83.3%	0 0.0%
私立大学	254 69.6%	12 3.3%	3 0.8%	29 7.9%	10 2.8%	4 1.1%	267 73.5%	36 9.7%
合計	300 62.3%	13 2.7%	3 0.6%	33 6.9%	10 2.1%	4 0.8%	353 73.6%	47 9.9%

割合としては、国立大学・私立大学の「必修→選択制」への移行が目立つ。

→ 大学設置基準の大綱化や進学率上昇に伴う変化と考えられる。

卒業論文の設置状況の変遷(1)

表5 1990年以降の卒業論文の設置状況の変遷

現在 変遷	必修		選択制		設置なし		合計
	変化なし	変化なし から変更	必修 から変更	設置なし から変更	変化なし	選択制 から変更	
国立大学	30 85.7%	1 2.9%	3 8.6%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	35 100.0%
公立大学	20 83.3%	0 0.0%	1 4.2%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	24 100.0%
私立大学	254 69.6%	12 3.3%	29 7.9%	10 9.5%	4 1.1%	1 0.3%	365 100.0%

割合としては、国立大学・私立大学の「必修→選択制」への移行が目立つ。

→大学設置基準の大綱化や進学率上昇に伴う変化と考えられる。

卒業論文の設置状況の変遷(2)

表6 卒業論文の設置状況の変遷理由

	必修 →選択制		設置なし →選択制
	国立	私立	
学生の学力低下のため	1	16	17
教員多忙化のため	9	5	14
学生確保のため	1	1	2
卒論以外が充実のため	1	6	7
教育水準向上のため	3	3	6
学生の学力向上のため	1	3	4
卒業時満足度向上のため	6	5	11

- 【必修→選択制】自由記述より
- ・大学教育の大綱化を検討する際に、必修単位数を大幅に少なくした。その中で卒論の位置づけを考えると必修よりも選択の方が妥当と結論づけられた。(国立大学)
 - ・資格取得や就職活動により力を入れるため(私立大学)
 - ・卒論のみでの留年が増加していたため(私立大学)
 - ・入学生が多様化しているため(私立大学)
 - ・学生の自主性を尊重するため。(私立大学)
 - ・就職活動が長期化している(私立大学)

卒業論文の設置状況の変遷(3)

表6 卒業論文の設置状況の変遷理由

	必修 →選択制		設置なし →選択制
	国立	私立	
学生の学力低下のため	1	16	17
教員多忙化のため	9	5	14
学生確保のため	1	1	2
卒論以外が充実のため	1	6	7
教育水準向上のため	3	3	6
学生の学力向上のため	1	3	4
卒業時満足度向上のため	6	5	11

- 【設置なし→選択制】自由記述より
- ・****年カリキュラムで**学科**専攻で「卒業研究」を設置 卒業発表会と論文要旨の提出を義務づけた(それ以前は演習のレポートとして各教員にまかせられていた) ****年カリキュラムでは**学科全体に拡大(私立大学)
 - ・学科の改組とカリキュラム変更による(私立大学)
- 【選択制→設置なし】自由記述より
- ・3・4年次に必修および選択必修科目を置かない方向へのカリキュラム改革を行なったため。(私立大学)

卒業論文の設置状況の変遷(3)

設置なしの場合でも、何らかの指導が行われていることもある。

- 例：【設置なし】自由記述より
- ・卒論よりも多様なアクティブラーニングを推進して行きたいと考えている。(私立大学)
 - ・卒業論文ではないが、ゼミ論文としてまとめて提出する様指導しており、ゼミを通して指導教員が具体的な指導を行っており、今後もこの方向で行こうと考えている(私立大学)
 - ・****系学部学科です。独自の論文が書ける学生を育てたいと考えます。(私立大学)

平成24年6月2日(土)
日本高等教育学会第15回大会
(東京大学本郷キャンパス)

設置者と推薦入試等割合にみる 人文科学系学科の卒業論文の意味の探索

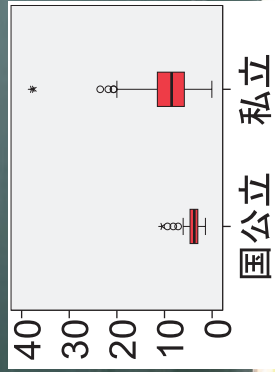
東京大学大学院教育学研究科博士課程
日本学術振興会特別研究員
日下田 岳史

設置者(国公立/私立)

▶初年度納付金	授業料	入学科	施設整備費	合計
国立	¥535,800	¥282,000		¥817,800
私立	¥857,763	¥269,481	¥187,007	¥1,314,251

【出所】国立大学等の授業料その他の費用に関する省令
文部科学省「私立大学等の平成23年度入学者に係る学生納付金等調査結果について」

▶人文科学系学科専任教員一人当たり4年生数



【出所】全国学科長調査より筆者作成。
※外国人学生(留学生)は除く。
※日本人4年生数=0の学科は除く。
※日本人学生総数=日本人4年生数の学科は除く。

人文系の卒業論文の意味を問うのはなぜ？

- ▶ 学士課程教育への入口の多様化 ⇒ 学生の多様化
- ▶ 「卒業主義」 ⇒ 学士課程の多様化は不可避？
(cf 矢野 2011) (入難出易、入易出易、…)
- ▶ 出口管理の一つとしての卒業論文(cf 単位数)

「マス選抜」化を受けた人文系学士課程教育の
現状を、卒業論文に代表させて把握。人文系教
育のレトリバンスを解明するための基礎的研究。



入学者選抜(「マス選抜」)の状況 cf 中村 2011

- ▶ 本発表は、募集定員に占める推薦入試等定員の割合に
着目。

(※)本発表ではAO入試を含む。

- ▶ 受験生評価尺度の多元化・複数化。

(※)推薦入試定員割合の目安(文部省) 上限3割(1995)→上限5割(2000)

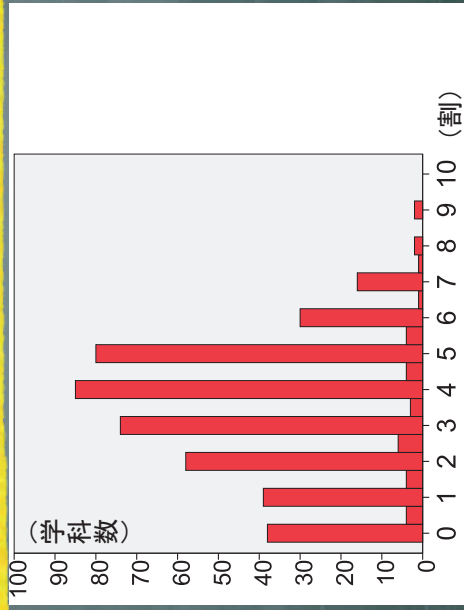
- ▶ 学生の多様性に係る代理変数。

- ▶ 学力不問という批判(中教審初中分科会 2008)。

学科(大学)の選抜性に係る代理変数という側面も。

- ▶ それでも、評価尺度の多元化に努めることとされている。

募集定員に占める推薦入試等定員の割合の分布



【出所】全国学科長調査より筆者作成。

※AO入試を含む。

※整数での回答を依頼したが、小数の回答も見られた。

仮説 卒業論文の意味は、 学科類型ごとに異なるのではないか？

- ▶ 学科長が回答するところの卒論評価の観点を分析する。
- ▶ 各観点を「とても重視」しているのか、いないのか。
- ▶ 似ている観点は近くに、似ていない観点は遠くに配置して分類する。
- ▶ プロットされた各観点の位置関係が学科類型ごとに異なる場合、当該観点の意味が学科類型ごとに異なる可能性が示唆される。
- ▶ 学科類型ごとにかテゴリーカル主成分分析(数量化理論Ⅲ類)の適用。
- ▶ 「とても重視している」学科が多い「論理的な文章構成」(次頁参照)の位置関係に注目。

学科の類型化

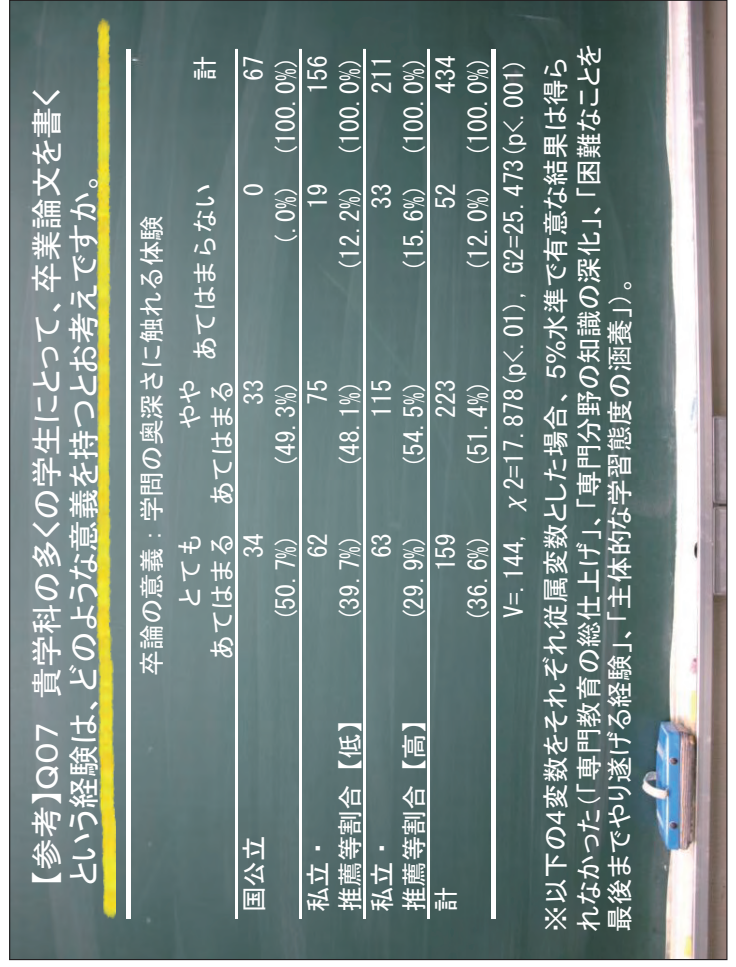
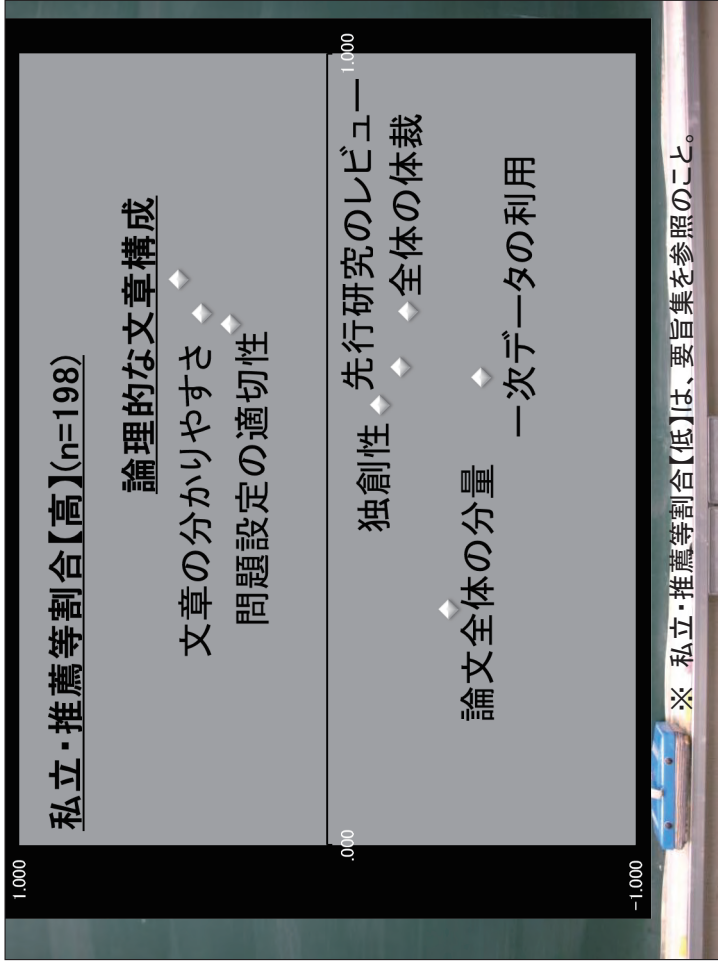
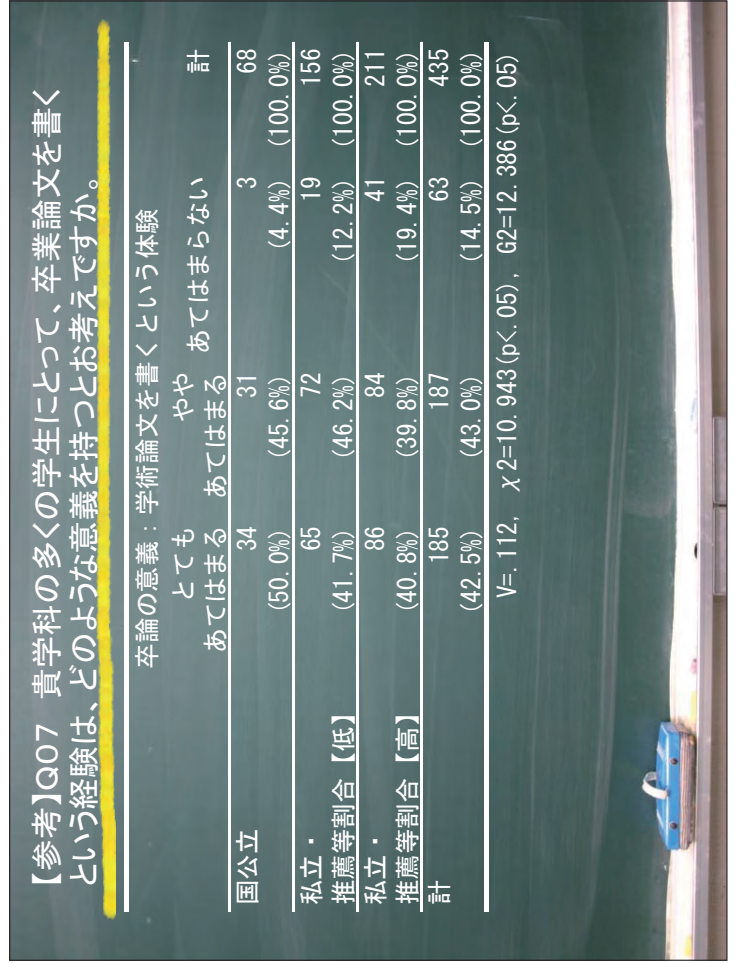
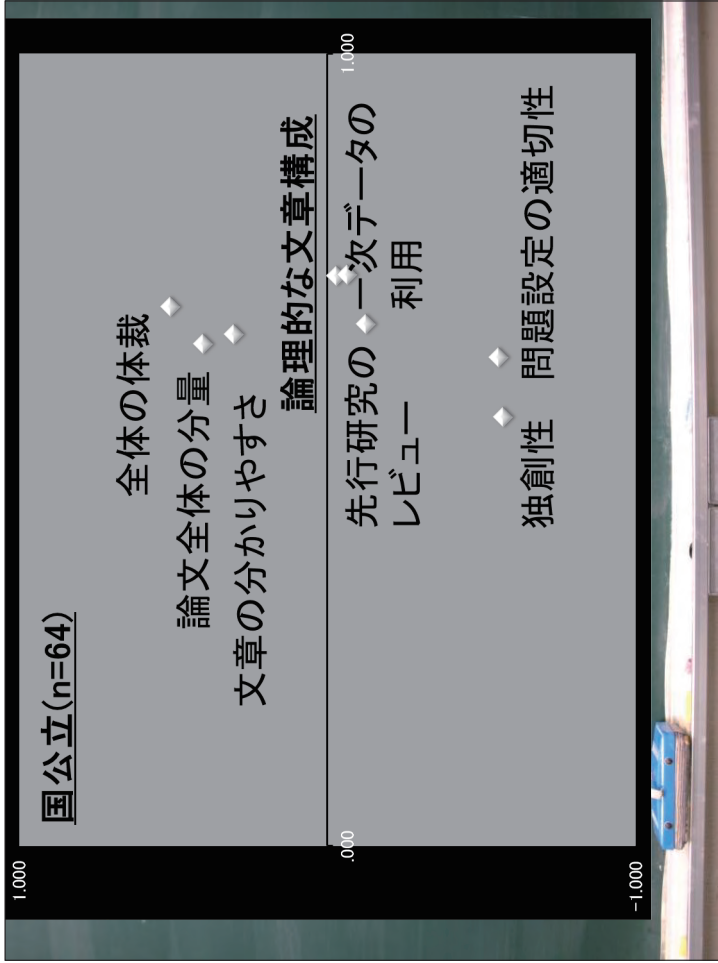
推薦入試等割合3割以下 (厳密には4割未満)



Q06 貴学科は、卒業論文の評価時に、以下の観点をどれくらい重視していますか。

	とても重視	ある程度重視	あまり重視せず	全く重視せず	無回答
A. 問題設定の適切性	44.9	45.7	2.9	3.4	NA 6.1
B. 先行研究のレビュー	27.1	57.4	8.6	0.6	NA 6.3
C. 全体の体裁(引用の仕方、文献表の作り方等)	43.0	48.2	2.1	0.0	NA 6.7
D. 一次データ(原典、史料も含む)の利用	33.6	49.1	9.6	0.6	NA 7.1
E. 独創性	24.2	50.7	17.1	1.3	NA 6.7
F. 論理的な文章構成	47.0	45.1	1.9	0.0	NA 6.1
G. 文章の分かりやすさ	34.2	55.5	3.1	0.0	NA 7.1
H. 論文全体の分量	20.0	52.0	20.3	1.5	NA 6.3

【出所】全国学科長調査より。



学科長の自由回答から(強調は筆者による)

《国公立》私立と共通する課題を抱えていることも確かだが、研究に関連付けた回答が特徴的。

- ▶1年次から研究の意味と意義を考え3年次までに研究そのものを理解する必要がある。4年次4月には研究にスムーズに入れる、積み上げが重要
- ▶卒業の存在は教育のみならず研究にとっても重要 しかし欧米のようなhonori制もありかもしれない
- ▶学士課程教育における創造性の指標として、また執筆者本人の体験・経験として大変重要なものと考えます。
- ▶人文科学系の学部・学科にとっては、卒業が、大学らしい教育の最後の砦と考えます(これらがなくなったら「終わり」)。
- ▶できるだけ早い時期にアカデミック・ライティングを教える必要があると思います。義務教育でも高校でも学生たちは何も学んでいません。
- ▶人文科学の場合、学問を使って知見を深め1つの作品として創造的行為をおこなうことが少ないように思われる。卒業の必修の是非はむずかしいが、大学のレヴェルにあわせて、卒業を作成させることは意義があると思う。

学科長の自由回答から(強調は筆者による)

《私立・推薦等割合【高】》基本的な日本語力に関する課題の指摘が特徴的。課題は多くとも卒業重視(研究としての側面を重視する意見もあり)。

- ▶4年間を通じて、日本語の読み・書きを必修とするようにしたいものです。
- ▶初年次教育をはじめとする基礎学力確保のための講義を充実したい。とくに国語力について注力すべきだと考える。
- ▶論理構成能力と日本語を正しく書く力を訓練できる最後の機会となっている。卒業論文を書くことは有効に機能しているが、それ以前の論理的思考力、明解で正しい日本語による作文力の向上が必要だと思つ。
- ▶学生の読み書き能力がかなり不足しているように感じる。今後、卒業論文を残すにしても指導は4年間全体を視野に入れたいとだめだろう。
- ▶出来る限り多くの学生に執筆を経験させるべきと考える。ただし学生の自由な発想を最大限に尊重して指導に当るべきであらう。卒業が学カリキレキラムの1つの根幹であるという姿勢はあくまでも維持すべきである。

学科長の自由回答から(強調等は筆者による)

《私立・推薦等割合【低】》卒業論を重視する意見が多い一方、卒業選択制を模索する動き、危機感も。

- ▶人文科学系の学生にとって卒業論文執筆はその学業の集大成として必須のものと思われ。しかし、一方で推薦系入試で入学する学生の学力低下は顕著で、選択制に移行することも考慮に与いする。本学科でも議論は分かれなかなか一致しない。
- ▶学生の学力低下や学習習慣の欠如故、一部の上位大学をのぞき、学士論文としての卒業論文を学生に執筆させることには、無理がある。他方、学生も論文を理解せずに書いているので、学習効果にも疑問が残る。
- ▶教員〇人で審査するので、読む論文が〇本ほどあり、教員の負担が重い。もう少し軽減したい。
- ▶人文科学系学科の学士課程教育において、今最も求められているのは、書き言葉の習得である。卒業論文の作成は、そのために欠かせない作業と考えている。だが現状は、諸般の事情から卒業論文を書かない、もしくは書けないまままで社会に出ていく学生が多い。これはゆゆしき事態であり、人文学の空洞化は、まずそこから始まると危機感を覚えている。

結論と課題

仮説(再掲) 卒業論文の意味は、学科類型ごとに異なるのではないか？

「論理的な文章構成」に着目。

卒業論文の「論理的な文章構成」の意味は学科類型別に、研究論文としての評価を意味する場合と、一般的な文章力の評価を意味する場合に分かれる傾向がある。

学士課程教育(卒業論文)と進路とのレリバンスとは？(本発表には、学科長が考える「卒業論の意味」という限界がある。)

- ▶(学科長の自由回答)他学科での指導経験では、卒業後の働きぶりや、卒業後のガンバリ具合に類似の関係があるようなので(卒業に粘り強く取組んだ学生は、その後職場でも仕事熱心)、卒業をガンバリ、そして学生を鍛える意味はありそうです。

参考文献(口頭発表分および要旨分)

日本私立大学協会私立高等教育研究所プロジェクト「私学学士課程教育における“学士力”育成のためのプログラムと評価(2011)」「第二回学士課程教育の改革状況と現状認識に関する調査報告書」。

中央教育審議会初等中等教育分科会第59回(2008)配付資料「学士課程教育の在り方に関する小委員会高等学校と大学との接続に関するワーキンググループ(WG)議論のまとめ」。

文部省(1993)『我が国の文教施策』。

文部科学省「私立大学等の平成23年度入学者に係る学生納付金等調査結果について」
http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/shinkou/07021408/1318332.htm
(2012/05/24確認)。

文部科学副大臣通知「平成24年度大学入学選抜実施要項」。

中村高康(2011)『大衆化とメイトクラシ—教育選抜をめぐる試験と推薦のパラドクス』東京大学出版会。

矢野嵐和(2005)『工学教育のレリハンス』科学研究費補助金報告書。

矢野嵐和(2011)『習慣病になったニッポンの大学 18歳主義・卒業主義・朝負担主義からの解放』日本図書センター。

日本語日本文学科の卒業論文・卒業試験について

神田 龍身

学習院大学文学部日本語日本文学科では、「卒業論文」と「卒業試験」をかしている。卒論の評価は、卒業試験の結果も参考にしてつけられる。卒論は文字数二万字以上ということになっており、卒業試験の科目は、「書き取り」「日本語学」「変体仮名」「古文解釈」「文学史（古典）」「文学史（近代）」「日本語教育学」「言語学」であり、そのうち四科目を受験しなくてはならない。しかも、各科目については、足きり点があり、それに引っかかると、その科目の再試験ということになる。再試験も不合格となると、再々試験か長大なレポートをさらに提出しなくてはならない。すべての科目を一回の試験でクリアする学生は少なく、何か引っかかる場合が多い。また再々試験受験のために、日程がずれこんで、卒業間際の計画がすべて狂ってしまった学生もいる。

以前、卒論は約四万字、卒業試験は五科目を受験しなくてはならなかった。それに比べると、現在は軽減されているが、それでも学生にとってはかなりの負担である。そもそも世間には日本語日本文学科と銘打った学科やコースが多くあるも、卒論を全員に必修としている大学は大変少なく一卒論を選択にしたり、卒論の代わりに卒業レポート等をかしている大学はある一、ましてや卒業試験まであるのは我が日本語日本文学科だけであろう。因みに、卒業試験の中に「書き取り」という科目があるが、一年生必修科目「基礎演習Ⅰ」と二年生必修科目「基礎演習Ⅱ」でも、「書き取り」試験を実施している。自習用の問題集があり、何頁から何頁というようにあらかじめ試験範囲を指定したうえで、この授業時間を使って行う。大学生にもなって、漢字試験かと訝る向きもあるが、物事を考える基本は、漢字熟語にどの程度習熟しているかによるという考えに基づいている。

卒論と卒業試験をなぜかしているのか。日本語日本文学科の教員個々により考え方が異なると思われるが、以下、私なりに纏めておきたい。それは文学部の「学問」とは何かという問題と関わる。例えば、日本語日本文学の授業において、「基礎」「特論」「各論」、あるいは「概論」「概説」という分類枠があろうと、そのことはあまり本質的ではない。基礎から応用という流れ、あるいは各論と概論との関係をどう考えるかはなかなか難しく、一筋縄ではいかない。各論と銘打っていても、ある種の普遍性を志向することに変わりはないし、概論といつつ、様々な学説なり作品解説なりをカタログ的に網羅したのでは、概論とはいえない。そもそも基礎から応用へという流れが、文学部の学問にはたしてあるのであろうか、疑問なきにしもあらずである。よくある、「上代文学」「中古文学」「中世文学」「近世文学」「近代文学」「現代文学」という時代による分類にしても、便宜的なものではなく、歴史をどう位置づけるかも研究者それぞれである。文学である以上、言葉のシステムから入る点において違いはないとすべきだが、実は必ずしもそうではない。あるいは、散文／韻文、音声言語／書記言語、という分類にしても、この差異化がいかに意味をなさないかは少しでも日本の古典を知っていれば明らかである。さらには、テキストとは何か、作家とは何か、作品とは何か、語り・視点とは何か、記録・描写とは何か、会話とは何か、文とは何か、……、これらについても研究者の数ほど学説があるといえる。

もちろん、日本語学・日本文学という学問に体系がないなどといっているのではない。

研究者個々において、それほどまでに理解が異なるということなのである。当然授業では、教員それぞれがそれ固有のスタイルにおいて、授業を行う外ない。例えば、どこの大学でも必ずのようにおかれている「日本文学史」「日本文学概論」という授業にしても、どのような内容になるのか、担当教員の学問スタイルに応じて全く内容が異なる。そのあたり調整して、かくかくしかじかの授業をしようと、教員同士の共通理解を得るのは土台無理であり、またその必要があるわけでもない。

学生は、そのような教員個々の学問体系を授業では享受するしかない。しかし、それはけっして悪いことではなく、A教員の方法、B教員の方法……というように、文学部の学問なるものがいかに多種多様で、混沌としているかが解ればよいのである。学問に一定の方法論があるわけではなく、それは各自が発見し確立するものなのである。

もちろん、これだけでは、教員個々のスタイルや雑多な知識が詰め込まただけで卒業してしまうだけのことである。以上を前提として、さらに総仕上げが必要であり、そのためにこそ卒論と卒業試験があると私は考えている。まず、「卒業試験」では、いわゆる基礎知識を正確に覚えているか否かの一点をチェックする。一通りの知識さえあれば、なんとかなる問題ばかりある。例えば、「文学史」という科目にしても、高校時代の教科書にのっている事項以上のものを出题したことはない。先ほどの漢字の書き取りと同様に、物を考えたり、興味を抱いたり、想像力をかけめぐらせたりするには、まずは事項を知っていることが重要であるとする考えから試験は行われている。

問題は卒論とは何かということだ。教員個々の勝手な学説を聞くだけで終らせずに、学生自身がその学問の世界に参画するよう促すためにこそそれはある。教員の勝手な学説はもう聞き飽きた、自分にも発言させろということであり、卒論とはそのチャンスを学生に与えることに外ならない。自身も学説を打ち立てて、論陣を張ってほしいということである。しかも、字数制限なしで、自説を開陳でき、かつ丁寧に読んでもらえて、評価もついてくるのだから、こんな素敵な機会はないのではなからうか。学生には、是非この機会を有効に活用していただきたいと私は思っている

もちろん、それほどに勇ましい卒論はめったにない。しかし、文学部の研究にあっては、その可能性は常にある。例えば、私の個人的な経験をいわせていただくと、演習授業で古典和歌をとりあげることがあり、この学生は私より明らかに歌がよめると感心することがしばしばある。こちらは経験量と知識量とで自身のセンスの悪さをカバーしている向きもあるが、和歌とはたった三十一字からなる言葉のテキストであり、その言葉の世界に切り込んで、そこで発動している想像力の軌跡を丸ごととらえてしまうような学生がままいる。いわゆる文学的センスというものがここで問題となっているのであろうが、極論すれば、センス一つで勝負ができるのも文学という学問の特性なのである。

さて、今回の調査結果だが、あらかた卒論に対する良好な評価があるのはうれしかったが、集積された多くのデータを素材として、卒論や卒業試験をかすことの教育的意味を再検討してみたいと思っている。卒業生・在学生をも含めて幅広く意見を聞くことができたのだから、それをふまえて、まず教員同士で時間をかけて意見交換する必要があるだろう。また、学生に卒論をかしていることの意味を学生側にもっと積極的にアピールすることの必要性も感じた。

エビデンス無きものへのエビデンス

小島 和男

本研究プロジェクト「人文系学士課程教育における卒業論文がもたらす学習効果の検証」では、平成23年度から3年間、大学における学問分野と、就職・社会人生活を主とした卒業後の進路との直接的関係性について人文科学系分野における学士課程教育における教育・学習効果について研究を行った。主な調査対象となったのは、学習院大学文学部であり、そこでカリキュラムとして取り入れられている卒業論文である。簡単に言えば、文学部で卒業論文を書いてどうなるのか、といった関心に基づく研究を行ったわけである。

本稿では、その文学部に所属し、学生に卒業論文を書かせるべく教育を行っている教員の一人として、実体験を紹介し踏まえながら、本研究について考えてみたい。

学習院大学文学部哲学科は哲学思想史系と美学美術史系に分かれ、それぞれが卒業論文の執筆を卒業に必須のものとして指導している。筆者は哲学思想史系の教員であり、西洋古代哲学を専門にしている。主に筆者の学生は西洋古代哲学を題材にして卒業論文を書くということになる。また、所謂「原典主義」を採っているため、学生たちは原典で題材とするテキストを読まなければならないのが建前となっている。つまり、筆者を指導教授として卒業論文を書く学生は、古典ギリシア語もしくは古典ラテン語で、プラトンなりアリストテレスなりアウグスティヌスなりの原典を読んで、つまり自分で日本語に訳して読んで、論文を書かなければならないわけである。

そのような学生は、大学一年生の時から、古典ギリシア語もしくは古典ラテン語を学ぶ。現代語と違ってオーラルコミュニケーションの場はない。初級文法を一通り学んだあとは、言わば暗号解読のように、テキストの一単語一単語、その単語の品詞は何なのか、それがどのような変化をしているのかを分析し、ノートにメモし、それを組み合わせでどのような文法事項が当てはまりどのような意味を成すのか、日本語訳のみならず各国語の訳や、注釈書を参考にしながら読んでいく。日本語の翻訳がある作品でも、その翻訳はあくまでも参考にしかならないものであり、その哲学者の書いたものに直に触れようとする姿勢をそこで学ばせているわけである。また、古典語を読むためには、英語、ドイツ語、フランス語と言った各国語をなるべく読めるようになることも重要となる。西洋古代哲学においては注釈書や研究書はたいていの場合、日本語ではなくそういった外国語で書かれている場合が多いからである。しかし、そのような注釈書や研究書を十分に読めるようになったからと言って、英語、ドイツ語、フランス語の実用的な能力が並行して身につくわけでは必ずしもない。注釈書や研究書で語られる内容は日常会話やビジネスで用いられる会話とは程遠い内容のものだし、そもそもオーラルコミュニケーションが全く求められていないからである。ともあれ上記の勉強を4年間続け、最後に卒業論文を書き、卒業するわけだ。

では、そういった経験は、一体どのような役に立つというのだろうか。大学院に進学し西洋古代哲学の研究者になるのであればもちろん必要なことだし、役にも立つわけだが、そのような学生はめったにいないし、需要も少ない。将来的にということではなく、まずは簡明直截に考えると、そういった古典語の習得は、古典語で読まれた本を読むときに役

に立つ。では古典語で書かれた本を古典語で読むことはたして何の役に立つのか。しかし、そもそも、学部の4年間を卒業後、大学院に進学しなかったものが引き続き古典語で書かれたテキストを読むことはまずはないだろう。還暦をこえ会社を退職した後の趣味で、ということなら考えられるが、時間も根気もいる作業を、趣味としても続ける人は極めて稀である。このような状況は、筆者の研究室に限ったことではないだろう。同様の状況、つまり、大学で卒業論文を書くために学んだことは、大学卒業後の、いわば社会に出てからの人生に何の意味も持たないように思われるのである。特に文学部の学問においてそれは顕著であろう。

これに対して、「無用の用」という言葉を持ち出し、何らかの反論とする場合は多いと思われる。しかし、実際は何の反論にもなっていない。一見無用と見えるものも役に立っている場合があるということが、という可能性を述べているにすぎないからだ。反論のためには、役に立っているという何らかの場合を示さなければならない。

とはいえ、「役に立つ」とはどのようなことだろうか。ハサミは紙を切るのに役に立つ。紙を切ることは、封筒を開けたりすることに役に立つ。封筒を開けることは中の手紙を読むために役に立ち、中の手紙を見ることは生活をしていくうえで役に立つ場合がある。我々はすべての行動に、何らかの「役立ち」を見出すことが出来るかもしれない。つまりそれは所謂「意味」である。これを我々のプロジェクトでは、「意義」という言葉で表した。機関調査の質問用紙のQ07（「Q07 貴学科の多くの学生にとって、卒業論文を書くという経験は、どのような意義を持つとお考えですか。あてはまる番号1つに○をつけて下さい」）、卒業生調査の質問用紙のQ8およびQ9（「Q8 今のあなたにとって、卒業論文・卒業研究の執筆にはどのような意義があったと思いますか。あてはまる番号1つに○をつけてください」、「Q9 卒業時、あなたは卒業論文・卒業研究の執筆にはどのような意義があると思っていましたか。あてはまる番号1つに○をつけてください」）、および在学生調査の質問用紙のQ09（「Q09 あなたにとって、卒業論文・卒業研究の執筆はどのような意義をもっていたと思いますか。あてはまる番号1つに○をつけてください」）においてそれを尋ねているわけである。選択項目は「A. 学術論文を書くという体験」「B. 学問の奥深さに触れる体験」「C. 専門教育の総仕上げ」「D. 専門分野の知識の深化」「E. 困難なことを最後までやり遂げる経験」「F. 自分の主張を分かりやすく伝える方法を学ぶ経験」「G. 主体的な学習態度を養う経験（※機関調査では「主体的な学習態度の涵養」）」の7つとしており、それぞれに「とてもあてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「全くあてはまらない」の4つの内のいずれかをマークする形になっている。

結果、特に卒業論文というカリキュラムで教育を受けた側からのマークが重要となるが、どの項目においても「とてもあてはまる」「ややあてはまる」に半数以上のマークが偏った結果となった。そもそもアンケートに自ら答えているというバイアスがかかってはいるが、アンケートに答えてまで卒業論文にそのような意義がなかったと表明したい学生や卒業生は少ないということは言えるだろう。受けた側としてはどのようなレベルにせよ意義があると、「思っ」てはいるとあって良いわけである。

しかし、それらの項目A～Gは、卒業論文が役に立つという前提のもとで、つまり、仮に卒業論文に意味や意義があると言うとしたら、どのようなものを挙げる事が出来るのかを常識的な範囲で思いつく限りにおいて並べたものである。「意義があると言うとしたら」

という予想のもの並べたものである。従って、自分が、もしくはその家族が、お金を費やした上で受けた、その教育に、何らかの理由でよほど否定的でもない限り、意義を持たないとは思いにくだらう。

さらに、それぞれの項目を見ていきたい。A～Dまでの四つと、E・F・Gの三つはグループ分け可能な項目である。先に、後者のグループを見ていこう。「E. 困難なことを最後までやり遂げる経験」「F. 自分の主張を分かりやすく伝える方法を学ぶ経験」「G. 主体的な学習態度を養う経験（※機関調査では「主体的な学習態度の涵養）」の三つであるが、それらは実際、文学部における卒業論文でなくても、いや、大学における教育でなくとも、持つことが可能な意義である。それが、文学部の教育でなくてはならない理由はどこにもないのである。

次に前者のグループを見てみよう。「A. 学術論文を書くという体験」「B. 学問の奥深さに触れる体験」「C. 専門教育の総仕上げ」「D. 専門分野の知識の深化」という4つであるが、それぞれ、さらにそれがどのような意義があるのかを尋ねられてしまうだろう。そしてそのような更なる意義を明確に答えることが出来なければ、それがその専門分野である理由は、見出されることはなくなってしまうのである。そしてまたそれも見いだされないように思われる。例えば先の筆者の研究室の例で言えば、西洋古典哲学を題材に学術論文を書くという体験に意義があるというのはどのようなことなのかということである。西洋古典哲学という学問の奥深さに触れるということが、古典語を習得し、古典語で書かれたテキストを読むという教育の総仕上げが、西洋古典哲学についてより深く知ることが、一体どんな意義があるというのであろうか。見出すことは出来ず、その結果、昨今、文学部は必要ないというように考えている人々を満足させるような答えはどうしたってできないであろう。しかし、果たしてそれらにどんな意義があれば人々は納得できるのか。おそらく「実用的」と言われるような意義であろう。

しかし、そもそもそういった「実用的」な意義を文学部の教育に見出すことが不毛なのかもしれない。そもそも学問は、知の探究は、それだけで価値のあるものなのである。古代ローマにおいて、「自由技芸*artes liberales*」と「機械技芸*artes mechanicae*」は区別されるものであった。「機械技芸*artes mechanicae*」は正に実用的な技術である。農業や商業、軍事などがそれにあたる。我々が社会で生きていくうえで実際に役に立つ、そのような技術である。それに反して「自由技芸*artes liberales*」は、所謂「自由七科」、文法学・修辞学・論理学および、算術・幾何学・天文学・音楽からなるものであり、それら自体が、我々が社会で生きていくうえで実際に直接役に立つということはない。そして、おそらく主に文学部の教育は「自由技芸*artes liberales*」に値する。それだけで価値のあるものが認められない場合に、そのような文学部が役に立つのかと言えば、役に立たないと言わざるを得ないのである。

ここで現在の日本の大学の状況を考えてみよう。第二次安倍内閣によって国家戦略として位置付けられた大学イノベーションは、業績一辺倒の、所謂「新自由主義」的な発想のもと行われようとしている。その「新自由主義」的な発想の中で文学部が生き残る道はないだろう。「ゼネラリスト」や「リーダー」を育てる教育としての「リベラルアーツ教育」と言われるものの中に、その希望を見出す論者もいるが（倉部2011:68-72）、そこで言われるような広い分野の学識をバランスよく備えた人を育てると言ったような理念は、建前や

希望としてはありうるかもしれないが、先の、所謂「リベラルアーツ」の語源となった「自由技芸artes liberales」に直接あるわけではない。また、「新自由主義」の定義は困難だが、効率性の追求や優勝劣敗の競争原理、パターンリズムの否定などがそれに当てはまるとすれば、文学部の教育は全くそれらに反しているだろう。効率性を求めているのは、答えの出ない問いを考え続けることはできないだろうし、優勝劣敗の競争原理では、研究の多様性がなくなっていくだろう。その上、パターンリズムを否定してしまえば、学術論文など書けはしないだろう。故に、文学部で卒業論文を書くという行為、書かせる教育は、最たる反「新自由主義」的行為だと言えるかもしれない。

また、「研究と教育の機能が分断され、大学教員から研究・教育労働者としての権利／権限／存在基盤が奪われ、その必然的な帰結として学術の発展を通じて社会に貢献するという大学本来の機能が喪失しつつある」（日本科学者会議大学問題委員会2013:6）とも表現されている日本の大学のこのような状態は、危機的と言われるものだが、正に文学部の危機に直結しているのは明白である。しかし、そもそもの「学術の発展を通じて社会に貢献」とはいかなることかという疑問が浮かぶ。そもそも文学部は「社会に貢献」するのかどうかである。しかし、それは前述の「学問はそれだけで価値のあるものだ」という考えからすれば、また、社会の中で学問が営まれ、その学問がそれだけで価値があるものならば、それはあるだけで社会に貢献しているとも言えるだろう。しかし、もとよりその考えが受け入れられていない以上、文学部は「社会に貢献」しているとはどうしたって言い難くなってしまふのである。むしろ、「社会に貢献」しなければならないなどという条件もあってはいけないうだろう。それだけで価値のある知の探究の場として大学があるならば、その条件付けがあつては、純粋な知の探究ができなくなってしまうことは明白だからだ。条件なき大学というものが、事実上、実在しないとしても（Derrida2001:14）。

さて、日本科学者会議大学問題委員会は日本の大学の危機の原因を、「グローバル経済化の時代に即応して、日本を『科学技術創造立国』として再建し、バブル経済崩壊後の『失われた10年』（現在は20年）を克服するという発想が、支配層にあったこと」（日本科学者会議大学問題委員会2013:6）としているが、恐らく根はもっと深い。というのは同種の問題は日本だけではなく起こっていることだからである。ジャン=リュック・ナンシーによれば、「すでにここ二〇年以上のあいだ、いや、詳細に分析しようとするれば、もっと長い期間にわたって、ある変動が世界中の大学に浸透し、「高等」の名称に適した水準の研究教育機関に押し寄せている」（ナンシー2013:201）のである。そしてその原因は、「技術者、市民、人間を互いに切り離」（ナンシー2013:204）してしまったことにあるとしている。

それならば、私たちは考えなければならないだろう。学問はそれだけで価値のあるものだと言説は何を意味するのかを。またもし学問学術の発展というものが「社会に貢献」というのはどういうことなのかを。「社会」はおいそれと明確に定義づけられる言葉ではないし、「貢献」もまた然り、何をもって「貢献」と言えるのかは分からない。金銭的な価値以外で以って「貢献」があることの多数の支持を得るのは難しいように思われる。しかし、金銭的な価値を文学部の教育に結び付けることが困難なことは明白である。けれども、もしその「社会」という言葉が、その「社会」の成員のことをも意味しているのであり、その成員がそれぞれ主観を持ち、何かを感じ言明するのであれば、この場合、それは全く、極めて主観的な個人的なものの中に求めていくしかないのではなからうか。

となると、こう聞くことが大事になる。「どのような意義があったと思いますか」と。経験したもの、その営みに関わるものが、どう「思うか」、が重要なのである。「卒業論文」という体験を、それだけで価値のあるところの、所謂「知の探究」である学問の一端であることから外さず、それでいて関わるものがどう感じ、どう思うかが重要なのであろう。いや、重要だと言えるかはわからない。そこにすぎるしかない、という言い方のほうが適切かもしれない。そしてそこから、エビデンス無きものである文学部の教育へのエビデンスになりうるものが出てくることを期待したい。

ちなみに、そもそも古代から哲学は評判が悪い。二〇年やそこらの問題ではなく、おそらく約二五〇〇年も前から、役に立たないものと言われ続けてきている。その悪評に対してプラトンは『国家』篇の中でソクラテスにこう語らせている。

君の言うことは正しいと教えてやりたまえ。確かに哲学をしている人々のうちの最も優れた人々だって大衆からすればただの役立たずだ。でもね、役立たずであることの責任は役に立てることのできない人々にあるのであって、その優れた人々にあるとすべきではないのだ (Pl. *Rep.* 489B)

文献表

Jacques Derrida, *L'Université sans condition*, Paris: Éditions Galilée, 2001.

S.R. Slings(ed.), *Platonis Respvblica*, New York ; Tokyo : Oxford University Press, 2003.

倉部史記『文学部がなくなる日』、主婦の友新書、主婦の友社、2011年。

ジャン＝リュック・ナンシー「大学—知と非—知」『人文学と制度』西山雄二編、未来社、2013年。

多彩な人文系諸学問と卒業論文

谷村 英洋

「文学部」というカテゴリーは、社会科学系の学部や自然科学系の学部と並んでいると、ある一括りの学問を束ねた単一の組織として自明視される。しかし、ひとたび個々の文学部の内に目をやると、哲学・史学・文学をはじめとする個性的かつ伝統的な学問・学科が軒を連ねている。文学部出身者ではない筆者は、それらが、学問としてのみならず教員の組織として相互に独立している状況を、大学職員になって初めて、比較的近くで体感するようになった。

そのような多彩・独立を特徴とする諸学問・諸学科の間で、卒業論文の位置づけはどのように異なるのであろうか。分析のため、「人文科学系学科の卒業論文についての調査」に回答してくれた学科長 487 名の所属学科を、その名称から 8 つのグループに分類した (図表 1)。門外漢が個人で行った分類の結果であるので、暫定的なものと考えて頂きたい。「文学・語学」に関しては、日本語系の「文学・語学(日)」と非日本語系の「文学・語学(外)」に分割した。しかし、「史学」については数が少なく、しかも対象国によって明確に分類することができないため、「史学」で 1 カテゴリーとした。「人文学」は、学科の名称に包括的なカテゴリーが使われていて、詳細な学問カテゴリーが明らかでないものである。結局、数の上で最も多くなったのは、「学際・その他」(194 学科)であった。「文学・語学(外)」(90 学科)、「心理・教育学」(85 学科)がそれに続く。

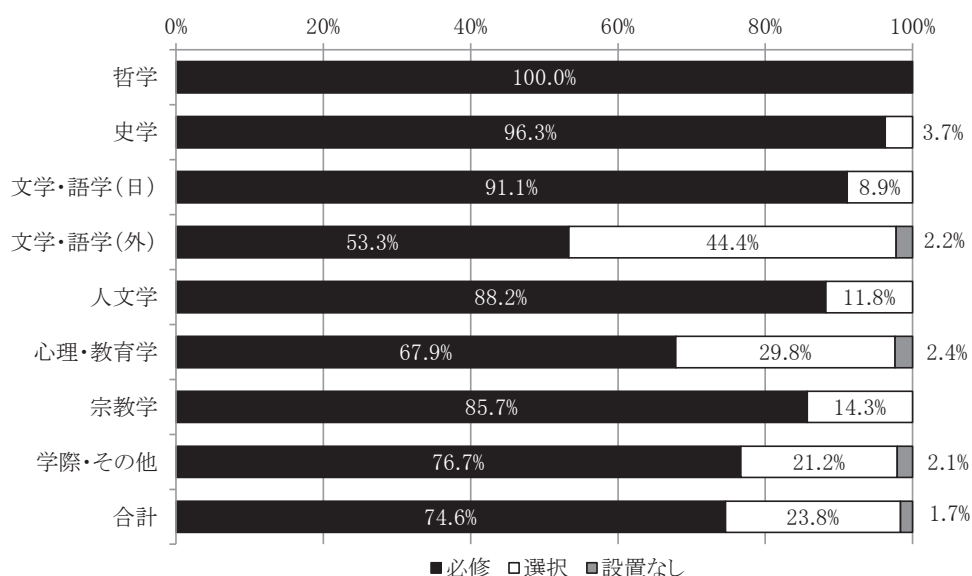
図表 1 学科類型の分布

	学科数	%
哲学	14	2.9
史学	27	5.5
文学・語学(日)	45	9.2
文学・語学(外)	90	18.5
人文学	17	3.5
心理・教育学	85	17.5
宗教学	14	2.9
学際・その他	194	39.8
学科名無回答	1	.2
合計	487	100.0

全学科で見ると、卒業論文が必修科目になっている学科が 74.6% (361 学科) に上り、多数派である (図表 2)。選択制の学科は 23.8% (116 学科) で約 4 分の 1 を占め、設置なしは 1.7% (8 学科) とわずかである。学科類型別にみると、「哲学」、「史学」、「文学・語学(日)」は必修の割合が高い。「哲学」では 14 学科すべてにおいて必修である。哲・史・文という伝統的な人文学領域においては、現在でも卒業論文を書くことが学士課程のスタンダードだといっただろう。

一方、同じ文学・語学でも外国文学や外国語を学ぶ「文学・語学（外）」では、必修にしている学科は半数にとどまる。学習院大学文学部でも、英語英米文化学科、ドイツ語圏文化学科、フランス語圏文化学科は卒業論文を必修にしておらず、卒業研究等を選ぶこともできる。

そのほかにも選択制が2割を超えている学科類型は、「心理・教育学」(29.8%)と「学際・その他」(21.2%)である。



図表 2 卒業論文の設置状況（学科類型別）

選択制の学科では、どれぐらいの学生が卒業論文執筆を選択しているのだろうか。選択制が2割を超えた3つの類型について集計すると図表3のとおりであった。「文学・語学（外）」の学科では、履修者が「2割以下」という学科が51.4%に上る。逆に「6割以上」という学科は3割を下回る。「心理・教育学」と「学際・その他」では、6割以上の学生が執筆しているという学科が過半数を占める。したがって、選択制が比較的多い3つの学科類型の中でも、「文学・語学（外）」の特異な状況が明らかである。外国語や外国文化を主対象として学ぶこと、さらに外国語を用いて学ぶことのハードルの高さが、このような状況の背景にはありそうである。

図表 3 選択者の割合の分布（選択制をとる学科のみ）

	2割以下	3割～5割	6割以上	合計	n
文学・語学(外)	51.4	20.0	28.6	100.0	35
心理・教育学	13.0	26.1	60.9	100.0	23
学際・その他	16.1	32.3	51.6	100.0	31

今回の調査では、卒業論文の位置づけが1990年以降にどのように変化したかということも調べた。この変化について、学科類型も踏まえながら整理してみたい。設問を「1990

年以降」とした意図は、大綱化以降の変化をとらえるということにある。質問文は、「1990年以降の卒業論文の設置状況の変化としてあてはまるものはどれですか」というものだったが、過去20年間の変化を正確にとらえきれたか、心もとない。20年という時間が流れれば、昨今の大学のカリキュラム改革は数次にわたっている可能性がある。また、過去20年を振り返って正確に答えることは、今現在（2011年の調査当時）の学科長にとって容易ではなかったはずだ。「わからない」や「その他」という回答があった背景には、以上のような事情があるだろう。さらに、回答があった学科の実に6割は1990年以降に設置されていた（改組も含むと考えられる）。

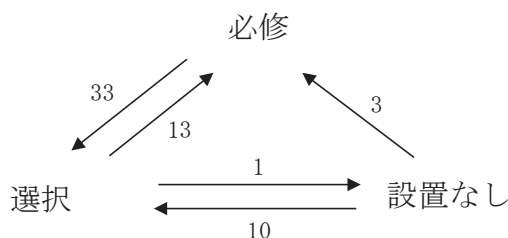
このような限界や留保事項を認識したうえで、調査データをまとめた。なお、すでに他の研究メンバーによって報告済みの内容も含まれることをお断りしておく。

図表4はすべての学科を対象に、卒業論文の設置状況の変化として把握できた結果を図示したものである。なお「わからない」や「その他」という回答は捨象している。もっとも多かったのは、「必修→選択」という動きで33学科が該当する。その理由を複数回答で尋ねているが、33学科の約半数（48.5%）の学科が「学生の学力が低下しているため」を選択している。「教員が多忙化しているため」（30.0%）、「卒業論文以外の教育課程が充実しているため」（21.0%）を選ぶ学科長も比較的多かった。「必修離れ」には、全員必修を困難にしている要因と、それを必ずしも自明視しない新しい教育課程編成の広がりという2つの面がある。

次に多かった動きは「選択→必修」（13学科）という動きであった。この理由については質問しておらず、明らかでない。必修離れとは逆の動きも生じているということだ。

「設置なし→選択」には10学科が該当した。理由としては、「学生の学力の向上を目指すため」（60.0%）、「教育水準の向上を目指すため」（50.0%）、「卒業時における学生満足度の向上を目指すため」（50.0%）といった項目が多く選択された。選択制であっても、卒業論文というメニューが教育と学習の向上にとって有益だという考えが、こうした動きを生んでいる。

文学部全体で見れば、必修離れ（「必修→選択」）の動きが相対的に多くみられる一方で、「設置なし→選択」や「選択→必修」という卒論重視の動きもみられることが確認された。



図表4 1990年以降の卒業論文設置状況の変化（全学科）※値は学科数

図表5は、設置状況の変化を学科類型別にまとめたものである。必修離れの動きをした学科、すなわち現在選択制をとっており1990年以降に必修から選択制へと移行した学科は、先に見た通り33学科あった。その内訳をみると、「学際・その他」が13学科、「文

学・語学(外)」が9学科、「心理・教育学」が7学科、「文学・語学(日)」が3学科、「人文学」が1学科となっている。選択制が2割を超えている3つの学科系統が、過去約20年間の必修離れの中心になってきたことがうかがえる。また、実数の上では「学際・その他」が最多だが、必修離れの学科が当該類型全体に占める割合が最も高いのは「文学・語学(外)」(10.0%)である。選択制で「変化なし」という学科も25.6%と「文学・語学(外)」で最も多い。つまり、1990年以前も以後も、「文学・語学(外)」に属する学科群は、選択制への指向性が強かったということが示唆されている。

図表5から明らかになるもう一つの興味深い点は、「設置なし→選択」や「選択→必修」という卒論重視の変化が、実は、「文学・語学(外)」、「学際・その他」、「心理・教育学」の学科によって引き起こされているということである。必修離れにせよ、卒論重視にせよ、卒業論文のとらえ直しは、これらの学科類型で相対的に活発であると指摘できる。

図表5 1990年以降の卒業論文設置状況の変化(学科類型別)

現在の設置状況	必修						選択						設置なし					合計
	変化なし	選択↓必修	設置なし↓必修	その他	わからない	無回答	変化なし	必修↓選択	設置なし↓選択	その他	わからない	無回答	変化なし	選択↓設置なし	その他	わからない	無回答	
哲学	13			1														14
	92.9			7.1														100.0%
史学	25			1													1	27
	92.6			3.7													3.7	100.0%
文学・語学(日)	41						1	3										45
	91.1						2.2	6.7										100.0%
文学・語学(外)	37	3	2	3	1	2	23	9	4	3	1			1			1	90
	41.1	3.3	2.2	3.3	1.1	2.2	25.6	10.0	4.4	3.3	1.1			1.1			1.1	100.0%
人文学	12	1			1	1	1	1										17
	70.6	5.9			5.9	5.9	5.9	5.9										100.0%
心理・教育学	46	2		5	1	3	11	7	2	4	1			1			1	84
	54.8	2.4	0.0	6.0	1.2	3.6	13.1	8.3	2.4	4.8	1.2			1.2			1.2	100.0%
宗教学	10			1	1		2											14
	71.4			7.1	7.1		14.3											100.0%
学際・その他	120	7	1	9	2	9	18	13	4	1	3	2	3		1			193
	62.2	3.6	0.5	4.7	1.0	4.7	9.3	6.7	2.1	0.5	1.6	1.0	1.6		0.5			100.0%
学科無回答										1								1
										100.0								100.0%
合計	304	13	3	20	6	15	56	33	10	9	5	3	4	1	1	1	1	485
	62.7	2.7	0.6	4.1	1.2	3.1	11.5	6.8	2.1	1.9	1.0	0.6	0.8	0.2	0.2	0.2	0.2	100.0%

「学習院大学在學生調査」実施概要

谷村 英洋

学習院大学人文科学研究所の共同研究プロジェクト「人文系学士課程教育における卒業論文がもたらす学習効果の検証」では、平成 23 (2011) 年度から平成 24 (2012) 年度にかけて 3 つの質問紙調査を実施した。本節では、その中で 2 番目に実施した「文学部卒業予定者の学生生活と卒業論文・卒業研究に関する調査」(以下、「在學生調査」) の実施概要について報告する。

1. 調査の目的

本調査は、大学入学前を含め、調査時点までの学生生活や卒業論文・卒業研究への取り組み方を問うことにより、学習院大学文学部の今後の教育のあり方を考えるための基礎的データをを得ることを目的として実施した。

2. 調査対象

平成 23 (2011) 年度に学習院大学文学部を卒業予定の者(卒業要件となっている所定の単位数を修得済み、かつ、卒業論文・卒業研究の提出を行った者) 全員を対象として実施した。調査対象者数は、表 1 のとおり、計 645 名となった。

表 1 「在學生調査」対象者数

	対象者数
哲学科	99
史学科	98
日本語日本文学科	130
英語英米文化学科	121
ドイツ語圏文化学科	41
フランス語圏文化学科	64
心理学科	92
計	645

※英語英米文化学科・ドイツ語圏文化学科は、卒業論文・卒業研究の選択者の合計、
フランス語圏文化学科は、卒業論文・卒業翻訳・卒業演習の選択者の合計。

3. 実施方法・時期

平成 23 (2011) 年 1 月から 2 月にかけて実施された各学科における卒業試験(卒業論文・卒業研究の口述試験) 時に質問紙を直接配付した。なお、フランス語圏文化学科の卒業演習選択者に限り、卒業論文の執筆に関する質問項目を削除した質問紙を別に用意した。回収については、各学科に用意した専用箱への提出を依頼し、督促は行わなかった。

4. 回答状況

学科での直接配付ということもあり、回答者数は603名、回答率は93.5%と、非常に高い回収率となった。

表2 「在学生調査」回答者数・回答率

	回答数	回答率
哲学科	96	97.0%
史学科	89	90.8%
日本語日本文学科	120	92.3%
英語英米文化学科	109	90.1%
ドイツ語圏文化学科	41	100.0%
フランス語圏文化学科	63	98.4%
心理学科	85	92.4%
計	603	93.5%

※英語英米文化学科・ドイツ語圏文化学科は、卒業論文・卒業研究の選択者の合計、
フランス語圏文化学科は、卒業論文・卒業翻訳・卒業演習の選択者の合計。

※本節は『大学教育学会誌 第35巻 第1号 (2013年5月刊行)』からの転載です。

大学教育学会誌 第35巻 第1号 2013年5月

〈事例研究〉

文学部での学びと成長

— 卒業論文に着目して —

谷 村 英 洋
(立教大学)

Learning and Outcomes in Humanities Undergraduate Program: Consideration on Effects of Commitment to Graduation Thesis Writing

Hidehiro Tanimura
(Rikkyo University)

A graduation thesis is viewed as an important element of undergraduate education in Japan partly because the process of writing it is thought to produce high learning outcomes. The aim of this paper is to examine the connection between commitment to writing it and graduating students' feeling of growth by using survey data (540 students) collected at Faculty of Letters, Gakushuin University.

The main findings are as follows: (1) Commitment to graduation thesis writing significantly affects whether to achieve growth feeling on various aspects, and it has relatively strong association with growth on disciplinary knowledge, writing skills, and an ability to take planned action. (2) Commitment to the other learning activities before starting graduation thesis writing: reading, writing, and making voluntary efforts to understand classes also affects growth feeling. (3) The accumulated learning experiences from these activities and graduation thesis writing significantly associate with growth feeling on disciplinary knowledge, writing skills, and critical thinking.

These results imply that enriching students' commitment to graduation thesis writing is effective in enhancing learning outcomes, and that enriching learning experiences before starting a graduation thesis is also crucial.

[キーワード：文学部，卒業論文，卒業研究，ライティング，成長感，学習成果，学習院大学]

1. 課題設定

(1) 目的

本稿は学習院大学文学部における学生の学習，特に卒業論文への取り組みが卒業時までの成長に対しどのような寄与しているのかを検討する。後述するように，同学部では卒業論文を重視した教育を行っている。ただしこれまで，書き上げられた卒業論文の評価と別に，その執筆経験がどのような点で学生を成長させているのかとい

う検証は行われてこなかった。そのような検証を通じて，卒業論文がもつ意義を確かめ，今後の同学部の教育への示唆を得ることが本稿の目的である。

同学部のみならず，人文学系の大学教育は卒業論文・卒業研究（以下，卒論）を重視してきた。近年の各種調査でも，自然科学系を除けば，人文学系の学部や学科は，必修にするなどして卒論を重視する傾向が強い（日本私立大学協会付置私学高等教育研究所 2011，河合塾 2012）。しかし，卒論を重視した教育を行いながらも，人文学をフィールドとした卒論の執筆がどのような意義をもつのか，学生のどのような成長に寄与するのかといっ

た点が、改めて問われることはほとんどなかったといえるだろう。

このような状況を受け、学習院大学人文科学研究所は、共同研究プロジェクト「人文系学士課程教育における卒業論文がもたらす学習効果の検証」(代表：神田龍身学習院大学文学部教授)を組織し研究を進めている¹⁾。本稿は、この共同研究プロジェクトの成果の一部である。

卒論はその書き上げられた完成物をもって、学士課程を通じた学習成果を測定・評価する材料と位置付けられることがある(黒河内 2008, 日本私立大学協会付置私学高等教育研究所 2011)。一方で、教員の指導や学生間の議論等を踏まえ卒論を執筆するというプロセスが、学生の知識・技能等の成長を促す学習のプロセスであるという見方も一般に共有されている。指導や研究支援に関する実践的研究は近年様々な分野で発表されており(たとえば、福田 2007, 真原ほか 2010, 岸川・嶋崎 2011)、卒論に関するプロセス改善への関心は高い。

卒論執筆を学生の学習プロセス、あるいは成長機会ととらえると、そのプロセスが実際に学生の成長につながっているのかという問いが生じる。卒論を重視する大学や学部であればなおさら重要な問いである。本稿では、上記プロジェクトの一環として、学習院大学文学部卒業予定者を対象に実施された質問紙調査のデータを用いて、この問いにこたえていく。この調査は、卒論を重視してきた人文系学部の一事例として同学部を取り上げ実施したものである。しかし、その計画と実施に同学部の教員が深く関与した、いわば自己分析の実践でもある。この実践の基礎的な知見を整理することが本稿の役割である。

(2) 学習院大学文学部の概要

同学部は、表1に示す通り、哲学・史学・文学系の各学科と心理学科からなる²⁾。いわば従来型の典型的な文学部の一つと言って差し支えないであろう。

同学部の卒論に関する概要は次の通りである。哲学科、史学科、日本語日本文学科、心理学科の4学科は「卒業論文」(12単位)を必修としている。英語英米文化学科とドイツ語圏文化学科は、「卒業論文」(12単位)と「卒業研究」(4単位)のいずれかを必修としている。ただし「卒業研究」を選択した場合は、論文執筆と並行して8単位の演習を履修する必要がある。「卒業論文」も「卒業研究」も論文を執筆するという点では共通している。フランス語圏文化学科は「卒業論文」(12単位)、「卒業翻訳」(12単位)、「卒業演習」(12単位)のいずれかを必修としている。同学科のみ、翻訳あるいは演習の履修という形で、論文執筆以外の選択肢を設けている。

表1 学習院大学文学部の概要

	2012年度 入学定員	2012年度 収容定員	在籍 学生数	専任 教員数
哲学科	95	380	453	12
史学科	85	340	403	12
日本語日本文学科	110	440	529	13
英語英米文化学科	115	460	536	13
ドイツ語圏文化学科	50	200	229	8
フランス語圏文化学科	80	320	389	10
心理学科	90	360	414	12
計	625	2500	2953	80

出典) 学習院大学ウェブサイト「公表情報コーナー」

注) 専任教員は教授、准教授、助教。また表中の教員は全て学科所属の教員で、このほかに学部所属の教員(助教)が2名いる。

同学部の教育研究上の目的には「文学部の行う教育の目標は、人文科学諸分野の研究内容を理解し、研究方法を取得した学生自らが、人文科学研究の創造を行うところにある」(学習院大学ウェブサイト「公表情報コーナー」の「教育・研究上の目的」より引用)との一文がある。学科ごとにバリエーションはあるが、どの学科においても、卒論等として学習・研究の成果をまとめ上げることを前提にし、1年次からそれへと水路づけられた段階的なカリキュラム編成がなされている。また卒論等の評価は口頭試問なども行い綿密に行われている。

(3) 分析課題

本稿は卒論執筆経験に着目するが、それ以外の学習経験も視野に入れる。在学中の成長は、それら両方の学習経験からもたらされていると考えられるし、両者を視野に入れることで、卒論の意義をより多角的に検討することができるからである。なお後述するように、卒論以外の学習経験としては、読書、レポート執筆、授業の理解という3項目を取り上げる。

具体的な分析課題は次の通りである。第一に、同学部における卒論以外の学習経験、卒論執筆経験、在学中の成長について記述する。第二に、卒論以外の学習経験と成長の関係を検討する。第三に、卒論執筆への取り組みと成長の関係を検討する。第四に、卒論以外の学習経験と卒論執筆経験の蓄積が、卒業時までの成長とどのような関係にあるのかを検討し、そこからそれぞれの学習経験の意義について考察する。

なお、卒論執筆が学生の成長につながるものであれば、より熱心に取り組んだ者ほど成長を遂げていると考えられる。また卒論以外の学習についても、より積極的に取り組んだ者ほど様々な成長がもたらされると想定される。ただ、それぞれの学習経験が学生にどのような成長をもたらすのかについて、予め明確な想定があったわけではない。したがって、個々の分析課題に厳密な仮説を用意し検証するのではなく、探索的に分析を進めるなか

で結果を解釈していくこととする。

2. データ

(1) 調査の概要

前出のプロジェクトの一部として実施した「文学部卒業予定者の学生生活と卒業論文・卒業研究に関する調査」で得られたデータを使用する。対象者は2011年度の学習院大学文学部卒業予定者で、2012年1月から2月にかけて実施された。厳密には「卒業直前期」というべき時期に実施された調査であるが、以下では「卒業時」という表現を用いることとする。

調査項目は、性別などの基本属性、入試種別、高校時代の学習経験、学科志望度、大学での学習や正課外活動の状況、卒論への取り組み方や意識、就職活動や決定進路、大学時代に身につけた能力である。質問紙は各学科を通じて配布し、学科事務室に設置した回収箱で回収した。調査対象者数は645人で、回答者数は603人、回収率は93.5%であった。性別では男性163人、女性438人、無回答2人で、女性が約7割を占める。対象学部において、女性が全体の7割程度を占めるのは例年のことである。学科別の回答者数は哲学科96人、史学科89人、日本語日本文学科120人、英語英米文化学科109人、ドイツ語圏文化学科41人、フランス語圏文化学科63人、心理学科85人であった。本稿では、卒論執筆経験に着目するという趣旨に照らし、卒業演習の履修者が多いフランス語圏文化学科の63人を除外した540人(男性154人、女性384人、無回答2人)を対象に分析を行う。

(2) 使用する調査項目

1) 卒論以外の学習経験

調査では、卒論への取り組みを除いて、大学入学後どのような学び方をしてきたかをたずねた。そのうち本稿では、「学術的な論文・書籍や文学作品を積極的に読んだ」、「授業で課されたレポート等はしっかり準備して書いた」、「授業内容が自分なりに理解できるまで考えたり調べたりした」の3項目に注目する。以下では、これらを読書、レポート、授業理解と略記する。読むこと、書くことが大学教育一般において重視されていることには疑いが無いが、特に人文学においては中核的な学びのプロセスだと考えられ、卒論執筆の下地となる知識と技能の形成にも寄与していると想定される。また授業の理解に関しては、当然在学中の成長と密接に関わっているという想定のもと、単に授業が理解できたかという点ではなく、授業内容から自らの知識を形成し獲得するという主体的な努力をどれだけ行ったかという点を問うた。なお厳密には、卒論以外の学習がすべて卒論執筆よりも時

間的に先行するとは断定できないが、おおむね入学から卒論執筆本格化前(最終学年の前半)までの時期に行われた学習を対象にして回答がなされたものと考えられる。

2) 卒論執筆経験

卒論執筆への取り組みの度合いを表すものとして、「卒論の執筆に真剣に取り組んだ」という質問項目への回答に着目し、以下この変数を卒論熱心度と呼ぶ。回答は「とてもあてはまる」から「全くあてはまらない」の4件法で求めた。

3) 卒業時までの成長

対象学部・学科の教育研究上の目的や学位授与の方針等を参照した結果、卒業時までの成長を問うにあたっては、知識、深い思考を行う力、コミュニケーションの力、自立の度合いという4つの側面を押えることが適切と判断した。具体的な質問項目は、教育研究上の目的等の記述や、学士課程教育の成果として一般的に例示される事項等を勘案して、以下の9項目とした。本稿ではこれら9項目を分析に用いる。

知識は「専門分野の知識」(専門知識)、「専門分野以外の幅広い知識」(幅広い知識)の2項目、深い思考力は「広い視野から人間を探究する力」(人間探求力)、「常識にとらわれることなく批判的に考える力」(批判的思考力)の2項目である。コミュニケーションについては「自分の考えを他者に文章で伝える力」(文章力)、「自分の考えを他者に口頭で伝える力」(口頭説明力)、「他者と協力してものごとを進める力」(協働力)の3項目を設けた。自立の度合いは「自分の適性や能力を把握する力」(自己把握力)、「目標を立てて計画的に行動する力」(計画的行動力)の2項目である。以上の9項目について、在学中にどの程度身につけることができたかを「かなり身についた」から「全く身につかなかった」の4件法で評価してもらった。

なお、上記項目への回答は、卒業時までの学習成果に対する主観的な評価を反映したものと考えられる。ただ、質問文は「これまでの大学生活で、あなたは以下に示すような知識・能力をどのくらい身につけることができましたか」であり、正課内外における何らかの学習の成果だけに限定して回答を求めたわけではない。本稿では、上記項目で把握された能力等の伸長を、その要因を限定せずに「成長」と呼び、それに対する学生本人の実感を「成長感」と呼ぶ。

で結果を解釈していくこととする。

2. データ

(1) 調査の概要

前出のプロジェクトの一部として実施した「文学部卒業予定者の学生生活と卒業論文・卒業研究に関する調査」で得られたデータを使用する。対象者は2011年度の学習院大学文学部卒業予定者で、2012年1月から2月にかけて実施された。厳密には「卒業直前期」というべき時期に実施された調査であるが、以下では「卒業時」という表現を用いることとする。

調査項目は、性別などの基本属性、入試種別、高校時代の学習経験、学科志望度、大学での学習や正課外活動の状況、卒論への取り組み方や意識、就職活動や決定進路、大学時代に身につけた能力である。質問紙は各学科を通じて配布し、学科事務室に設置した回収箱で回収した。調査対象者数は645人で、回答者数は603人、回収率は93.5%であった。性別では男性163人、女性438人、無回答2人で、女性が約7割を占める。対象学部において、女性が全体の7割程度を占めるのは例年のことである。学科別の回答者数は哲学科96人、史学科89人、日本語日本文学科120人、英語英米文化学科109人、ドイツ語圏文化学科41人、フランス語圏文化学科63人、心理学科85人であった。本稿では、卒論執筆経験に着目するという趣旨に照らし、卒業演習の履修者が多いフランス語圏文化学科の63人を除外した540人(男性154人、女性384人、無回答2人)を対象に分析を行う。

(2) 使用する調査項目

1) 卒論以外の学習経験

調査では、卒論への取り組みを除いて、大学入学後にどのような学び方をしてきたかをたずねた。そのうち本稿では、「学術的な論文・書籍や文学作品を積極的に読んだ」、「授業で課されたレポート等はしっかり準備して書いた」、「授業内容が自分なりに理解できるまで考えたり調べたりした」の3項目に注目する。以下では、これらを読書、レポート、授業理解と略記する。読むこと、書くことが大学教育一般において重視されていることには疑いが無いが、特に人文学においては中核的な学びのプロセスだと考えられ、卒論執筆の下地となる知識と技能の形成にも寄与していると想定される。また授業の理解に関しては、当然在学中の成長と密接に関わっているという想定のもと、単に授業が理解できたかという点ではなく、授業内容から自らの知識を形成し獲得するという主体的な努力をどれだけ行ったかという点を問うた。なお厳密には、卒論以外の学習がすべて卒論執筆よりも時

間的に先行するとは断定できないが、おおむね入学から卒論執筆本格化前(最終学年の前半)までの時期に行われた学習を対象にして回答がなされたものと考えられる。

2) 卒論執筆経験

卒論執筆への取り組みの度合いを表すものとして、「卒論の執筆に真剣に取り組んだ」という質問項目への回答に着目し、以下この変数を卒論熱心度と呼ぶ。回答は「とてもあてはまる」から「全くあてはまらない」の4件法で求めた。

3) 卒業時までの成長

対象学部・学科の教育研究上の目的や学位授与の方針等を参照した結果、卒業時までの成長を問うにあたっては、知識、深い思考を行う力、コミュニケーションの力、自立の度合いという4つの側面を押えることが適切と判断した。具体的な質問項目は、教育研究上の目的等の記述や、学士課程教育の成果として一般的に例示される事項等を勘案して、以下の9項目とした。本稿ではこれら9項目を分析に用いる。

知識は「専門分野の知識」(専門知識)、「専門分野以外の幅広い知識」(幅広い知識)の2項目、深い思考力は「広い視野から人間を探究する力」(人間探求力)、「常識にとらわれることなく批判的に考える力」(批判的思考力)の2項目である。コミュニケーションについては「自分の考えを他者に文章で伝える力」(文章力)、「自分の考えを他者に口頭で伝える力」(口頭説明力)、「他者と協力してものごとを進める力」(協働力)の3項目を設けた。自立の度合いは「自分の適性や能力を把握する力」(自己把握力)、「目標を立てて計画的に行動する力」(計画的行動力)の2項目である。以上の9項目について、在学中にどの程度身につけることができたかを「かなり身についた」から「全く身につかなかった」の4件法で評価してもらった。

なお、上記項目への回答は、卒業時までの学習成果に対する主観的な評価を反映したものと考えられる。ただ、質問文は「これまでの大学生活で、あなたは以下に示すような知識・能力をどのくらい身につけることができましたか」であり、正課内外における何らかの学習の成果だけに限定して回答を求めたわけではない。本稿では、上記項目で把握された能力等の伸長を、その要因を限定せずに「成長」と呼び、それに対する学生本人の実感を「成長感」と呼ぶ。

表4 卒論以外の学習経験と成長感（「成長感あり」の％）

	読書		p	γ	レポート		p	γ	授業理解		p	γ
	消極群	積極群			消極群	積極群			消極群	積極群		
専門知識	76.5	96.1	**	.77	78.9	90.6	**	.44	74.3	94.2	**	.70
幅広い知識	58.4	83.0	**	.55	64.2	75.2	*	.26	55.7	80.5	**	.53
人間探求力	75.1	90.8	**	.53	74.8	87.1	**	.39	73.1	89.4	**	.51
批判的思考力	56.6	82.7	**	.57	69.1	72.5		.08	56.3	79.1	**	.50
文章力	72.4	90.8	**	.58	65.9	88.3	**	.59	70.1	89.1	**	.55
口頭説明力	72.4	81.3	*	.25	66.7	80.9	**	.36	64.7	83.5	**	.47
協働力	80.5	86.9		.23	75.6	86.8	**	.36	82.0	85.2		.12
自己把握力	73.8	81.0		.21	61.8	82.9	**	.50	71.9	80.7	*	.24
計画的行動力	66.1	77.4	**	.28	49.6	79.7	**	.60	53.3	81.6	**	.60

**p<.01 *p<.05

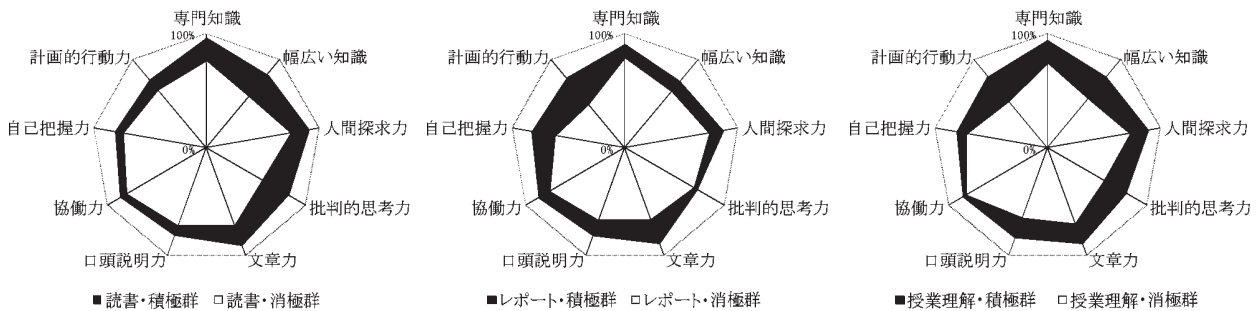


図1 卒論以外の学習経験と成長感（「成長感あり」の％）

とも関わっていることが示唆された。

レポートは、当然文章力と関連が強く、専門知識の獲得にもつながっている。それらと同等に強い関係にあるのが、自立に関わる計画的行動力と自己把握力である。レポート等を書くということは一定の期間を要するものであり、本来段取りが欠かせない。また、レポート課題の性格にもよるが、書くプロセスは、自らの興味関心や知識と向き合い自説を形成するプロセスでもある。レポートをしっかりと準備して書く経験が自立を促すという解釈だけが可能なわけではないが、両者が関連性をもつという結果は、計画的に書くことにむけた指導の意義が単に文章作成スキルの向上にとどまらない可能性を示唆している。

一方、レポートと批判的思考力との関連は有意なものではない。単に準備して書くというだけでなく、その準備のあり方が問われているといえよう。本項での分析結果を踏まえれば、レポート執筆が、読書や授業理解への積極的な取り組みと結びつくことが、批判的思考力向上にとって効果をもたらすと考えられる。

授業理解は図1を見ると、協働力と自己把握力を除く多くの項目で消極群と積極群の差が開いている。ガンマ係数が最も大きいのは専門知識(.70)である。計画的行動力(.60)も関連が強いが、これは「授業内容が自分なりに理解できるまで考えたり調べたり」することが、自らの関心に沿って自立して行動するという点で、計画的

な行動と親和性があるためであろう。また自分なりに考える・調べる経験が、視野の広がり(人間探求力)や常識を疑う態度(批判的思考力)の涵養にもつながっていると解釈できる。主体的な理解に努めることが、知識・思考・コミュニケーション・自立の各領域で多様な成長を促していることが示唆された。

(3) 卒論熱心度と成長感

次に卒論熱心度と成長感の関係をみていこう。以下の分析にあたり、卒論熱心度はその分布を考慮して、「とてもあてはまる」を「高群」、「ややあてはまる」を「中群」、「あまりあてはまらない」と「全くあてはまらない」を合わせて「低群」とした。表5ならびに図2が、クロス集計の結果である。

卒論熱心度も多くの成長感と関連しており、低群の学生よりも、中群・高群の学生の方が、成長感ありの割合が高くなっている。唯一の例外は、協働力である。低群80.0%、中群87.2%、高群82.7%で大きな差がない。高群で高まるという傾向もみられず、検定の結果も有意ではない。専門領域に大きく左右されると考えられるが、当該学部においては、卒論執筆のプロセスは個人での取り組みが主であり、他者との協働を伴うものではない。このことが端的に表れた結果といえよう。ただし、卒論執筆の過程では、演習や卒論指導といった場での発表や議論が重要な役割を果たす。口頭説明力の成長感が卒論熱心度と無関係でないのはそのためと解釈できる。

表5 卒論熱心度と成長感（「成長感あり」の％）

	低群	中群	高群	P	γ
専門知識	61.4	90.0	93.7	**	.56
幅広い知識	55.7	72.1	78.2	**	.27
人間探求力	68.6	83.6	89.5	**	.37
批判的思考力	55.7	67.1	80.7	**	.36
文章力	62.9	81.2	91.1	**	.50
口頭説明力	68.6	75.3	82.3	*	.23
協働力	80.0	87.2	82.7		.04
自己把握力	62.9	77.2	83.1	**	.28
計画的行動力	41.4	71.2	83.5	**	.49

**p<.01 *p<.05

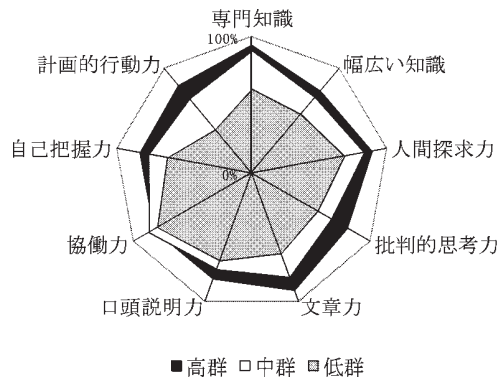


図2 卒論熱心度と成長感（「成長感あり」の％）

ガンマ係数に注目すると、卒論熱心度との関連性が最も強いのは、専門知識(.56)である。中群と高群では約9割の学生で成長感があるのに対し、低群では約6割にとどまり、その差が大きい。文章力(.50)と計画的行動力(.49)も値が大きく、関連が相対的に強い。後者については、卒論への熱心な取り組みが段取りを踏んだ計画的な執筆につながり、成長を促したともとれる。しかし計画的行動力が大学生活のなかで身についた学生ほど卒論熱心度が高かったという逆向きの解釈も可能である。いずれか一方を選択するための根拠はえられておらず、実際には両方のケースがあるという可能性も否定できない。いずれにせよ、卒論への取り組みが多様な成長感と結びついていることが明らかになった⁶⁾。

(4) 在学中の学習履歴と成長感

では、これまで個別に検討してきた卒論以外の学習経験と卒論執筆経験の蓄積によって、卒業時の成長感の有無はどのように異なってくるのか。卒論以外の学習経験

と卒論執筆経験を組み合わせて、学習履歴を示す3つの変数を作成し、クロス集計を行った。その結果から卒論執筆の意義について考察する。

ここでは紙幅の都合から、専門知識、文章力、批判的思考力の3つの成長感に限定し分析結果を提示する。前項でみたように、専門知識と文章力は卒論熱心度との関連が強く、かつ卒論によって成長しているという解釈も取りやすいため、卒論に着目した本稿がここで取り上げる意義は大きい。また批判的思考力は、一般に大学での教育・学習の主たる成果の一つとして重視されるが、成長感ありの割合が他を下回っており今後の課題と指摘した項目である。

3つの学習履歴は、読書・レポート・授業理解それぞれの2群(消極群/積極群)と、卒論熱心度の3群(低群/中群/高群)を組み合わせで作成した。読書と卒論執筆への取り組みを類型化したのが学習履歴I、レポートと卒論執筆への取り組みを類型化したのが学習履歴II、授業理解と卒論執筆への取り組みを類型化したのが学習履歴IIIである。いずれの学習履歴も卒論以外の学習経験が消極群で、かつ卒論熱心度が低群のグループをA、消極群かつ中群をB、消極群かつ高群をC、積極群かつ低群をD、積極群かつ中群をE、積極群かつ高群をFとした。表6に示したとおり、いずれの学習履歴もFの割合が3割を超え最も多い。

結果は表7・表8・表9のとおりである。カイ二乗検定の結果、すべての学習履歴が3つの成長感と有意な関係にある。卒論への取り組みを含め、在学中どのように学習を積み上げたかが、最終的な成長の実感へとつながっていることが確認された。

以下、表中の値に触れながら、ここから読み取れることを整理する。第一に、蓄積された学習経験が顕著に異なれば、成長感も顕著に異なる。多くの場合、成長感ありの割合は、学習の蓄積が最も低調といえるAで一番低く、逆に最も堅調に学習経験を蓄積したFで高い。たとえば表7で文章力の成長感をみても、学習履歴IのAでは成長感ありが約半数(56.6%)にとどまるのに対し、Fでは93.1%にも上る。対極的なAとFの顕著な差異は、在学中の学習の蓄積の重要性を改めて確認させる

表6 各学習履歴の分布(％)

	A	B	C	D	E	F	合計
	消極・低群	消極・中群	消極・高群	積極・低群	積極・中群	積極・高群	
学習履歴I(読書・卒論)	9.9(53)	20.1(107)	12.2(65)	3.4(18)	21.8(116)	32.6(174)	100.0(533)
学習履歴II(レポート・卒論)	7.5(40)	9.8(52)	6.2(33)	5.8(31)	32.1(171)	38.6(206)	100.0(533)
学習履歴III(授業理解・卒論)	7.9(42)	16.4(87)	7.7(41)	5.5(29)	25.6(136)	37.0(197)	100.0(532)

注) ()内はn

ものである。表には各セルの調整残差⁷⁾も示している。学習の積み上げが最も堅調といえるFやEで成長感ありが有意に多く、逆にAやBでは有意に少なくなっている。第二に、卒論執筆経験が成長感に影響を与えているこ

表7 学習履歴Ⅰ（読書・卒論）と成長感（%）

		A	B	C	D	E	F	全体	p
専門知識	成長感あり	58.5 (-6.89)	80.8 (-2.46)	84.1 (-0.96)	70.6 (-2.21)	98.3 (3.87)	97.1 (4.58)	87.8	p < .01
	成長感なし	41.5 (6.89)	19.2 (2.46)	15.9 (0.96)	29.4 (2.21)	1.7 (-3.87)	2.9 (-4.58)	12.2	
	合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	
文章力	成長感あり	56.6 (-5.46)	73.1 (-3.09)	85.7 (0.57)	82.4 (-0.1)	88.6 (1.74)	93.1 (4.24)	71.7	p < .01
	成長感なし	43.4 (5.46)	26.9 (3.09)	14.3 (-0.57)	17.6 (0.1)	11.4 (-1.74)	6.9 (-4.24)	28.3	
	合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	
批判的思考力	成長感あり	49.1 (-3.85)	54.8 (-4.26)	65.1 (-1.24)	76.5 (0.45)	78.3 (1.77)	86.2 (5.2)	83.2	p < .01
	成長感なし	50.9 (3.85)	45.2 (4.26)	34.9 (1.24)	23.5 (-0.45)	21.7 (-1.77)	13.8 (-5.2)	16.8	
	合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	

注) ()内は調整残差。網掛けは調整残差の絶対値が1.96を超える成長感ありのセル（表8、表9も同様）

表8 学習履歴Ⅱ（レポート・卒論）と成長感（%）

		A	B	C	D	E	F	全体	p
専門知識	成長感あり	65.0 (-4.6)	81.6 (-1.39)	90.9 (0.56)	56.7 (-5.38)	92.4 (2.19)	94.1 (3.51)	87.8	p < .01
	成長感なし	35.0 (4.6)	18.4 (1.39)	9.1 (-0.56)	43.3 (5.38)	7.6 (-2.19)	5.9 (-3.51)	12.2	
	合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	
文章力	成長感あり	55.0 (-4.97)	69.4 (-2.72)	75.8 (-1.18)	73.3 (-1.49)	84.6 (0.6)	93.6 (5.06)	71.7	p < .01
	成長感なし	45.0 (4.97)	30.6 (2.72)	24.2 (1.18)	26.7 (1.49)	15.4 (-0.6)	6.4 (-5.06)	28.3	
	合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	
批判的思考力	成長感あり	57.5 (-2.07)	67.3 (-0.71)	84.8 (1.74)	53.3 (-2.3)	67.1 (-1.62)	79.9 (3.33)	83.2	p < .01
	成長感なし	42.5 (2.07)	32.7 (0.71)	15.2 (-1.74)	46.7 (2.3)	32.9 (1.62)	20.1 (-3.33)	16.8	
	合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	

表9 学習履歴Ⅲ（授業理解・卒論）と成長感（%）

		A	B	C	D	E	F	全体	p
専門知識	成長感あり	47.6 (-8.3)	84.3 (-1.05)	80.5 (-1.49)	82.1 (-0.94)	93.4 (2.31)	96.4 (4.63)	87.8	p < .01
	成長感なし	52.4 (8.3)	15.7 (1.05)	19.5 (1.49)	17.9 (0.94)	6.6 (-2.31)	3.6 (-4.63)	12.2	
	合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	
文章力	成長感あり	52.4 (-5.56)	74.7 (-2.25)	80.5 (-0.48)	78.6 (-0.67)	85.2 (0.73)	93.3 (4.75)	71.8	p < .01
	成長感なし	47.6 (5.56)	25.3 (2.25)	19.5 (0.48)	21.4 (0.67)	14.8 (-0.73)	6.7 (-4.75)	28.2	
	合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	
批判的思考力	成長感あり	45.2 (-3.99)	54.2 (-3.88)	70.7 (-0.16)	71.4 (-0.05)	75.0 (0.96)	83.1 (4.41)	83.2	p < .01
	成長感なし	54.8 (3.99)	45.8 (3.88)	29.3 (0.16)	28.6 (0.05)	25.0 (-0.96)	16.9 (-4.41)	16.8	
	合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	

とが看取できる。卒論以外の学習において積極的だったという点で共通しているD・E・Fでは、卒論熱心度が高かった群ほど成長感ありが多いという傾向が読み取れる。顕著な例としては、表8の批判的思考力をみると、Dの成長感ありは53.3%、Eが67.1%、Fが79.9%である。また表7から表9を通して、D・E・Fのなかで調整残差の値から成長感ありが有意に多いといえるのは、ほとんどの場合、卒論熱心度が高群であったFだけである。

なお表7・表8の専門知識に注目すると、学習履歴I、IIのEで成長感ありが有意に多く、Dでは成長感ありが有意に少ない。専門知識の成長感は、卒論以外の学習に積極的であっても、卒論への取り組みによって大きく異なってくるものと推測される。

卒論以外の学習で消極的だったA・B・Cの3群でも、卒論熱心度が高かった群ほど成長感ありの割合が概ね高い。たとえば表7で専門知識の成長感ありの割合をみると、Aで58.5%、Bで80.8%、Cで84.1%となっている。ただし調整残差をみると、Cで成長感ありが有意に多いという結果は得られていない。Cの成長感ありの割合は、AからFまでを合わせた全体の分布からいえば有意に高いものでも低いものでもない。A・B・C3群の違いは、Cの成長感ありの多さではなく、AあるいはBの成長感ありの有意な少なさに表れている。

最後に、卒論以前の学習の重要性について改めて触れておく。繰り返しになるが、各学習履歴のC、すなわち卒論以外の学習には消極的だったが、卒論には非常に熱心に取り組んだという群で、成長感ありが有意に多くなっているセルは表7から表9のどこにもない。加えて、卒論に中程度の熱心さで臨んだとしても、卒論以外の学習で消極的だったBの成長感ありの割合は、全体からすれば有意に低いものであることが多い。これらの分析結果が示唆しているのは、卒論に熱心に取り組むだけで成長感が格段に得られやすくなるわけではない、すなわち、卒論執筆以前の消極的な学習経験の影響が卒業時まで尾を引くように持ち越されているということだろう。

(5) 考察

上記結果の含意は、同学部においてより多くの学生の成長を促すためには、まず低年次から読書、レポート執筆、授業理解を積極的に支援し、加えて熱心な卒論執筆をより多くの学生に実践させることが有効であるということである。

それらの方策については、本調査データの今後の分析によって検討していきたい。ただ、一つ分かっていることがある。それは、読書・レポート・授業理解が卒論熱

心度と有意に関連しているということである。容易に想像されるように、卒論以外の学習に積極的だった学生の方が、卒論熱心度が高い。読書・レポート・授業理解に積極的だった学生ほど、卒論執筆に先駆けて知識や自分なりの問題関心、読む力や書く力、思考力が備わり、卒論にスムーズに取り組んでいると推測される⁸⁾。つまり、同学部のカリキュラムが想定しているように、卒論以外の学習経験には、卒論に取り組む上でのレディネスを形成している側面があると考えられる。したがって、卒論以外の学習経験を向上させることには、学生の成長を直接的に下支えするという効果に加えて、卒論執筆への取り組みを高めることで成長を促すという間接的な効果も期待できる。このことを踏まえれば、なおのこと卒論以外の学習が重要である。

4. まとめと今後の課題

本稿では、学習院大学文学部生の在学中の学習への関与と、卒業時までの成長の関係を、特に卒論執筆経験に注目して分析した。明らかになったことは、第一に、卒論への取り組みも卒論以外の学習への取り組みも、卒業時の多様な成長感と関連しているということである。そして第二に、専門知識、文章力、批判的思考力という3つの知識・能力の成長感を取り上げて分析した結果、それらが、卒論執筆経験と卒論以外の学習経験の蓄積によって左右されていることを確認した。さらに指摘できることは、成長感の有無に対する卒論執筆の効果とその限定性である。すなわち、卒論執筆に熱心に取り組む方が専門知識、文章力、批判的思考力の成長感は得られやすい。しかし、非常に熱心に卒論を書いた学生でも、卒論以前の読書・レポート・授業理解への取り組みに消極的だった場合、成長を実感できる者が有意に多くなることはない。これらの結果は、卒論執筆が意義をもつ一方で、卒論以外の学習経験が在学中の成長の鍵であることを示している。

以上の結果から、当該学部の教育・学習の成果をさらに高めるためには、学生の卒論への取り組みを一層高めることと、卒論執筆に着手する前の学習を効果的に促すことの両方を実践することが有効であるという示唆が得られた。

なお本稿では、成長感の有無に焦点を絞って分析を行った。したがって卒論執筆やその他の学習がもたらす成長の詳細まで検討できたわけではない。今後の課題として、成長感の程度を視野に入れ、またより多くの成長感を取り上げて、データを精緻にみていくことが挙げられる。加えて卒論執筆経験について熱心度以外の指標を

用いることも検討すべきであろう。さらに、学科ごとの学問特性、就職活動や正課外活動などが卒論執筆に与える影響等も踏まえて分析を行っていくことが必要である。

謝辞

研究補助者である著者に論文執筆の機会を与えてくださった学習院大学文学部の神田龍身学部長(投稿時)、鶴間和幸教授、小島和男准教授、ならびにそのほかのプロジェクトメンバーの皆様へ深く御礼申し上げます。

注

- 1) 本プロジェクトは、まず卒業論文に着目しながら、人文系学士課程教育の効果や効用、多様な意義を調べ、それらの向上に向けた省察を行う試みとして実施されている。これまでに全国の人文系学科の学科長を対象としたカリキュラム調査、学習院大学文学部の卒業予定者を対象とした調査、同学部卒業生を対象とした調査の3つを実施し分析を行っている。学科長調査の分析結果の一部は、日本高等教育学会第15回大会において発表した(篠田雅人・日下田岳史・谷村英洋・神田龍身・鶴間和幸・小島和男「卒業論文の意味付けにみる人文科学系学科の現状—全国学科長調査の結果から—」)。
- 2) 2013年4月に新たに教育学科が設置される。
- 3) 調査では「先行研究をきちんとふまえること」「引用の仕方、文献表の作り方」「一次データ(原典、資料も含む)の利用」「問題設定の適切性」「独創性」「論理的な文章構成」「文章の分かりやすさ」のそれぞれを、卒論執筆時にどの程度意識したかを4件法(「とても意識した」から「全く意識しなかった」)で聞いた。卒論熱心度の高い学生ほど、これらの点に配慮して執筆したという分析結果が得られている。
- 4) 表4の検定結果はイェーツの連続性修正を行った検定による。
- 5) グッドマンとクラスカルのガンマ(γ)は2つの変数の関連の強さを表す。無関連の時に0になり、正の関連性が強いほど1(最大値)に近づき、負の関連性が強いほど-1(最小値)に近づく。本項の場合、符号が正であることは、消極群よりも積極群で成長感が多いという関連のしかたを表している。
- 6) なお、表4と表5で成長感ごとにガンマ係数を比較すると、前者の方が上回っている場合が多い。これは本稿が設定した成長感9項目が、卒論熱心度よりも卒論以外の学習と相対的に強い関連性をもっていること

を示している。本稿では探索的検討と位置付け、卒論執筆経験とそれ以外の学習経験の両方の効果を、これら9項目を用いて検討したが、卒論執筆経験独自の効果の検証のためには、その目的により適合した質問項目をさらに検討していく必要があるという示唆が得られた。今後の課題としたい。

- 7) 調整残差が1.96よりも大きければそのセルの度数は5%水準で有意に大きく、-1.96よりも小さければ5%水準で有意に小さいと判断される。なお、ここで大きい/小さいという時の比較対象は、全体の分布をもとに求められた期待度数であり、AからFの群間を比較を行っているわけではない。
- 8) 読書・レポート・授業理解のそれぞれに積極的に取り組んだ学生ほど、「授業をきっかけにして自分なりの関心を形成していった」を肯定し、卒論執筆にあたって「書きたいテーマがみつからなくて苦労した」を否定している。読書・レポート・授業理解は、知識・技能とともに、個々人の問題関心を作り上げるプロセスになっていることがうかがえる。

参考文献

- 福田真規夫(2007)「課題研究授業支援システムの研究～総合系学部における卒業研究の上流工程の支援～」、『大学教育学会誌』29(2), pp.122-130.
- 学習院大学ウェブサイト、「公表情報コーナー」.<http://www.gakushuin.ac.jp/univ/profile/kouhyo/index.html>, 2013.1.25)
- 河合塾(2012)、「ひらく日本の大学」から見る大学教育と国際化の現状—第2次調査結果より—, 『Guideline』4-5, pp.35-49.
- 岸川善紀・嶋崎真仁(2011)「経営工学分野における卒業研究管理手法」, 『電子情報通信学会技術研究報告』111(213), pp.1-6.
- 黒河内利臣(2008)「大学教育における卒論の重要性に関する一考察—大学教育の学習効果を測定する卒論の機能について—」, 『大学教育学会誌』30(1), pp.90-95.
- 真原友春・田隅広紀・西尾雅年(2010)「ロジックモデルとバランススコアカードを活用した卒業研究支援」, 『国際プロジェクト・プログラムマネジメント学会誌』5(1), pp.161-170.
- 日本私立大学協会付置私学高等教育研究所(2011)『第二回学士課程教育の改革状況と現状認識に関する調査報告書』.
(http://www.shidaikyo.or.jp/riihe/result/pdf/p4_002.pdf, 2013.1.25)

Research Report 781039562470

人文科学系の卒業論文と学生の成長感

—学習院大学文学部における事例研究—

A Case Study of Undergraduate Thesis and Students' Self-evaluation in Humanities' Program

中世古貴彦 NAKASEKO, Takahiko (独立行政法人国立美術館本部事務局職員)

卒業論文は人文科学系の学士課程教育において広く授業科目として配当されているが、学生の成長にどのような影響を与えるのか必ずしも十分に解明されていない。本稿では、教育の受け手である学生が文学部の卒業論文への取組みを通じてどのように成長感を高めているのかについて検証を試みる。

キーワード 卒業論文, 人文科学系の学士課程教育, 学生調査

1 本研究の背景

大学教育の質保証への関心が高まっている。「学士課程教育の構築に向けて(答申)」は、学士課程教育の改善方法の1つとして「在学中の学習成果を証明する機会を設け、その集大成を評価する取組」を促している。なかでも、卒業論文等の工夫改善や新規実施をとくに例示(中央教育審議会, 2008:27)していることは、卒業論文を重視している人文科学系の学士課程教育にとって重要な指摘であると考えられる。

大学教育の質保証に関する研究として、学生調査の分析等によってカレッジ・インパクトの検証を試みる研究が多数存在する¹。しかし、それらは初年次教育を含む授業等や学生自身の属性やエンゲージメント等に注目するものが多く、卒業論文については明らかにされていない点が少なくない。

また、教育内容が比較的標準化されているとされる工学系の分野では、男性ホワイトカ

ラーを対象に在学時の学習と卒業後の状況とのレリバンスという観点から大学教育の効用を検証した先行研究が存在するが、卒業論文に主たる関心があるわけではない²。一方で、いわゆる文系分野においては、教育内容の標準化があまり進んでいないとされることもあってか、卒業論文や学習の成果に関する実証的な研究はあまりみられない³。

2 本稿の目的

以上のような状況もあり、人文科学系の学士課程教育、とくに卒業論文に焦点を当てた検証が求められているといえる。本稿では、学習院大学文学部で行われた卒業論文を含めたカリキュラムの検証を目的とする調査を用い、卒業論文が学生の成長感に及ぼす影響を分析する⁴。

なお、本稿で学生の主観的な評価を使用している点について、予め説明しておきたい。本稿の目的は、卒業論文への取組みと学習成果との関連の検証と換言できる。それならば、

卒業時点で様々な知識や能力がどの程度身についていたかを学習成果と捉えるのが自然である。しかしながら、大学教育をとおして身につくと考えられる知識や能力の獲得度合を客観的に測定することは容易ではない。また、たとえばGPAや卒業論文に対する教員の評定といった他者からの評価を学習成果の代理変数とした場合にも、それらが適切に標準化されているとは限らない。これらの問題点を踏まえ、本稿では獲得した知識や能力に対する学生の自己評価、言い換えれば卒業時の成長感を（主観的な回答に依拠することによる限界はあるが）学習成果の代理変数として用いている。

3

学習院大学文学部の卒業論文等に関する調査

本稿で用いるのは、2012年1月に学習院大学文学部で卒業論文・卒業研究（以下、「卒業論文」）を経験した学生を対象にした質問紙調査（回収率93.5%、回答数603件）のデータ⁵である。学習院大学は首都圏に立地する私立大学で、文学部は哲学、史学、外国文学等の学科で構成され、人文科学の幅広い領域をカバーしている。本調査は、当該学部最終学年の学生のうち卒業論文を提出した者（645人）を対象とした事実上の悉皆調査であった。調査票の作成には当該学部教員も一部参加し、調査票の配付・回収にも学部の全面的な協力を得て実施した。

集計結果を簡潔に紹介すると、回答者における女子学生の割合は、在校生における割合とほぼ同じ7割強である。8割以上の学生が現在の学科を希望して入学したと回答しており、全体的に授業に意欲的に取り組む学生が多い。⁶8割前後の学生が「授業で課されたレポート等はしっかり準備して書いた」や「授

業を通して自分なりの関心を形成していった」に（とても+やや）あてはまると回答している。また約9割の学生が、卒業論文に関して教員に指導を受ける機会は十分あり、卒業論文の執筆に（とても+やや）真剣に取り組んだと答えている。一方、卒業論文の出来に（とても+やや）満足している学生と（あまり+全く）満足していない学生の割合はほぼ同じであり、自制的に自己評価をしている面もうかがえる。項目にもよるが概ね7割強から9割弱の学生が、大学生活を通じて様々な知識や能力が（かなり+やや）身についたと答えており、卒業後の進路について9割弱が（とても+やや）納得している。卒業を控えての昂揚感があるのかもしれないが、多くの学生は所属学科の教育を肯定的に評価していると考えられる。

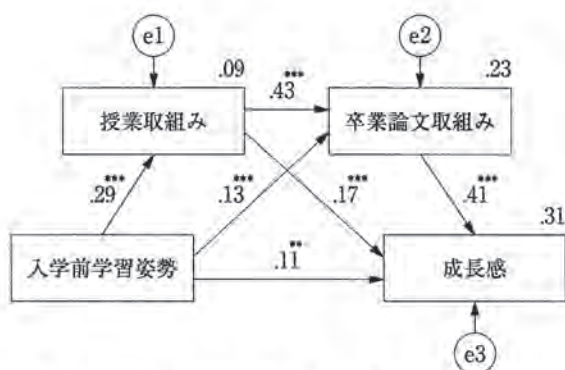
4

卒業論文への取組みと学生の成長感

卒業時の成長感との関連が想定される諸要因を統制する必要があるが、限られた紙幅でそれらを網羅することは難しい。できるだけ解釈しやすく、かつとくに重要な要因は押さえたモデルを検討した結果、インプット要因である入学前学習姿勢、卒業論文に先行する学習経験である授業取組み、学士課程教育の終盤の学習経験である卒業論文取組みのそれぞれが、いわばアウトプットである成長感にそれぞれどの程度影響するのかというモデルを採用した。これらの変数間に存在する時間的・論理的な順序を加味した分析を行うため、入学前学習姿勢以外は合成変数を作成したうえで、パス解析を行った。⁷なお、卒業論文に代えて卒業翻訳を選択できる外国文学系の1学科は分析対象から除外した。⁸欠損値のあるサンプルを除いた各変数の記述統計量は表1

表1 使用した変数の記述統計量

	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差	α 係数
入学前学習姿勢	516	1	4	2.78	0.78	—
授業取組み	516	3	12	9.19	1.67	0.709
卒業論文取組み	516	13	32	24.02	3.55	0.739
成長感	516	11	36	27.15	3.73	0.773



注) $n=516$, ***は0.1%水準(両側)で有意, **は1%水準(両側)で有意であることを示す。矢印の隣の数字はパス係数、変数の右肩の数字は決定係数。

図1 パス解析の結果

のとおりである。

パス解析の結果は図1のとおりで、すべてのパスが有意な正の相関を示した。まず、入学前学習姿勢が良好な者は、授業にも前向きで(パス係数は.29)、それほど顕著ではないが卒業論文にも真面目に取り組み(.13)、卒業時に一定の成長を感じている(.11)ことが読み取れる。自律的に学習を行う習慣が身についていた学生は、やはり大学入学後も伸びやすいのであろう。次に、授業取組みからのパスに着目すると、授業に熱心に取り組む者は、卒業論文でも手を抜かず(.43)、卒業時の成長感も高い(.17)。授業をとおして卒業論文につながりそうなテーマへの関心を深めたり、執筆に必要な基礎力を養ったりしているものと考えられる。最後に、卒業論文取組みから成長感へのパス係数の値(.41)が比較的大きく、入学前学習姿勢や授業取組みの影響を統制してもなお、卒業論文へ熱心に取り

組むことが学生の成長感をいっそう高めていることを示している。

詳細は割愛するが、各変数の標準化した総合効果、直接効果、間接効果を計算すると、卒業論文取組みの総合効果(または直接効果)が他よりも大きめであることがわかる。また、入学前学習姿勢や授業取組みにおいては間接効果の割合が大きく、これらが成長感に十分寄与するためには、卒業論文取組みを介する必要があることがうかがえる。

卒業論文取組みが全体的な成長感を押し上げるとしても、とくにどのような観点で効果があるのか、あるいはないのかも確認する必要がある。表2は、成長感の内訳である個々の変数を最終的な被説明変数とした場合の各説明変数の標準化総合効果である。紙幅の都合で一部を取り上げるだけにとどめるが、たとえば「他者と協力してものごとを進める力」に対しては、卒業論文取組みだけでなく、授業取組みもほとんど寄与していない。このような能力の育成は、当該学部の(正課)教育の課題なのかもしれない。観点別の分析結果を各学科のカリキュラムや教員の指導方針と照らし合わせ、狙いどおりの効果が(少なくとも学生の自己評価で)得られたのか検証が必要と思われる。

5 まとめと今後の課題

分析結果は、知識や能力の観点によって若干の違いがあるものの、卒業論文への取組み

表2 知識や能力の自己評価に対する各説明変数の標準化総合効果

被説明変数	入学前学習姿勢	授業取組み	卒業論文取組み
専門分野の知識	0.160	0.407	0.285
専門分野以外の幅広い知識	0.158	0.283	0.145
常識にとらわれることなく批判的に考える力	0.120	0.251	0.231
他者と協力してものごとを進める力	0.148	0.042	0.085
自分の考えを他者に文章で伝える力	0.138	0.224	0.436
自分の考えを他者に口頭で伝える力	0.199	0.138	0.230
自分の適性や能力を把握する力	0.095	0.148	0.299
目標を立てて計画的に行動する力	0.228	0.213	0.262
広い視野から人間を研究する力	0.179	0.197	0.242

が学生の成長感を高めることを示すものであった。「入学前学習姿勢」→「授業取組み」→「卒業論文取組み」→「成長感」とつながるパス係数の値が比較的大きいことに表れているように、入り口では学士課程教育への準備ができた学生を入学させ、卒業論文執筆に向けて授業等でしっかりと鍛え、最終学年でも気を抜かないように意欲的に卒業論文に取り組ませるといふ、学士課程教育の一連のプロセスが機能することの重要性と、そのなかで卒業論文の果たす役割が改めて示されたといえよう。ほとんど自明視されあまり検証されていない卒業論文の効果の一端について、教育の受け手である学生の評価に基づき検証した点に一定の意義があると考えられる。

ただし、本稿はあくまで事例となった文学部の学生の自己評価に基づく検証であり、人文科学系の卒業論文一般の有効性まで主張するものではない。また、卒業論文さえ頑張れば学生は十分に成長すると主張するものでもない。可能であれば客観的な指標を用いた検証も交えつつ、実際に教育に携わった教員による検討や、卒業生に対する調査等を通じて、卒業論文の効果を具体的に特定していくことなどが今後の課題である。

注

- ・1 カレッジ・インパクトの研究において、たとえば初年次教育に関する研究では山田(2012)が、学生のエンゲージメントに関する研究では小方(2008)が存在する。
- ・2 たとえば、工学系の学士課程教育については矢野(2005)が、大学院教育については濱中(2009)が挙げられる。
- ・3 たとえば、教科書に関する研究のなかでは、浦田(1987)が文系分野の標準化の程度が低いことを指摘している。
- ・4 本調査についての詳細は学習院大学人文科学研究共同研究プロジェクトのウェブサイト(http://www.gakushuin.ac.jp/univ/let/rihum/project_kanda.html)を参照されたい。なお、本稿における大学名の明示および調査データの的使用に関しては、プロジェクトメンバーの事前了承を得ている。ただし、本稿の内容は学習院大学文学部の公式見解ではなく、仮に誤謬等があった場合もその責任は筆者個人にある。
- ・5 特定のテーマについて調査して相当量の論理的な文章を執筆するという意味で、卒業論文と卒業研究はほぼ同様のものととらえ、本稿における表記は「卒業論文」に統一した。
なお、学習院大学文学部の卒業論文は12単位(または卒業研究4単位と卒業研究〔指導〕演習8単位)に相当する。学科によって多少異なるが、3年次からのゼミ参加や中間発表が課されるなど、教員の指導のもとでしっかりと取り組む体制がとられている。
- ・6 本調査でいう「授業」には、予習・復習も含まれている(質問紙にそのように明記)。
- ・7 本稿では合成変数を作成する前の個別の変数の組合せについて逐一紹介できないので、データの特徴性等も考慮し、各構成概念に対応する合成変数を用

いた。ただし、入学前学習姿勢については、事前に検討した合成変数の信頼性係数の低さや、単独でモデルに投入した場合の他の変数との相関が試作した合成変数よりも高めだったことなどを考慮し、高校時代の学習経験に対する設問「授業でわからなかったところは自分で考えたり調べたりした」への回答（4件法）をそのまま使用した。

授業取組みには、予習・復習も含めた「基礎教養科目」「自学科の専門講義」「自学科の専門演習」への取組み度合を尋ねた回答（4件法）の合計値を用いた。経験しなかった者の多い他学科の授業や、外国文学系の学科では意味合いが異なる可能性がある外国語の授業などは考慮していない。

卒業論文取組みには、どの程度「卒論・卒研の執筆に真剣に取り組んだ」のかと、執筆に際し「問題設定の適切性」「先行研究をきちんとふまえること」「引用の仕方、文献表の作り方」「一次データ（原典、資料も含む）の利用」「独創性」「論理的な文章構成」「文章の分かりやすさ」にどの程度注意したかを尋ねた質問への回答（4件法）の合計値を用いた。

成長感には、「専門分野の知識」「専門分野以外の幅広い知識」「常識にとらわれることなく批判的に考える力」「他者と協力してものごとを進める力」「自分の考えを他者に文章で伝える力」「自分の考えを他者に口頭で伝える力」「自分の適性や能力を把握する力」「目標を立てて計画的に行動する力」「広い視野から人間を研究する力」がどの程度身についたかという自己評価（4件法）の合計値を用いた。

以上はいずれも、回答時点（卒業直前）で学生が回答する回顧型の質問である。なお、各合成変数の内訳である変数同士には、ごく一部の組合せを除き、互いに統計的に有意な正の相関があることを確認している。

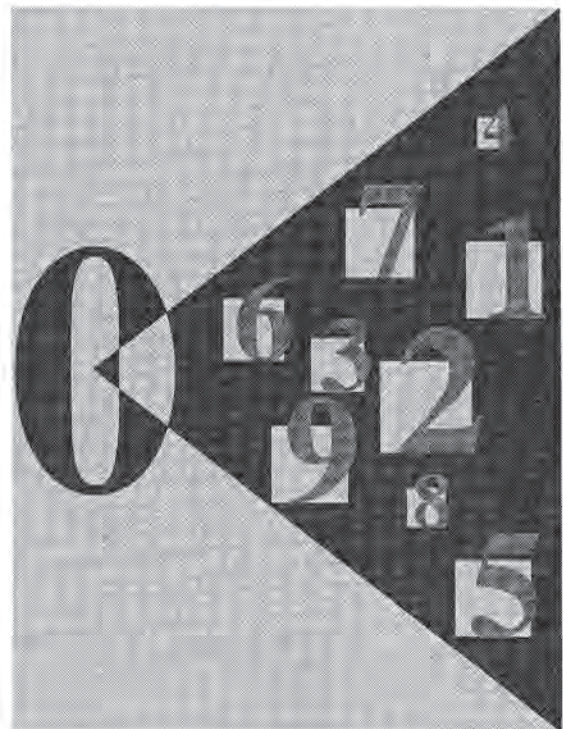
- ・8 本来であれば、人文科学系の卒業論文の検証を行うためには、その他の学問分野における卒業論文の執筆経験の有無についても統制できるデータとモデルを用いるべきと考えられる。しかしながら、仮にそのようなデータを用いて卒業論文の執筆経験の有無によるグループ分けができたとしても、グループ間の差異は入学者の学力やカリキュラム全体の違い等の卒業論文以外の要因を反映したものである可能性が高い。たとえば、卒業論文執筆に当たり指導教員の事前承諾が必要な場合、執筆経験の有無は、実際には学生の何らかの能力的な差異を意味しているおそれがある。したがって、1回限りの横断面調査に基づき、執筆経験の有無から卒業論文の効果を検証することは現実的ではない。そのため本稿では、厳密な意味で卒業論文の効果の検証とは言い難いものの、あえて文学部の卒業論文を執筆した学生だけを対象とし、その取組み方の違いに着目して分析を行った。

- ・9 パス解析に用いたこれら4つの変数間の相関係数はいずれも0.1%水準で有意な正の値だった。前述のように本調査は実質的に悉皆調査であり、統計的仮説検定は必要ないともいえるが、本稿では参考までに検定結果も記している。

- ・10 私の所属する研究グループでは、類似した調査設計のもとで、学習院大学文学部を卒業後10年前後が経過した卒業生を対象とする質問紙調査を別途実施している。本稿が示した知見の妥当性の確認も含め、卒業生調査を用いた実証研究を今後進める予定である。詳細については、上述の学習院大学人文科学研究共同研究プロジェクトのウェブサイト参照されたい。

文献

- 中央教育審議会, 2008, 「学士課程教育の構築に向けて（答申）」。
- 濱中淳子, 2009, 『大学院改革の社会学——工学系の教育機能を検証する』東洋館出版社。
- 小方直幸, 2008, 「学生のエンゲージメントと大学教育のアウトカム」『高等教育研究』11: 45-64。
- 浦田広明, 1987, 「大学教科書の問題」片岡徳雄編著『教科書の社会学的研究』福村出版, 204-21。
- 山田礼子, 2012, 『学士課程教育の質保証へむけて——学生調査と初年次教育からみえてきたもの』東信堂。
- 矢野眞和, 2005, 『工学教育のレリバンズ』平成14～16年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究（B）研究成果報告書。



人文科学系学科の卒業論文と学習成果 —A文学部における事例研究—

中世古貴彦 (独立行政法人国立美術館)、神田龍身 (非会員：学習院大学)、
嶋間和幸 (非会員：学習院大学)、小島和男 (非会員：学習院大学)、
篠田雅人 (学校法人学習院)、日下田岳史 (東京大学大学院・日本学術振興会特別研究員)、
谷村英洋 (立教大学)、于和莉 (非会員：学習院大学)

日本高等教育学会第16回大会 2013年5月26日 於 広島大学

1

構成

- 1. 研究の背景と目的
- 2. 使用するデータ
- 3. 分析モデル
- 4. 分析結果
- 5. まとめ
- 6. 今後の課題

2

1. 研究の背景と目的

- 人文科学系の卒業論文の効果に関する研究はあまり見られない
 - カレッジ・インパクト研究 (例えば山田 (2012)、小方 (2008) 等)
 - 初年次教育を含む授業等や学生の属性、エンゲージメント等が中心。大学教育のレリバンズ研究
 - 工学系ではいくつもの先行研究がある (矢野 (2005) 等)。
 - 一方、文系分野では教育内容の標準化が進んでいない (浦田 (1987) 等) ためか、実証的な研究は少ない。
 - 文系分野では標準化が進んでいるとされる経済学系 (原田 (2009)) では濱中 (2012) が男性ホワイトカラーを対象に分析。「学士課程答申」
 - 「学中の学習成果を証明する機会を設け、その集大成を評価する取組」を促す。卒業論文等の工夫改善や新規実施を特に例示 (中央教育審議会, 2008: 27)。卒業論文を重視している人文科学系の学士課程教育にとって重要な指摘。

3

本日の発表は次の研究の一部

- 学習院大学人文科学研究所共同研究プロジェクト
「人文系学士課程教育における卒業論文がもたらす学習効果の検証」
- 3つの調査を実施
 - ①全国の人文科学系学科の学科長が対象
「人文科学系学科の卒業論文についての調査」 (2011年11月実施、有効回答率44.0%、n=487)
 - 第15回大会 (2012年開催) で「卒業論文の意味付けにみる人文科学系学科の現状—全国学科長調査の結果から—」として、本研究グループの篠田・日下田から報告。
 - ②卒業直前の在学生在が対象 (本発表で用いるデータ)
 - 「文学部卒業予定者の学生生活と卒業論文・卒業研究に関する調査」 (2012年1月実施、有効回答率93.5%、n=603)
 - ③卒業生が対象
「学習院大学文学部での学びと卒業後の生活・意識等に関する調査」 (2013年2月実施、有効回答率23.0%、n=829)

4

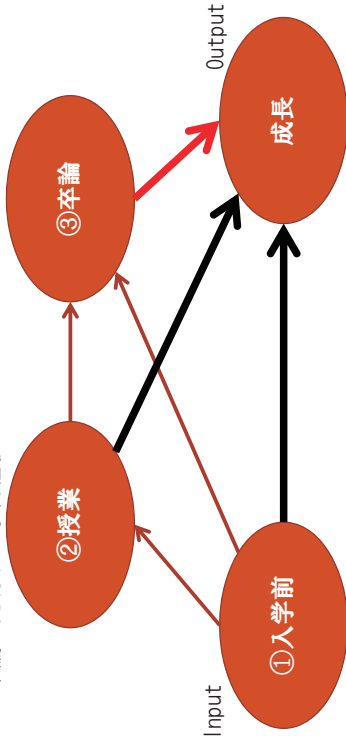
2. 使用するデータ

- 前項②の「文学部卒業予定者の学生生活と卒業論文・卒業研究にかかわる調査」(2012年1月実施)
 - 調査対象は、卒業・卒研等(以下「卒論」)を終えた2011年度(2012年春)の学習院大学文学部の卒業予定者(実質的に悉皆調査)
 - 有効回答率93.5%、有効回答数603
 - 約7割が女子学生
 - 今回分析対象となるのは、卒論に代え卒業翻訳を選択している1学科を除いた540人

5

3. 分析モデル

卒業に先行する学習経験 学士課程教育終盤の学習経験



- ①、②の影響力を考慮しても、③にどの程度の影響力があるのか。
- 知識・能力の内容によって影響力に違いがあるのか。

6

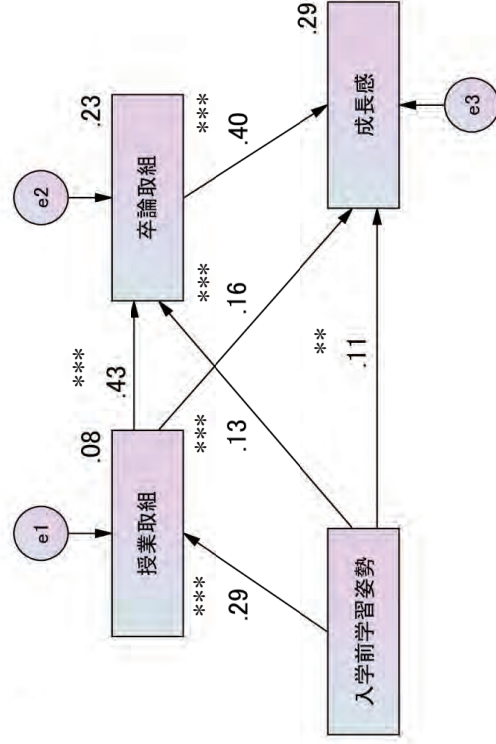
使用する変数の記述統計量

変数名	度数	範囲	最小値	最大値	平均値	標準偏差	α係数
入学前学習姿勢							
002.E.授業でわからなかったところは自分で考えたり調べたりした	538	3	1	4	2.78	0.78	-
授業取組							
004.A.基礎教養科目	530	3	1	4	2.78	0.75	-
004.B.自学科の専門講義	535	3	1	4	3.14	0.71	-
004.C.自学科の専門演習	534	3	1	4	3.24	0.67	-
卒論取組							
007.F.卒論・卒研の執筆に真剣に取り組んだ	534	3	1	4	3.31	0.72	-
008.A.問題設定の適切性	535	3	1	4	2.98	0.66	-
008.B.先行研究をきちんと読まえること	535	3	1	4	2.97	0.78	-
008.C.引用の仕方、文献表の作り方	534	3	1	4	2.99	0.78	-
008.D.一次データ(原典、資料も含む)の利用	534	3	1	4	2.93	0.79	-
008.E.独創性	534	3	1	4	2.74	0.81	-
008.F.論理的な文章構成	535	3	1	4	2.97	0.71	-
008.G.文章の分かりやすさ	535	3	1	4	3.09	0.70	-
成長感							
016.A.専門分野の知識	532	3	1	4	3.09	0.60	-
016.B.専門分野以外の幅広い知識	532	3	1	4	2.86	0.67	-
016.C.常態にとらわれない批判的に考える力	532	3	1	4	2.90	0.71	-
016.D.他者と協力してものごとを進める力	531	3	1	4	3.19	0.75	-
016.E.自分の考えを他者に文章で伝える力	530	3	1	4	3.05	0.66	-
016.F.自分の考えを他者に口頭で伝える力	531	3	1	4	2.99	0.68	-
016.G.自分の適性や能力を把握する力	531	3	1	4	2.98	0.68	-
016.H.目標を立てて計画的に行動する力	531	3	1	4	2.86	0.78	-
016.I.広い視野から人間を研究する力	531	3	1	4	3.13	0.69	-

※パス解析に用いた変数間の単相関係数は全て片側0.1%水準で有意。

7

4. 分析結果(標準化推定値)



8

パス図の解釈

- 全てのパスが統計的に有意。どの変数も直接的、間接的に「成長感」に寄与。
- 「入学前学習姿勢」→「授業取組」→「卒論取組」
→「成長感」と繋がるパス係数が大きめ。
- 「入学前学習姿勢」や、「授業取組」もよいに越したことはない。
- しかし、(それらの条件が同じならば、) 卒論に
しっかりと取り組むことには大きな効果が認められる。

9

成長感（及び合成前の変数） に対する各変数の標準化総合効果

	入学前学 習姿勢	授業取組	卒論取組
成長感	0.264	0.334	0.395
A.専門分野の知識	0.170	0.396	0.286
B.専門分野以外の幅広い知識	0.150	0.272	0.136
C.常識にとらわれない批判的に考える力	0.121	0.240	0.226
D.他者と協力してものごとを進める力	0.128	0.035	0.078
E.自分の考えを他者に文章で伝える力	0.132	0.219	0.421
F.自分の考えを他者に口頭で伝える力	0.187	0.126	0.219
G.自分の適性や能力を把握する力	0.092	0.143	0.298
H.目標を立てて計画的に行動する力	0.229	0.209	0.262
I.広い視野から人間を研究する力	0.175	0.190	0.238

10

5. まとめ

- 大学での成長感を高めるため、以下の要素はいずれも重要。
 - 高校までの学習姿勢
 - 予習復習を含む授業への取組み
 - 卒論への取組
- (少なくとも学生の実感では) 卒論へ真剣に取り組むことの寄与は小さくない。
- 知識・能力の内容によって影響力が多少異なる。
 - 知識や批判力は授業を通して身につけやすい
 - 言語による表現力や、自己や周囲を把握する力には卒論が有効

11

6. 今後の課題

- 卒論は学士課程教育の総仕上げ？
- 今後の課題は・・・
 - 客観的な観測に基づく検証
 - 卒業生調査を用いたレリバンスの検証
 - 当該大学（学部、学科）のカリキュラムの目標は達成できているのか, etc.

12

参考文献

- 浦田広明, 1987, 「大学教科書の問題」片岡徳雄編『教科書の社会学的研究』福村出版: 204-21.
- 小方直幸, 2008, 「学生のエンゲージメントと大学教育のアウトカム」『高等教育研究』11: 45-64.
- 中央教育審議会, 2008, 「学士課程教育の構築に向けて（答申）」.
- 濱中淳子, 2012, 「『大学教育の効用』」再考—文系領域における学び習慣仮説の検証—」『大学論集』43: 189-205.
- 原田健太郎, 2009, 「大学の教科書の研究」『高等教育研究』12: 237-253.
- 矢野眞和, 2005, 「『工学教育のレリバンス』科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書」.
- 山田礼子, 2012, 「学士課程教育の質保証へむけて—学生調査と初年次教育からみえてきたもの」東信堂.

13

ご清聴ありがとうございました。

学習院大学人文科学研究所共同研究プロジェクト「人文系学士課程教育における卒業論文がもたらす学習効果の検証」については以下のURLをご参照ください。

http://www.gakushuin.ac.jp/univ/let/rihum/project_kanda.htm!

14

卒業論文を書くことと読むこと

鶴間 和幸

学習院大学文学部の史学科では卒業論文をきわめて重視している。卒業単位であることはいままでもなく、400字の原稿用紙で本文だけで100枚（4万字）前後、しかも手書きで提出させている。かつてワープロ原稿を認めた年が例外的にあったが、当時はプリントに時間がかかり締め切り時間に遅れたとか、データをすべて消去したなどの事故が発生し、2年後に手書きの清書にもどした。史学科に入学した学生は、他大学の卒論の執筆要領と比べることもなく、それが当然のことと受け止めている。ワープロ草稿をもとに原稿用紙に文字を埋めていく清書の作業は、今の時代一生に一度の大きかりで貴重な体験となっている。

今回の調査でわかったことは、全国の人文系の大学で卒業論文がどのような位置づけであり、自分のところが全体でどのような位置にあったのかということである。手書きを義務づけているのは立正大学文学部史学科と2大学のみ、手書き100枚は学習院大学文学部史学科だけであった。それを誇るわけではないが、むしろそれを乗り越えていく学生に毎年お疲れ様といたい。

卒業論文は学生にとっては講義に出席して単位を取ることに比べて、かなりの負担である。といっても講義や演習の延長線上に卒業論文はあるので、しっかりと積み重ねをしてきた学生にはかなりのレベルの卒業論文を執筆することができる。レポートと卒業論文とは大きな開きがある。一年次では概説で歴史学の基礎を学び、基礎演習で史料を読むための初歩的トレーニングを積み、二年次、三年次では特殊講義で歴史研究のなんたるものを学び、演習で歴史の論文や史料の高度な読み方を学ぶ。四年次にみずからテーマを選び、自分で史料を読み込み、そこから新たな歴史的事実を発見する。論文のタイトルを見ると、堅実なものから、興味をそそられるものまで多様である。

提出された卒業論文は、主査、副査、三査の3名の教員が読み、最後には一週間かけて口述試験を実施する。学生一人に、教員全員が面談する。双方が緊張する時間であり、対学生といっても教員間のやりとりでもある。他の教員がどれほど学生を指導してきたのかわかる。三査ともなれば分野外の論文を読むことになる。論文を通して最近の研究動向を学べるし、指導の教員との質疑を通して学ぶことが多い。教員も四年間指導し、四年次では卒業論文を書くための演習を開いているから、およそ学生がどのレベルで卒業論文を完成させるかは予想がつく。ただ最後の頑張りによって予想を超えるできればよいこともあり、私たち教員の楽しみでもある。普段から積極的な学生は、教員とのやりとりで卒論の質を次第に高めていく。自分の世界に閉じこもる学生もいるので、四年次には卒業論文の中間報告と最終報告を行う。

12月20日に製本されて完成された卒業論文が提出される。この日は学生にとっても指導の教員にとっても、長い一日となる。清書が間に合わずに、当日の学科閲覧室で多くの友人の手を借りて流れ作業をし、午後4時の締め切り直前に提出先の教務課まで全力疾走する者もいる。とにかくこれほどまで真剣に取り組み、追い込まれては潜在的な能力を発揮する事業はほかにはない。地道に史料を収集し、丹念に読み込んでいく作業が、一冊

の論文に集約される。大学四年間の学習の結実でもある。いろいろな感想がある。在学中にこれほど真剣に取り組んだものはない、苦しかったが完成したときは嬉しかった、卒業生は卒論に比べれば、社会の仕事の方が楽だなんて生意気なこともいう学生もいる。

アンケートに現れない、卒業論文の裏事情を紹介しました。

学士課程教育の「出口」としての卒業論文 —文学部における学びが学習成果に与える影響—

中野 啓太

1 問題関心

本稿では、文学部において卒業論文が大学教育の学習成果に与える影響を明らかにすることを目的としている。

日本の大学教育においては卒業論文（卒論）が大きな役割を占める。大学教員は、研究室・ゼミ形式での教育の準備に時間的に大きな割合をさいており（金子 2013）、自身の研究室・ゼミの学生の育成・成長への関わりに自身の成長を強く感じる（小方 2012）とされる。小笠原（2009）は日本の大学教育は特に卒論・卒研で本格化すると指摘しており、研究室・ゼミ形式の重視、特にその中でも卒論・卒研重視の傾向が教員にはみられる。

また、一方学生の側も卒論の多くの時間的資源を投下しているようである。金子（2013）は授業外での学習時間が1・2・3年と段々減少していく一方で、4年になると上昇する傾向がみられ、この傾向は卒論・卒研による学習時間の増加によるものであると指摘している。

このような教員・学生の卒論重視によって、卒論は大学教育の集大成であるとみなされることがある（黒河内 2008）。多くの学生にとって、卒論は学生生活の最後に取り組む学業課題であり、同時に最大の課題であるからだ。だが、大学教育の集大成で重視されるからといって、卒論を終わらせることのみが大学教育の目的ではない。大学教育は、卒論だけでなく学士課程全体を通して評価されるべきものである。「卒論の重要性とその効果を高めるためには、卒論をその最終目標とするような教育的活動と研究的活動の設計、つまりカリキュラムの連関が必要」（黒河内 2009: 93）であり、卒論に取り組むにはその前での学習の積み重ねが必要とされる。

それゆえ、卒論までの学習への取り組みが不十分であるとすれば、卒論をしっかりと執筆できていたとしても大学教育の成果はさほど得られていないことになるのではないだろうか。その場合、卒論の執筆は学士課程教育の集大成なのではなく、卒論執筆に至るまでに大学教育が果たせなかった役割を補うためのつじつま合わせのような役割に過ぎないことになるだろう。

今回事例として取り上げる文学部を含む人文系学部では卒論が必修である割合が他の文系学部に比べて高く（河合塾 2012）、卒論が大学教育において重視されている。そこで、卒論が実際にどの程度大学教育の成果に影響を与えているのか、また卒論がどのようにそれ以前の学習と関連を持っているのかをこの事例を通じて検証することで、これまで大学教育の「出口」として重要視されてきた卒論を冷静に見つめることが可能になる。

2 先行研究の検討

卒論が大学教育の中で持つ効果について検討した論文は、谷村（2013）を除き、ほとんどみられない。

谷村（2013）は、学習院大学文学部の4年生540人の質問紙調査データの分析を行い、

学生の卒論への取り組みが卒業時までの成長にどのように寄与しているのかを、クロス集計表を中心に検討した。そこでの主な知見は、①「卒論熱心度」と「卒論以外の学習経験」は「卒業時までの成長」と関連をもつこと、②卒論には熱心に取り組んでいても、それ以前の学習に消極的だと成長感が全体的に低いため、卒論以前の学習が重要であること、である。

卒論以外の学習経験が卒論への取り組み方と卒業時の成長に関係するという視点は、本稿の問題関心と通じるところもあるが、本稿では以下の3点で先行研究の課題を克服したい。

第一に、卒論執筆経験を水準の高さで評価し、より適切な卒論学習効果を推定できるようにした。本稿では卒論執筆経験の変数について、良い卒論の要件について留意した度合い（卒論留意度）を採用している。谷村（2013）が用いている卒論満足度はたしかに卒論執筆経験の一側面を代理する変数ではあるが、卒論に満足したからといって水準の高い卒論が書けているとは限らないと考えられる。大学教育の効果という視点からは「満足したか」よりも「水準の高い卒論となっているか」を重視した方がより適切であると思われる。谷村（2013）でも卒論執筆経験について熱心度以外の指標を用いる検討の余地があることが指摘されているが、本稿では卒論留意度を卒論執筆経験（あるいは卒論学習効果）の代理指標としたい。ただし、卒論留意度は学生本人の自己認識を問うた設問を使用して作成された変数であるため、その客観性については一定の留保が必要だと考えられる。

第二に、卒論に関連する環境要因をモデルに含め、本人の学習経験以外の要因を含めた分析を行った。卒論を書く際には、自身の学習経験以外にも、論文指導を受ける頻度、同時期に学生が経験する場合の多い就職活動との関係といった執筆環境も重要になってくる。これらの卒論に関連する環境要因（卒論環境要因）の変数をモデルに含めることで、本人の学習経験に還元されない要因への目配りが可能になる。

第三に、分析の焦点となる卒論前の学習経験としての自律的学習習慣や卒論留意度、大学教育の成果の代理指標とする技能習得度の各変数をスコア化し、多変量解析に適した分析を行った。これらのスコア化は個別の質問項目についての議論が難しくなる一方で、多変量解析を用いた大学教育の効果のトータルな把握が容易になるメリットがある。本稿のように、他の変数との効果の度合いの比較を行う問題関心に応えやすい分析手法である。

3 分析課題

分析に当たって2つの分析課題を設定した（図1）。

第一の分析課題は、卒論留意度を規定する要因の検討である。卒論学習効果である卒論留意度はどのような要因によって規定されているのかを明らかにする。具体的には、大学時代の自律的な学習習慣と卒論環境要因を独立変数として、卒論留意度に与える効果を検証する。

第二の分析課題は、大学時代の技能習得度を規定する要因の検討である。卒論留意度は卒論以前の学習と比較してどれほどのインパクトを大学教育の成果に与えているのかを検証する。具体的には、大学時代の自律的な学習習慣と卒論環境要因と卒論留意度を独立変数として、大学時代の技能習得度に与える効果を検証する。その上で、結果的に有意な効果を見いだせた自律的な学習習慣と卒論留意度の2つの変数が大学時代の技能習得度に与

える効果の経路について、パス解析を用いて検証する。

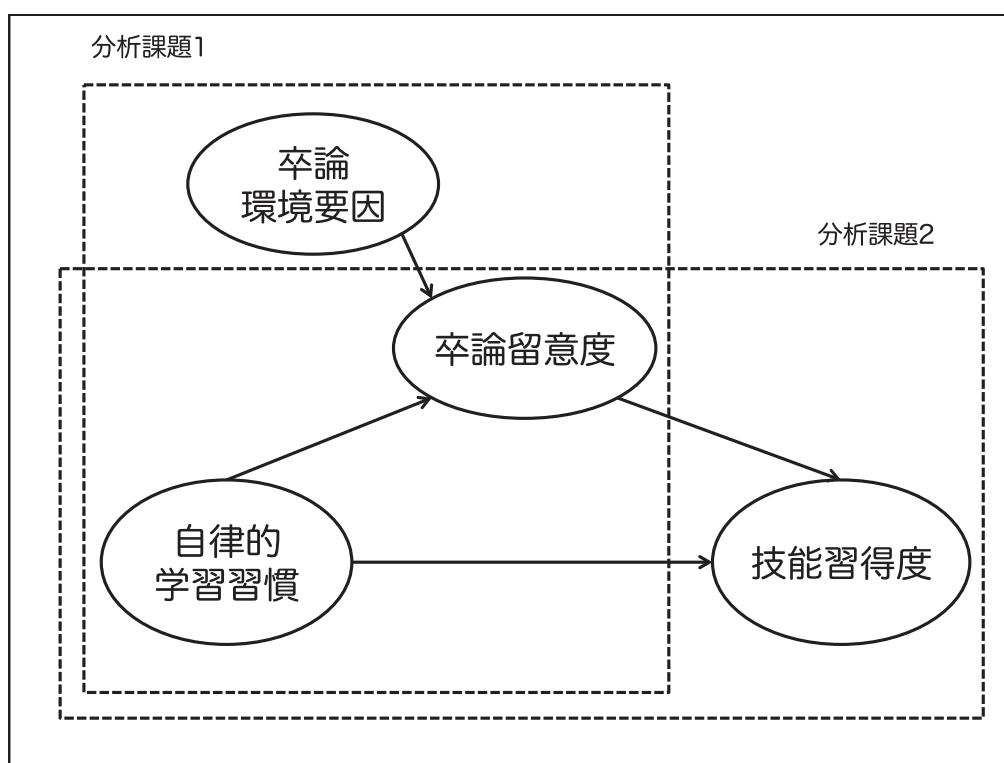


図1 分析課題の関係図

4 使用データ

分析には、学習院大学4年生を対象に2012年度1～2月に行った質問紙調査のデータを使用する¹。調査対象者数は645名で回答者数は603人（回収率93.5%）であった。なお、このデータセットは、谷村（2013）で使用されたものと同じである。

本稿では卒論が学習成果に与える影響を分析の主眼とするため、卒論が必修ではないフランス語圏文化学科の63人を除いた540人を対象に分析を行う²。男女の内訳は、男性154人、女性384人³であり、女性の割合が高いが、これは人文科学分野専攻の特徴である。

5 使用変数

①自律的学習習慣:Q05A「A学術的な論文・書籍や文学作品を積極的に読んだ」・Q05B「授業で課されたレポート等はしっかり準備して書いた」・Q05D「授業内容が自分なりに理解できるまで考えたり調べたりした」・Q05E「授業をきっかけにして自分なりの関心を

¹データは、学習院大学人文科学研究所共同研究プロジェクト「人文系学士課程教育における卒業論文がもたらす学習効果の検証」（代表 神田龍身）から提供を受けた。

²このデータセットには、卒業論文を執筆したドイツ語圏文化学科（卒論の執筆は必修ではない）の学生も含まれている。ただし、このデータセットにおいてドイツ語圏文化学科の学生は、卒論関連の質問に無回答であった1人を除いて全て卒業論文を執筆している。

³ 無回答の者が2人いた。

- 形成していった」を使用した⁴。それぞれ「とてもあてはまる」～「全くあてはまらない」を「4」～「1」に割り当てる逆転変数を合成して作成。クロンバックの α 値は0.710。
- ②自律的学習習慣 2段階: ケース数がおおよそ二分されるように、①で作成した「自律的学習習慣」を4～11 (43.6%) と12～16 (56.4%) に分割し作成。
- ③卒論留意度: Q08A「問題設定の適切性」・Q08B「先行研究をきちんとふまえること」・Q08C「引用の仕方、文献表の作り方」・Q08D「一次データ(原典、史料も含む)の利用」・Q08E「独創性」・Q08F「論理的な文章構成」・Q08G「文章の分かりやすさ」を使用。「とても意識した」～「全く意識しなかった」を「4」～「1」に割り当てる逆転変数を合成して作成。クロンバックの α 値は0.702。
- ④卒論留意度 2段階: ケース数がおおよそ二分されるように、③で作成した「卒論留意度」を11～20 (46.4%) と21～28 (53.6%) に分割し作成。
- ⑤十分な論文指導: Q07B「教員に指導を受ける機会は十分あった」を使用した。「とてもあてはまる」を「1」、「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「全くあてはまらない」を「2」とした。また、後者を「0」としたダミー変数「十分な論文指導ダミー」を作成。
- ⑥就活による卒論関係時間の不足: Q07C「就職活動に時間を取られ卒論・卒研どころではなかった」を使用した。「あまりあてはまらない」「全くあてはまらない」を「1」、「とてもあてはまる」「ややあてはまる」を「2」として作成。また、後者を「0」としたダミー変数「就活による時間の不足ダミー」を作成。
- ⑦卒論テーマと卒業後進路との関連: Q07E「卒論・卒研のテーマは卒業後の進路と関係している」を使用した。「とてもあてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」を「1」、「全くあてはまらない」を「2」として作成。また、後者を「0」としたダミー変数「卒論テーマと卒業後進路との関連ダミー」を作成。
- ⑧技能習得度: Q16A「専門分野の知識」・Q16B「専門分野以外の幅広い知識」・Q16C「常識にとらわれることなく批判的に考える力」・Q16D「他者と協力してものごとを進める力」・Q16E「自分の考えを他者に文章で伝える力」・Q16F「自分の考えを他者に口頭で伝える力」・Q16G「自分の適性や能力を把握する力」・Q16H「目標を立てて計画的に行動する力」・Q16I「広い視野から人間を探究する力」を使用した。「かなり身についた」～「全く身につかなかった」を「4」～「1」に割り当てる逆転変数を合成して作成。クロンバックの α 値は0.772。
- ⑨技能習得度 2段階: ケース数がおおよそ二分されるように、⑧で作成した「技能習得度」を11～27 (57.0%) と28～36 (43.0%) に分割し作成。

6 分析

6.1 卒論留意度を従属変数とした基本クロス集計

分析課題1について多変量解析を行う前に、使用する独立変数と従属変数の基本的なクロス集計を検討する。

⁴ 厳密には卒論執筆時期も含まれるが、一般的に卒論執筆期にはすでに他の授業の履修を終えている学生が多いため、卒論執筆以前の学習習慣として使用している。

最初に、卒論環境要因の各変数と卒論留意度についてのクロス集計を検討する。表1は「十分な卒論指導」と「卒論留意度2段階」のクロス集計表である。この関連には有意差がみられ、十分な論文指導を受けている人ほど、卒論の留意点をおさえていることがわかる。すなわち、教員による論文指導が卒論の水準に効果を与えている。

表1 十分な論文指導×卒論留意度2段階

十分な論文指導	卒論留意度2段階		合計	N
	高	低		
あてはまる (%)	65.6	34.4	100.0	(256)
あてはまらない (%)	42.3	57.7	100.0	(274)
合計 (%)	53.6	46.4	100.0	(530)
クラメールのV : 0.233 0.1%水準で有意 p=0.000				

表2は、「就活による卒論関係時間の不足」と「卒論留意度2段階」のクロス集計表である。この関連には有意差がみられない。就活が忙しく、卒論に関係した時間がとれない場合でも、卒論の留意点をおさえて執筆するかどうかには影響を与えないようだ。

表2 就活による卒論関係時間の不足×卒論留意度2段階

就活による卒論関係時間の不足	卒論留意度2段階		合計	N
	高	低		
あてはまる (%)	49.5	50.5	100.0	(198)
あてはまらない (%)	56.0	44.0	100.0	(332)
合計 (%)	53.6	46.4	100.0	(530)
クラメールのV : 0.063 有意差なし p=0.171				

表3は、「卒論テーマと卒業後進路との関連」と「卒論留意度2段階」のクロス集計表である。この関連には有意差がみられ、卒論テーマと卒業後進路が関係している学生ほど、卒論の学習効果が高い。自分の卒論が今後の進路で生きてくると考えることで、しっかりと卒論に取り組み、よい卒論を書くということだろう。

表3 卒論テーマと卒業後進路との関連×卒論留意度2段階

卒論テーマと卒業後進路との関連	卒論留意度2段階		合計	N
	高	低		
ある (%)	59.3	40.7	100.0	(216)
ない (%)	49.7	50.3	100.0	(312)
合計 (%)	53.6	46.4	100.0	(528)
クラメールのV : 0.094 5%水準で有意 p=0.037				

次に、大学での自律的学習習慣と卒論留意度のクロス集計表を検討する。

表4は「自律的学習習慣2段階」と「卒論留意度2段階」のクロス集計表である。この

関連には有意差がみられ、ポイント差は 45.8 と極めて大きい。卒論を書く前から自律的学習習慣がある学生ほど、卒論留意点に注意している。自律的に学ぶ習慣がある学生は、卒論以前の学習を通じて、卒論の留意点を意識的あるいは無意識的に習得している可能性がある。

表 4 自律的学習習慣 2 段階×卒論留意度 2 段階

自律的学習習慣 2 段階	卒論留意度 2 段階		合計	N
	高	低		
自律的学習習慣あり (%)	73.5	26.5	100.0	(298)
自律的学習習慣なし (%)	27.7	72.3	100.0	(231)
合計 (%)	53.5	46.5	100.0	(529)
クラメールの V : 0.455 0.1%水準で有意 p=0.000				

以上の検討を踏まえると、「十分な論文指導」「卒論テーマと卒業後進路との関連」「自律的学習習慣」が卒論留意度に効果を与えていることがわかる。次節ではこれらの独立変数について、変数同士の影響をコントロールした上で卒論留意度に与える効果を分析する。

6.2 卒論留意度を従属変数とした重回帰分析

表 5 は、独立変数に「自律的学習習慣」と卒論環境要因の各変数を、従属変数に「卒論留意度」を用いた重回帰分析である。モデル 1 では卒論環境要因の各変数のみを独立変数に用いた分析を、モデル 2 では自律的学習習慣を独立変数に加えた分析を行っている。モデル 1 に比べて、モデル 2 の方がモデルの説明力が高い。

表 5 卒論留意度の規定要因分析（重回帰分析）

独立変数	モデル 1			モデル 2		
	B	標準化 偏回帰係数		B	標準化 偏回帰係数	
十分な論文指導ダミー	1.625	0.260	***	0.877	0.141	***
就活による卒論関係時間の 不足ダミー	-0.075	-0.012		0.008	0.001	
卒論テーマと卒業後進路との 関係ダミー	0.909	0.143	**	0.307	0.048	
自律的学習習慣 (定数)	19.549		***	0.779 11.000	0.523	*** ***
調整済み R2 乗値	0.081			0.330		
N	527			524		

注 : + p<0.10、* p<0.05、** p<0.01、*** p<0.001。

モデル 1・モデル 2 の両方で「十分な論文指導ダミー」が「卒論留意度」に有意な正の効果を与えている。学生本人の自律的な学習習慣の有無に関わらず、教員による十分な指導によって、卒論学習効果は上がると考えられる。また、逆にモデル 1・モデル 2 の両方で「就活による卒論関係時間の不足ダミー」は有意な効果を与えていない。クロス集計で

も確認できたように、本稿の分析では卒論学習効果に就活による卒論関係時間の低下の影響はみられなかった⁵。一方で、「卒論テーマと卒業後進路との関係ダミー」はモデル1では有意だが、モデル2では有意でなくなっている。モデル2で最も標準化偏回帰係数が大きいのが「自律的学習習慣」であり、この変数が最も「卒論留意度」に大きな影響を与えている。谷村（2013）が指摘するように、卒論執筆においてそれ以前の学習は大きな影響力を持っているとすることができるだろう。

卒論環境要因について自律的学習習慣の条件付き効果を検討するために、表5のモデル2に「自律的学習習慣」と卒論環境要因の各ダミー変数との交互作用項を追加して分析を行った結果が表6である。なお、自律的学習習慣についてはセンタリング済みの変数を用いた。

表6をみると、交互作用項では、「自律的学習習慣×卒論テーマと卒業後進路との関連」が有意となっている。このことから、卒論のテーマと卒業後の進路が関連している場合に、自律的学習習慣が身につけているほど、卒論学習効果がより大きくなることがわかる。

表6 卒論留意度の規定要因分析（重回帰分析・交互作用項追加）

独立変数	B	標準化偏回帰係数	
十分な論文指導ダミー	0.833	0.444	***
就活による卒論関係時間の不足ダミー	0.001	0.000	
卒論テーマと卒業後進路との関連ダミー	0.255	0.040	
自律的学習習慣	0.801	0.538	***
自律的学習習慣×十分な論文指導	-0.165	-0.080	
自律的学習習慣×就活による卒論関係時間の不足	-0.044	-0.018	
自律的学習習慣×卒論テーマと卒業後進路との関連	0.275	0.102	*
(定数)	20.190		***
調整済み R2 乗値	0.336		
N	524		

注：+ p<0.10、* p<0.05、** p<0.01、*** p<0.001。

6.3 技能習得度を従属変数とした基本クロス集計

分析課題2について多変量解析で分析を行う前に、分析で主要な独立変数となる「卒論留意度」と「自律的学習習慣」の「技能習得度」との関係性をクロス集計で検討しておく。

表7は、「卒論留意度2段階」と「技能習得度2段階」のクロス集計表である。この関連には有意差がみられ、卒論の学習効果が高かった学生ほど、大学教育全体で技能を身につけている。卒論の学習効果は、大学教育の成果として表れているようである。

⁵ 就活終了時期が2011年6月以前を「1」とするダミー変数を作成し、「就活による卒論関係時間の不足ダミー」の代わりに分析に投入したモデルも検討したが、有意な効果はみられなかった。

表7 卒論留意度2段階×技能習得度2段階

卒論留意度2段階	技能習得度2段階		合計	N
	高	低		
高 (%)	61.2	38.8	100.0	(281)
低 (%)	22.3	77.7	100.0	(242)
合計 (%)	43.2	56.8	100.0	(523)

クラメールのV: 0.392 0.1%水準で有意 p=0.000

表8は、「自律的学習習慣2段階」と「技能習得度2段階」のクロス集計表である。この関連には有意差がみられ、自律的学習習慣が身につけていた学生ほど、大学教育全体で技能を身につけている。卒論執筆以前の学習効果も大学教育の成果として表れていることがわかる。

表8 自律的学習習慣2段階×技能習得度2段階のクロス表

自律的学習習慣2段階	技能習得度2段階		合計	N
	高	低		
自律的学習習慣あり (%)	59.0	41.0	100.0	(295)
自律的学習習慣なし (%)	21.9	78.1	100.0	(228)
合計 (%)	42.8	57.2	100.0	(523)

クラメールのV: 0.371 0.1%水準で有意 p=0.000

以上の検討を踏まえると、「卒論留意度」と「自律的学習習慣」はともに技能習得度に影響を与えていることがわかる。次節では、これらの独立変数が変数同士の影響をコントロールした上で技能習得度に与える効果を分析する。

6.4 技能習得度を従属変数とした重回帰分析

表9は、独立変数に「卒論留意度」「自律的学習習慣」と卒論環境要因の各変数を、従属変数に「技能習得度」を用いた重回帰分析である。モデル1では、独立変数を「卒論留意度」と「自律的学習習慣」のみにし、モデル2では統制変数として卒論環境要因の各変数を追加している。モデル2で追加した変数による説明力の上昇はほとんどない。

「卒論留意度」と「自律的学習習慣」はモデル1・モデル2ともに、「技能習得度」に有意な正の効果を与えている。クロス集計で検討したように、卒論の学習効果と卒論以前の学習効果の両方が技能習得度に影響を与えている。標準化偏回帰係数をみると、「自律的学習習慣」の方が「卒論留意度」よりも数値が大きく、卒論留意度よりも大きな効果を与えている可能性が高い。言い換えれば、卒論執筆以前の学習経験の方が大学教育の成果に与える影響が大きい可能性があるということになる⁶。

だが、この分析だけで結論を出すには不十分であろう。なぜなら、図1に示した通り、

⁶ 高校時代の学習習慣が大学時代にまで影響を与えていることも考慮し、Q02E「E. 授業で分からなかったところは自分で考えたり調べたりした」をダミー変数にし、本章2節・4節の重回帰分析に投入したが、他の変数の有意差は変化しなかった。

自律的学習習慣と卒論留意度は変数間に因果関係が想定される。自律的学習習慣が卒論留意度に有意な効果を与えていることは本章2節で明らかにしたが、自律的学習習慣は卒論留意度を經由しても技能習得度に影響を与えている。次節で、この変数の直接効果と間接効果をより詳細に検討するためにパス解析を行う。

表9 技能習得度の規定要因分析（重回帰分析）

独立変数	モデル1			モデル2		
	B	標準化 偏回帰係数		B	標準化 偏回帰係数	
卒論留意度	0.334	0.280	***	0.313	0.263	** *
自律的学習習慣	0.616	0.347	***	0.581	0.328	** *
十分な論文指導ダミー				0.375	0.050	
就活による卒論関係時間の 不足ダミー				-0.071	-0.009	
卒論テーマと卒業後進路との 関係ダミー				0.524	0.069	+
(定数)	13.025		***	13.503		** *
調整済み R2 乗値	0.307			0.309		
N	520			516		

注：+：p<0.10、*：p<0.05、**：p<0.01、***：p<0.001。

6.5 3つの変数間のパス解析

分析課題2をより詳細に検討するため、「卒論留意度」「自律的学習習慣」「技能習得度」の3変数の効果の経路を明らかにするパス解析を行った（図2）。

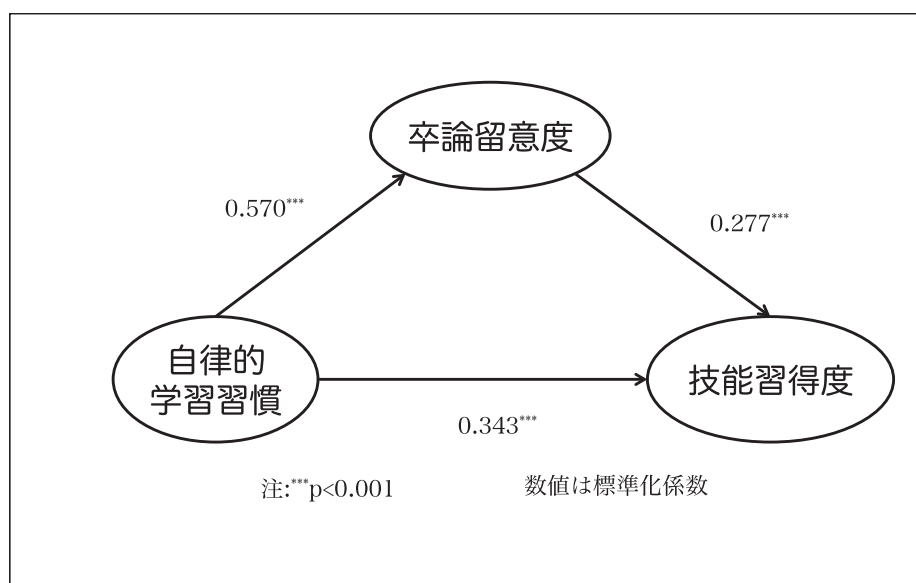


図2 3変数間のパス解析

パスはすべて有意であり、「自律的学習習慣」は技能習得度に直接効果を与えていると同時に、卒論留意度を經由しても技能習得度に間接効果を与えていることがわかる。具体的な効果の数値を確認すると、直接効果は 0.343、「卒論留意度」を經由する間接効果は 0.158（自律的学習習慣→卒論留意度のパス係数 0.570×卒論留意度→技能習得度のパス係数 0.277）となり、合わせた総合効果は 0.501 となる。間接効果はあるものの、その大きさは直接効果の半分弱であることが読み取れる。

また、「卒論留意度」が「技能習得度」に与えている効果は 0.277 であり、この値は「自律的学習習慣」が「技能習得度」に与えている効果の 0.343 よりも小さい値にとどまっている。

この結果から、「技能習得度」に対して最も大きな効果を与えている経路は「自律的学習習慣→技能習得度」のパスであることがわかる。大学教育の成果を規定しているのは卒業学習効果よりも卒業以前の学習の効果によるものであるということができらるだろう。

7 考察

本稿の第一の分析課題は卒論留意度を規定する要因の検討であった。分析の結果から次の 3 点を知見として提示できる。

第一に、学生本人の卒論以前の学習や就職活動との時間の兼ね合い、卒業後の進路と卒論テーマの関係性を考慮しても、教員から十分な論文指導を受けることで卒論の学習効果は高まっている。教員が卒論を重視している傾向は、実際にその効果が表れているということが実証されたことにより、一面では合理的な判断であるといえる。

第二に、卒論の学習効果に最も大きな影響力を持っているのは卒論執筆以前の大学での学習だということである。教員が論文指導をすることはたしかに卒論の水準を向上させるが、卒論執筆以前の学生の学習のあり方がそれ以上に卒論の出来を左右している。卒論で問われていることは大学教育で学んできた学問の方法論を学生本人が理解し、自分の選んだテーマの中で実行できるかということである。大学で自律的に学習習慣を身につけている学生は、これらの方法論をしっかりと実行できる段階にたどり着いているといえる。

第三に、卒論のテーマが卒業後の進路と関連している場合、自律的学習習慣を身につけている学生ほど、卒論の学習効果が大きくなる。就活終了後に卒論を本格化させる学生も多いと考えられるため、このような学生は卒業後の進路と関連した卒論のテーマを選んでいる学生を指していると思われる。卒業後の進路と関連した卒論のテーマを選んでいる学生で、自律的学習習慣がある学生は、より卒論テーマへの理解や執筆意欲が上がり、卒論学習効果が高まっているとするのが妥当な解釈だと考えられる。自律的に学習している学生は、方法論に対するしっかりとした理解を深めているため、テーマ設定による相乗効果を得ることができるのである⁷。

次に、第二の分析課題の分析からは次の点が知見として提示できる。

今回の分析では、卒論の学習よりも卒業以前の大学での学習が大学教育全体の学習成果

⁷ 今回の分析対象の文学部を含む人文系学部よりも社会科学系学部や教育系学部の方が、卒論のテーマと卒業後の進路に関連を持たせやすいと考えられるため、他の学部でも同様のことが観察されるかを検証することが必要であろう。

に影響を与えていることが示唆された。また、大学以前の学習は卒論学習に影響を与え、卒論学習を媒介して大学教育で習得した技能に影響を与えるが、それ以上に技能に直接与える影響の方が大きい。教員による卒論指導は卒論の水準を高めるために重要ではあるが、それが卒論の学習を通じて大学教育全体に与える影響は限定的である。大学教育の集大成とされる卒論は大学の最終的な教育成果に対して一定の影響を持つことは確かだが、その一方で、卒論以前で身につけた学習習慣が大学成果により大きな影響を持つことから、卒論を重視することの危険性が示唆された。たとえば大学のカリキュラムや授業の改善の取り組みを通して、卒論執筆時期よりも前に授業で学生に自律的な学習習慣や学問の方法論の基本を身につけさせることが求められるだろう。

他方で本稿の限界としては以下の点が挙げられる。第一に、卒論以前の学習については具体的にどのような取り組みが有効であるのかという点に対しては本稿ではアプローチできていない。どのような授業を行うことで、学生が学習習慣を獲得するのか。あるいは実際に現場で教員が授業に割けるリソースがどれくらいあるのか。個別の大学で勘察したより慎重な議論が必要である。第二に、本稿の知見の過度な一般化には留保をつける必要がある。この事例は人文科学系分野の中でも特に文学部の学生を対象にしたものである。社会科学系の分野はもちろん、同じ人文科学系分野の他分野についても本稿と同様の知見が得られるのか。今後の課題としたい。

<引用文献>

- 金子元久, 2013, 『大学教育の再構築—学生を成長させる大学へ』 玉川大学出版部.
- 河合塾, 2012, 「「ひらく 日本の大学」から見る 大学教育と国際化の現状」
(http://www.keinet.ne.jp/g1/12/04/hiraku_1204.pdf, 9月1日参照)
- 黒河内利臣, 2008, 「大学教育における卒論の重要性に関する一考察—大学教育の学習効果を測定する卒論の機能について」 『大学教育学会誌』 30(1): 90-95.
- 小笠原正明, 2009, 「学習させる授業と「2つの文化」」 『IDE 現代の高等教育』 515: 44-48.
- 小方直幸, 2012, 「大学教員の授業への構え」 『IDE 現代の高等教育』 543: 64-70.
- 谷村英洋, 2013, 「文学部での学びと成長—卒業論文に着目して」 『大学教育学会誌』 35(1): 135-143.

1) 卒業論文の位置

本研究プロジェクトは、大学教育における卒業論文の教育的意義を主題としている。プロジェクトへの誘いを受け、卒業論文が日本の大学教育において格別の意義を有してきたことを再認識した。世界各国の大学で、日本の大学ほど卒業論文に高い教育的意義づけを行ってきた大学は他に例を見ないだろう。その特異な伝統は、1886年の帝国大学発足時から始まっている。創立当初から帝国大学では、卒業生全員の名簿に「卒業論文」のテーマを記載して全国に発信していた。この伝統が何に由来するのかは定かではない。しかし、日本の大学はその創立時から、卒業論文を学士の象徴であり、学士になる最も重要な通過儀礼として位置づけていた。その特異な伝統は、少なくとも人文学・社会科学系の大学教育においては今日まで続いている。(特に本学(学習院大学)の卒業論文は、他大学と比して教育上、大きなウェイトを占めている。)

戦前の大学において卒業論文が重んじられたのは、それなりの根拠があった。彼らの卒業先の進路は、その大半が国家官僚か旧制中学もしくは旧制高校の教師であった。東京大学の場合、卒業生の8割以上が国家官僚か旧制高校あるいは旧制中学の教師である。国家官僚は戦前においては専門性を掲げたテクノクラートであり、何を専門として大学で学んだかが将来を決定していた。旧制中学と旧制高校の教師になる場合も、大学で何を専門として極めたかが採用の決め手となっていた。卒業論文は、この要請に応えるものであり、卒業論文の題目の公表もこの要請に合致していた。

戦後の大学においては、卒業生の大半は民間企業に就職しており、戦前の大学のような卒業論文の教育的意義は薄らいでいる。しかし、なぜ、今なお卒業論文は、多くの大学、特に人文学・社会科学系の大学教育において大きなウェイトを占めているのだろうか。

戦後の教育改革において、大学教育はドイツ型(専門教育中心)からアメリカ型(教養教育中心)へと移行する改革が断行され、結果的に戦前からのドイツ型とアメリカ型を折衷した「日本型」の大学へと移行することとなる。「日本型」(戦後タイプ)の特徴は、2年間の「一般教養」と2年間の「専門教育」を接合しているところにある。ドイツを含むヨーロッパの伝統的な大学教育では、教養教育(リベラル・アーツ)は高校段階で修了していることが前提とされ、大学は専門教育を中心に組織されていた。(旧制高校と帝国大学との関係もこのモデルである。)他方、アメリカの大学では学士教育は教養教育として位置づけられ、専門教育(専門家教育)は大学院で行うものとされる。戦後、日本の大学はこのドイツ型とアメリカ型を折衷した「日本型」の大学へと移行したのである。

戦後の改革においても卒業論文の位置は変わることはなかった。卒業論文は、もはや国家官僚の教育とも旧制高校(エリート教育)の教師教育とも接点を失っていたが、戦後の大学においても卒業論文は、大学カリキュラムの最も重要な位置を譲らなかった。その理由はいくつも考えられるが、次の二つが最も大きな要因であったことは確かだろう。第一は、卒業論文が大学の学術研究と教育を接合する要として意義づけられたことである。卒業論文は、学問の府たる大学における教育の象徴的存在になったのである。第二は、戦後

直後の大学は、教養教育の理念を掲げ、市民的教養の教育と専門教育の二本立てで構成された。卒業論文は、その専門教育の総仕上げとして位置づけられた。さらに言えば、教養教育をベースとした専門教育の帰結点として卒業論文が位置づけられた。

その後、1991年の大学設置基準の改正によって大学が自主的に教育課程が編成できるようになり、卒業論文の位置づけも変化した。設置基準改定後の最も大きな変化は教養課程の解体であり、大学教育は専門教育中心へと変化した。ただし、この専門教育中心への変化は、学術中心というよりも、むしろ実用性の高い専門教育への変化と言ったほうが正確である。大学は教養教育の解体という面からも専門教育の実用性の追求という面からも、「学問の府」という理念から遠ざかっている。19世紀以来の学術研究の自由を掲げたフンボルト型の大学からの離脱が進行したと言ってよい。

1991年の大学設置基準の改定以降、学士課程から卒業論文を外す学部が増加した。(修士課程から修士論文を外す大学院も増加した)。卒業論文は「学問の府」としての大学教育の象徴であったが、卒業論文を外すことによって専門教育は社会的実用性を強める方向を強めている。大学の大衆化がその推進力となった。

しかし、人文学、社会科学、教員養成系の大学・学部において、卒業論文は依然として専門教育の中心的位置を弱めていないことも事実である。むしろ日本の大学と学部の全体を見れば、学士課程における卒業論文の位置は、相対的には弱まったものの、絶対的に見れば、その位置を揺るがすほどには弱まってはいない。また、今後も卒業論文の位置がこれ以上弱まることも、現段階では想定しにくい。なぜ、卒業論文の教育機能は、大学の教員からも学生からも今なお高く評価されているのだろうか。

2) 教養教育の問い直し

本プロジェクトへの参加を要請された直後、北京で開催されたノーベル賞受賞者と世界各国の第一線の研究者を招へいした国際学術会議「北京論壇」に招待され、教育改革に関する招待講演を行ったが、その翌日「高等教育の分科会」に参加した。この分科会にはヨーロッパ諸国から5名、アメリカから3名、中国から1名の高等教育を専門とする研究者が参加していた。日本からの招待者がいなかったのも、私もオブザーバーとして参加した。論議となった議題は三つ、第一は大学と社会との接続、第二は企業化する大学、第三はICTの活用可能性である。興味深かったのは、どの国においても大学の大学の大衆化に伴って社会的実用性の高い専門教育への移行が顕著であるが、現実に調査してみると、どの国においても学生の就職状況が良いのは学術研究中心の大学であり、社会的評価が高いのも学術研究中心の大学教育であるという調査結果である。この調査結果は、少なくともヨーロッパの大学でもイギリスの大学でもアメリカの大学でも共通していた。すなわち、社会的実用性の高い教育を志向する各国の高等教育改革は、意外にも社会的要請に応じているとは言えない。この国際シンポジウムにおいては、なぜ「伝統的」と思われる学術研究中心の大学教育が、学生の就職率においても社会的評価においても「社会的実用性」を志向する大学の専門教育よりも高い結果を示すのかについて、その謎を解明するまでにはいたらなかったが、興味深い研究結果と論議であった。

今日なお卒業論文が多く大学の大学・学部で専門教育の中心的位置を占め続けているのは、めまぐるしく変化する知識基盤社会の現在も、大学は「学問の府」として学術研究を基盤

とする教養教育と専門教育の伝統を維持し、現代的に洗練させる必要を示している。その一つの兆候を示すものとして、教養教育の見直しがある。

大学の教養教育には、これまで二つの伝統があった。一つは、中世の大学以来のリベラル・アーツとしての教養教育の伝統であり、もう一つは第一次世界大戦後の平和と自由を求めてアメリカで発展した一般教養 (general education) としての教養教育の伝統である。戦後日本の大学の「一般教養」はこの後者の伝統にもとづいていた。しかし、現在の教養教育の復興は、この二つの伝統とは異なる系譜を形成しつつある。現在復興している教養教育は、リベラル・アーツのように人文学の古典中心の教養教育ではないし、自然科学・社会科学・保健体育の三つのジャンルから一定の単位を取得する「一般教養」の復活でもない。新しく台頭している教養教育は、専門教育と融合した教養教育であり、市民的教養を備えた専門家が保有すべき教養の教育である。

3) 卒業論文の新たな意義を求めて

卒業論文の位置づけも、新しい大学教育の模索の中で再検討されるべきであろう。かつては、専門教育の総仕上げとして、あるいは大学院修士課程への導入として卒業論文は位置づいていた。これからの卒業論文は、大学自体の変化に伴って、専門教育における位置づけも教養教育との関連も新たに再定義されるだろう。本プロジェクトは、この魅力ある主題を研究する企てである。私もその末端に参加し、この魅力ある論題を探究し始めている。この主題は、卒業論文の指導のあり方を解明する手がかりを提供するだけでなく、現在から将来にわたる大学の学術研究とその教育のあり方を探る一歩になるだろう。

「学習院大学卒業生調査」実施概要

篠田 雅人

学習院大学人文科学研究所の共同研究プロジェクト「人文系学士課程教育における卒業論文がもたらす学習効果の検証」では、平成 23 (2011) 年度から平成 24 (2012) 年度にかけて 3 つの質問紙調査を実施した。本節では、その中で最後に実施した「学習院大学文学部での学びと卒業後の生活・意識等に関する調査」(以下、「卒業生調査」) の実施概要について報告する。

1. 調査の目的

大学教育の意義や効果が厳しく問われている現代において、学習院大学文学部での学習や諸経験が、卒業後の生活とどのような関係にあるかを検証することにより、日本の文学部教育のあり方と、学習院大学文学部の教育成果について検証・考察することを目的としている。

2. 調査対象

大学での教育成果・学習成果について、卒業後の社会経験に照らして振り返ってもらうため、一定以上の社会経験を経た者に調査することが望ましいという観点から、卒業後満 10 年経過者を中心に、その前後 3 年間の範囲の卒業生を対象とした。具体的には、平成 10 (1998) 年度から平成 16 (2004) 年度に学習院大学文学部を卒業した者のうち、平成 24 (2012) 年 12 月現在、一般社団法人学習院桜友会(学習院出身者の卒業生団体、以下、「桜友会」) に住所登録のある方全てを対象とした。なお、桜友会から個人情報の提供を受けるにあたっては、桜友会による所定の審査を経たことを付記しておく。

以上の結果、最終的な調査対象者数は、表 1 のとおり、計 3,606 名となった。

表 1 「卒業生調査」対象者数

学科名	卒業後満13年	卒業後満12年	卒業後満11年	卒業後満10年	卒業後満9年	卒業後満8年	卒業後満7年	計
	1998年度 1999.3卒	1999年度 2000.3卒	2000年度 2001.3卒	2001年度 2002.3卒	2002年度 2003.3卒	2003年度 2004.3卒	2004年度 2005.3卒	
哲学科	81	77	89	72	66	71	80	536
史学科	82	70	72	67	69	64	89	513
日本語日本文学科	90	89	97	101	84	74	95	630
英米文学科※	108	83	86	106	95	99	100	677
ドイツ文学科※	52	45	37	41	48	51	43	317
フランス文学科※	71	60	76	65	66	71	71	480
心理学科	70	60	60	63	68	62	70	453
計	554	484	517	515	496	492	548	3,606

※表中の英米文学科・ドイツ文学科・フランス文学科は、現在の英語英米文化学科・ドイツ語圏文化学科・フランス語圏文化学科の名称変更前の学科名である。

3. 実施方法・時期

平成 25 (2013) 年 1 月から平成 25 (2013) 年 2 月にかけて、全て郵送法により実施した。
なお、督促は行わなかった。

4. 回答状況

回答者数は 830 名、回答率は 23.0%と、郵送法による質問紙調査としては、比較的良好な結果となった。

表 2 「卒業生調査」回答者数・回答率

学科名	回答者数	回答率
哲学科	111	20.7%
史学科	131	25.5%
日本語日本文学科	156	24.8%
英米文学科※	133	19.6%
ドイツ文学科※	61	19.2%
フランス文学科※	85	17.7%
心理学科	149	32.9%
不明	4	
計	830	23.0%

※表中の英米文学科・ドイツ文学科・フランス文学科は、現在の英語英米文化学科・ドイツ語圏文化学科・フランス語圏文化学科の名称変更前の学科名である。

平成26年6月29日
日本高等教育学会第17回大会(大阪大学)

人文科学系学士課程教育の成果 —学習院大学卒業生調査の結果から—

篠田 雅人(学習院大学)

中世古 貴彦(独立行政法人国立美術館)

谷村 英洋(立教大学)

日下田 岳史(大正大学)



本報告の概要

1. 研究の背景・問題意識・学習院大学文学部卒業生調査の実施概要
2. 個別報告
①篠田 雅人
「卒業生にとっての卒業論文執筆経験の意義」
②中世古 貴彦
「人文科学系における学習の経済的効用」
③谷村 英洋
「大学での学習経験と卒業後の社会関与の意識と行動」
④日下田 岳史
「卒業論文執筆経験が私生活に影響を及ぼすという論理」
3. まとめと今後の課題

2

研究の背景・問題意識(1)

◎学士課程教育の質保証問題

→教育カリキュラムと卒業後の進路とのレリバンスの関係が重要

例：工学教育のレリバンス(矢野2005)

経済学教育のレリバンス(濱中2012)

→しかし、人文科学系学科については先行研究がほとんどない

→人文科学系学科のカリキュラムの現状確認が必要

特に、学部4年次学生が、学修成果の評価を受けるために提出する

「卒業論文」に着目

日本私立大学協会付置私学高等教育研究所プロジェクト

「学士課程教育の改革状況と現状認識に関する調査」

(プロジェクト代表：濱名 篤 関西国際大学学長)

の分析に基づく山田 礼子 同志社大学教授の発言

(大学教育学会課題研究会シンポジウム(2009年11月))

3

研究の背景・問題意識(2)

・学習院大学文学部の教育研究上の目的

「文学部の行う教育の目標は、人文科学諸分野の研究内容を理解し、研究方法を取得した学生自らが、人文科学研究の創造を行うところにある。文学部各学科で文化創造の経験をさせることによって、社会の一員として、社会全体の文化を考え、文化を支え、文化を創造する担い手を育てることを目的とする。」

⇒教員側は「先行研究」をふまえて、「適切な問題設定」をし、

「独創的」な視点からの成果(≡近視眼的には「卒業論文」・

「卒業研究」の執筆・完成)を目指している。

⇒その結果として、「卒業論文」を重視したカリキュラム構成に
なっている。

4

学習院大学人文科学研究共同研究プロジェクトの立ち上げ

平成23年度～25年度 学習院大学人文科学研究共同研究プロジェクト
「人文系学士課程教育における卒業論文がもたらす学習効果の検証」
(研究代表者：神田 龍身 学習院大学文学部日本語日本文学専攻教授)

- ① 機関調査(全国学科長調査)(平成23年11～12月)
「卒業論文」のコミュニティ上の位置付け・意味付けを調査
 - ② 学習院大学在学生調査(平成24年1～2月)
 - ③ 学習院大学卒業生調査(平成25年1～2月)
- ②・③はいずれも学習院大学文学部の事例研究として、「卒業論文」執筆経験者の学習経験・意識・進路等について調査

⇒以上の3つ調査を順次実施・分析

5

学習院大学卒業生調査の概要

- ・実施時期：平成25年1～2月
- ・実施方法：質問紙調査・郵送法
- ・対象者：文学部卒業後満13～7年を経過し(平成10年度～16年度の卒業生)、平成25年1月8日現在、桜友会(卒業生団体)に住所登録のあった卒業生
- ・対象者数・回答者数・回答率：以下のとおり

	対象者数	回答数	回答率
哲	536	111	20.7%
史	513	131	25.5%
日	630	156	24.8%
英※	677	133	19.6%
ド※	317	61	19.2%
フ※	480	85	17.7%
心	453	149	32.9%
不明		4	
合計	3,606	830	23.0%

※当時は、英文学科・ドイツ文学科・フランス文学科

6

平成26年6月29日
日本高等教育学会第17回大会(大阪大学)

卒業生にとつての 卒業論文執筆経験の意義

篠田 雅人
(学習院大学)

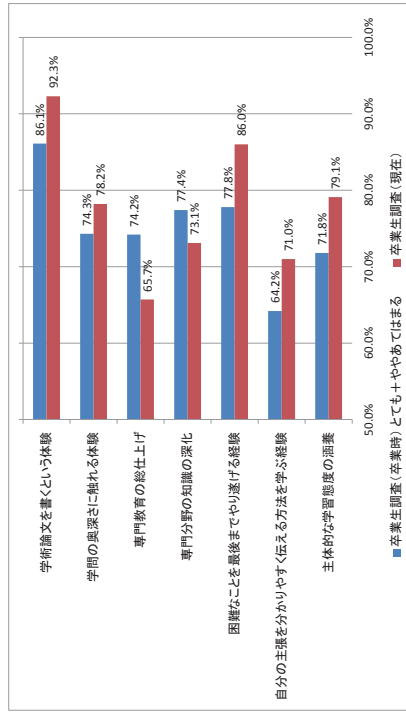
7

本報告の着眼点

- ・「卒業論文を書くという経験の意義」
「卒業時(執筆直後)」と「今のあなたにとって(現在)」という2時点における質問
⇒「専門教育の総仕上げ」(卒業時：Q9-C／現在：Q8-C)・「困難なことを最後までやり遂げる経験」(卒業時：Q9-E／現在：Q8-E)に注目
- ・「卒業論文・卒業研究の執筆経験について(の振り返り)」
(一部、在学生調査結果との比較を含む)
⇒「教員に指導を受ける機会は十分あった」(卒業時：Q6-B)・「就職活動に時間を取られ卒論・卒研どころではなかった」(卒業時：Q6-C)・「卒論・卒研のどきどきに満足している(卒業時：Q6-G)」に注目

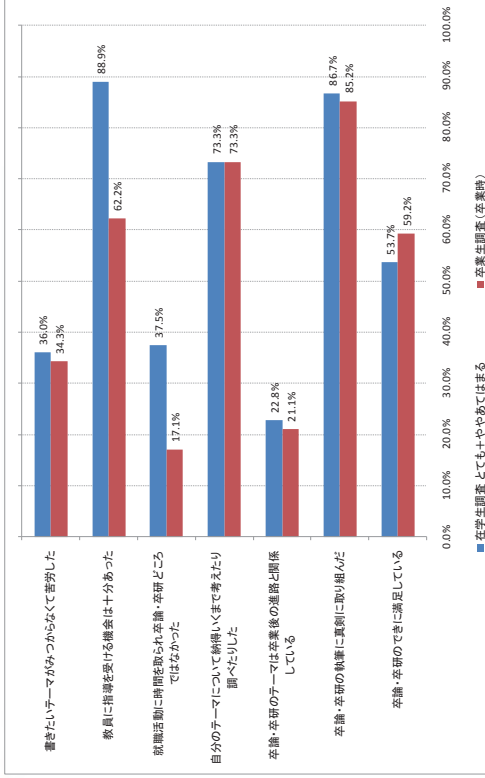
8

卒業論文執筆の意義(卒業生調査－卒業時／現在)



- ・教員側が卒論を「専門教育の総仕上げ」と位置づけている一方で、卒業生側からはそこまで評価が高くない。
⇒人文科学系の学問の奥深さや究めることの難しさを実感しているものとも考えられる。
- ・一方で、卒業時と現在との差を見ると、「困難なことを最後までやり遂げる経験」は現在の評価が高い。
⇒卒論執筆は、社会に出てから実感する数少ない「達成経験」のひとつ。

卒論執筆経験(1)－在学生調査・卒業生調査(卒業時)の比較



- ・在学生も卒業生も基本的な回答傾向は似ており、世代間格差はさほどない。
⇒学習院文学部部の安定的な教育成果とも考えられる。
- ・一方、「教員の指導を受ける機会」・「就活の時間との関係」は差が大きい。
⇒かつてより、教員の指導機会は増えているものの、就活で学業が疎かになっている？

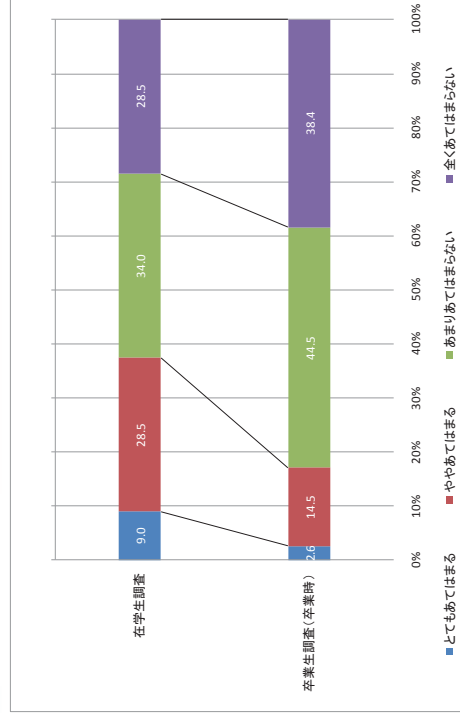
卒論執筆経験(2)－「教員の指導機会×卒論のときに満足」

教員の指導機会十分	卒業時、卒論のときに満足していた				n
	とてもあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない	
とてもあてはまる	35.8%	44.1%	16.8%	3.4%	179
ややあてはまる	14.7%	45.7%	29.4%	10.2%	293
あまりあてはまらない	11.0%	35.4%	42.3%	11.4%	246
全くあてはまらない	14.6%	24.4%	22.0%	39.0%	41

Pearsonのχ²乗検定 p=0.000

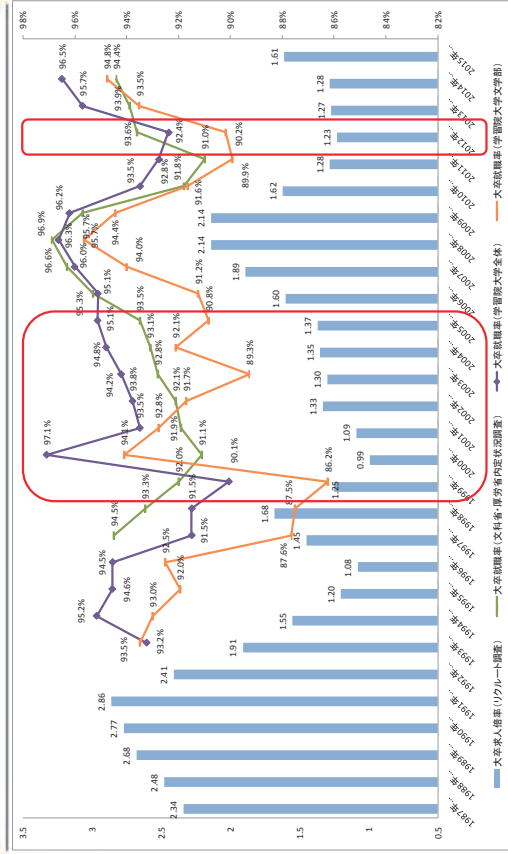
- ・当然と言えば当然なのだろうが、「教員の指導機会が十分だと、卒論の出来の満足度が高い」傾向にあることが示されている(在学生調査でも同様の結果)。
⇒「学生の学力・気質が変化したため、かつてより丁寧に指導するようになってきている。」(文学部教員)

卒論執筆経験(3)－「就活に時間とられ卒論どころではなかった」①



- ・現在の学生の就職活動は本当に大変なのか？

卒論執筆経験(3)―「就活に時間とられ卒論どころではなかった」②



・大卒求人倍率はさほど変わらない(卒業生:0.99~1.37倍/在学生:1.23倍)。業種別で見ても同様。就職率も2000年3月卒を除けばそこまで大きな差はないと言える。
 ⇒ ネット就活が普及し、エントリー数が増加しているという影響もあるだろうが、「就活が大変...」という雰囲気は、マスコミや就活産業に煽られているところが多い？

まとめと今後の課題

- ・卒業論文の位置付けとして、教える側が期待するような「問題設定の適切性」・「獨創性」を意識していない、あるいは、「専門教育の総仕上げ」(「専門分野の知識深化」も同様の回答)、「困難なことを最後までやり遂げる経験」にあってはまらないと感じている学生もそれなりに存在。
- ・卒業生調査の結果を見る限り、かつてより教員の指導機会が増えていると感じられている。
 ⇒ 教育・学習成果の向上のためにも、どういった学生が「意識していない」・「あてはまらない」と回答しているのか、今後詳細な検証が必要。
- ・一方で、学習院大学文学部に限った話かもしれないが、「卒業論文を書くという経験の意義」の多くの項目では、卒業時の肯定的回答がやや低く、現在の肯定的回答はほぼ同じ割合という傾向。
 ⇒ 「卒論執筆直後の高揚感」と「過去の経験は美化される傾向」というバイアスをどのように考えるかという問題は残るものの、学習院大学文学部としての教育成果が現れているとも考えられる。

卒論執筆経験(4)―「就活で卒論どころではなかった×卒論のときに満足」

就職活動に時間を取られ卒論どころではなかった	卒業時、卒論のときに満足していた				n
	とてもあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない	
とてもあてはまる	0.0%	35.0%	20.0%	45.0%	20
ややあてはまる	11.9%	26.6%	41.3%	20.2%	109
あまりあてはまらない	17.1%	42.5%	32.3%	8.1%	334
全くあてはまらない	18.3%	41.0%	30.1%	10.6%	291

Pearsonのカイ2乗検定 p=000

・「就活で忙しいと、卒論の出来の満足度が低い」傾向にあることが示されている(在学生調査でも同様の結果)。
 ・一方で、就活とのバランスがとれていたと回答した卒業生のうち、約40%が卒論の出来に満足していない。

⇒ 人文科学系の学問の奥深さや究めることの難しさを象徴しているものとも考えられる。

人文科学系における学習の経済的効用

独立行政法人 国立美術館
 中世古貴彦
 本部事務局 総務企画課
 E-mail nakaseko-t@momat.go.jp

発表の内容

1. 研究の背景
2. 分析の枠組み
人文科学系における「学び習慣仮説」の検証
3. 直接効果の推定
重回帰分析
4. 間接効果の推定
パス解析
5. まとめと今後の課題

17

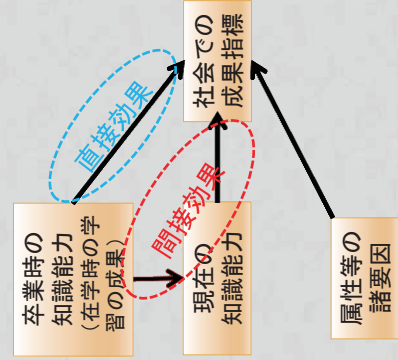
1. 研究の背景

- 問われる人文科学系の大学教育の質保証
 - 「人文・社会学系の学科での教育課程の体系化・構造化に向けた取り組みが十分でない」（中央教育審議会2010：16）
- 人文科学系の教育と社会とのレリバランス？
 - 工学系（矢野2009）や経済学系（濱中2012）では「学び習慣仮説」に基づく実証的な先行研究が存在。
 - 「大学時代の学習が、卒業時の知識能力を向上させ、その経験が卒業後に継続することによって、現在の知識能力が向上し、その結果が所得の向上に結び付いている」（矢野2009）
- 職業とのレリバランスが必ずしも強くない人文科学系でも検証が必要。

中央教育審議会、2012、「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」、10項。
 矢野真和、2009、「教育と労働と社会—教育効果の視点から」『日本労働研究雑誌』588：5-15。労働政策研究・研修機構。
 濱中淳子、2012、「『大学教育の効用』」再考—文系領域における学び習慣仮説の検証—『大学論集』43：189-205。18

2. 分析の枠組み

- 文学部での学習は卒業後にプラスになる？
- 成果指標：本人年収
- 一般的に考えられる諸要因
 - 労働経験、居住地、性別、性別、仕事の負荷、etc.
- 文学部での学びと、成果指標との関係は？
 - **直接効果**：
卒業時の知識能力 → 成果
 - **間接効果**：
卒業時の知識能力 → 現在の知識能力 → 成果



19

3. 直接効果の推定（重回帰分析）

変数	正社員 n=315		公務員・教員 n=72		非正規雇用 n=121			
	最小値	最大値	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
卒業後年数	8	14	10.82	2.14	11.08	2.05	10.86	2.10
転職ダミー	0	1	0.39	0.49	0.31	0.46	0.55	0.50
地方ダミー	0	1	0.30	0.46	0.50	0.50	0.48	0.50
女性ダミー	0	1	0.81	0.40	0.61	0.49	0.88	0.32
仕事の負担感	1	4	2.68	0.83	2.74	0.84	2.20	0.95
卒業時の知識能力	9	36	24.88	3.81	24.58	3.67	24.44	4.66
現在の知識能力	15	32	25.27	3.25	24.81	3.21	24.69	3.08
本人年収	100	1100	494.29	178.72	550.00	141.42	238.84	145.70

卒業時の知識・能力：4件法のQ10（AからI）の合計、 $\alpha = 0.780$
 現在の知識・能力：4件法のQ14（AからG）とQ15_Aの合計、 $\alpha = 0.773$
 本人年収：200万円区切りの回答の階級値
 4件法の選択肢はいずれも「1=全くあてはまらない」「4=とてもあてはまる」等に変換

20

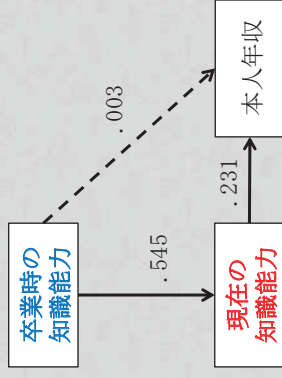
重回帰分析の結果 被説明変数＝本人年収

独立変数 (定数)	正社員			公務員・教員			非正規雇用		
	B	β	p値	B	β	p値	B	β	p値
卒業後年収	117.956		.214	152.557		.338	186.261		.160
転職ダミー	13.978	.167	.001	31.418	.456	.000	3.647	.053	.550
地方ダミー	-71.129	-.194	.000	74.312	.244	.029	28.095	.096	.282
女性ダミー	-22.140	-.057	.268	-71.340	-.254	.030	-66.511	-.229	.010
仕事の負担感	-129.686	-.287	.000	-33.218	-.115	.306	-51.614	-.114	.204
卒業時の知識能力	24.886	.115	.025	9.186	.055	.614	49.646	.325	.000
現在の知識能力	1.273	.027	.653	-2.786	-.072	.602	2.236	.072	.482
サンプルサイズ	10,511	.191	.002	5,073	.115	.422	-3,588	-.076	.456
R ² 乗	315			72			121		
調整済みR ² 乗	.220			.300			.181		
	.202			.224			.130		

21

4. 間接効果の推定 (パス解析)

- 正社員では、卒業時の知識能力が現在の知識能力を高めることで、本人年収の上昇に間接的に寄与。
- 在学時の学習の成果（の自己評価）が、卒業後の職業的成果にプラスの影響をもたらす。
- ただし、能力以外の要因で給与が決定される公務員・教員や非正規雇用のグループでは、現在の知識能力から本人年収への直接効果がないため、卒業時の知識能力の総合効果もほぼゼロ。



正社員グループのパス図

22

卒業時の知識能力の効果

被説明変数	職業	直接効果	間接効果	総合効果
本人年収	正社員	.003	.126	.129
	公務員・教員	-.089	.108	.019
	非正規雇用	.008	-.003	.005
(参考) 仕事上の成果	正社員	-.021	.306	.285
	公務員・教員	-.006	.384	.378
	非正規雇用	.107	.218	.325

「仕事上の成果」は4件法。正社員のグループでは、本人年収と有意な正の相関あり。

23

5. まとめと今後の課題

- まとめ
 - 文学部卒業生の実感では、在学時の学習は実社会で（間接的に）成果と結びつく。実学が重視されそうな民間労働市場で、年収増に寄与。
 - ただし、（自己評価であるが）現在の本人の力量が給与に反映されにくい職業では、在学時の学習は金銭面に寄与しない。
- 今後の課題
 - 金銭面以外に対する効果をどのように考えるか。（例：仕事における自己肯定感）
 - 文学部卒業生には女性が多い。いわゆる男性ホワイトカラーを暗黙の前提とした分析の限界。

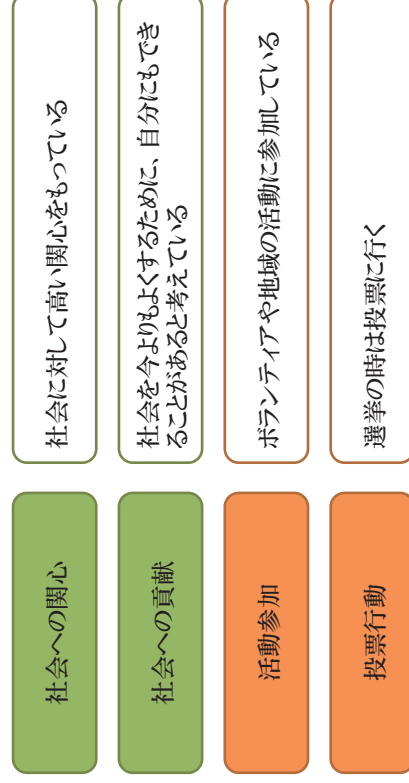
24

大学での学習経験と 卒業後の社会関与の意識と行動

谷村 英洋
立教大学 大学教育開発・支援センター

25

社会関与の意識と行動



27

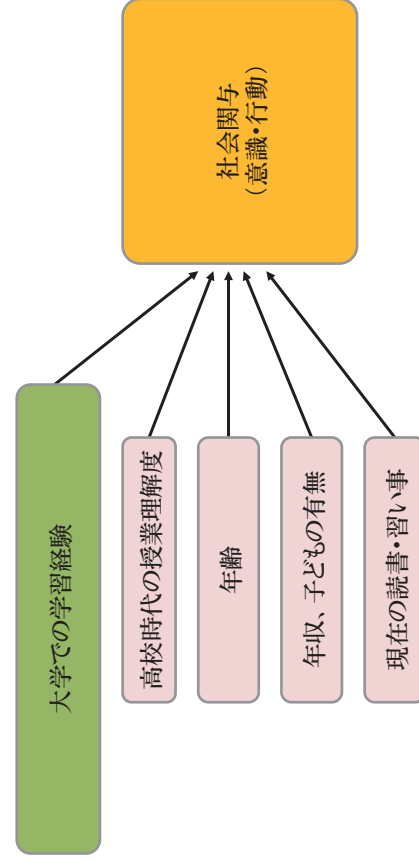
分析の意図

- 学習院大学文学部での学習経験と卒業後の関連性を探る
- 経済的な側面以外に着目する
- 大卒者と社会の関わり方
 - 学界、審議会、個別大学

26

分析枠組

「大学での学習経験」と「現在の社会関与の状況」の関係を探る



28

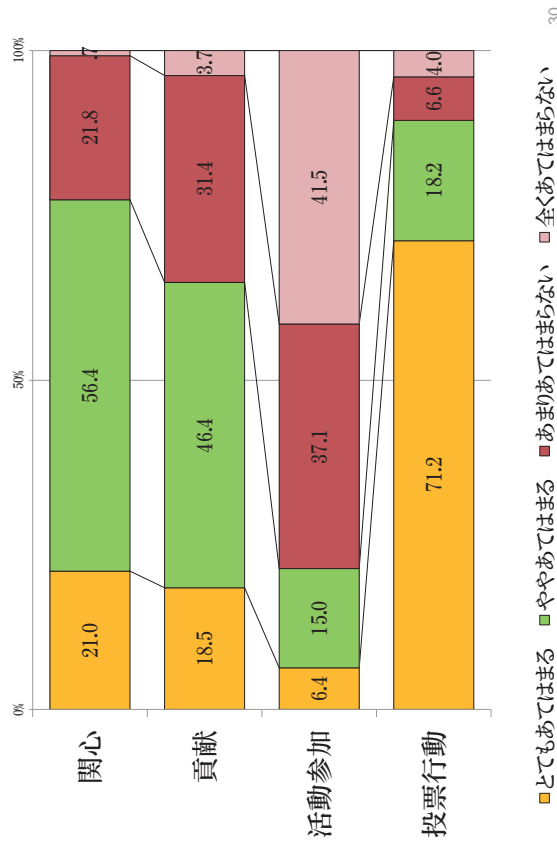
分析対象

「学習院文学部での学びと卒業後の生活・意識等に関する調査」(2013年1月実施)

年齢	29歳～39歳の者に限定 全体平均 33.2歳 (SD=2.3) n=804 男性平均 33.7歳 (SD=2.4) n=128 女性平均 33.1歳 (SD=2.3) n=676
性別	男性 128人 (15.9%) 女性 676人 (84.1%)
就業状況	男性:有職 120人 (14.9%) 女性:有職 489人 (60.8%) 女性:専業主婦 151人 (18.8%) その他・不明 44人 (5.5%) <small>(※「有職」は正社員、公務員・教員(正職員)、派遣社員・契約社員、公務員・教員(非常勤・臨時)、自営業・家族従業員、パート・アルバイト)</small>
配偶者	全体 あり460人(57.2%) なし341人(42.4%) 無答不明3人(0.4%) 男性 あり73人(57.0%) なし(43.0%) 女性 あり460人(57.5%) なし286人(42.5%)
子ども	全体 あり318人(39.6%) なし465人(57.8%) 無答不明21人(2.6%) 男性 あり45人(36.0%) なし80人(64.0%) 女性 あり273人(41.5%) なし385人(58.5%)

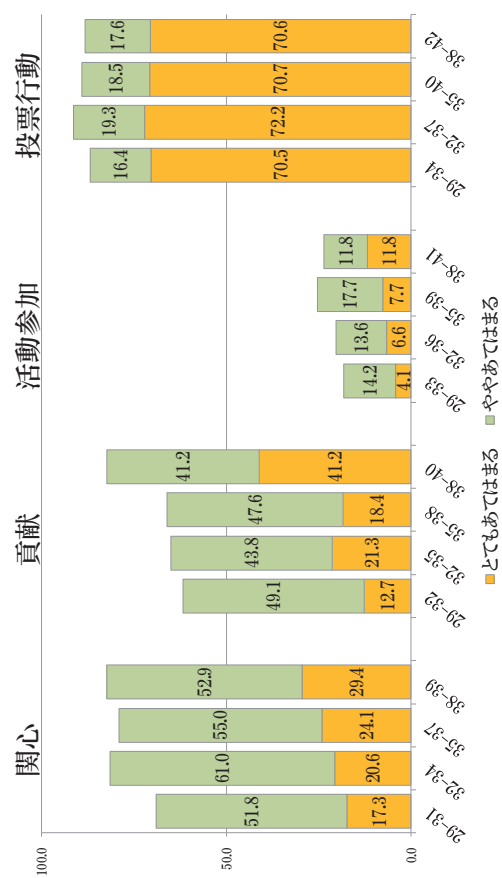
29

社会関与4項目の回答分布



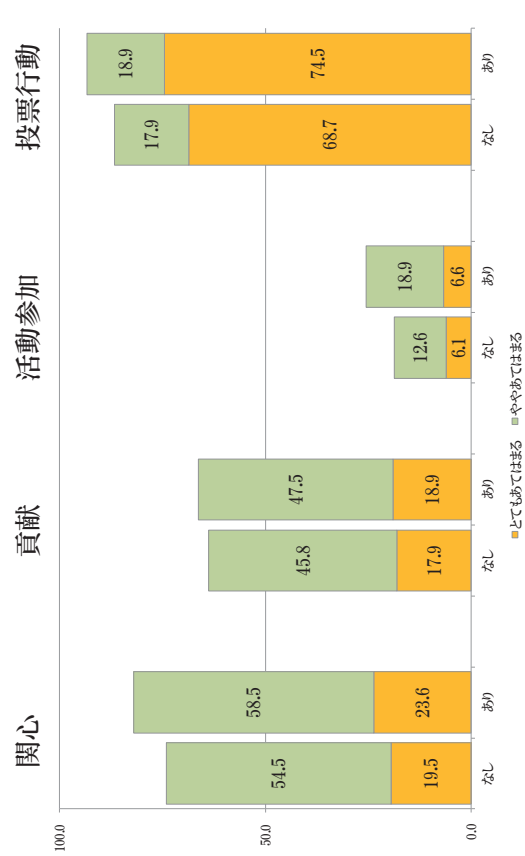
30

年齢 (%)



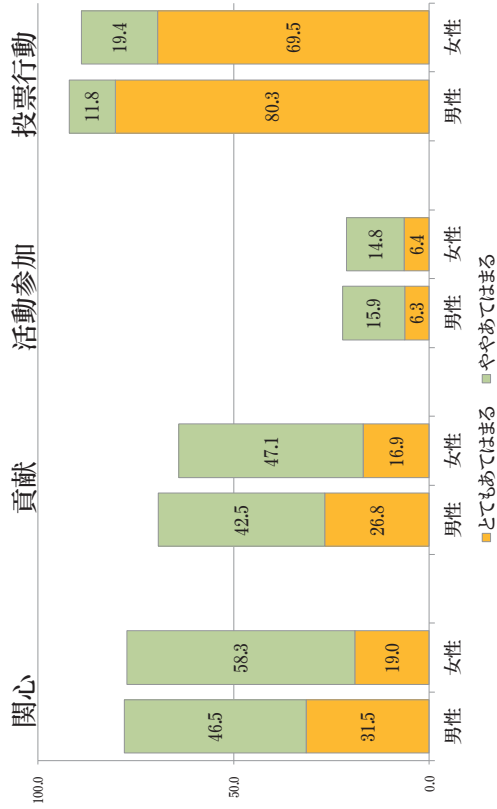
31

子どもの有無 (%)



32

性別 (%)



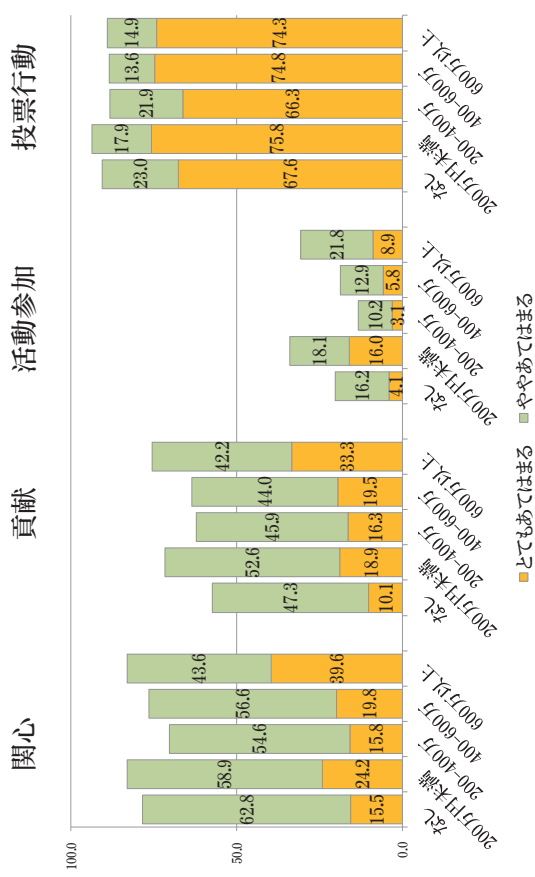
33

変数：大学での学習経験等

- ◆ 大学での学習経験：下記4項目の平均値 ($\alpha = .687$)
 - 学術的な論文・書籍や文学作品を積極的に呼んだ
 - 授業で課されたレポート等はしつかり準備して書いた
 - 授業内容が自分なりに理解できるまで考えたり調べたりした
 - 卒論・卒研の執筆に真剣に取り組んだ
- ◆ 高校時代の授業理解度
 - どの科目でも学校の授業内容は理解できていた
- ◆ 現在の読書・習い事
 - 読書や習い事などをしている

35

年収 (%)



34

ロジスティック回帰分析結果 (従属変数: ともあてはまる=1)

	関心	貢献	活動参加	投票行動
	Exp(B)	Exp(B)	Exp(B)	Exp(B)
年齢	1.090 *	1.105 *	1.125	1.013
女性タミー	.514 *	.576 *	1.038	.506 *
子どもあり	1.363	1.244	1.284	1.608 *
本人年収 (基準: 年収なし)				
200万円未満	1.861	1.984	4.810 **	1.645
200~400万円	1.275	1.666	.883	.976
400~600万円	1.309	1.842	1.386	1.462
600万円以上	3.093 **	3.333 **	2.281	1.211
高校授業理解度	1.232	1.076	.945	.817
大学学習経験	2.122 ***	1.335	1.187	1.422 *
部活動	1.046	1.166	1.272	1.181 *
サークル活動	1.168	1.081	1.098	1.072
アルバイト	1.185	1.261 *	1.288	1.132
資格・検定対策	1.055	1.050	1.195	1.027
現在の読書・習い事	1.377 **	1.579 ***	1.871 **	1.240 *
Nagelkerke R ²	.147	0.121	0.129	0.077
χ^2	74.012 ***	57.192 ***	37.777 ***	40.813 ***

注) 定数は省略。*** p<.001 ** p<.01 * p<.05

36

まとめ

- ◆ 在学中の学習経験は卒業後の「社会への関心」「投票行動」に有意な正の効果を有していた
- ◆ 「社会への貢献」の意識、「社会活動への参加」に対しては有意な効果が確認されなかった
- ◆ 現在の読書・習い事はすべての社会関与意識・行動に正の効果を有していた
- ◆ 人文科学系の特性や当該機関の特性を明らかにするには、分析を続けるとともに、分野間比較や機関間比較を行う必要がある

37

データの特徴と推計上の課題

- 追跡データ⇒観察不能要因を除去できる可能性
- 一時点データ⇒観察不能要因の影響を受けるおそれ
- 「操作変数法」(IV, 2SLS)による解決
 - …観察不能要因の影響が除去された、因果関係
- 「入学学科」は操作変数として活用できる可能性が高い。
 - 「卒業論文の執筆経験の有無」と強相関あり。
 - 入学学科(10代の選択)は、30代で感じる効果と無相関だと仮定。
 - 入学学科は実質的に卒業学科と同等と見なせる(転科等は無視)。

卒論執筆経験が私生活に影響を及ぼすという論理

日下田岳史

本報告のねらい

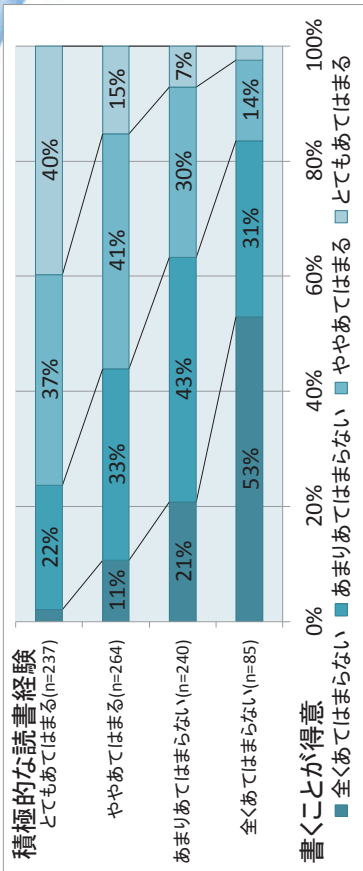
- (1) 統計的研究に基づく当該影響の存在確認
(篠田・日下田 2014)
- (2) 定性的研究に基づく論理(の一類型)の抽出

考慮すべきその他の要因(外生変数)

- 年齢
 - (世代効果は無いとの仮定のもと)加齢に伴って過去の経験を美化しがちな効果(経験的な仮説)を取り除く。
- 性別
 - 基礎的な属性として考慮しておく。
- 母集団の特徴を踏まえ、出身階層(社会的属性変数)のバラつきは大きいとは言えないと仮定できる。出身階層変数は、考慮しなくてよい。
- **大学入学前に身に付けた、学習への構え**
 - 卒業論文の執筆が主体的な学習経験の集大成である時、高校時代に身に付けた学習の構えの程度は、考慮するべき重要な変数かもしれない。

高校時代の積極的な読書経験の意味

- 積極的に読書した者は、書くことが得意な傾向。



書くことが得意 0% 20% 40% 60% 80% 100%
 ■ 全くあてはまらない ■ ややあてはまる ■ あまりあてはまらない ■ とてもあてはまる

- 高校時代の積極的な読書経験は、書くことへの準備である。

現在の知識・能力等の主観的評価への効果

現在の知識・能力等の主観的評価 (被説明変数)	最小二乗法 (見かけ?)		操作変数法 (因果)	
	卒論執筆経験の有無	高校時代の積極的な読書経験	卒論執筆経験の有無	高校時代の積極的な読書経験
批判的思考力	0	0	0	+
協調力	0	0	- (※)	0
文章で伝える力	0	+	0	+
口頭で伝える力	0	0	0	0
自己能力把握力	0	0	0	0
計画的行動力	0	0	0	0
人間探求力	0	0	0	0

p<.05, 0 = 統計的に有意な効果なし
 4件法による順序尺度変数は、量的変数と見なせるものと仮定している (以下同様)。
 (※) モデル全体のF検定は有意水準5%で非有意であることに注意。

卒論執筆経験の有無は、現在の知識・能力等に直接効果なし。

現在の私生活の質の主観的評価への効果

現在の私生活の質の主観的評価 (被説明変数)	最小二乗法 (見かけ?)		操作変数法 (因果)	
	卒論執筆経験の有無	高校時代の積極的な読書経験	卒論執筆経験の有無	高校時代の積極的な読書経験
私生活上、専門分野での学びが役立っている	0	+	+	+
私生活上、専門分野以外の学びが役立っている	0	+	0	+

p<.05, 0 = 統計的に有意な効果なし

卒論を執筆することは、現在の私生活上の「専門教育の役立ち感」に直接の効果がある。その論理とは?

就職できたのは学習院であったことが影響していると思う。

社会や仕事から学んだことのほうが多い。

文学部が役に立つと言えらるか、鋭い意見の対立がある。

社会で仕事をするためには文学部のあり方を変えるべき。

文学部や卒論は役に立たない。女性が働き続けるには資格が必要

文学部で学ぶ知識が役立つこともある。

知識を社会と関連付けることが大切だ。語学力が高まった。大学の問題ではなく自分の問題だ。

卒論から学べる経験は多い。

教えることに役立つ。物事を客観的に検証できるようになるための訓練だ。

精神力の鍛錬になる。

手書きという史学科ならではの経験が自信につながっている。非認知的能力が養われる。

4年間は自由な時間。卒論を書くのは当然。先行研究の厚みに圧倒された。

卒論はかけがえのない経験で、その後の力に繋がってほしい。

自分への興味が深まった。友人や恩師との出会いが自分を支えている。私生活の幅を広げてくれる。気が付くには、卒論が日常や仕事などで役立つ。知識を得る過程が大切。社会に出てから、時間もあまりない。大学の準備が大切。卒論を書くのは当然。先行研究の厚みに圧倒された。

卒論を書くのは当然。先行研究の厚みに圧倒された。卒論はかけがえのない経験で、その後の力に繋がってほしい。

質問紙の自由回答に見る、私生活上の「専門教育の役立ち感」の論理

今後の課題

- この分析結果から、卒論を執筆することから期待される効果は無いという仮説は棄却される。しかし、残された課題は少なくない。
 - 卒論を執筆することの効果の大きさは、すべての個人にとって同じ？
 - 卒論執筆を選択する理論的な確率が低い人(≡卒論に向いていない人かも?)ほど、卒論執筆経験の効果は大きい(または小さい)かも？
- 卒論の主観的効果が発現する論理も、一つではないだろう。
- 卒論執筆を課す(または課さない)理由の明確化に資する研究を蓄積していく必要がある。

本報告は、

学習院大学人文科学研究所第88回講演会配付資料(日下田岳史)

篠田雅人・日下田岳史「人文科学系学科における卒業論文の意味するもの—学科における現状認識と、操作変数法による執筆効果の推定から—」『大
学経営政策研究』2014, pp.55-71

に、新たな知見を追加したものです。

全体のまとめと今後の課題(1)

◎各発表のまとめ

- 卒業論文執筆経験に対する意識は、世代によってさほど差がない。
- 在学時の学習は、実社会で(間接的に)成果と結びついている。
- 在学中の学習経験は、卒業後の社会関係等に正の効果をもたらし、卒業論文の執筆を通じた教育・学習成果は、時間が経つてから効いてくるもの。
- ➔「人文科学系の学問は、『人生を豊かにする』という示唆が得られている」という意味においては、人文科学系学士課程教育におけるレリバランス研究の端緒とも言える。

◎人文科学系のレリバランス研究に対する是非論

- (例) 高度専門職業人の養成とは異なる教育目標を掲げているはずの人文科学系学部においても、同様な問題設定を行う必要があるのだろうか。
- ➔いわゆる「社会基礎力」「学士力」で求められているのは、論理的思考力や課題発見力・解決力といった、汎用性の高い知識や技能。職業と関連の強い分野に限ることなく、学士課程教育全般のひとつとして、人文科学系でもレリバランス研究を進める意義はあると考えられる。

全体のまとめと今後の課題(2)

◎主観的な指標(例:学生調査)を用いた研究への批判

- ➔本来的には、主観的データと客観的データの両方で教育成果を検証することが理想的。しかし、現実的には、主観的データを入手することも容易ではなく、教育の成果とみならず成績(点数)・GPA等を結びつけるために記名式で調査を実施することはそれ以上に困難。仮に記名式の調査を実施できたとしても、学内の成績データ利用に結びつけることは容易ではないという現実。
- ➔一方で、客観的な指標(成績・GPA等)によって、どこまで「客観性が担保できる」のかという疑問も残る。

◎今後の課題

- 例えば、卒業論文を必修とする学科と選択制を採用している学科の双方を含む学部の卒業生調査等を複数の学部で実施し、大学・学部間比較を行う。これにより、卒業論文が教育課程として最適な成果指標足り得るかを含め、教育成果指標を幅広く捉えながら検討を進めていく必要がある。そのためには、事例研究を積み重ねて、一般性のある知見を導くためのメタ研究が長期的には求められる。

1. はじめに

前節では、学習院大学文学部卒業生（1998～2004 年度卒）を母集団とする事例研究から、卒業論文執筆経験がもたらす主観的効果について検討を行った。その結果、「(仕事等に役立つような実践的な能力の修得という点では) 役に立たない文学部」観を実感しながらも、あるいはだからこそ、卒業論文執筆経験は私生活を豊かにするものとして、卒業生に受け止められているという解釈が示された。文学部で中核的な位置を占めると信じられている卒業論文の純粋な効果が、操作変数法という統計的な手法を用いて厳密に示されたと行ってよいだろう。

しかし、卒業論文の執筆にそのような教育効果があるとしても、その効果が発現するまでの因果的経路は、明らかにされていない。卒業論文執筆から得られる教育効果が、長い時間をかけながら、しかも私生活という主観的意識が強く反映される領域の中で発現する時、当該因果経路の解明は容易なことではない。

そこで本節では試論的に、卒業論文執筆の効果をはじめとする文学部の学びの効果が生起するまでの経路を、川喜田（1967）の方法を踏まえながら、卒業生個人の主観的意識データに基づき構造化してみたい。用いるデータは、卒業生調査の自由回答欄⁽¹⁾にみられる記述である。本節の試みは、前節で行った計量的分析に質的な分析を積み上げて、卒業論文の執筆効果を多角的に把握しようとするものと言えよう。

誤解がないようあらかじめ先回りしておくが、同じ主観的意識データを分析対象とする追試を行ったとしても、一意の分析結果が導かれるとは限らない。文学部における学びの効果が生起するまでの経路が、ここで一つ抽出されるとしても、それが唯一の道という訳ではない。このように述べると、本節の試みは研究としての信頼性を欠くのではないかと思う人もいるかもしれない。しかし、卒業論文の執筆効果の解明という課題は、まだ緒についたばかりである。さらには、教育効果の複雑な因果経路の一部を記述的に提示しておくことは、岐路に立つ日本の大学教育を考えるための材料の一つになるかもしれない。

2. 学びの効果が生起するまでの主観的経路⁽²⁾

2. 1 卒業から就職へ

文学部での学びや卒業論文の執筆経験は、どのように生きてくるか。この問いに対して、卒業生は、「就職できたのは学習院大学を卒業したことが影響していると思う」という振り返りから、語り始める。

だからと言って、大学時代の学修経験が初職の現場で効果を発揮しているという認識が直ちに導かれる訳ではない。むしろ、「社会や仕事から学んだことの方が多い」のである。このような認識は、例えば次のような記述から顕著にうかがわれる。

現在の仕事は、在学中に学んだ専門的な知識をいかす職業ではない（女性・日本語日本文学科）。

私生活上の問題を克服するためのカウンセリングから学んだことの方がはるかに多い（女性・心理学科）。

実生活に関わることを少しも研究しなかったので、文学部や卒論の経験がそのまま役に立つことはない（女性・ドイツ語圏文化学科）。

2. 2 文学部は役に立つのか？

「社会や仕事から学んだことの方が多く」という主観的な認知は、文学部は役に立つのかという懐疑を生み出す。卒業生のほとんどが卒業後直ちに仕事に就くことを踏まえると、そのような懐疑が生じるのは不思議なことではない。教育から職業への移行に伴うリアリティ・ショックがあるとすれば、それゆえに、文学部は仕事の役に立つのかという疑問が生まれるのは自然なことにも思える。そして、卒業生の認識は、「役に立つ」という肯定派と、「役に立たない」という否定派に分かれていく。

2. 2. 1 否定派の意識

否定派は、端的に言って、「社会で役立つ教育をするためには文学部のあり方を変えるべきだ」と考えている。「社会や仕事から学んだことの方が多く」という認識が、文学部教育の職業的意義を問い直そうとする考え方を生み出している様子をうかがうことができる。

例えば、「大学では知識を体系的に学ぶ・調べる・身につけるという観点が多すぎる（女性・心理学科）」という意見がある。確かに、大学で学ぶ知識それ自体が役に立たないとしても、不思議ではない。

他方で、これまでの文学部教育の職業的意義に対する疑義は、「女性が働き続けるためには資格が必要だ」という資格志向と関連していることにも留意する必要がある。文学部で教員免許等を取得することは可能だが、文学部の教育課程が資格志向に 대응するものとして捉えられていない。そもそも文学部には女性が比較的多い（学習院大学に限らない）わけだが、女性は出産等を契機に退職するという慣行が存在するがゆえに資格志向が支持されるという構図が、当事者の認識の中に垣間見える。否定派の論理は、仕事を獲得の機会を規定する社会の構造または規範に裏付けられた部分もあると言えよう。具体的な記述をいくつか紹介すると、次の通りである。

結婚・出産後も働き続けられる資格を取れる大学に入ればよかった（女性・心理学科）。

在学中に資格取得をサポートするなど一生役に立つことを学ばせてほしかった（女性・心理学科）。

一度退職すると大学で学んだことは再就職時のアピールポイントにならない（女性・心理学科）。

就活・仕事・転職には活かせなかった（女性・フランス語圏文化学科）。

もちろん、資格があれば（再）就職に直ちに役立つとは限らない。しかし、仕事を続けたいけれども難しい、仕事を働きたいという意識が差し迫っていけばいるほど、その希望の実現に資すると期待される資格を取得できない文学部は「役に立たない」という意識が顕在化していくと推測される。やや踏み込んで解釈するならば、時間がない人ほど文学部は「役に立たない」と考える傾向にあるのかもしれない。

このような論理が卒業生の主観の中に潜んでいるとすれば、教育効果を短期的な成果として捉えようとする意識が、文学部は「役に立たない」という認識を生み出していると言えるのかもしれない。裏返せば、文学部の教育効果は中長期的に、緩やかにと発現するという意識があれば、卒業後一定程度の時間を経て、仕事や生活という様々な場面で、教育効果を実感できると思われる。

2. 2. 2 文学部で得た知識が役立つこともある—肯定派の意識①—

肯定派の意見は大きく分けて3つに区分される。第一に、文学部で学ぶ知識が役立つこともあるというものである。この認識は、さらに3つの下位区分に分かれる。

まず、外国語力が要求される場面を想定してみよう。そこでは、文学部で学んだ語学力が確かに直接的に活用しうるのであろう。このことは、以下の意見から明確に読み取ることができる。

仕事をしていた時は海外の人と電話する機会が多く、学んだことが活かされて良かった（女性・フランス語圏文化学科）。

教職や教育産業に身を置く卒業生も、在学中に学んだ知識が役に立っていると回答している。卒業後に就いた職業によって、文学部教育の中に職業的意義が回顧的に見出されていると言えよう。

ただし、仕事上の個別具体の用務に対して文学部で学んだ知識が直接役立つことは、全体から見れば稀であろう。それでは文学部教育にはほとんど効果が期待できないかと言えば、そういう訳でもない。知識を自ら積極的に活用しようとする姿勢が、過去の経験の主観的効用を高めている様子が見られる。すなわち、「知識を社会と関連付けることが大切だ」ということである。仕事上の個別具体の用事に役立つかどうかという視点から語るのではなく、過去に身に付けた知識を現実に応用しようとすることで、教育効果が実感されるようである。

社会の出来事を歴史と関連付けられる知識が身につけている（女性・日本語日本文学科）。

知識は今の社会にどのように役立たせることができるか、先生と学生が議論して実行して、役立たせることが大事（女性・心理学科）。

インプットするだけでなく、アウトプットして初めて「社会に役立つ知識を身につけている」と言える（女性・心理学科）。

社会と関連付けることによって過去に学んだ知識が生きてくるという認識は、場合によっては、「文学部が役に立たないことは大学の問題ではなく自分の問題だ」という、言わば自己責任論に発展する場合がある。文学部という自由な環境で何を為すかはまさに自己責任であり、当時の経験が、30代になってから振り返るに値するものとなっているかどうかを問う意見である。

大学時代を振り返り、（知識が）活かされていないと私が感じることは、必ずしも大学側の課題ではない（男性・心理学科）。

在学中にフランス語を身に付けられず、その後の人生でフランス語を使おうと思わなかったのは自己責任（女性・フランス語圏文化学科）。

大学という自由で自主的な環境で卒業論文を書くことは、大学生生活を全うした達成感につながる（女性・心理学科）。

このように、文学部で得た知識が役に立つという認識の背後において、文学部で学ぶことができる知識の捉え方自体が、文学部教育の主観的効用観を規定している様子をうかがうことができよう。それでは、文学部で学ぶことのできる知識自体を認識する枠組み自体は、どこから来るのであろうか。その手がかりが、卒業論文の執筆経験に隠されている。

2. 2. 3 卒業論文の執筆経験から学べることは多い—肯定派の意識②—

前述のように、就いた職業によっては文学部で学んだ知識が直接的に役立ちうることも確かである。しかし、卒業論文の執筆に熱心に取り組むことで、「卒業論文は、物事を客観的に検証できるようになるための訓練だ」という認識が生まれる場合がある。このことについて、卒業生は次のように述べている。

客観的に物事を見られる力は、客観的に論文を仕上げたことに起因しているかもしれない（女性・英語英米文化学科）。

仮説を立てて根拠を探す訓練ができた（女性・史学科）。

文学部で学んだことを、仕事上の個別具体の用務を起点として位置付けようとする考え方ではなく、仕事や生活等の様々な場面で求められる方法論の学修経験として捉えようとする考え方を読み取ることができる。しかもその方法論は、卒業論文の執筆という訓練によって得られるという認識が、卒業生によって示されている。

例えば、「卒業論文は自分の意見を伝える方法を身に付けるための訓練だ」とか、「論理的な文章力が養われた」ということである。

日常生活や仕事で自分を表現することの大切さと方法を身に付けることになった（女性・英語英米文化学科）。

情報を集め分類し、立場を明確にして考えを主張する方法を児童に伝えるのに役立つ（女性・日本語日本文学科）。

書物などの情報が全て正しいと思わないこと（女性・日本語日本文学科）。

長い論文を順序立てて書くことが、社会人として文章を書くのに役立つ（女性・史学科）。

50枚という大量の文章を書くという経験から、文章を書くのに抵抗がなくなった（女性・心理学科）。

2. 2. 4 卒業論文を書く経験は精神力の鍛錬にもなる—肯定派の意識③—

文学部肯定派の第三の論拠は、精神力等のような、非認知的能力に関わるものである。多くの卒業生にとって卒業論文は、最初にして最後の、長文執筆経験であろう。このことをやり遂げたという事実が、精神的な充足感をもたらしているようである。さらには、卒業論文の執筆経験の中に、非認知的能力を訓練する機会を見出している卒業生も出てくる。

一から自分で考え最後までやり遂げる精神力は、どんなことにも役立つ（女性・ドイツ語圏文化学科）。

根気よく計画的に物事を進める大切さを改めて感じた（女性・史学科）。

トータル的な人間力のようなものも、卒業論文には必要だったらしい（女性・史学科）。

ところで、学習院大学文学部史学科の場合、卒業論文は手書き原稿で執筆・提出しなければならない。その経験は、30代になっても思い起こされるものとなっている様子がかがわれる。

手書きで100枚書いたことは、今でも自信になっている（女性・史学科）。

手書きの卒業論文は、同様の経験をした人がいないので、話題に事欠かない（女性・史学科）。

2. 3 文学部で学んだ経験はあとからゆっくり発現する

これまで、文学部教育は役に立つと考える肯定派と、役に立たないと考える否定派の論

理を、卒業生の主観的意識データに基づきながら述べてきた。肯定派の論理は概ね、文学部で学んだ効果はすぐには現れず、時間をかけてゆっくり発現するという意見に集約されていく。ゆっくりと現れる効果は、その遅効性のため、教育効果が発現したまさにその瞬間は認知できない。ゆえに、教育効果は卒業生によって回顧的に認知されることもしばしばである。

このような文学部の教育効果の遅効性という認識は、否定派の論理とまったく無関係とは言いきれない。文学部で学んだ経験はあとからゆっくり発現するという意識は、否定派の論理を裏から述べたものでもある。前節で述べたように時間がない人ほど文学部は「役に立たない」という意識があるとすれば、この意識を裏返すと、時間にゆとりがある人ほど文学部は「役に立つ」と考える、と読める。文学部教育の効果に対する主観的な認識は、表から述べるか裏から述べるかという違いこそあるが、時間に対する認知のあり方（時間選好率）から導かれているという点では共通していると言える⁽³⁾。なお、一般的には、時間選好率が大きい人ほど現在志向が強いと考えられている。

それでは、卒業生の時間に対する価値判断の相違は何から由来しているのか。もちろん生得的なものの違いなのかもしれないが、その可能性は本稿の範囲では検証できない。しかし、卒業生の主観的データが、一つのヒントを提供してくれる。それは、学生時代の経験を点として捉えるか、点と点を結ぶ線分として捉えるか、その点や線分を現在からみてもどのように意味付けるか、という違いだと思われる⁽⁴⁾。卒業生は、次のように述べている。

歴史そのものの知識よりも、根拠に基づき伝わる文章を書くプロセス（を経験したこと）が役立つ（女性・史学科）。

専門的な知識に自信はないが、心理学科で学んだ経験は無駄ではなかった（女性・心理学科）。

論文の書き方や思考の仕方は、あらゆる仕事に役立っていると思う（女性・心理学科）。

卒業論文を書くという行為で得たことが、日常生活や仕事で形を変えながら活かされている（女性・哲学科）。

文学部で学んだ研究に対するアプローチや作文方法は、社会生活に役立っていると感じる（女性・日本語日本文学科）。

個別の知識よりもそれらを得る過程で身に付けた経験が大切であること、そして卒業論文はその一連の課程を体験するものとして位置付けられ、日常や仕事などの場面でその経験が役立っていると感じられることが、卒業生の記述からうかがわれる。

このような教育効果の主観的認知体験は、文字通り、あらゆる場面で得られるもののようなものである。例えば、次のような記述がある。

現在の子育てにも役立っている（女性・心理学科）。

子育て期間中だが、様々な人との出会いがある（女性・英語英米文学科）。

文学部で学んだ経験は、子育てにも役立つと感じられる場合があるのである。文学部教育は、時間が経ってから役に立つと感じられるようになる。このことについて、ある卒業生は次のように端的に述べている。

社会に出てようやく、時間もあり様々なツールを利用して勉強できる大学時代は素晴らしいと思えるようになった（女性・英語英米文学科）。

ところで、文学部教育が子育てに役立っているという意識は、やや突拍子もないものに映るかもしれない。しかし、そうではない。そのような意識の背後には、文学部の学びが私生活の幅を広げてくれるという考え方がある。

例えば、文学部での学びや卒業論文の執筆を通じて得られた友人や恩師との出会いが自分を支えているという記述が、複数みられる。

手探りで全貌の見えない卒業論文に取り組む時、暗い箱の中を照らしてくれたのは先生や先輩だった（女性・史学科）。

友人や恩師との出会い、卒業後の交流が、とても意味のあるものになっている（女性・日本語日本文学科）。

卒論データが後輩の受けた授業で使われたそうで、仕事をする上で自信になった（女性・日本語日本文学科）。

そして、卒業論文を書くことで自分自身に対する興味が深まると同時に、自分自身への認識の深化と、縦横的な対人関係の獲得体験が、様々な場面における円滑な社会的関係の構築に役立っているという心理を生み出している様子がうかがわれる。

卒業論文を通じて自分の無知を知った（男性・英語英米文学科）。

正解は自分で考えること（女性・日本語日本文学科）。

論文を書くことで自分の興味と能力が理解できた（女性・心理学科）。

いろいろな人と共通の知識や話題を得ることができるようになっていたことが社会で役立つ（女性・心理学科）。

読書範囲が幅広いため、対人関係で話の内容がある人が多い（女性・日本語日

本文学科)。

これらの記述からうかがわれる卒業生の認識は、最終的に、文学部の学びは人生の豊かさに関わっているという主観に達しているようである。

常に考察すること、哲学や芸術同様に人生の豊かさや奥深さを教えていただいたことは、一生を通じて活かされると思う (女性・ドイツ語圏文化学科)。

学びは、同時に喜怒哀楽を感じる経験を伴うことで、より尊く人生に作用する (女性・フランス語圏文化学科)。

教養を身につける面でも、各単位で得られたことがらが日常生活で活かされている (女性・日本語日本文学科)。

自分の人生の一部であり、知識の一部である (女性・フランス語圏文化学科)。

3. 卒業生が考える文学部のあり方—まとめにかえて—

本節は、文学部の学びの効果や、卒業論文を執筆したことによる効果が生起するまでの経路を、卒業生個人の主観的意識データに基づき構造化してきた。その結果、文学部で学んだことよりも社会や仕事から学んだことの方が多という認識が、文学部の教育効果の有無を巡って捉え方の違いをもたらしている可能性が提示された。そして、文学部の教育効果に対する認知は、効果を中長期的に捉えようとするのか、それとも短期的に捉えようとするのかという時間選好率と関連している様子が示唆された。それは、大学での学びの体験を、知識という点の集合体として捉えるのか、それとも点と点を結ぶ線分として捉えるのかという違いと言っても良いだろう。文学部で学んだ経験が効果として現れるまでには時間がかかるという認識が、仕事の場面に限らないあらゆる場面において、文学部の学びの効果を回顧的に認知することを可能にしていると推測される。そして、文学部の学びや卒業論文の執筆の効果が顕著に感じられるのが、私生活上の領域においてである。それを可能とするのは、学修に基づく自分自身への認識の深化と、縦横的な対人関係の獲得体験などであるようだ。

最後に、卒業生が文学部のあり方をどのように考えているのか、簡単に触れておきたい。

前節で述べたように、文学部は「役に立たない」と考える卒業生が一定数存在しており、その記述には、「在学中に資格取得をサポートするなど一生役に立つことを学ばせてほしかった」という回答に象徴されるような、資格志向に応える文学部への転換への期待が滲んでいる。今日の学生や、やがて入学してくるであろう学生たちの中にも、資格志向を有する人たちは少なからずいるだろう。このことを前提とするならば、文学部のこれまでのあり方と、学生の資格志向（それが学生の間でどの程度代表的かどうかは別として）との間に齟齬を見出すことは容易である。ここに文学部の課題を見出すことは、難しいことではない。

ただし、それが文学部だけの課題と言えるのか、慎重に判断するべきかもしれない。な

ぜなら、資格志向の根強さは、日本社会における労働スタイルと関連していると考えられるためである。特に女性が家族の都合等で退職を余儀なくされ、正規雇用での再就職を希望してもその実現が困難な状況が続くとすれば、いざという時のための資格志向も根強く存在し続けると予想される。これまでの文学部を直ちに肯定するばかりでなく、大学は仕事の世界と隣り合っているという事実を踏まえながら文学部のあり方を模索することが、卒業生から求められているのかもしれない。

他方で、学生生活を次のように回顧している卒業生もいる。そこでは、「大学 4 年間は自由な時間だ」という素直な心情が語られている。

卒業後に役立つかどうかではなく、歴史が好きで史学科に入った（女性・史学科）。

生活の心配はなく、自分の思うがままに時間を使って好きなように過ごした日々であった（女性・ドイツ語圏文化学科）。

最高に充実した 4 年間を送れたのがよかった（男性・日本語日本文学科）。

学業と演奏技術の向上に 20 代を捧げてしまったため、恋愛はからきしだった（女性・史学科）。

そして、自由な学生生活の集大成として取り組む卒業論文の執筆経験は、先行研究の蓄積の厚みに圧倒された経験として語られている。文学・歴史・史学等の膨大な研究蓄積の上に成り立ってきたこれまでの文学部教育のあり方を大切にしてほしいという卒業生の願いを、読み取ることができるだろう。

先行研究を通じ人間のここまでの取り組みの偉大さを痛感し、学問の奥深さ・怖さを知った（男性・英語英米文学科）。

あまりに奥が深く文献も膨大でどこから手をつけてよいか分からなかった（女性・ドイツ語圏文化学科）。

文学部のあり方に対する卒業生の認識は、どのようなものか。それは、文学部を変えようとする意識と守ろうとする意識がせめぎ合いながら、形作られている。

引用文献

日下田岳史・矢野眞和，2014，「女子高校生のライフコース展望からみた進路選択の差異とその合理性」『東京大学大学院教育学研究科紀要』53，pp.81-93.

川喜田二郎, 1967, 『発想法 創造性開発のために』 中公新書.

Stanford University. Steve Jobs' 2005 Stanford Commencement Address (with intro by President John Hennessy) [Video file]. Retrieved from https://www.youtube.com/watch?v=Hd_ptbiPoXM [2014-12-3]

※本節は、篠田雅人ほか「人文科学系学士課程教育の成果－学習院大学卒業生調査の結果から－」（日本高等教育学会第17回大会、大阪大学、2014年）の日下田担当箇所に基づいて執筆したものである。

(1) この質問は、学習院大学文学部での学びから得た知識・スキルや、卒業論文の執筆経験が、卒業後にどのように活かされているのかを尋ね、自由に記述する形で回答してもらうものである。具体的な質問文は、卒業生調査質問紙 (p.196～p.201) Q19 を参照されたい。

(2) 引用する自由回答記述は、筆者において要約されたものである。

(3) 時間の捉え方と教育効果の認知に関する議論は、例えば日下田・矢野 (2014) も行っている。女子高校生の進路選択に関する議論において、現在志向（本人の経済的条件や主観的価値観により規定される）が高く時間選好率が大きい人ほど、大学教育から期待される金銭的便益を低く見積もり、進学せずに就職するというモデルが展開されている (p.84)。

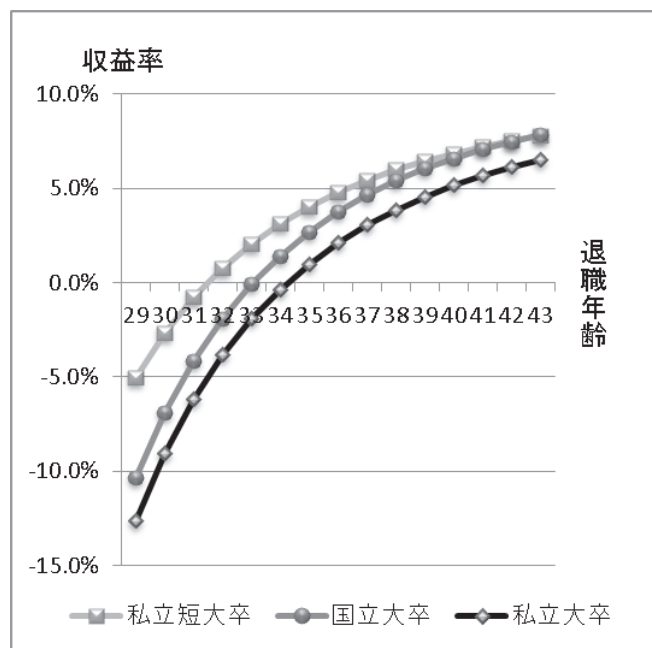
(4) 世界的に著名な企業家であるスティーブ・ジョブズ氏は、スタンフォード大学卒業生に贈った祝辞の中で、学生生活における「点 (dots)」の意味について述べている。

卒業生調査から得られたサンプルの一般的意義について

日下田 岳史

本コラムは、卒業生調査から得られたサンプルの意義を、文学部というテーマから離れてやや一般的に考察するものである。

卒業生調査から得られたサンプルの構成は、「卒業生調査の概要」に示されているように、84%が女性であり、かつ、平均年齢は 33.6 歳（最小値は 29 歳、最大値は 69 歳）である。卒業生調査から得られたサンプルは、30 代半ばに足を踏み入れつつある大卒女性の主観的意識が強く反映されていることに、特段の留意が必要である。その留意事項とは何か。次の下図を見てみたい。



学歴別・女性の教育の収益率（2009年）

出所 日下田（2013, p.133）に国立大卒を加筆。

この図は、女性が高校卒業後に進学する時に期待される金銭的便益（仕事から得られる賃金）を、収益率という指標で表したものである。大学や短期大学への進学資金を投資額として捉えた時の利回りに相当するものが、収益率である。その投資額の中には授業料ばかりでなく、高卒後に就職する時に期待できる賃金が間接費用（放棄所得）として含まれている。この収益率を、進学先の大学種別・（想定）退職年齢別にプロットしてみたものである。

この図が示唆しているのは、大卒女性にとって 30 代前半から半ばという年齢は、自分自身が受けてきた大学教育の意味を問い直す時期に相当するという可能性である。具体的に説明しよう。

例えば、29歳で退職するという想定のもとで私立大学に進学した場合に期待される収益率は、-10.0%を下回っている。この場合、私立大学卒業後に働いて得られる賃金から進学資金を回収できず、赤字に陥る。それが、想定退職年齢を34歳にすると、私立大学に進学した時の収益率はほぼ0%となり、教育投資額と収益が均衡する。そして想定退職年齢が30代半ばを超えると、収益率がプラスに入れ替わる。このような関係は、進学先が私立短期大学や国立大学の場合にも概ね当てはまる⁽¹⁾。大学や短大への進学資金を、仕事から期待される賃金で回収しようとする限り、30代半ばまで働き続ける必要があると言える（日下田2014）。

ところが日本社会は、女性が働き続けたくてもそれが難しい社会であり続けている。30代前半から半ばという年齢は、大卒女性が仕事と家庭との関係にまつわる様々なことがらに直面しがちな時期であると同時に、収益率がマイナスからプラスへと転化する瀬戸際の時期でもある。大卒女性にとって、自身が受けてきた大学教育の意味に言葉が与えられ、その意味がまさに自身の中で明確になろうとする時期が、30代前半から半ばに当たると考えられる。

卒業生調査から得られたサンプルは、このような特性を強く帯びている。女性にとっての大学教育の効果が生起するまでの経路を、中期的な視点から捉えようとする時、このデータは格好の材料となるものである。

引用文献

日下田岳史，2013，「潜在看護師の再就労意欲に関する研究—学歴差に着目して—」『大学評価研究』12，pp.131-140.

日下田岳史，2014，「仕事上の期待便益に基づく大学進学需要の説明可能性と課題—就業構造基本調査オーダーメイド集計を活用した都道府県別・男女別分析から—」（日本教育社会学会第66回大会、松山大学・愛媛大学）。

(1) ただし、細かく見ると、収益率がゼロになる退職年齢が進学先により異なっている。私立短大→国立大→私立大の順に、31～32歳→33歳→34～35歳となっている。この図は、女性の4年制大学志向の高まりを受けて、仕事から期待される賃金により教育投資額を回収するのに要する期間が長期化する様子を、明確に示している。

職業生活に寄与する文学部での学び

中世古 貴彦

卒業生は文学部での学びが仕事上で役に立つと感じているのか

一般的な印象では、人文科学系の専門的な教育内容は他の分野ほどには職業と直結しにくいと思われるようである。例えば、工学部ならエンジニア、経済学部ならビジネスパーソンに必要とされる専門性にある程度通じる教育内容が提供されると考えられる。だが、例えば哲学、歴史学、古典文学等のいかにも文学部的な専門知識を、労働者の多くが常日頃の業務で活用することは考えにくい。

実際に卒業生調査のデータで確認すると、専門分野での学びが役に立っているか尋ねた設問に対して、現在の職業が民間企業の正社員や、パート・アルバイト・契約社員等の非正規雇用のグループでは、7割前後の卒業生が否定的な回答をしている。一応、公務員・教員のグループでは約6割の人が肯定的な回答をしている。自由記述回答の内容からは、特に教員となった者の中に大学での専門分野に関連する教科を担当している、或いは子供と接する際に心理学等が役立ったと感じる者が一定割合存在することが読み取れる。いずれにせよ、文学部での専門的な学習が役にたったと評価している者は多数派とは言えないようである。

しかし、単純に役に立つと思うか否かを尋ねただけの質問への回答に基づき、有用性の有無を判断するのは性急ではないか。やはり、実際に労働を介して現れる指標に基づき判断するべきであろう。そこで、先行研究の多くが大学教育の成果指標として設定する本人の年収に着目して検証を行う。

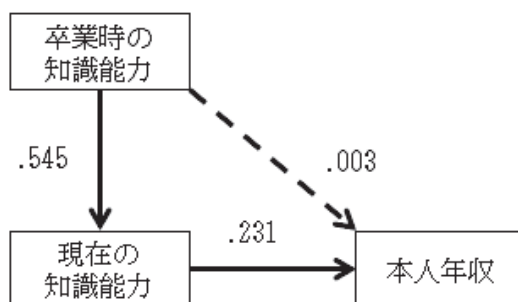
年収を向上させる（場合もある）文学部での学び

詳細な計量分析の結果は本報告書の学会発表資料等にも掲載してあるので割愛するが、卒業生調査の分析結果からは、少なくとも民間の正社員では、学習院大学文学部で確りと学習して様々な知識や能力が身についたと自己評価している者の方が、より多くの年収を得ていた。民間労働市場では、労働経験の蓄積、仕事の負担感、性別（女性だと不利）等も年収を決定する要因となるが、現在本人がどれほどの知識能力を身につけているのかもプラスの影響を持っていた。そしてこの現在の知識能力は、在学時の学習の成果である卒業時の知識能力に強く規定されていた。つまり、図1のように文学部で一生懸命に学習した経験が、間接的に現在の所得の向上につながっていたのである。

なお、年功序列的な賃金体系の影響が強い公務員・教員のグループと、主に居住地の物件費の相場や仕事のきつさが賃金を決定する非正規雇用のグループでは、在学時の学びが間接的に年収を向上させる効果は見られなかった。図1で言えば、一番下の矢印に効果が認められないため、卒業時の知識能力の影響が年収までつながらなかったのである。

一見実学しか評価されなさそうな民間労働市場において、文学部での学びが、間接的であったとしても、金銭的な側面で効果を発揮しているというのは興味深い結果ではないだ

ろうか。



実線の矢印は0.1%水準で有意なパスを表す。矢印の隣の数字はパス係数。

図1 本人年収に対するパス解析の結果（正社員）

仕事上の成果を高める文学部での学び

一方、金銭的報酬と比べると主観的ではあるが、仕事上の成果（をあげていると感じているかという問い）に対して、卒業時の知識能力は影響力を持つのか。本人年収と同様の分析を行った結果、どの職業グループでもちょうど図1のような関連が存在し、卒業時の知識能力が、現在の知識能力を介して、仕事上の成果を向上させていることが確認された。

卒業時の知識能力から各成果指標への直接的な効果、間接的な効果、それらを合計した総合的な効果のパターンをまとめたのが表1である。卒業時の知識能力から成果指標へと直接つながる影響の経路は、いずれの組み合わせでも統計的に有意でなく、直接的な効果は認められなかった。一方で、公務員・教員と非正規雇用のグループの場合の本人年収に対する組み合わせ以外では、現在の知識能力を介した間接的な効果が存在し、結果として総合的な効果も存在することが確認された。

表1 卒業時の知識能力から各成果指標への効果

成果指標	職業	直接的な効果	間接的な効果	総合的な効果
本人年収	正社員	0	+	+
	公務員・教員	0	0	0
	非正規雇用	0	0	0
仕事上の成果	正社員	0	+	+
	公務員・教員	0	+	+
	非正規雇用	0	+	+

卒業生の自由記述回答に見る間接的な役立ち

分析結果からは、在学時にしっかりと学習を積んだ（と自認している）文学部卒業生は、社会に出てからも高い水準の知識能力を形成し（ていると感じており）、（やはり自己評価

ではあるが) 仕事でもよい成果をあげており、職業にもよるが高い年収を得ている傾向にあることが明らかになった。文学部における学習は、労働において利益をもたらしている。

自由記述回答には、専門的な知識そのものの有用性は低くとも、専門分野の学習を通じて得た論理的な思考力や、卒業論文執筆に求められた問題に対してアプローチする技法や文章力などが仕事においても役に立っているという記述が多数見られた。ごく一部だけとなるが、以下に代表的な例(原文ママ)を紹介する。

「大学の学びで得た専門知識が現在の仕事に直接活かされている部分はゼロに等しい。(そういう職業についていない) 一方、自己表現に責任を持つこと。(裏付けをとったり事前準備をしたりしたうえで表現すること) この点は大学で学び私が仕事や私生活のあらゆる面で実行している卒論等の経験から発しているものとする。特に職場においては、それなりのポジションを得ているが、私が大学の学びで得た事の結果が成果につながっているであろうと自負する。」(正社員、女性)

「授業、卒論とも、自身で課題を見つけ、課題解決の努力するというプロセスの経験は、社会に出て仕事をしていく上で十分に役立ったと考えます。文学部で得たものは、知識というよりは『考え方』『伝え方』の部分が多いと個人的には感じています。」(正社員、男性)

「仕事をする上で大切な文献・文章を読み込む力やレポートを書きあげる力は文学部で養われた能力であると強く感じている。」(公務員・教員、女性)

「知識、スキルそのものよりも、考え方や答えのみつけ方、自分の中に問題や疑問を抱えつつけるだけの力がついたように思います。そして、それは、自己肯定感の強さにつながっていると思います。」(非正規雇用、女性)

なお、知識能力も仕事上の成果も、あくまで自己評価に基づくものである。そのため、実際には大した成果を出していなくとも、自分は仕事で成果をあげていると思い込んでいる者が、自分の知識能力についても過大に評価しているだけという解釈も不可能ではない。しかし、実は正社員のグループでは、年収と仕事上の成果の間に有意な正の相関が存在していた。(ただし、賃金を決定するメカニズムが異なる公務員・教員と非正規雇用のグループではこのような相関は見られなかった。) となると、「年収と仕事上の成果との関連はあくまで本人の主観にすぎない」と断定するのは、少し極端過ぎるのではないだろうか。

まとめと課題

他の学問分野でこのような効果が存在しないと主張するわけではないが、専門教育の内容と職業とのレリバンスが決して高いとは言えない人文科学系において、大学教育の有効性の一端が実証的に示されたことの意義は小さくない。自由記述回答からも読み取れるが、卒業時の知識能力の間接的・総合的な効果が意味するのは、在学時の学習が、仕事に向き

合う自己の認識をポジティブな方向に誘導し、結果的に自己肯定感を高めているということである。「文学は人の心を豊かにする」といった表現もあるが、卒業後のキャリアによっては大学教育が必ずしも金銭的な報酬に結び付くとは限らないものの、精神的な報酬には多くの職業で（間接的にではあるが）しっかりと結び付いている。伝統的に女子学生が多く、妊娠・出産・子育て等で労働から遠ざかる人も少なくない人文科学系の大学教育の非金銭的な効用について、研究を深めるべき余地は大きい。

残念ながら本研究はあくまで一文学部の卒業生、それも特定の年齢層を対象とした分析結果であり、直ちに人文科学系の大学教育一般の有効性を主張しうるものではない。また、学習や仕事の成果を正確かつ客観的に測定することは難しく、自己評価で代用している点も十分とは言えない。今後はできる限り客観的な指標も用いつつ、実証的な研究をさらに積み重ねる必要があるだろう。

謝辞

卒業後長い年月が経過し、仕事、家事、育児等でお忙しい方も多数いらっしゃるにもかかわらず、非常に多くの（とりわけ、読み応えのある自由記述）回答をお寄せいただいた卒業生の皆様方に、この場をお借りして深く御礼申し上げます。

「就活で忙しいから卒論どころではなかった」は本当か？

篠田 雅人

卒業論文・卒業研究は、事前の問題意識の醸成や事前準備といった要素を除けば、学部4年生の段階で取り組む授業科目である。4年生ということは、ごく普通の学生であれば、大学卒業後の就職に向け、就職活動、いわゆる「就活」も同時並行的に進める必要があることは周知の事実である。特に、近年の就活は、「エンドレス」という俗称もあるそうだが、インターネットエントリーの普及等の影響もあり、多戦多敗を強いられ、肉体的にも精神的にも疲労困憊となってしまう学生が多いということである。

とはいえ、日本における就活そのものは、今に始まったことではない。終身雇用制・新卒一括採用が雇用慣行となっている日本では、時代により就職協定の有無や採用活動開始時期の差はあるものの、大学生の場合、3年生の後半から4年生の時期にかけて就活期間が存在する。筆者にも3年生の2月頃から4年生の8月頃まで就活期間があり、実際に大卒時の就職先から内々定をもらったのは4年生の6月だったと記憶している。

そこで、ひとつの疑問が生まれる。それは、「昔と今では、就活の忙しさは本当に違うのか？」。本研究プロジェクトで実施した在学生調査と卒業生調査では、意図的に同じ質問を試みた。それは、「就職活動に時間を取られ卒論・卒研どころではなかった」というものである。結果は、図1のとおりであった。

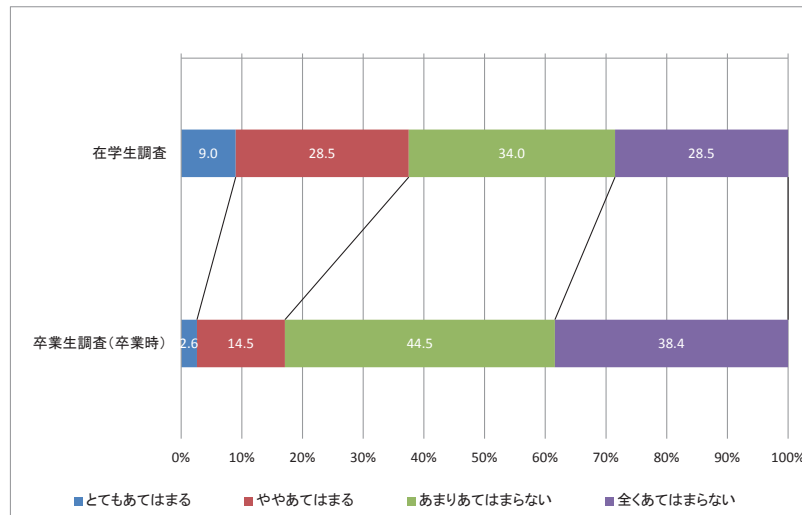


図1 「就職活動に時間を取られ卒論・卒研どころではなかった」

卒業生調査は、1999（平成 11）年 3 月～2005（平成 17）年 3 月卒業の文学部卒業者を、在学生調査は、2012（平成 24）年 3 月卒業の文学部卒業予定者をそれぞれ対象として実施した。それぞれの世代が大学を卒業する時の経済情勢としては、「失われた 20 年」と言われるバブル経済崩壊後の低迷期と「リーマンショック」直後と、似たような状況にあると言える。「（とても＋やや）あてはまる」の割合を見てみると、卒業生調査では 17.1% だったのに対し、在学生調査では 37.5% となっており、卒業生より在学生（当時）の方がよ

り「就職活動に時間を取られ卒論・卒研どころではなかった」と感じていることが分かった。この数値をどう解釈するか、立場によって解釈が異なるため、あくまでも筆者の個人的な感想としてだが、文学部という、一般的には大学での学習内容と就職との関係性が薄いと考えられる学部を考慮すれば、就活による卒論への影響は小さいのではないかと感じた。とはいえ、卒業生の2倍以上の在學生（当時）が「就活で忙しい」と感じていた事実そのものは、現在の就活事情を反映したデータとしてしっかりと認識する必要があるだろう。

一方、大卒予定者の就活事情を示す各種統計データを踏まえた検討をしてみたい。日本全体の大卒就活事情を象徴的なデータとして、「大卒求人倍率」（リクルート調査）と「大卒就職率」（文部科学省・厚生労働省内定状況調査）が挙げられる。この2種類のデータに、「学習院大学の就職率」（学習院大学調査、大学全体と文学部を併記）を加えた3種類（学習院大学データの併記を厳密にカウントすれば4種類）のデータをまとめてみたものが図2である。

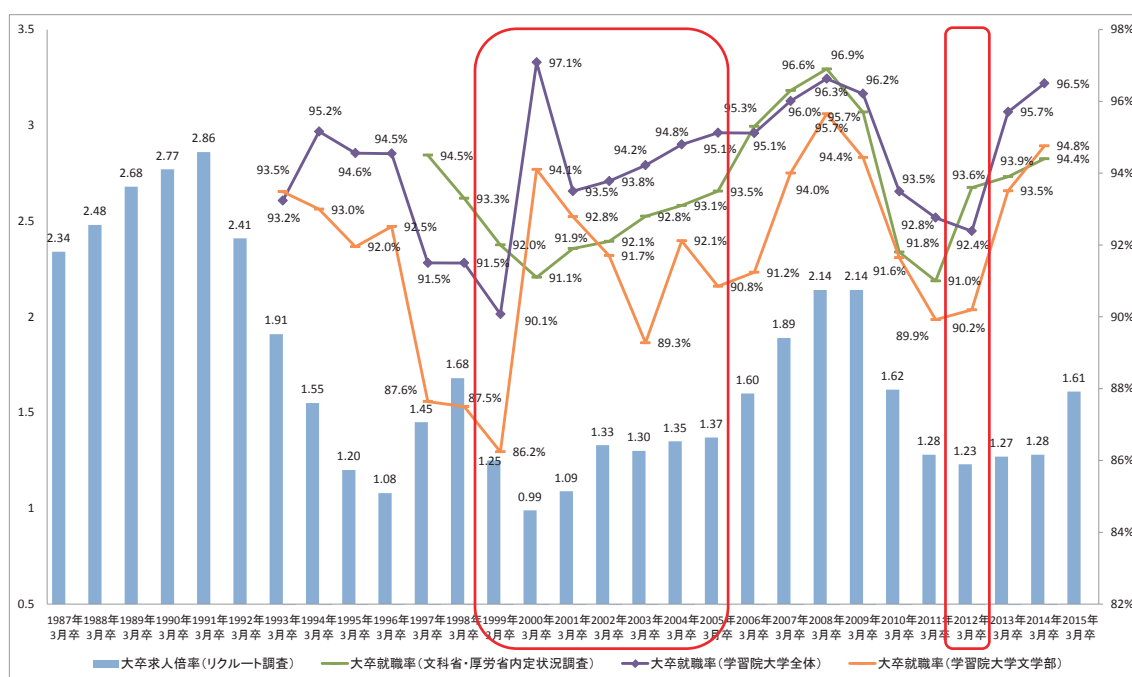


図2 大卒求人倍率と就職率（各種データを引用のうえ筆者まとめ）

図2の赤枠で囲んだところが卒業生調査・在學生調査対象者の卒業年であるが、これを見ると、経済情勢が低迷していたため、当然と言えば当然であるが、それぞれの世代が就活を行っていた時期の大卒求人倍率は低く、実際の就職率も景気が良い時に比べれば低い傾向にあることが共通点である。中でも、最も象徴的な年として、2000（平成12）年3月卒が挙げられる。この年は、大卒求人倍率が0.99倍と、リクルート調査によるデータがある中では、唯一1.00倍を切った年であり、また、大卒就職率も91.1%と、文科省・厚労省調査データによるリーマンショック直後の2011（平成23）年3月卒の91.0%に匹敵する数

値となっている。ただし、このような状況であるにもかかわらず、学習院大学データによれば、その年の大学全体就職率は97.1%、文学部卒業生だけを見ても94.1%と相当に高い。これは、就活中ないしは卒業時点で、就職希望者から就職を希望しない者という扱いにデータシフトした（された）学生が相当数存在したことが推測される。たまたまであるが、筆者はその年に学習院大学の経済学部を卒業し、とある団体に就職した一人である。振り返ってみれば、当時就職先として希望していた業界では、新卒採用そのものを実施しないという企業も多く、確かに求人数そのものは厳しかったのだろうが、結果として複数の内々定をもらうこともでき、実際の就活自体はさほど厳しいとは感じなかった。今となっては覚えている人も少ないだろうが、“ミレニアム”の年における大卒者の就活状況、大学卒業、就職と、随分とメモリアルな年であったことが分かる。

個人的な感傷に浸るのはここまでとして、学習院大学文学部の就職状況を確認してみると、卒業生調査対象者のうち、最も厳しかったのは、1999（平成11）年3月卒の86.2%、2番目に厳しかったのは2003（平成15）年3月卒の89.3%である。このいずれの数値も、在学生調査対象者の2012（平成24）年3月卒の90.2%よりも低いことが分かる。経済情勢だけでなく、学生層や産業構造の変化等を含め、世代により様々な違いがあると考えられるが、数値だけを単純に比較する限りにおいては、在学生調査対象者が「就活が厳しい」と感じていたであろう状況は、少なくとも卒業生調査対象者が感じていたであろう「就活が厳しい」状況と大きくは変わらないと言える。

以上、2つの観点から、卒論と就活の関係、あるいは就活が卒論をはじめとする大学の学習活動にどのような影響を与えているのかについて検討してみた。その結果として、実は、就活が卒論をはじめとする学習に与える影響はさほど大きくないのでは？という答えに行き着いた。

では、大学生を「就活で忙しい」状況に追い込んでいるのは何か？それは、就活そのものではなく、実は「就活産業」なのではないか？ということである。

本研究プロジェクトで実施した2つの調査結果と各種データを比較した結果として、前述のように、卒論と就活の関係が世代間でさほど大きくないとするならば、学習院大学は一定以上の入試選抜機能を果たしている大学である、という前提の下でこの2世代で決定的に違うのは、就活に関する様々な情報を得るための環境、端的に言えば、インターネット環境の目覚ましい発展・普及度合いではないだろうか。2000（平成12）年前後では葉書による資料請求、電話による会社説明会予約、紙のエントリーシートの提出がまだ主流だった。が、その後、これらのステップは、圧倒的な割合でインターネット経由に取って代わられた。就活に必須となる様々な情報収集や資料請求、会社説明会申込に加え、データによるエントリーシート提出や、大学名によるフィルタ機能設定が可能といった意味を含む選考活動そのものに幅を利かせているのは、全てインターネットである。

しかし、これらネット環境の変化によらず、唯一変わらないものがある。それは、就活の軸として君臨している、換言すれば、就活そのものを商売としている、俗に言う「就活産業」の存在である。就活は、就活産業が制作した自己分析ツールの使用に始まり、就活産業が主催・協力する各種セミナーや合同企業説明会、履歴書・エントリーシートの作成、一部の企業等では選考結果まで通知されるポータルサイトの利用と、最初から最後まで就

活産業の支配下にあるといっても過言ではない。

就活産業と大学は持ちつ持たれつの関係、という事実そのものを否定できないのが大学人としての苦しい立場ではあるが、ここは敢えて声を大にして言いたい。「就活の忙しさ」の原因は、「就活産業の学生に対する煽り」なのではないか。これが筆者の偽らざる意見である。

※本節は『学習院大学人文科学研究所報2011年度版』からの転載です。

共同研究プロジェクト概要

人文系学士課程教育における卒業論文がもたらす 学習効果の検証

研究代表者 神田 龍身

研究スタッフ

神田 龍身	学習院大学	文学部	日本語日本文学科	教授
鶴間 和幸	学習院大学	文学部	史学科	教授
小島 和男	学習院大学	文学部	哲学科	准教授
篠田 雅人	学習院大学	人文科学研究所	客員所員	
	学習院女子中・高等科事務室		主事補	
谷村 英洋	研究補助者	立教大学	大学教育開発・支援センター	学術調査員
日下田岳史	研究補助者	東京大学大学院	教育学研究科	博士課程
		日本学術振興会	特別研究員	

本研究プロジェクトの概要

「大学教育の質保証」をめぐる議論の中で、学士課程教育における「『卒業論文・卒業研究』というカリキュラムの存在が教育成果として有効に機能する可能性」を指摘した先行研究に基づき、大学における学問分野と、就職・社会人生活を主とした卒業後の進路との直接的関係性についてほとんど先行研究のない人文系分野における大学教育効果について、本学の文学部および協力校の人文系学科の学生・卒業生を対象に質問紙調査を実施し、「卒業論文」および卒業論文作成のベースとなった「学習経験」が与えた学習成果についての分析を行うとともに、「卒業論文」を必修としている人文系学士課程の教育カリキュラムの有効性を検証することを目的とする。同時に、全国の人文系学部・学科に対して、「卒業論文」に関するカリキュラム調査を行うことにより、最終的には原則として「卒業論文」を必修としている本学文学部の教育カリキュラムの検証を行うためのデータベースも構築する。

本年度の研究活動

第1回研究会 2011年6月8日(水) 18:45~21:30 (人文科学研究所会議室)

本年度がプロジェクト初年度の第1回研究会ということもあり、研究スタッフの自己紹介を行った後、年間の研究計画について議論した。その結果、機関調査については予定通り実施すること、また、学生・卒業生調査については、当面本学文学部のケーススタディに限定することとし、他大学への協力要請はしないという方針が確認され、プロジェクト申請時点での研究計画を変更することとした。結果として、本年度に実施する調査としては、全国国公立大学の人文系学科の学科長を対象にした、卒業論文に関する「機関調査」と、本学文学部学生で卒業論文(卒業研究を含む)を提出した4年生に対する卒業論文を中心とした学習効果検証のための「在学生調査」の2種類の調査を実施することとした。



第1回研究会の様子

日本私立学校振興・共済事業団訪問 2011年7月28日(木) 13:00~14:30

機関調査に必要な私立大学の所在地等の情報について、私学事業団の私学経営情報センターに研究趣旨を説明の上、情報提供を受けた。

第1回作業部会 2011年9月9日(金) 18:30~23:00 (学習院女子中・高等科内)

機関調査の質問項目についての検討を行うとともに、送付先データの準備について確認した。

第2回研究会 2011年10月4日(火) 19:00~20:30 (人文科学研究所会議室)

作業部会による調査票案を基に、機関調査の質問項目の検討を行った。

第2回作業部会 2011年10月20日(木) 19:00~23:00 (学習院女子中・高等科内)

第3回作業部会 2011年11月1日(火) 19:00~23:00 (学習院女子中・高等科内)

機関調査の質問項目について検討を行うとともに、送付先データの準備について確認した。

第3回研究会 2011年11月2日(水) 19:00~20:30 (人文科学研究所会議室)

作業部会による調査票案を基に、機関調査の質問項目の検討を行った。

第4回作業部会 2011年11月16日(水) 19:00~21:30 (学習院女子中・高等科内)

第5回作業部会 2011年11月18日(金) 15:00~20:00 (学習院女子中・高等科内)

完成した機関調査「人文科学系学科の卒業論文についての調査」の発送作業を行った。

第6回作業部会 2011年11月30日(水) 19:30~23:00 (学習院女子中・高等科内)

第7回作業部会 2011年12月5日(月) 19:30~23:00 (学習院女子中・高等科内)

機関調査の回答状況の確認を行った。

第4回研究会 2011年12月7日(水) 19:00~20:30 (人文科学研究所会議室)

機関調査の回収・回答状況の報告を行い、未回答学科に対して再度調査票を送付することを決定した。また、今後予定している在学生調査の質問項目について検討を行った。

第8回作業部会 2011年12月8日(木) 19:00~22:30 (学習院女子中・高等科内)

機関調査の回答状況の確認を行った。

第9回作業部会 2011年12月9日(金) 19:00~21:30 (学習院女子中・高等科内)

機関調査(未回答学科向けの再発送)の発送作業を行った。



発送作業の様子

桜美林大学訪問 2011年12月15日(木) 12:00~14:30

工学系の教育効果について研究を行った矢野眞和教授を訪問し、在校生調査についてアドバイスを受けた。

第10回作業部会 2011年12月28日(水) 15:00~20:00 (学習院女子中・高等科内)

機関調査の回答状況の確認および在学生調査の質問項目について検討を行った。

第11回作業部会 2012年1月14日(土) 14:00~22:00 (学習院女子中・高等科内)

機関調査の回答状況の確認およびコーディング作業を行った。

第5回研究会 2012年1月16日(月) 18:30~21:40 (人文科学研究所会議室)

機関調査の回収・回答状況の報告および在学生調査の質問項目について検討を行った。

本稿執筆時点(2012年1月18日)では、機関調査については実施中、また、在学生調査については未実施であることから、調査結果の集計・報告のため、年度中に2~3回程度の研究会と5回程度の作業部会を予定している。

なお、本格的な分析は次年度以降となるため、この紙面上では調査結果についての詳細は報告できないが、進行中の機関調査について若干触れておきたい。機関調査は、卒業論文のカリキュラム上の位置付け、卒業論文の指導・評価体制等について質問しており、国公立大学については2011年度、私立大学について2010年度の情報に基づき、約1,100学科を調査対象とした。そのうち、500を超える学科から何らかの回答・連絡があり、一部の学科長からは調査報告書の送付を希望する手紙を頂戴する等、予想以上の反応をいただいている。これは、本研究プロジェクトに対する関心が高いことを示していると考えられる。

また、今後実施予定の在学生調査は、卒業論文を中心とした学習経験と就職との関係を質問項目として予定している。

いずれの調査結果についても、今年度中の本格的な分析は困難なため、結果については、次年度以降に予定されている研究会および学会発表等で公表していくこととしたい。

※本節は『学習院大学人文科学研究所報2012年度版』からの転載です。

共同研究プロジェクト概要

人文系学士課程教育における卒業論文がもたらす 学習効果の検証

研究代表者 神田 龍身

研究スタッフ

神田 龍身	学習院大学	文学部	日本語日本文学科	教授
鶴間 和幸	学習院大学	文学部	史学科	教授
小島 和男	学習院大学	文学部	哲学科	准教授
篠田 雅人	学習院大学	人文科学研究所	客員所員	
	学習院女子中・高等科事務室		主事補	
于 莉莉	学習院大学	人文科学研究所	客員所員	
谷村 英洋	研究補助者	立教大学	大学教育開発・支援センター	学術調査員
日下田岳史	研究補助者	日本学術振興会	特別研究員	
		東京大学大学院	教育学研究科	総合教育科学専攻
			比較教育社会学コース	博士課程
中世古貴彦	研究補助者	独立行政法人国立美術館本部事務局	職員	

(国立大学法人東京大学から出向中)

本研究プロジェクトの概要

「大学教育の質保証」をめぐる議論の中で、学士課程教育における「『卒業論文・卒業研究』というカリキュラムの存在が教育成果として有効に機能する可能性」を指摘した先行研究に基づき、大学における学問分野と、就職・社会人生活を主とした卒業後の進路との直接的関係性についてほとんど先行研究のない人文系分野における大学教育効果を検証すべく、本学文学部各学科と協力校の人文系学科の在学生・卒業生を対象に質問紙調査を実施し、「卒業論文」および卒業論文作成のベースとなった「学習経験」が与えた学習成果についての分析を行うとともに、「卒業論文」を必修としている人文系学士課程の教育カリキュラムの有効性を検証することを目的とする。同時に、全国の人文系学部・学科に対して、「卒業論文」に関するカリキュラム調査を行うことにより、最終的には原則として「卒業論文」を必修としている本学文学部の教育カリキュラムの検証を行うためのデータベースも構築する。

本年度の研究活動

第1回研究会 2012年5月10日(木) 19:34~21:04 (学習院戸山キャンパス内)

プロジェクト2年目の第1回研究会ということもあり、新規加入の研究スタッフの自己紹介を行った後、今年度の研究計画の詳細について議論した。具体的には、①6月開催の日本高等教育学会における共同発表(篠田・日下田)の内容確認、②昨年度実施した「機関調査」の補完のため、特徴的な回答のあった複数学科の学科長に対してインタビュー調査を実施すること、③昨年度実施した「在学生調査」については、順次データ分析を行い、今年度半ば頃に発表する機会を設けること、④「卒業生調査」については、当面本学文学部のケーススタディに限定することとし、他大学への協力要請はしないことを前提として今年度中に実施すること、という4点が確認され、今年度分としてのプロジェクト申請時点における研究計画を若干変更することとした。

第1回作業部会 2012年5月30日(水) 19:00~22:00 (学習院戸山キャンパス内)

6月開催の日本高等教育学会における共同発表(篠田・日下田)における発表資料の確認作業を行った。

日本高等教育学会第15回大会でのグループ発表 2012年6月2日(土) 13:00~15:00 (東京大学(本郷キャンパス))

昨年度実施の「機関調査」の分析結果を踏まえ、自由研究発表Ⅱ-3部会「学部教育②」において、「卒業論文の意味付けにみる人文科学系学科の現状—全国学科長調査の結果から—」と題し、篠田・日下田が共同発表を行った。



日本高等教育学会における発表の様子

第2回研究会 2012年6月28日(木) 19:20~21:00 (人文科学研究所会議室)

昨年度実施した「機関調査」補完のための学科長インタビューについては、今秋頃までに3~4学科程度を作業グループが抽出の上、順次実施していくこと、10月30日(火)を候補日として、昨年度実施の「機関調査」「在学生調査」についての研究発表を本学内で開催する方向が確認された。

また、「卒業生調査」の対象者・質問紙の枠組み等についての検討も行った。



第2回研究会の様子

第2回作業部会 2012年7月25日(水) 19:00~22:10 (人文科学研究所会議室)

「機関調査」補完のための学科長インタビュー対象の抽出作業、「在学生調査」の分析の枠組みの検討を行った。

学科長インタビュー① 2012年9月18日(火)・19日(水)

「機関調査」補完のための学科長インタビューとして、西南学院大学文学部英文学科・福岡国際大学国際コミュニケーション学部国際コミュニケーション学科を対象として、篠田・日下田による訪問調査を実施した。



学科長インタビューの様子(左:西南学院大学、右:福岡国際大学)

第3回研究会 2012年9月20日(木) 19:20~22:20 (人文科学研究所会議室)

「機関調査」「在学生調査」に関する研究発表について、10月30日(火)に人文科学研究所講演会として開催することが決定し、当日の進行予定、発表者の分担内容等の確認・検討が行われた。

学科長インタビュー② 2012年10月2日（火）

「機関調査」補完のための学科長インタビューとして、A大学B学部C学科（匿名）を対象として、篠田・日下田による訪問調査を実施した。

第3回作業部会 2012年10月15日（月）19：40～22：55（人文科学研究所会議室）

10月30日（火）開催の人文科学研究所講演会の発表内容について確認・検討が行われた。

学科長インタビュー③ 2012年10月26日（金）

「機関調査」補完のための学科長インタビューとして、京都産業大学外国語学部言語学科を対象として、小島・篠田・日下田による訪問調査を実施した。



学科長インタビューの様子（京都産業大学）

**人文科学研究所講演会「文学部で学んでなんになる!？」 2012年10月30日（火）18：00～20：00
（北2号館10階文学部大会議室）**

25名の参加を得て、「卒業論文の意味づけ—全国学科長調査から—」（篠田・日下田）、「文学部生と卒業論文—学習院大学の場合—」（谷村・中世古）と題した2つの発表を行い、質疑応答・意見交換が行われた（講演会での発表内容については、別頁の「講演会要旨」を参照）。なお、終了後には参加者による懇親会が開催され、活発な意見交換が行われた。



講演会における発表者の様子



講演会における質疑応答の様子

第4回作業部会 2012年11月16日（金）19：30～22：30（人文科学研究所会議室）

第5回作業部会 2013年1月4日（金）17：00～20：45（人文科学研究所会議室）

今年度実施予定の「卒業生調査」の質問項目について検討を行った。

第4回研究会 2012年1月17日（木）19：00～21：00（人文科学研究所会議室）

今年度実施予定の「卒業生調査」について、作業部会による調査票案を基に、質問項目・発送対象者数等の検討を行い、実施概要の決定を行った。また、今年度中に投稿を予定している論文等、来年度の学会発表申し込みについても併せて予定確認を行った。

プロジェクト2年目の大きな柱のひとつは、プロジェクト1年目に実施した「機関調査」「在学生調査」の集計・分析であった。

おそらく日本初実施の悉皆調査となった人文系学科長を対象とした「機関調査」からは、授業科目としての卒業論文は、1990年以降、学生の学力低下や就職活動への影響といった理由から、必修から選択制への移行が進みつつあることが、また、設置者と募集定員に占める推薦入試等定員割合を軸とした分析の結果から、卒業論文そのものの意味が学科類型によって異なることがそれぞれ明らかとなった。さらに、補完として実施した学科長インタビューを通じ、学生のみならず経営面を含めた教育環境の変化や危機感が露わになるとともに、現場の教員による様々な取り組みや涙ぐましい努力が語られ、人文系学士課程教育の今後に対する期待と不安が入り混じった現場の姿が浮き彫りとなった。なお、学科長インタビューについては、プロジェクト3年目にも実施を予定しており、最終的に作成を予定している報告書にその詳細を記す予定である。

一方、「在学生調査」からは、卒業論文への取り組みが卒業時までの成長にプラスの影響を与えていること、また、大学3年までの学習経験は直接的かつ間接的に学生の成長に関わっていることなどが明らかになりつつあり、さらに詳細な分析を続けていく予定である。

プロジェクトのもう一つの大きな柱である「卒業生調査」は、本稿執筆時点（2013年1月12日）では調査票作成の最終段階にあるため未実施であるが、調査結果の集計・報告のため、年度中に研究会と作業部会の開催をそれぞれ予定しており、プロジェクト3年目には「在学生調査」結果との

比較を含め、詳細な集計・分析作業を予定している。

プロジェクト最終年度となる来年度に向け、いずれの調査についても、研究会や学会における発表のみならず、積極的に論文・研究ノート等での投稿を通じて研究成果を公表していく予定としている。また、研究成果報告書そのものの作成も可能な限り最終年度中の完成を目指す。

講演会要旨

文学部で学んでなんになる!?

篠田 雅人

(学習院大学人文科学研究所客員所員)

日下田 岳史

(日本学術振興会特別研究員)

谷村 英洋

(立教大学大学教育開発・支援センター学術調査員)

中世古 貴彦

(独立行政法人国立美術館本部事務局職員)

【紹介記事】

人文科学研究所共同研究プロジェクト「人文系学士課程教育における卒業論文がもたらす学習効果の検証」では、平成23年度から3年間の計画で、大学における学問分野と、就職・社会人生活を主とした卒業後の進路との直接的関係性を取りあげ、ほとんど先行研究のない人文科学系分野における学士課程教育の教育・学習効果について研究を進めている。本講演会では、プロジェクト1年目に実施した、全国の人文科学系学科の学科長を対象とした「人文科学系学科の卒業論文についての調査」(「機関調査」)、学習院大学文学部卒業予定者を対象とした「文学部卒業予定者の学生生活と卒業論文・卒業研究に関する調査」(「在学生調査」)の2つの調査結果の基礎的な分析に基づく報告が行われた。当日は、共同研究スタッフの他に学内者・学外者計25名の参加を得て、興味深い発表と活発な質疑応答が行われた。以下、研究スタッフ4名による発表概要を紹介する。

挨拶：鶴間和幸(学習院大学文学部史学科教授)

司会：小島和男(学習院大学文学部哲学科准教授)



【講演要旨】

卒業論文の意味づけ—全国学科長調査から—

①篠田雅人

「人文科学系学科における設置科目としての卒業論文の現状」と題し、「機関調査」の結果から、卒業論文(卒業研究を含む)の設置状況としては、国公立大学よりも私立大学の方が必修制の割合が低いこと、また、卒業論文の単位数に見る限りにおいては、国公立大学に比べ、私立大学の方が必修・選択制のいずれの場合であっても単位数が少ない傾向があり、教育カリキュラムにおける卒業論文の比重が国立大学よりも私立大学の方が軽いと考えられること、さらに、1990年以降、学生の学力低下や就職活動への影響といった理由から、必修から選択制への移行が進みつつあることが報告された。

②日下田岳史

「設置者と推薦入試等割合にみる人文科学系学科の卒業論文の意味の探索」と題し、設置者と募集定員に占める推薦入試等定員割合を軸として、「論理的な文章構成」に着目した分析を行った。その結果、次のようなことが明らかとなった。第一に、国公立大学は、私立大学と共通する課題を抱えていることも確かだが、卒論を研究に関連付けた回答が特徴的である。第二に、私立大学で推薦等の割合が低い学科は、卒



論を重視する意見が多い一方、卒論選択制を模索する動きや危機感がある。第三に、私立大学で推薦等の割合が高い学科は、基本的な日本語力に関する課題に対する指摘が特徴的である。このように、卒業論文そのものの意味が学科類型によって異なることが報告された。

文学部生と卒業論文—学習院大学の場合—

③谷村英洋

「卒論執筆の成果とそれを支える大学での学習」と題し、学習院大学文学部4年生を対象とした「在学生調査」の基礎的な分析から、卒論に熱心に取り組むことは、大学入学後の卒論執筆以前の学習経験を考慮しても、知識、技能(書く)、視野の広がり、批判力等における卒業時までの成長にプラスの影響を与えていること、つまり卒論執筆以前の学習に積極的だった学生にとっても、消極的だった学生にとっても、卒論執筆が最後の重要な成長機会になっていることが報告された。また、卒論執筆以前の学習が、卒業時までの成長を直接的かつ間接的(卒論が媒介する)に促していることも報告され、卒論執筆開始の前と後、両方の学習を向上させる必要性が指摘された。

④中世古貴彦

卒論執筆による独自の学習成果があるとすれば、大学入学前に積極的に身に付けた学習態度や、授業への取り組み姿勢といった変数を統制してもなお学びの成果を実感しているはずであるという仮説に基づき、「在学生調査」データを分析した。学びの成果を知識・能力の獲得という変数で定義した場合、入学までの学習姿勢、予習・復習を含む授業への意欲、卒論・卒研に対する意識の全てが直接的・間接的に知識・能力の向上に寄与するが、その中でも特に卒論・卒研に対する意識による効果大きいという分析結果が報告された。

※本節は『学習院大学人文科学研究所報2013年度版』からの転載です。

共同研究プロジェクト概要

共同研究プロジェクト概要

人文系学士課程教育における卒業論文がもたらす 学習効果の検証

研究代表者 神田 龍身

研究スタッフ

〈所員〉

神田 龍身 学習院大学文学部日本語日本文学科教授
鶴間 和幸 学習院大学文学部史学科教授
小島 和男 学習院大学文学部哲学科准教授

〈客員所員〉

篠田 雅人 学習院大学人文科学研究所客員所員
学習院女子中・高等科事務室主事補
于 莉莉 学習院大学人文科学研究所客員所員

〈研究補助者〉

谷村 英洋 立教大学大学教育開発・支援センター学術調査員
日下田 岳史 日本学術振興会特別研究員
東京大学大学院教育学研究科総合教育科学専攻比較教育社会学コース博士課程
中世古貴彦 独立行政法人国立美術館本部事務局職員

研究の目的および意義

「大学教育の質保証」をめぐる議論の中で、学士課程教育における「卒業論文・卒業研究」というカリキュラムの存在が教育成果として有効に機能する可能性を指摘した先行研究に基づき、大学における学問分野と、就職・社会人生活を主とした卒業後の進路との直接的関係性についてほとんど先行研究のない人文系分野における大学教育効果について、本学文学部各学科の在学生・卒業生を対象に質問紙調査を実施し、「卒業論文」および卒業論文作成のベースとなった「学習経験」が与えた学習成果についての分析を行うとともに、「卒業論文」を必修としている人文系学士課程の教育カリキュラムの有効性を検証することを目的とする。同時に、全国の人文系学部・学科に対して、「卒業論文」に関するカリキュラム調査を行うことにより、最終的には原則として「卒業論文」を必修としている本学文学部の教育カリキュラムの検証を行うためのデータベースも構築する。

研究活動記録

第1回研究会 2013年4月19日(金) 19:20~21:00 (人文科学研究所会議室)

プロジェクト最終年度の第1回研究会ということもあり、今年度の研究計画の詳細について議論した。具体的には、①5月開催の日本高等教育学会における発表(中世古)の内容確認、②昨年度実施した「機関調査」の補完のため、特徴的な回答のあった複数学科の学科長に対してインタビュー調査を実施すること、③昨年度実施した「卒業生調査」のデータクリーニング状況の確認、④「卒業生調査」については、順次データ分析を行い、今年度後半以降に発表する機会を設けること、⑤投稿論文等の進捗・審査状況の5点が確認された。

第1回作業部会 2013年5月18日(土) 15:30~18:20 (北2号館10階文学部新中会議室)

5月開催の日本高等教育学会における発表(中世古)における発表資料の確認作業、「卒業生調査」の分析状況の確認を行った。

日本高等教育学会第16回大会でのグループ発表 2013年5月26日(日) 9:30~12:00 (広島大学(東広島キャンパス))

昨年度実施の「機関調査」の分析結果を踏まえ、自由研究発表Ⅲ-1部会「大学生Ⅱ」において、「人文科学系学科の卒業論文と学習成果-A 文学部における事例研究-I」と題し、中世古を代表報告者とした共同発表を行った。



日本高等教育学会における発表の様子

第2回研究会 2013年6月24日(月) 19:30~22:00 (人文科学研究所会議室)

①初年度に実施した「機関調査」補完のための学科長インタビューについては、今秋頃までに2~3学科程度を作業グループが抽出の上、順次実施していくこと、②プロジェクト申請時点で計画していた「1年目を実施した在学生調査回答者のうち、賛同者に対する追跡調査」については、計画を変更し、今年度中の実施を見送ること、③当初今年度中に完成を予定していた研究成果報告書については、平成26年度の人文叢書として刊行することとし、必要な予算申請を行うこと、④「卒業生調査」を中心とした研究成果について、11~12月に人文科学研究所講演会として開催すること、⑤来年度の科研費申請についての5点が確認された。また、「卒業生調査」の分析状況および投稿論文等の進捗・審査状況の報告がなされた。

第3回研究会 2013年7月23日（火）19：35～22：05（人文科学研究所会議室）

研究成果報告としての人文科学研究所講演会は、前年度から継続した内容であることをアピールするため、タイトルを「文学部で学んでどうなった！？（仮題）」とし、12月3日（火）を開催候補日として検討していること、当日の内容については、予定どおり「卒業生調査」を中心とするこの確認がなされた。また、来年度の科研費の申請内容について検討を行った。

第2回作業部会 2013年8月2日（金）19：25～22：45（東京大学教育学部内）

「卒業生調査」の自由記述分析を実施した。

第3回作業部会 2013年8月29日（木）14：20～18：00（人文科学研究所会議室）

12月3日（火）開催予定の人文科学研究所講演会のタイトル・内容および来年度の科研費の申請内容について検討を行った。また、「卒業生調査」の分析状況が報告された。

第4回研究会 2013年9月19日（木）12：15～12：44（人文科学研究所会議室）

人文科学研究所講演会の開催日が12月3日（火）から12月17日（火）に変更となったこと、タイトルを「文学部で学んでどうなった！？」で正式に決定すること、文学部教育学科の佐藤学教授にコメンテーターを依頼することが確認された。また、来年度の科研費の申請内容、人文叢書をはじめとする刊行物について検討を行った。

第4回作業部会 2013年9月30日（月）20：45～22：30（東京大学教育学部内）

投稿論文等の打ち合わせを実施した。

第5回作業部会 2013年10月16日（水）19：15～21：50（人文科学研究所会議室）

来年度の科研費の申請内容について検討を行った。

学科長インタビュー① 2013年10月25日（金）

初年度に実施した「機関調査」補完のための学科長インタビューとして、藤女子大学文化総合学科を対象として、篠田・日下田による訪問調査を実施した。



学科長インタビューの様子（藤女子大学）

第6回作業部会 2013年11月5日(火) 19:30~21:55 (人文科学研究所会議室)

12月17日(火)開催の人文科学研究所講演会当日の進行予定、発表者の分担内容等の確認・検討が行われた。また、来年度の科研費の申請内容についての最終確認を行った。

第7回作業部会 2013年11月28日(木) 20:20~23:20 (東京大学教育学部内)

投稿論文等の打ち合わせを実施した。

第8回作業部会 2013年12月9日(月) 19:30~22:20 (人文科学研究所会議室)

12月17日(火)開催の人文科学研究所講演会当日の進行予定、配付資料等の確認・検討が行われた。

人文科学研究所講演会「文学部で学んでどうなった!？」

2013年12月17日(火) 18:00~20:00 (北2号館10階文学部大会議室)

16名の参加を得て、「学生と教員の意識差にみる文学部教育のズレ」(篠田)、「卒業論文執筆経験の効果の推定」(日下田)、「文学部における学習の経済的効用」(中世古)、「文学部卒業生の社会関与の意識と行動」(谷村)と題した4つの発表を行い、質疑応答・意見交換が行われた(講演会の具体的内容については、別頁の「講演の要旨」を参照)。なお、終了後には参加者による懇親会が開催され、活発な意見交換が行われた。





講演会の様子

研究成果

プロジェクト最終年となった今年度は、2年目に実施した「卒業生調査」のデータ分析と、1年目に実施した「機関調査（学科長調査）」・「在学生調査」の分析結果の公表に注力した。一方、1年目に実施した「機関調査（学科長調査）」の結果に基づく学科長インタビュー調査は、インタビュー先との日時調整や、研究スタッフの本務スケジュールとの関係もあり、現在も継続して実施している状況である。なお、今年度中に、さらに1～2学科の学科長インタビュー調査の実施、「卒業生調査」の単純集計表のWeb上での公表、研究成果報告書としての人文叢書の来年度刊行に向けた2～3回程度の研究会・作業部会の開催を予定している。

プロジェクトそのものは今年度で終了となるが、「在学生調査」の分析結果の一部については、本稿執筆時点（2014年1月8日）で既に2本の投稿論文が採択あるいは採択決定となっており、我が国の高等教育研究者が本プロジェクトによる研究内容を高く評価しているものと考えている。また、「機関調査（学科長調査）」についても、分析結果の一部については既に研究論文としてまとめられており、本稿執筆時点で審査中のものがある。なお、「卒業生調査」については、今年度実施の人文科学研究所講演会でその一部を公表しただけに留まっており、来年度以降にさらなる分析結果の報告を学会発表・研究論文等により行う予定である。

これまで実施してきた3つの調査では、いずれも「卒業論文」の位置付け・意味付けを重視した調査設計を採用した。これは、人文系学科で教鞭を執る教員にとって、卒業論文を学士課程教育の集大成として見なそうとする強い信念があること、また、先行研究でも同様の傾向が確認できたことを鑑みた結果である。その結果、一部の研究者からは、卒業論文偏重主義的な研究に陥る危険性がある、という指摘を受けたこともある。確かに、調査設計が本研究の限界を示すとも言えるが、少なくとも、ユニバーサル段階に達した大学、特に人文系学科にとっては、「教育の質保証」を検討・検証するための貴重なデータとなったことは間違いない。これらのデータ取得にあたっては、研究計画の承認と原資となる研究費がなければ容易ではなく、その意味において、学習院大学人文科学研究所・文学部の多大なる支援に厚く御礼申し上げます。また、実際に調査に回答いただいた全国の人文系学科長、学習院大学文学部4年生・卒業生、卒業生の情報提供に協力いただいた学習院校友会（卒業生団体）にもこの場を借りて感謝の意を述べさせていただきます。

なお、3つの調査結果については、今後さらに詳細な分析を行うことにより、学会発表、研究論文の執筆・投稿、刊行物等を通じ、研究成果としての公表を可能な限り行っていく所存である。特に、来年度の刊行が決定している人文叢書については、単なる研究成果報告書に留まることのないよう努力したいと考えている。

講演会要旨

文学部で学んでどう なった!?

篠田 雅 人

(学習院大学人文科学研究所客員所員)

日下田 岳 史

(日本学術振興会特別研究員)

谷 村 英 洋

(立教大学大学教育開発・支援センター学術調査員)

中世古 貴 彦

(独立行政法人国立美術館本部事務局職員)

コメンテーター: 佐 藤 学

(学習院大学文学部教育学科教授)



【講演要旨】

①「学生と教員の意識差にみる文学部教育のズレ」(篠田雅人)

文学部教育の集大成といわれる「卒業論文」を執筆した側(在学生・卒業生)と、その学習成果を期待(評価で重視)する側(教員)の意識差について、前述の3つの調査の中で共通する質問項目を用いて紹介しながら、その「差」を縮めていくことが人文系学士課程教育に求められていると考えられる一方、実社会ではあまり役に立たないと思われがちな人文系の学問の意義、教育・学習成果は、むしろ実社会に出てからより強く実感できるものだという卒業生のコメントが多かったこともまた、人文系の教育の質を考えるための重要な視座と考えられることが報告された。なお、コメンテーターから、現在の学生は、直接的効用を求める傾向が強くなっているがゆえに、大学で学んだことが社会で生かせないと意識しがちだが、「大学教育が実際には機能している」ことが明らかにできるような問い方の工夫も必要だというコメントをいただいた。

②「卒業論文執筆経験の効果の推定」

(日下田岳史)

「卒業生調査」に基づき、主観的に評価され

【紹介記事】

人文科学研究所共同研究プロジェクト「人文系学士課程教育における卒業論文がもたらす学習効果の検証」では、平成23年度から3年間の計画で、大学における学問分野と、就職・社会人生活を主とした卒業後の進路との直接的関係性についてほとんど先行研究のない人文科学系分野の学士課程教育における教育・学習効果について研究を進めている。本講演会では、プロジェクト2年目に実施した、学習院大学文学部卒業生(1998年度～2004年度)を対象とした「学習院大学文学部での学びと卒業後の生活・意識等に関する調査」(「卒業生調査」)の調査結果を中心とした(一部はプロジェクト1年目に実施した、「機関調査(全国学科長調査)」、「在学生調査」の結果も活用)基礎的な分析に基づく報告が行われた。当日は、共同研究スタッフ・コメンテーターを含め、計16名の参加を得て、興味深い発表と活発な質疑応答が行われた。以下、研究スタッフ4名による発表概要と、コメンテーターによるコメントを紹介する。

挨拶：鶴間和幸(学習院大学文学部史学科教授)

司会：小島和男(学習院大学文学部哲学科准教授)

た各評価指標に対する卒業論文執筆経験の効果
を推計した。推計には操作変数法を用いて、観
察されない要因の影響が考慮された厳密な意味
での効果を抽出することができた。その結果、
(1) 卒業論文を執筆したことは、大学時代に身
につけた専門知識に関する主観的な評価および
私生活上の「専門教育の役立ち感」に対して直
接の効果を持つこと、(2) 観察されない要因を
考慮しない場合、卒業論文を執筆したことは、
期待される方向から逆回りの効果を持つとい
う見かけの結果に誘導されるおそれがあること
等が明らかとなった。評者から、厳密な意味
での効果推計が重要である等のコメントを
いただいた。

③「文学部における学習の経済的効用」

(中世古貴彦)

「卒業生調査」の分析に基づき、在学時の学
習が労働を通じた成果に間接に寄与している
ことが報告された。具体的には、職業によっ
て若干違いがあるものの、卒業時の知識・能
力が高い者ほど、本人の年収や仕事上の成果
を上げる効果のある現在の知識・能力が高
いと自己評価しており、一見職業的レリバン
スの低そうな文学部での学びが、職業生活に
おける成功に少なからぬプラスの間接効果
を持つことが明らかにされた。コメンテーター
からは、在学時の学習が間接的にサイキッ
クリワード（達成による心理的・精神的報酬）
を高めていることがよく示されており、大
学における学びの重要性を意義づける貴重
な知見であるとのコメントを得た。

④「文学部卒業生の社会関与の意識と行動」

(谷村英洋)

「卒業生調査」を用い、学習院大学文学部
での学習経験と卒業後の関連性について、
経済的な側面以外に着目した分析を行った。
その結果、在学中の成長の一部が現在の社
会関与と関連しているものの、男性よりも
女性の方がより多くの項目で関連してい
ること、また、専門分野以外の知識と人
間探求力の成長感が、男女ともに社会関
与意識と有意な関連をもつことが明らか
にされた。コメンテーターからは、専門教
育か教養教育という区分ではなく、専門性
を生かした教養教育という、従来のリベ
ラルアーツとは異なる教養観が現在の大
学教育に求められていることを象徴する
分析結果であり、その教養観を教える側
が強く認識すべきだろうとのコメント
を得た。



おわりに

学習院大学人文科学研究所共同研究プロジェクト

「人文系学士課程教育における卒業論文がもたらす学習効果の検証」

鶴間 和幸

学習院大学の文学部は、基本的には卒業論文が必修となっている。カリキュラムとして卒業論文を必修としているのは、教員の感覚として、卒業論文の執筆を通して得ることのできる学習成果が非常に大きいと確信しているからである。実際に、卒業生が毎年のように残していく言葉から判断しても、卒業論文の執筆経験やその出来具合が、大学教育に対する満足度の大きな部分を占めているように感じる。一方、本研究プロジェクトを始めるまで、実際にその成果を数値で検証してみようなどということを考えたこともなかった。その意味においては、本研究プロジェクトは、学習院大学文学部としては、相当にチャレンジングな取り組みであったと思う。

さて、実際に研究を進めるにあたって、質問紙調査の内容の検討会を数回行ったが、その議論の中で質問項目に入れて欲しいと提案したのが、指導する教員の負担感に関するものと、卒業論文を手書きで書かせている学科はあるか、という2点であった。前者については、俗に言う学生の学力低下に対応するカリキュラムや指導の実態を知りたかったということ、後者については、自らが所属する学習院大学文学部史学科の卒業論文は手書き必須であり、だからこそ卒業生の満足度も高いのではないかと一教員として期待していたこと、がその理由であった。

卒業論文指導の困難さについては、学科長調査の実施前の段階でもある程度は想像していた。が、回答内容を見ると、人文系学科の教育の集大成でもある卒業論文をカリキュラムとして維持すべきだと考えてはいるものの、学生の学力低下による影響だけでなく、各種学内業務に忙殺されていることもあり、どうしても授業時間外での指導が必要となる論文指導の負荷が大きい、という教員の負担感や、就職活動の長期化により、学生が指導を受けに来ることができないため、論文指導の機会そのものが激減してしまった結果として要求水準に達しない、あるいは、学生の就職先が決定しているため、仕方なく単位を与えてしまっている、といった生々しい現実についての報告は想像を超えるものがあった。一方、手書きの卒業論文が必須という点についても、まさか本学史学科の他にないだろうと思っていたところ、他に1学科存在することが判明した。驚きであった。

学部卒業生の大半が卒業直後に就職する日本において、特に人文系学科の卒業生にとっては、大学時代の学びと職業とのレリバンスは非常に弱いという現実は否定できない。だからと言って、「文学部は役に立たない」という評価はあたらない。それは、先行研究の確認や一次データの利用、適切な引用といった経験は仕事上のスキルとして生かされている、論文執筆により養われた論理的思考力や文章力は、企画書をはじめとするビジネス文書作成に役立っている、といった想像しやすい回答に加え、複数の回答があった「育児に役立っている」という回答にも表れている。「育児に役立っている」という言葉は、人類の叡智の蓄積の上に成り立っている人文系の学問が、まさに「人生を豊かにする」ことを立証しており、大学教育の教育・学習成果としてはこれ以上ない究極的な表現ではないだろうか。

付 録

平成23（2011）年11月

全国国公立大学
人文科学系学科長 殿

学習院大学人文科学研究所共同研究プロジェクト
「人文系学士課程教育における卒業論文がもたらす
学習効果の検証」
研究代表者 学習院大学日本語日本文学科教授・
文学部長 神田龍身

「人文科学系学科の卒業論文についての調査」ご協力をお願い

謹啓 皆様におかれましては益々ご清祥のこととお喜び申し上げます。

さて、近年、中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」や、日本学術会議回答による「大学教育の分野別質保証の在り方について」等、「大学教育の質保証」についての議論が様々に行われております。特に、学士課程教育については、工学をはじめとする理工系学科については、その教育カリキュラムと卒業後の進路とのレリバンスが先行研究によって明らかにされつつありますが、人文科学系学科においては、明確な研究成果がない状態にあります。

そこで、平成23（2011）年度から開始された学習院大学人文科学研究所の共同研究プロジェクト「人文系学士課程教育における卒業論文がもたらす学習効果の検証」（研究代表者：学習院大学日本語日本文学科教授・文学部長 神田龍身）において、「卒業論文・卒業研究」を中心とした人文科学系学科の教育・学習効果について研究することとなりました。

その一環といたしまして、人文科学系学科における卒業論文（卒業研究を含む）の設置状況や指導のあり方の実態を明らかにするとともに、これからの人文科学系学科における学士課程教育のあり方を検討すべく、学科長の皆様に調査票をお送りさせていただいた次第です。対象学科につきましては、文部科学省による学校基本調査の学科系統分類表から抽出させていただきました。

なお、回答は全て統計的に処理され、貴学科に係る情報が他の目的で使用されることはありませんが、学術的な観点から調査結果の一部が公表されますことをご了承いただきまして、何卒本調査にご協力いただきますようお願い申し上げます。

ご多用中のところ大変恐縮ではございますが、本共同研究プロジェクトの趣旨をご理解いただき、同封の返信用封筒をお使いいただきまして、**平成23（2011）年12月5日頃まで**にご回答いただきますよう重ねてお願い申し上げます。

末筆ながら、皆様の益々のご発展をお祈り申し上げます。

謹言

本調査についてのお問い合わせ先

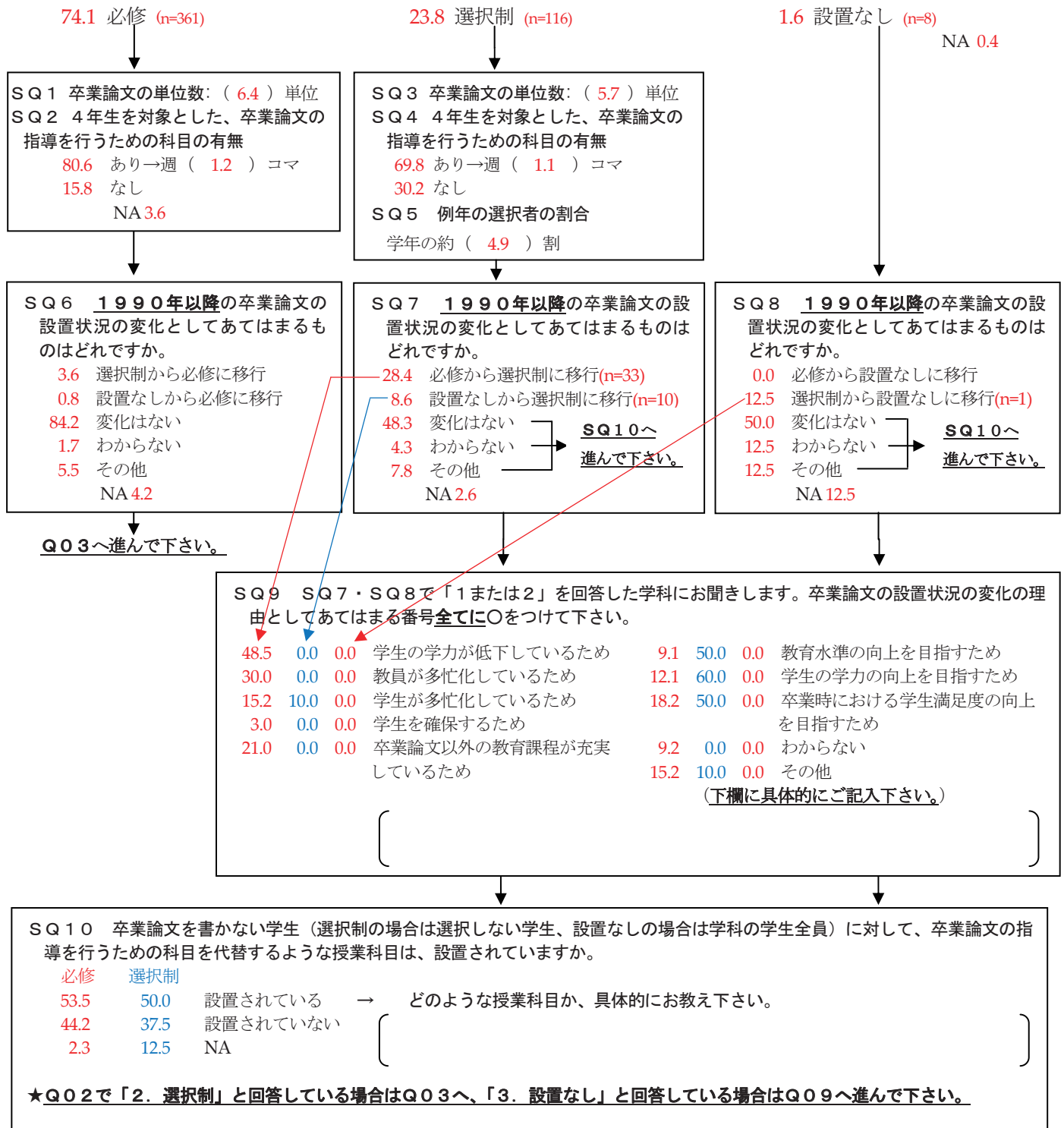
〒171-8588

東京都豊島区目白1-5-1 学習院大学人文科学研究所
客員所員 篠田 雅人

E-mail:masato.shinoda@gakushuin.ac.jp

●貴学科の「卒業論文」の基本的なことからについてお聞きします。本調査における「卒業論文」とは、「学部4年次学生が、学修成果の評価を受けるために提出する論文」のことを指します。貴学科が、本調査の「卒業論文」と同等の論文の執筆を学生に課している場合、「卒業研究」等のように名称が異なっても、「卒業論文」と同じものとしてお答え下さい。

Q02 卒業論文の設置状況についてあてはまるものはどれですか。あてはまる番号に○をつけて下さい。なお、「1. 必修」は、卒業論文が学科の学生全員の卒業要件になっている場合をさします。また、() 内には数字を記入して下さい。



2年生 1.5
 3年生 4～9月 23.6
 3年生 10～3月 22.5
 4年生 4月 43.0
 4年生 5月以降 4.2
 NA 5.2

Q03 卒業論文に係る諸規定について、以下のことをお聞きします。

- A. 卒業論文の指導が始まる学年および時期 () 年生の () 月頃
 B. 2010年度の提出締切日 () 月 () 日
 C. 分量

12月前半以前 20.5
 12月後半 24.6
 1月前半 28.0
 1月後半 14.8
 2月以降 2.5
 NA 9.4

NA 19.6 【下限】 26.9 規定なし 53.4 規定あり → (16,644) 字以上
 NA 29.4 【上限】 59.9 規定なし 10.6 規定あり → (28,318) 字以下
 NA 58.0 【その他(例えば「原稿用紙100枚程度」等)】 17.5 規定なし 24.4 規定あり → ()

具体的にご記入下さい。

- D. 卒業論文の執筆形式
 0.4 手書きを義務付けている 34.5 パソコンによる執筆を義務付けている
 56.9 手書きでもパソコンによる執筆でもよい 5.3 その他 () NA 1.3
- E. 論文要旨の提出義務
 45.9 義務付けている 48.0 論文要旨の提出制度はない 5.0 その他 () NA 1.0
- F. 卒業論文執筆上、使用を認めている言語
 65.3 規定なし 31.7 規定あり NA 2.9

→ 使用を認めている言語を、選択肢から全て選んでご記入下さい。

【日本人学生の場合】 83.7 日本語 7.2 中国語 3.6 韓国語 46.4 英語 7.2 仏語 6.0 独語 3.0 その他の言語

【外国人学生の場合】 48.2 日本語 3.6 中国語 1.8 韓国語 25.3 英語 3.6 仏語 1.8 独語 1.8 その他の言語

- G. 卒業論文の保管の状況
 49.9 保管している 26.9 保管せず執筆者に返却している 21.3 その他 () NA 1.9

→ Q04へ進んで下さい。

SQ 貴学科が保管している卒業論文を閲覧できる人(あてはまる番号全てに○をつけて下さい。)

80.2 貴学科の学生 46.4 同じ学部の他学科の学生 35.9 他学部の学生 48.0 同じ学部の他学科の教員
 37.5 他学部の教員 9.4 学外者 21.0 その他 ()

●貴学科の卒業論文の指導や評価等についてお聞きします。

Q04 卒業論文の指導について、以下のことをお聞きします。

- A. 4年生を対象に卒業論文の指導を行うための科目の担当教員
 42.0 学科に所属する専任教員全員 46.6 当該学生の指導教員(副査等を含む)のみ
 6.5 卒業論文の指導を行うための科目は設置されていない 4.6 その他 () NA 0.4
- B. 4年生を対象にふだんの指導(科目以外の指導)にあたる教員
 48.4 学科に所属する専任教員全員 43.4 当該学生の指導教員(副査等を含む)のみ
 5.2 その他 () NA 2.9
- C. 貴学科(または学部、大学全体)が作成した、学生向けの卒業論文執筆の手引きの有無
 44.5 ない 52.2 ある → 本調査票ご返送の際に、コピーを添付して頂けたら幸甚です。 NA 0.6
- D. 卒業論文と就職活動との関係
 14.2 卒業論文を優先させる指導方針をとっている 4.2 就職活動を優先させる指導方針をとっている
 67.0 学科としての指導方針はない 13.2 その他 () NA 1.5
- E. 卒業論文の執筆が順調ではない学生に対する支援の有無(行われている支援全てに○をつけて下さい。)
 6.9 大学院生による支援 90.0 指導教員による支援
 25.3 指導教員を含む学科の複数の教員による支援 13.6 学科全体におけるオフィスアワー充実の推進
 19.0 学生の自主性に任せる 3.3 その他 ()
- F. 2007年度の入学人数に対する、2010年度に卒業論文を提出した学生数の比率
 (おおまかで構いませんので、整数でお答え下さい。)(必修 89.0 選択制 45.8)パーセント

Q05 卒業論文の評価体制について、以下のことをお聞きします。

A. 口頭試問を行う教員

16.7 学科に所属する専任教員全員 45.9 当該学生の指導教員（副査等を含む）のみ
 10.9 その他（ ） 10.9 口頭試問は行わない NA 1.5

B. 卒業論文を評価する教員

17.5 学科に所属する専任教員全員 73.9 当該学生の指導教員（副査等を含む）のみ
 7.3 その他（ ） NA 0.8

Q06 貴学科は、卒業論文の評価時に、以下の観点をどれくらい重視していますか。あてはまる番号1つに○をつけて下さい。

	とても重視している	ある程度重視している	あまり重視していない	全く重視していない	NA
A. 問題設定の適切性	44.9	45.7	2.9	0.4	6.1
B. 先行研究のレビュー	27.1	57.4	8.6	0.6	6.3
C. 全体の体裁（引用の仕方、文献表の作り方等）	43.0	48.2	2.1	0.0	6.7
D. 一次データ（原典、史料も含む）の利用	33.6	49.1	9.6	0.6	7.1
E. 独創性	24.2	50.7	17.1	1.3	6.7
F. 論理的な文章構成	47.0	45.1	1.9	0.0	6.1
G. 文章の分かりやすさ	34.2	55.5	3.1	0.0	7.1
H. 論文全体の分量	20.0	52.0	20.3	1.5	6.3

●学科長の先生個人のお考え等についてお聞きします。

Q07 貴学科の多くの学生にとって、卒業論文を書くという経験は、どのような意義を持つとお考えですか。あてはまる番号1つに○をつけて下さい。

	とてもあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない	NA
A. 学術論文を書くという体験	40.9	42.0	13.8	1.0	2.3
B. 学問の奥深さに触れる体験	35.9	49.5	11.7	0.4	2.5
C. 専門教育の総仕上げ	56.6	33.8	6.9	0.0	2.7
D. 専門分野の知識の深化	37.2	51.8	8.4	0.0	2.7
E. 困難なことを最後までやり遂げる経験	68.9	26.1	2.5	0.0	2.5
F. 自分の主張を分かりやすく伝える方法を学ぶ経験	58.2	34.4	4.8	0.0	2.5
G. 主体的な学習態度の涵養	66.0	27.8	3.8	0.2	2.3

Q08 ご自身が学士課程在籍時に受けた卒業論文の指導は、現在振り返ってみて、ご自身が貴学科で行ってこられた卒業論文の指導に、役に立っていますか。あてはまる番号1つに○をつけて下さい。

28.0 役に立っている 32.8 やや役に立っている 26.7 あまり役に立っていない 6.9 全く役に立っていない
 3.1 経験していない NA 2.5

Q09 ご自身が学部を卒業されたのはいつですか。（ ）内に数字をご記入下さい。西暦（ ）年
 50-59年 0.4 60-69年 9.4 70-79年 45.8 80-89年 33.5 90-99年 4.7 2000年以降 0.8 NA 5.3

Q10 人文科学系学科の学士課程教育における、卒業論文の現状や今後のあり方等について、差し支えなければ、ご自身の意見を自由にお書き下さい。

●質問はこれで終わりです。ご協力いただき、ありがとうございました。

付録 3

学科長インタビュー調査①

(2012年9月18日実施)

西南学院大学 文学部 英文学科 学科主任 金子 幸男 教授
インタビューアー 篠田 雅人 (学習院大学人文科学研究所客員所員)
日下田 岳史 (東京大学大学院教育学研究科博士課程)

調査者 最初に、英文学科の歴史や、カリキュラム、学生さんの特徴をお聞かせください。

回答者 学生の特徴から先に行きます。おとなしいです。

調査者 おとなしい。

回答者 まじめに聞きます。しかし、自発性は少ないです。言わないとやってこない、読書量は少ないです。最近の傾向として目立ってきたのが、例えばゼミとか、予習をしないで出てきても平気な学生が多くなってきています。昔はしてこなくてすみません、みたいな顔が見えましたが、最近は堂々としている感じです。でも、単位を与えないと言うとか、実際に落とさないと次回やってこないような状況です。

調査者 なるほど。

回答者 英文学科ですが、文学に関心があって入ってくるのはごくごく少数で、英語が好きだからとか、実用的な英語の面に関心があって入ってくる学生が多いです。もしくは、英語の教員免許が取れるのが文学部の英文学科ともう一つ、実用的なところをやっている外国語学科の英語専攻があります。その二つしかないのだからこちらに来たとか、もう一つの選択肢として国際文化学部国際文化学科がありますが、社会系の教員免許は取れますが、英語の免許は取れません。ですから、迷ったけれども、英語の免許を取れるこちらに来たとか、こちらが英語の免許も取れるようになると、向こう(国際文化学部国際文化学科)のほうに流れる可能性もあります。多彩な文化を並べていて、メニューが豊富なので、こちらに比べると、文学だけではなく、視覚文化その他切り口が多いので、学生を取られる可能性はあります。

調査者 もともと国際文化学科は文学部の一学科だったわけですね。

回答者 それが独立して出て、自分の所帯を構えたような感じです。ですから、後に残された文学部は、文学部といっても、ほとんど哲・史・文の体を成していなくて、要するに文学部の中に英文学科(定員100名)と外国語学科があるような感じで、後者の下にフランス語専攻(定員50名)、英語専攻(定員100名)があります。英語専攻では、実用的な英語の上に、コミュニケーション学とか、英語学・英語教育学とか、あるいはビジネス英語といったところがカリキュラムとして入っています。それに対して、文学部の下にもう一つあるのが、英文学科です。

だから、1学部2学科ですが、英文学科の下に別に何々専攻があるわけではありません。そこでは、英米を中心とした文学・文化をやるという感じです。普通の大学で言えば、英文学科の中に、今言った英語専攻と英文学科が一緒に入っていて、一つの英文学科を構成しているのが従来型だと思いますが、20年以上前だと思いますが、正確な年代はわかりませんが早い段階で分かれました。今では英語専攻が一番レベルが高いと思います。

調査者 入試による選抜性の高さということですか？

回答者 そうです。入試における人気も高いです。いろいろな入試を見ても配点が違うので比べられませんが、一時期、うちも含めてほかの学部と（大学入試）センター試験で差があるのがわかりました。突出して英語専攻受験者のセンター試験の点数が高いなどは感じました。

カリキュラム的に言うと、文学部はもともと文学しかやっていなかったのが、文化的な要素をどんどん入れてきています。そして、実用的な部分をどんどん入れていく流れでこの2、30年来たのではないかと思います。

（カリキュラム表を見ながら）これは、4年、5年ぐらい前に新しいカリキュラムに移行して、やっとワンサイクル終わったところですが、新しいカリキュラムにおいて初めて卒論を必修からはずして、選択にしました。そこにおいて、文学だけではというので文化を入れて、さらにいろいろな実用的なものを入れてきたこれまでの流れを踏まえて、こういう履修モデルを作りました。

理念系みたいなもので、このとおりにはいかないと思いますが、従来型の英米文学・文化型と、キャリアイングリッシュ型とって、またすぐ後で科目を説明します。それと、学際教養型です。これを可能にするために、それまで英米文学・文化の専攻科目を、合計で86単位以上は修得しなければならなかったのですが、それを16単位削って、70単位ぐらいまで専攻科目は取ればよいということにして、16単位をキャリアイングリッシュとか学際教養型の科目を取れるようにして、縛りを緩くしました。これはいろいろアンケートを採った結果を反映させたものです。多様な関心を持った学生になっているので、それに応じたものにしようということ、こういうかたちになりました。

例えば、これ（カリキュラム表）を見るとどういう科目が入っているかがわかると思いますが、専攻科目の中に「基礎科目部門」があります。そこに何とかスキルという名前の科目が複数入っていますが、将来、キャリアイングリッシュ型、英米文学・文化型、学際教養型、どのタイプの学生になるにせよ、英語でやる以上はこれだけはやらなければいけない基礎的なものを全部そろえています。

ただ、一番上にある「英米文学・文化基礎講読」、「基礎演習」は、従来型の英米文学・文化型、キャリアイングリッシュ型、学際教養型、どれに行くにせよ、一応英文学科という看板があるので、ここはきちっと押さえてほしいと思っています。三年次に専攻に移行できるようにするために、また二年次に専門科目が入ってくるからそこに移行しやすくするために、「基礎演習」は入れて、レポートの書き方から何からいろいろな指導をここでやることにしています。

時代の流れに沿って、趨勢で機械を使ったCALL演習みたいなものも入れるようになっていきます（「CALL演習」）。言語教育センターがこの4月に新しく建ったので、いろいろな機械、ビジュアルオーディオ関係などの、授業で使う設備がかなり整備されてきました。

英米文学・文化型で行く人は、従来あった英文学科であれば専攻科目の「英米文学・文化部門」の科目を履修し、「キャリアイングリッシュ部門」の科目は、大体二年、三年、四年で履修しますが、「キャリアスピーキング」、「キャリアライティング」はビジネス英語中心です。ただし、後者の上級クラスではもう少し一般的なエッセイライティングも含めて、アカデミックライティングも教える科目です。そして、両者は三年以上ですから、

アドバンスレベルの科目です。

「キャリアイングリッシュ部門」にはさらに「通訳・翻訳科目」が複数入っていると思いますが、これはうちの目玉の一つになっています。ただ、この程度で通訳者や翻訳者になれるわけではないので、本当のさわりにしかすぎないということをやったうえでやっています。これはキャリア系の科目です。これは二年からやります。これは全員が取れるわけではなく、抽選科目になっています。そして、TOEFL、TOEICに即したセミナーがあります。そして、「コミュニケーション概論」です。これは英語専攻の先生方のお助けを借りてこういうのを入れています。これが「キャリアイングリッシュ部門」で、ここで、例えば「キャリアスピーキング」とか「キャリアライティング」は1回取ってしまえば2回は取れませんが、「アドバンスイングリッシュ」とかは幅広くて、ディスカッション、ディベートから普通の講読から何でもありです。ただ、レベルを高くしているのので、この辺を何科目でも取れば修得単位を増やせます。そうでなくても、一つずつ取ったとしてもかなりの量になります。そうすると、キャリアイングリッシュ型でしっかりとこの辺を固めて卒業したい人は、文学・文化は必要最低限にして、ここを取っていくことになると思います。

「英語学部門」とあるのは、どちらかといえば英語教職に必要なだからある部門です。
調査者 そのようですね。

回答者 「特殊部門」はゼミですから、ゼミに関してはキャリアイングリッシュ型、学際教養型とかではなく、内容としては、英米文学・文化をやることになります。今後もしかすると翻訳とか通訳の人を採用して、そういうゼミを開講する可能性はないわけではありませんが、今のところは考えていません。つまり、東京ならまだしも、そういう学生を育てても就職先がありません。福岡では、仕事がないので、通訳・翻訳だけでは食べていきません。

だから、そういう人（翻訳・通訳専門）を雇ってゼミを開いても、いずれ就職先がないということで人が集まらなくなるだろう、学生が来なくなるだろうということで、この程度のさわりだけをやれば、もしもっとやりたい人は専門学校でやるなり、東京、関西に出てやるなりすればよいという感じです。

「学際教養型」の説明がまだだったと思いますが、関連科目として、これは例えば、「フランスを散策する」というカテゴリーとかいろいろあります。これはフランス語専攻の先生方の授業を取れるようにしています。そして、「ヨーロッパに触れる」とか、「アメリカを考える」、「アジアと日本を知る」、「文化、芸術、言語に親しむ」、「現代社会・世界を捉える」等のカテゴリーに属する科目、その辺りは主に国際文化学科の科目です。一部、「ジャーナリズム」は英語専攻が提供している科目ですが、そういうのを取りに行かせている、時間割が大丈夫なら取りに行っても構わないよというものです。「情報リテラシー」もあります。これは情報関係を中心にやります。

この辺をたくさん取れば、要するに英米だけでは狭いと感じていて、もっといろいろ幅広くやりたい、多様な関心がある学生はそこをやります。あとは共通科目、いわゆる従来の教養科目ですから説明は不要でしょう。こういうのを可能にするために、先ほど言った専攻科目だった英米の科目を86単位は取らなければいけないのを70単位にして減らして、キャリアイングリッシュ部門の科目を取れるようにするし、国際文化が提供している「地

中海文化」など関連科目を取れるようにしています。

キャリア・イングリッシュ部門科目、学際教養型科目（関連科目に属する）は四年まで継続してやらないと意味がありません。もし四年で卒業論文が入ってくると、かなりの負担になります。しかも、書かせるテーマは英米文学・文化で決まっていますからね。

せっかくキャリアイングリッシュとか学際教養型とかの二つのタイプを持ってきたのに卒論を従来のままの必修にしておくで、結局四年生になって少し自由な時間が生じたときに、好きなものが取れない可能性が高くなるので、卒論を選択にする可能性を考えました。そして、卒論を選択にすれば、卒論を書かない学生はゼミ論を書くことが義務になりますが、普通の卒論の字数の半分で済みます。うちは、基本的に日本語で書かせて、特に派遣留学とかに行った学生には英語で書かせるのが原則です。

ですので、そういう卒論の負担を減らすことによって、ほかの好きなものを取れるようにしてあげることと、学生が従来の卒論の長さのものを書けるレベルの者が少なくなってきてレベルが低下しているので、無理にそこまでやらせなくてもいいのではないかと、という考えです。本来であれば、卒論で見たい論理的思考力とか、いろいろなりサーチ力とか、そういったものを卒論の半分の長さの「ゼミ論」として書かせればいいわけです。4年生必修の「演習II」に、「ゼミ論」が付属しています。

調査者 「演習II」ですね。

回答者 つまり、卒論を書かない人間は、「演習II」で必ずゼミ論を書きます。卒論を書いたら、「演習II」のゼミ論は免除するというのをしました。ゼミ論でも十分、従来の卒論に必要な能力は養えるだろう、見られるだろう、先ほど言ったように負担が軽くなれば、ほかのキャリアイングリッシュ型か学際教養型で卒業したい学生はそちらで行けるだろうということです。

実際に学生のレベルも下がってしまっているんで、半分の長さにして、もう少し質の高いものを書かせたほうがいいだろうという配慮もあります。

調査者 2008年から新カリキュラムを始めるまでに、学科ではどのくらいの期間カリキュラム改革の検討をしましたか。

回答者 3、4年です。

調査者 結構かかっていますね。

回答者 かかっています。作っては壊し、作っては壊しですから、10年もつようなものにしてしようと思いましたが、大学は大学でまたいろいろ考えているみたいです。

調査者 そうですか。

回答者 慌ただしくなる可能性は高いです。

調査者 三つの型の学生の割合は？

回答者 それか、まだ追跡調査していません。これからやらなければいけません。ちょうどワンサイクル終わったところなので・・・。

調査者 3月に出た子でちょうど一回りですね。

回答者 一回りです。ですから、3月の子がどういうふうにとったのかを調べてみないといけない時期には来ています。

調査者 感覚的にはどうでしょう。キャリア型あるいは学際教養型のほうにそれなりに行っていたのではないかなというのとは。

回答者 キャリア型は結構人気があったのではないかと思います。学際教養型にどのくらい流れたかは見えにくいというか、他学科提供科目のことなので、うちの学生がどれくらい行っているかというのが伝わってきません。あと、卒論は選択にしても、半分以上には書かせたいという思いの先生も結構いました。実際に蓋を開けて調べてみると、今年は「7対5」でした。つまり、「7」が卒論で、「5」がゼミ論で、卒論を書かなかった学生です。だから、これだったら満足のいく割合ではないかとは思いますが。

私のゼミは、三年生は別ですが、この四年生は私の出し物が悪かったのか、集まりが悪くて、普段は大体15人ですが8名しか来なくて、しかも第一志望が落ちて、第二志望ばかりの学生でした。モチベーションが低いです。1年ちょっとやってみて、レベルの低い子が集まっているから、予習もしてこないのが当たり前になっているし、「そういう学生は、卒論は書かせないよ」と言いました。

結局、8名中2名しか卒論を書かせないことにし、私のほうから指定しました。いわゆる卒論を書くこと自体が特権的なことだと意識させたつもりですが、彼らは予習も何もしてこないのに、「卒論だけは書きたい」と言います。私は、「それはだめだ」と言いました。これまでに「書きたいと言いながら、その日の予習もしてきていない学生には書かせない」とはっきりと言いました。「どう見てもこれまでの積み重ねも何もないようなのにそれは無理だから、ゼミ論だけにしなさい」ということで、2名だけはまあまあしっかりして、1名は優秀でしたし、その2人には書かせることにしました。

調査者 予習をしてこないけれども、卒論を書きたいと。その理由は確認されていますか？

回答者 そこまでは僕も突っ込まなかったですが、何でしょうね。たぶん授業には熱心ではなかったのに、卒論を書かないと他の学生に低く見られるというプライドのなせる業か、卒論4単位という単位数が、2単位ではありませんから、卒業単位として魅力的に映ったのではないのでしょうか。

調査者 彼らは、どんな学生だったのでしょうか？

回答者 雰囲気的にはどちらかというところ、そんなに集中してやるタイプの子ではありません。遊ぶほうが好きな、バイトをしているほうが好きな感じのタイプの子です。

調査者 おとなしい学生で、予習はしてきませんが、授業にはしっかり出る感じのタイプですか。

回答者 四年生になったらつまり、就職活動で出てこなくなっています。前期は半数、3、4名で授業をやったこともありましたが。そういう感じだったので、「就職の説明会だ」という欠席理由をどこまで信じていいのかという感じの日頃の授業態度です。

調査者 なるほど、わかりました。就職活動とか卒業論文やゼミ論の話は、またのちほど改めて伺います。先ほどの話の中には、なかなか学生の指導をしていくのも難しいという趣旨の話も少しあったかと思えます。そういう意味で現在の学科の先生方の学科やカリキュラム、学生に対する思い、雰囲気など、何か特徴的な表現があれば教えてください。

回答者 学科の先生方の雰囲気ですか。どういう状況認識を持っているかというところ、忙しすぎます。これだけ忙しいと、なかなか細かく指導が行き届かないのではないかと、僕は思います。

調査者 忙しいというのは、どういうことでしょうか？

回答者 まず、授業準備に割ける時間が圧倒的に少なくなりました。学習院大学はわかりませんが、うちは15週はきっちり守っています。私は明日、高校へ出張講義に行きますが、公務出張であっても必ず補講はしろということになっています。そのようにしてやる補講は大体出席率は半数、わかりますよね。土曜日に出てきませんよね。

調査者 もともと、土曜日は授業がない日ですか。

回答者 ない日です。土曜日は授業がない日で、第1、第3、第5だったかな。すみません、毎土曜日ではありませんが、大学側は補講日にしていますが、出席率は悪いし、バッティングするから、必修科目を優先的に補講に出るように言っているので、出てきませんね。ほとんど形骸化しているような。来年からは、6限も使うらしいです。

調査者 平日の？

回答者 平日にね。「まだまし」と言いますが、「だけど、みんなバイトに行くよ」と。

調査者 そうですね。

回答者 それは意味がありません。以前は結構いいかげんなようできて、結構プラクティカルに皆さんやっていたと思います。大体、12週から13週やっていて、それでうまく回っていたのではないかという、それをきっちり法令か何かに合わせて15週守らせるようになったときからきしみが生じて、うまく動いていないような、私はそう思います。

大学によっては、事務の方があまりうるさくは言わないとか、いろいろ柔軟に対応してくれるところもありますが、ここはどうもそういう態度を取っていないので、教務部長に柔軟な考え方にしてくれと多くの教員が何度言っても変わりません。

ですので、私は私立大学で連合して、法律自体を変えていくべきではないかと思います。イギリスとかアメリカの制度の一部だけを取ってきて、いいところはまねないのではないのでしょうか。私が在外研究でお世話になった、イギリスのレスター大学だと授業の週は30週ではありません。「10週・10週・5週」（ケンブリッジ大学では、「8・8・4週」）で、5週目はほとんど授業がなくてテストですから、先生方が拘束されるのは20週の授業期間だけです。もちろん、テストとその採点のときは忙しいかもしれませんが、それ以外は入試の作成義務もありません。

そうすると、イギリスではアカデミックないろいろな業績を問われますが、それだけ豊富な研究時間があるわけですから、そのようなアカデミックな面の厳しさは納得がいきます。ところが日本ではそういう英米の制度のよいところは全然まねようとしません。

そうすると、うちだと昔は夏休みは2カ月弱ありましたが、今はお盆前まで試験と採点ですね。お盆から31日までは会議は入りません。この2週間だけが実質的な夏休みです。9月1日から大学院の入試やいろいろな会議が入って、先週の金曜日から（9月半ば過ぎ）、授業が始まったから、夏休みは正味2週間です。それで授業の準備、あるいは先生方も休息を取らないといけないから、新しいところの授業の準備、新学期の授業の準備をいつするのか。確かにうちはサバティカルが充実しているのでそれで十分ではないかという議論もあるかもしれませんが、授業や会議その他公務繁忙の通常の年にこれだけ時間が取れないと問題はあると思います。

卒論は、これまでの、先生方の研究の蓄積がないとだめなので、学生のいろいろなニーズに合わせて、いろいろな作家やら作品、テーマを選ばせるのであれば、こちらがある程度準備しなければいけません、春休みもいろいろ入ってくるから、その蓄積の期間がほ

とんどなくなると言えます。そうすると、あまり多様なテーマを選んでもらっては困る、こちらも指導できない。「同時進行でやれ」といっても、普段も自転車操業でいろいろな授業をやっているという先生が多いですから難しいですね。

調査者 実際に15週問題が主たる多忙化の理由と思いますが、西南学院大学では、週の授業のノルマとして何コマやらなければいけないのでしょうか？

回答者 学部で6コマです。6コマですが、私はそういう不満（多忙化）も聞いているので、たまたまですが、この新しいカリキュラムだと柔軟に組めるところもありました。それで、学部「5.5」コマにまでは持ってきました。ということは、非常勤に任せるところが増えたということです。それでひずみがなきにしもあらずかなという、これは実は、最終的には5コマまで持っていくつもりでした。しかし、さらに非常勤に任せることができるといふ・・・。

少なくとも学部だけの先生ならいいですが、大学院も担当される先生がいるので、大学院の先生の場合には、学部・院の総コマ数を「5」コマにしてしまうと、つまり本当に大学院のコマを入れて「5」コマにしてしまう、あるいは「5.5」コマにしてしまうと、学部のほうにしわ寄せが来ます。その問題があるので、3、4年前までは大学院を持っている英文学科の先生は学部・院の総コマ数が「7」とか「8」とかいう感じでした。コマ数の問題は大きな問題であって、夜間で社会人も取っていることもそれに大きく影響しています。

回答者 この制度の問題についてはもう少し説明しましょう。大学院では最大5コマ持たなければいけません。何かというと、まず、修士用の「特殊研究」というのがあります。これが半期1コマ、修士課程用の通年の「演習」1コマ、博士課程用の通年の「研究指導」1コマ、これで通年2.5コマです。そして、それに社会人が入ってくると、社会人は基本的に夜なので、社会人用に「特殊研究」をもう一つ同じものを組まないといけません。社会人用に同じ「演習」をもう一つ、修士の学生の場合に持ってこないといけません。博士も同じ原理で2倍になりますから、トータルで $2.5 \times 2 =$ 通年「5」コマです。

実は社会人がうまい具合に昼のほうがいいという場合には、昼間の学生と一緒に重ねられるので問題ありませんが、昼間には合わせられないという夜間学生の場合には当然のことですが、夜にやります。すると、同じものを二つ、それが次には修士の上の博士にまで及びます。博士の「研究指導」でももう一つ夜用のを作ります。「研究指導」は「1対1」ではなく授業形態です。だから、卒論指導のように個人指導でやることができません。これも30週です。休めば補講をしろとなるし、そうなるとうどうなりますか。院だけで5、6コマ・・・。

調査者 人によっては、7、8コマというケースもあり得るのですかね。

回答者 今問題になっているのは、私が調べたのは数年前のデータですが、学部と合わせて12コマ持ってられる先生もいましたし、10コマ、11コマも少なからずありました。また学部長で8コマもっておられる方も複数います。うちでは8コマ以上もっている教員が全教員の3割を占めています。授業の質に関わる問題なので、対応を教務部長、大学院学務部長、学部長の先生方をお願いしましたがなかなか動いてもらえません。動いてもらえない理由は、ノルマ以上のコマ数にはすべて、上限なしに超過勤務手当が支給されることにあるでしょう。また、公的な場で発言をするのが私一人なので、教員全体としては現状容認または黙認と受け取られていることもあるでしょう。中には、特殊な領域の科目で非

常勤が簡単にはみつからないというやむを得ない事情もあって持ちコマが多くなる場合もあると聞いています。しかし、本当にそんなに多くのコマを専任が担当しなくてはいけないカリキュラムが必要なのかどうか、学部によ、大学院によ、もっとスリムにできないのかどうかとかいうことは各学部・大学院ともに検討する必要はあるでしょう。事情はどうあれ、あまりに多くのコマ数を教えるとなれば、授業の質に響く問題であり学生が損をするのですから、理由はどうあれ速やかに対応することが望ましいでしょう。

でも、このコマ数問題は、全学の学部と大学院全体の問題ですから、何とも動きが遅くてどうしようもないというか。クリスチャンの学長も、経営判断からだけではなく、心から教員の健康のことを心配されて、毎年のようにカリキュラムのスリム化と、教員一人当たりの担当コマ数を減らすように教員サイドにお願いするのですが、カリキュラムは学部の専権事項ですからなかなか前へ進みません。ですからコマ数の多さは大学当局も認識している各学部・大学院の問題、教員サイドの問題です。あるいは、ひょっとすると私には見えていない日本の大学院制度の問題なのかもしれません。僕が、「国立大学でやっているように学部の三、四年生向けの「研究」と大学院の「特殊研究」を一緒に重ねたらどうか」と言うと、反対する先生がいます。事務サイドもそれは制度的に無理だと言います。他の大学でやっているところがあるにも関わらずです。「修士の「演習」と、博士の「研究指導」は両者とも毎週授業をするのだから、この二つを重ねて、同じ名前ではないけれども同じ一つの授業にしたらどうか」というのも言っていますが、なかなか変わってくれません。一人の受講者しかいない授業を二つするよりは、修士、博士合同の数名の授業にしたほうが効果的だと思うのですが。私の知る大抵の大学院の担当者は1コマ、または多くて2コマでやっているところばかりなので、なぜうちではそれが可能ではないのか不思議です。

そうすると、10コマもやっていて、どうやってほかのところを……。さすがに英文はこれまで「8」コマが最高だったみたいだからそこまでひどくありませんが、「8」コマでも全部教える科目が違うし、「6」、「7」コマは全部専門で違う科目ですから、どうやって授業の質を担保するのかという問題がクローズアップされると思うのですが、大学院が、そんな状況に進んでいるので、どうするつもりなのかと。体を壊している人もばたばたいるし、ある学科専攻の前主任は心筋梗塞で亡くなりました。

調査者 何歳くらいの方でしたか。

回答者 56、7歳です。あれは過労死だと思います。ちょうどあちらのカリキュラム改革と認証評価報告書の作成が重なりました。僕のほうも主任の通常業務だけでも大変なのに、カリキュラム改革の中心者、認証評価報告書の執筆者と三重苦でした。認証評価報告書は、三度ぐらい書き直しさせられて、僕もそれで春休み、夏休みが全部潰れました。というか、授業期間中も1週間、全部休講にするときもあったし、そうでないと間に合いません。つまり、授業をよくするためにとか、大学をよくするためにということで書類を書かせて、本体の授業自体を悪くしている実態を文部科学省はどこまで把握していただけるのか……。ちなみに僕が生き残ったのは、主任一期目の2年間は研究を中止したこと（亡くなられた先生は研究も手抜きをしなかったすごい方）と、ゼミ生にろくな卒論指導をしなかったことにあるでしょう。一種の自己防衛でしたね。でも、あの時のゼミ生は本当に可哀そうだったなと今でも思いますよ。

前に、朝日新聞か何かの連載で、大学の先生が忙しくなり過ぎて、アカデミックな仕事ができなくなりつつあるとあったと言いますが、それはどこからも聞こえてくる問題で、むしろそこを何とか切ってよくしていかないと、この間学会で会ったアメリカのジョージア大学の先生は、5、6、7、8、9月だったかな。6、7、8、9月だったかな。要するに、4か月か5カ月はもう授業はありません。だから、こもって仕事ができるそうです。そういうタームになっています。

ツーターム制かスリーターム制か知りませんが、とにかく授業中は忙しいと。でも、解放されれば長期間にわたり毎年ずっと集中してやるのが保証されているかたちです。

調査者 今の話が出たのでわれわれの本題から少しずれますが、認証評価のために自己点検報告書を書いた、大学全体で500ページを超えるものをわれわれは見てきましたが、ああいう仕事をするときには、ほとんどの部分は先生の仕事になっていますか。職員はあまりやりませんか。

回答者 職員の部分もあります。

調査者 管理部分ですよ。

回答者 そうです。でも、こちらでしかわからない部分はこちらで書くしかないので、学部長が書く場合もあるし、でも学部長は点検のほうが多いです。あとの部分は、学科主任がほとんど書きます。

調査者 内容自体ではなく、「てにをは」も含んだ校正を職員がやってくると、そういうことは職員がやりますか。

回答者 最終的には、それはありました。職員というか部長クラスかもしれません。部長クラスはかなり上級クラスで、そこには職員も交えて、多分、課長クラスも入ったうえでだと思いますが、「てにをは」も、内容チェックも含めて点検したのではないのでしょうか。

調査者 それは最後のほうの段階であって、最初の取っ掛かり、台に載せるまでは先生方が・・・。

回答者 私が、そうです。全部やらないといけませんから、そういう・・・。

調査者 わかりました。もう一つ、前提の話が長くなっていて申し訳ありません。今、学科の話をついで伺いましたが、今度は先生個人の話をお聞かせしてもらいます。こちらの質問紙に答えていただいたのが、学部を卒業したのが1982年ということで、ご自身が受けた卒業論文の指導は、今のところ卒論の指導にはあまり役に立っていないという回答をされています。先生ご自身は学部ではどういうことをしていたのか、その後、今に至るまでの自身の研究の方向性や、何で大学の教員になったのかといったことに関して簡単に伺います。

回答者 学部では、英文学専攻か何かでした。私は京大ですが、国立はどこも同じで、東大の友達も言っていましたが、指導らしい指導はなく、自由放任でした。自由な時間はあから自分の好きな本を好きなように読めるというメリットがありますが、それは昔風なやり方ですね。それと直接の卒論指導というわけではありませんが、今でも役に立っていることを一つ言い忘れました。それは徹底的な作品の面白さ、細部にこだわった英文の読解です。これは学部と院の授業で徹底的にたたきこまれ、修士論文の中間発表会でも先生方のコメントを聞いていて、とことんこだわっている個所だとの印象を持ちました。今、学生に卒論の作品の分析をさせる時もその点に留意した指導をしています。地味な点ですが、とても大切なところです。文学の面白さに関わる根幹部分ですから。要するに、'how'

に関わる卒論指導はありませんでしたが、'why'に関わる指導、これは京大の学風にも関係しますが、そういうものはあったと思います。

もとに戻ります。あとで大学教員として教えるようになってから、学部生・院生の時期にイギリスの学生がどういう指導を受けていたかを知ると、日本の場合は自由度が高いというよさがありますが、'how'を教えない分、あまりにも回り道をさせるシステムではないかと思います。私はあまり勘がよくないから、勘のいい人はいい本をすぐに見つけるでしょうが、東京ではなく京都だと本もなかなかないし、神田などに行くことがありません。そうすると、絶対に読まなければならない本の見分け方、そういう紹介はほとんどありませんでした。

つまり、リーディングリストが英・米の大学では必ず出されるのに、それがありません。授業によっては、1冊、2冊紹介はされますが、英・米で出すリーディングリストは授業ごとに、2、30冊だから、それは必須の知識として頭に入れてしまえということだから、どんなテーマをやるにしろ、そういうところを押さえないで来てしまったというのは、今の卒論の指導をするときに欠けている部分が必ずあるはずなので、少し回り道をさせられているのではないかと。

それと、図書館の使い方の説明会は、英・米ではあります。どこにどういう資料があって、どういうものをどう使えばいいのかも、先生でなくてもいい、ライブラリアンでもいいですが、説明してくれますが、日本の場合は、ライブラリアンにそこまで期待できません。そうすると、図書館をどう使っているのかがわかったのは大学院を修了してからです。

ですので、在外研修で2回行きましたが、ケンブリッジ大学とレスター大学と、そのライブラリアンは全部専門家、Ph.D. ぐらいを持っている人だからものすごい本の知識を持っているので、どんな本を図書館に入れたらいいか先生に聞かなくても、自分で判断できます。書評もよく読んでいるのでしょね。学生から聞かれても、「この本がある」ということで、卒業生でしょね、そういう人たちがものすごい学問レベルを維持するための制度が調っていますね。

うちはこの5、6年、図書館説明会はどんどんやっています。昔に比べると学生は恵まれているはずなのに、問題は学生がその気がないという……。そういう制度を作っても、昔の学生に対して今の制度があれば大変うまくギアがかみ合ったことでしょう。

そういうことで、図書館の使い方もわからなかったし、リーディングリストも与えられなかったし、テーマのいろいろな方向性といったものについてもあまり与えられたこともなかったもので、私みたいに勘の悪い学生はその辺りでかなり遅れを取ったのではないかと思います。勘のいい学生、優秀な学生はそれでもやってしまう人なのだと思います。

でも、英・米の制度では100人中50人以上をあるレベル以上にきちっと育てるとすれば、自由放任な制度のために日本の制度では1人、2人の天才は出るかもしれませんが、あとの98人は全部死に駒になってしまうような、私はそういうイメージで、私の学生時代の制度を考えたりしています。自分自身は今の学生にリーディングリストとかを作って出しますが、残念ながらあまり読んでくれません。強制的に単位と結びつけないと、自発的に読むことはあまり期待できません。

ですので、私が研究の世界に進んだのは、大学院に入るのにも結構悩んだので、間が2年空いてしまいました。結局、普通の企業も考えたり、公務員も考えたり、やってみまし

たがだめだとわかりました。つまり、合わない。合わないというのがわかるために2年もかかって修士に入りました。

地方公務員の試験勉強もしました。あまりにも砂をかむような法律の文章が合わなくて、これはだめだと思ったし、企業も四年生のときには考えましたが、高校とか中学の教員も考えましたが、少し難しいかなと。そして修士に入って、大学への就職が難しくなっている時期だったので、出版とかも考え、博士が通らなかつたら出版関係で行こうかと思ったら、たまたま入れてくれました。それで研究の世界に進んできた感じです。

調査者 先生はもともと、京大という話でしたが、ご出身は？

回答者 神奈川県です。相模原市で生まれました。

調査者 高校までは神奈川ですか。

回答者 そうですね。そして京都に来て・・・。

調査者 京大を出たあと、こちらに赴任されたのですか？

回答者 違います。大阪に一旦赴任して、そこで10年やって、またこちらでもう10年ぐらいになります。

調査者 少し前に入試の話が出たと思います。英語専攻のほうがレベルが高いといった話が出たと思いますが、今の入試の状態についてどのような考えを持っていますか。例えば、一般入試で入る方が7割ぐらいいると思います。私立の大学の中ではかなり高い数値かと思っっています。

回答者 思いますね。

調査者 特に推薦とかA0だと、基礎学力が欠けているとか、巷間でいろいろな評判もありますが、一般入試、A0、いろいろな入試がありますが、その辺りの所見について伺います。

回答者 一般（入試）が7割というのは高いと認識していますが、それを初めて知ったとき驚いたことがあります。5割を推薦で入れる私立大学があるそうですが、それで大丈夫かなと。でも、関東の某有名難関大学はもう開き直って、一般で入ってきた5割で大学の評判を維持すればいい、あとの5割はレベルが低かろうが構わんみたいな態度でいると、私は裏では聞きました。いいかげんなものだと思います。

英文学科では、今3割を推薦で入っていますが、もっと減らしたいぐらいで、リスクが高いです。推薦についてはとにかく、こう言っては申し訳ないのですが事務の方の考えが柔軟でなくて、文部科学省は、「推薦では、試験はやってはいけない」と言っているらしいですがそれを守ろうとします。

でも、それを無視してきちっと実力を見られるような英語の問題を出している大学もありますが、うちの大学は文部科学省が「試験をやっちゃいかん」と言うことを受けてそれに忠実に従おうとするので、英語を読ませて難しい個所を読めているかどうかが見えるような、一般入試に即したような出題形式が取れません。だから、読ませて、大意を要約して、自分の意見を書きなさいという感じです。率直に言って、これだと本当の英語の実力がわかりません。

結局、半々で、推薦入学生半分はきちっと取れたとしても、あとの半分はレベルの低いのが入ってきてしまった。この始末をどうするの？というか、力のない学生を入れてしまって、推薦は、僕は一芸に秀でるとか何とか言いますが、どうかなという思いで、5%ぐ

らい、あるいは10%ぐらいでいいのではないかと。30%は取り過ぎではないかと思えます。ただ大学側は経営がありますから早めに学生を確保したいのですよね。

しかも、高校のほうのからくりを聞いたことがあります。推薦で押してくるような学校の中には一部ではありまじょうが、点数を上げるために試験を一般の学生と別に、推薦だけの学生に易しい試験を受けさせいい成績をあげさせると、そのような学校もある、それを聞きました。

だから、成績はあまり重視せず、僕らは面接のときに高校の成績はざっと参考にする程度です。そうでなくても学校間格差があるのに、中には推薦の人たち用の試験を受けてきた者もいるかもしれないとなると成績はあまり価値を持ちません。そんなのをやってもあまり意味はないでしょう。

調査者 なるほど。

回答者 ですから、評判を上げるために高校とかもそういうことをやるのでしょう。それと、高校においては、希望する大学の一般入試で入れるほど力がある子は、推薦枠は与えられません。「おまえはできるから、推薦ではなく一般入試でやれ」ということです。つまり、セカンドベストが推薦に乗っかって推薦されてきます。そうすると、できない学生が入ってくる可能性が高まりますね。ですから、高校名は言いませんが、「一番いいクラスに入ると推薦がもらえないから、入りたくない」といったことが行われている高校がありました。

調査者 高校の成績がそれほど信用できないとなると、推薦入試や公募制推薦の場所において、その生徒の英語力をどのように判断するのか、評価するのかの辺りは？

回答者 ですから、きちっとした試験をやりたいです。でも、それもだめだと文部科学省が言っているらしいです。入試課はそのように言っているし、ぎりぎりのところで自分の意見を書かせる部分ではなく大意要約のところでは英語をきちっと読んでいるかどうか分かれればいいと期待しています。しかし、大意要約はごまかせるところもあるので、もう少しきちっとした英語力があるかどうかは、ちゃんと和訳させたり、一般入試で問われているやり方をしなければいけません、それが許されていない以上はほとんど……。こわごわというか、清水の舞台から飛び降りる感じで取っています。

面接の感じでしっかりとした学生かどうか、どういう勉強をしてきたかとか、どんな本を読んできたかとか、しっかり見て行きますが、彼らはほとんど本を読んでいません。学校生活で忙しいでしょう。ですから、とにかく高校生もクラブやら何やらで忙しいですね。とにかく、日本は忙しすぎて余裕を持って趣味なり何なりを開拓する、自分のプライベートな生活が少なすぎる、そんなことはないか。クラブがある。クラブがぎゅうぎゅうで軍隊式だから、どうかなと思います。イギリスは、クラブとかは土・日にはやりません。第二の人生ならぬ、クラブ以外の第二の趣味を味わって狭い人間になりなさんなということでしょう。うちの子どもは日本ではサッカーでしたが、高校のときはお盆までやりました。家族旅行へ行く時間も取れませんでした。

調査者 日本の高校は部活動に対する熱心度がものすごいですからね。

回答者 要するに、ああやって縛ってコントロールして、悪さをしないようにするということでしょうか。ある中学の校長先生と話していたときに、「中高の先生は忙しすぎますね、イギリスとかの先生方みたいに、本当に休暇を充電期間で取れるようになるといいの

ですがね」と言ったら、「いや、親の目がありましてね、夏休みでもそんなに休暇を取れないんですよ」と言いました。そんなことを言われていられるので、すごく悪循環に感じます。

それと同じ発想で大学まで来てしまっていて、教員は休ませないというシステムですね。大学の先生は休むのではなく、集中的に自分たちの研究をして、それを授業に反映させる期間として、春休み、夏休み、冬休みをとらえているのですが、その休みが授業の質を担保するのに十分なほどには取れなくなっています。これは多分、どの大学に行っても同じことを聞かれると思います。

調査者 ありがとうございます。では、次に、今、入試の話、いわゆる入口の話を少し伺いましたが、学科の学士課程教育、中身の部分で重複する部分をなるべく避けながら伺います。先般答えてもらった調査は、先ほどの話にもありましたが、卒業論文はもともと必修だったところを選択にした、その理由としてこちらに書かれているのが、教員の多忙化、学生の学力が低下しているということです。

回答者 もう一つ、書くべきでしたね。卒論の機能をゼミ論で達成させながら、同時に学生の負担を減らすという、それを少し書き忘れていました。

調査者 自由記述のところに卒論の半分の長さのゼミ論でも十分能力は養成できるということはコメントしてもらっていますので、その話が今の何とか型の話にも関連するのかと思います。実際、先ほどお話を伺った能力のある者には卒論を勧める、それ以外の者はゼミ論でよいという話でしたが、実際、ゼミ論でも文章を書くという能力の養成ができるということでコメントをもらっていますが、実際はどうですか。

回答者 すみません、ところが私はこの3月に卒業した学生は持っていません。というのは、3年前に在外研究に行ったので、ちょうどゼミを持たなくなりました。スタッフの先生に聞いておけばよかったですね。ただ、私の記憶だと、卒論は1万6千字以上かな。

調査者 1万6千字以上が普通の卒論の分量です。

回答者 そうです。ですから、8千字以上のはずです。8千字というのは原稿用紙20枚以上ですから、そこまで行けば論理構成から何から、組み立てからやらせて、ある程度のデータを入れさせて、日本語もきっちりと見ることができる長さだろうなという判断を私はしています。

調査者 そうすると、学生の学力が低下している、あまり予習もしてこないという話もありましたが、結果的に卒業に至るまでには、文章を書く力とか先行研究を確認するとかという意味でのアカデミックスキルのようなものも最低限身に着けて卒業していつているだろうというとか。

回答者 そうですね。それで行ってもらわないと困るというか、さわり程度でもできるようになって卒業してもらいたいと思いますね。あと、何が何でも卒業させなければいけない、あまり留年させられないというのがあられるでしょう。そうすると、いろいろな理由で、メンタルな理由もあるし、極端に低いレベルの書けない学生がいます。そういう学生でも入ってきてしまった以上は面倒を見なければいけないし、アメリカみたいに切り捨てるわけにはいかないということで、卒業させなければいけません。それで、多分、あまりひどい、少し無理だという学生でも、無理して課題を与えるなどして、下駄を履かせて合格点を与えて卒業させているのもあると思います。

調査者 とはいえ、本当に学力の低下が叫ばれている中では、恐らくゼミの指導があつてということだと思いますが、それなりに満足していく教育効果が出ているのだろうかというの、この卒業論文あるいはゼミ論であると考えますか？

回答者 はい、はい、そうですね。ただ、教員がもう少し多忙でなければ、もう少しいい指導ができるだろう。だから、教員は徐々にテーマも広げられて、いろいろなテーマに対応できなければいけません。それがしづらくなっています。日本語チェックぐらいはできますが、テーマとかいろいろな議論の中で方向性を与えていくのには、こちらのインプットがかなり要るはずですよ。私が言っているのは、その時間がないのに、こちらがどうやってきちんとした指導ができるのかという問題です。

そうすると、僕は原則的に半分だけは新しい、15名中7名ぐらいは新しいテーマを追求してもらっても構いませんが、あとの8名は僕がよく知っているテーマでやってもらうとか、7名でも少しきつぐらいでもっと減らしたいぐらいです。

調査者 そういう意味では、自由記述でもいただいている、きちんとした指導ができないのだったら、卒論はなくしたほうがよいというコメントがありますが、今の話がまさしくその葛藤という……。

回答者 そうですね。そういう感じです。それは少し極端かもしれませんが、感情的な気持ちを含めたものです。実際に、英語専攻は卒論がありませんが、四年の演習を必修から選択にするのではないですかね。聞いて僕もびっくりしていますが、どういう理由だったか忘れてしまいましたが、忙しいだけが理由ではないかもしれませんが、そういうことを言っていました。

でも、英語専攻も「レベルが低くなってやりづらくなった」と言っていたから、「演習とかをやるのはやっぱり動機の高い者だけでいい」ということなのでしょう。

調査者 それと、いわゆるゼミなしっ子も出てきて、ゼミ論、あるいはリサーチペーパーみたいなものも書かずに卒業していく子が出るかもしれないという。

回答者 そうですね。英語専攻のことなので、二年、三年でどういうことをやっておられるのかわからないので、もしかしたらその手のことはレポートの作成指導みたいなかたちでやっているとは思いますが、卒論はもともと必修ではありませんでした。

調査者 実際に卒論を含めてカリキュラム改革を2008年から変えたものをスタートして、その前に3、4年検討していたという話ですが、カリキュラムを変えようという発案者、あるいは案を具体化していく過程で先生方の話し合いがあると思います。その発案や実務のプロセスを先生だけですべてをやったのか、あるいは教務課のようなポジションにいる職員が関与をしていたのか、あるいは大学で今後の学科のことをどう考えているのかという話もありましたが、経営サイドからの圧力というかそういったプロセスに関して、どういった方がどういったかたちでかかわっていたかというのを、簡単に結構ですが……。

回答者 大学側はほとんどありません。プレッシャーはほとんどありません。定員割れとかすれば文学部長がいろいろ言って、文学部長からのそういう意味での、「何とかせい」という圧力は来るでしょう。あるいは、例えば志願者が減ったり、そういうことにはある程度反応すると思います。でも、大学のトップのほうから何かしろということはありません。教務からうんぬんというのは一切ありません。教育内容に関しては全くこちら任せです。

多分、あの当時、志願者が減っていくのが見えたからではありませんか。文学部の人気も、文化を入れていましたけども、減っていた気がします。減ったり増えたりだったか。でも、長い目で見ると、減っている感じがあったと思います。やはり、このままではだめだろうという意識があって、カリキュラム委員会（英文学科主任が委員長を兼ねる）を立ち上げて、そこで3、4名で議論をしてという感じでした。

調査者 そのカリキュラム委員会の3、4名の先生方には、骨子案を作っていたものを、最終的にそれでいこうと決定するプロセスは？

回答者 英文学科の会議体・委員会で最終決定を。

調査者 学科で決定・・・。

回答者 学科で決定です。

調査者 学部でということはないわけですね。

回答者 ありません。文学部以外のところは学部主体ですけども、うちの学部に関しては、学科の独立性が強いので、学科で決まったら、あとは、学部は追加承認みたいなもので、ほとんど何も言われることはありません。

調査者 そもそも学科の先生方3、4名で考えたものを、最終的に学科の会議で承認して今に至ると。一回りしたところで、これからいろいろな研修をするという感じですか。

回答者 そういうことです。

調査者 はい、わかりました。抽象的な質問になってしまいましたが、大学は、学部を卒業すると「学士（何々）」と学位名が、おそらく「文学」だと思いますけれども、英文学科の学科教育として、学士（文学）という学位名を見たときに、実際に学科教育、学士課程教育としての課題は何かというのが何か見えるかという話です。あるいは学位名によらず、学士とは何かを考えたときに、今の英文学科の現実で、課題があれば、ご意見をいただければと思います。

回答者 学士（文学）は伝統的なもので、内容は反映していないかもしれないけれどもしょうがないのかと、その辺を疑問に感じたことはあまりありません。もしそれをやると、頻繁に名前が変わるのでかえって困ると思うので、それで何とかということはありません。

調査者 特に学士課程教育、最近、プログラム化と中教審（中央教育審議会）等も言っていますけれども、大学として、学科としての教育は、その成果として学士（文学）で十分に語れるということ。

回答者 そうですね。ゼミで、それなりの方向性で4年間できちんと何をやったのかというときに、こういうのをやると部分的には卒論で見て、テーマも外から見て明確になっていると思います。また、それは、英米圏に関してはいろんな科目を出しているので、それなりの知識を蓄えて卒業しているという感じは持ちます。

調査者 今まで学士課程教育の中身を伺ってきて、今度は卒業生、大学から社会へという出口について、いくつか伺いたいと思います。特に三年生は、秋口になると、いわゆる就活が始まってくる時期だと思います。西南学院の学生の就活について、何か普段感じていることをざっくばらんに伺えたらと思います。

回答者 四年の前期の演習が、事実上、成立していないというか、あれだけ頻繁に休まれてしまうと、本人も、何をやっているかがわかっていないのではないかという感じは受けます。また、先生方によっては、3回以上休んだら、会社説明会であろうが何であろうが

アウトだという先生もいますけれども、私の場合は水曜日が演習ですが、「水曜日にしか入っていない説明会ならしょうがないけど、もう一つ金曜日に入っているならそちらに行くようにして、水曜日は空けなさい」とは言いますが、それでもやはり多かったです。

後半になれば、もうちょっと出席率はよくなる可能性はあります。ただ、後半は、授業をやっても構わないし、個人指導に切り替えてもらっても構わないところです。「1対1」で見たりする段階で、出欠については融通が利くので、そんなに問題はないと思います。むしろ前期です。前期は、これまでどおりの授業形態で、毎週1回の授業を持つので、それにきちんと出られないのは、先生としてもちょっとやりづらいところがあります。

調査者 就職活動のやり方は、今、インターネットを中心にやると思います。過去、特に、先生が学生時代の経験と照らし合わせて、昔の就職活動と昔の大学生活について、まずお伺いできないでしょうか。

回答者 私は、最初は企業を考えていなかったもので、あまり参考にならないと思います。中・高の教員になろうかという感じだったので、そちらでやっていました。だから、普通の学生がやるような就職活動はどういうものかをあまり知りません。知らないで来てしまいました。

今はエントリーシートとか何とかをいっぱい書いて、自己分析をしたりと大変みたいですけど、昔はそんなところまでやっていなかったのではありませんか。もっといいかげんとか、OBと連絡を取って、いろいろと会社訪問をしました。私の周りの人たちはそういうことをやっていた気がします。そして、授業とか、ゼミに出てこなかったのはあまりなかったと思います。四年もゼミはありましたけど、みんな、出ていたような気がします。その辺がちょっと……。

調査者 近年の就職活動だと、3年生の10月から途端に始まる印象を受けますけれども、先生が学生時代の頃は、特段そういうことはありませんでしたか。

回答者 ありませんでした。文学部はいいかげんです。経済学部とか、法学部に所属していれば、もうちょっとその辺があったかもしれませんけども、みんな、いいかげんな連中が集まっているので、大体留年して8年というのも普通の時代でした。いつの間にかインドに行って消えてしまったような人もいるし、行方知れずになったとか、変わった人がいっぱいいました。

昔は、東大の先生で、年に3回しか授業をしなくて、その日だけは朝8時から夜10時までぶっ続けでやるとか、それが許されていた時期です。それでいい授業をすれば構わないという、毎週やれという縛りもない自由な時期でした。そういうところで、普通の会社活動がどうだと言っても、影響はあまりなかった気がします。そういう話は聞きませんでした。

調査者 それに比べて、近年の就活はぎゅうぎゅうやっていて、学生も大変だろうと思います。

回答者 そう思います。

調査者 例えば、すぐに内定が取れる学生もいれば、ずっと取れないで苦しむ学生もいると思います。どういうタイプの学生がずっといくとか、あるいはずっと長期化してしまうとか、何か普通のゼミでイメージをお持ちでしょうか。

回答者 積極的で明るい感じの子のほうが、おとなしすぎる子よりは決まるのではありませんか。そういう感じですか。だから、力はあるに越したことはありませんけども、ちょっ

と暗いとか、陰気だったら無理でしょう。そういう学生は決まらないと思います。

ちゃらちゃらした感じの子は決まりません。どこかで水商売のアルバイトをしていたのではないかという印象を持たれるような子もいます。そうすると、ちょっと決まりにくいかなど。実際にそうなっているかは知りませんが、そういうイメージを与えてしまう学生もいます。本当に口を利かない子もいます。これがまたいつ決まるのかという人もいます。やはり、比較的積極的で、動きができる子のほうが決まりやすいです。

それと、教職の子は、忙しくてきゅうきゅうです。学科の科目以外にも教育実習や教職関係の授業を多数取っていて、もうほとんど埋まっています。あれでは本を読んでいる暇もないという……。私らのときには、授業なんかは出なくていいから、好きな本を読んでもというのが当たり前の時代でした。

それからすると、本当にこれでもか、これでもかと、締めつけて。社会に出てからも締めつけられるのに、学生時代ぐらいはもう少し自由にしてやってもいいのにというぐらいですけども、文部科学省は、簡単には教員にさせない方向でやっています。

さらに、現職の教員には、教員免許の更新講習のほうまでやります。更新講習をやるよりは、英語の先生であれば、1週間の海外休暇の補助でも出してあげたほうが、その経験が生徒に語られることによって、ものすごくいい影響を与えたいと思います。暑い時期に1日うちに来て私の話を聞いて帰るよりは……。

こちらも、更新講習の負担も結構あります。つまり、大学の教育・行政のいろんなところでそういう負担が少しずつ増えています。このことだけではありません。更新講習の1日だけではなくて、ほかのところでも同じように負担が増えています。

そうすると、多忙なのはお互い様なのかなという感じです。中・高の先生とかを見ていると、本当に気の毒な感じがします。時間をもっと与えてあげたほうが、教材研究とは言わないけれど、本を読んだり何なり、自分の趣味を追求するなり、何かをする時間を取ったほうが、生徒にはよほどいい影響を与えるのではないかと。生徒とのインターアクションもうまくいく感じがします。

調査者 大学でも高校でも、今の話からすると同じような課題があるのかと。つまり、教員と学生、あるいは高校ならば生徒とのお互いの交流の時間がどんどん……。お互いが多忙化されてきて、擦れ違いがあるという構図が浮かび上がってくる感じがあります。また、卒業生は、西南学院大学を卒業して、どのくらいの満足感を持つのかという疑問が浮かんできます。実際にその辺りはどうでしょうか。満足して卒業していくのでしょうか。

回答者 その辺は、私のほうは全然統計を取っていません。むしろ、就職課、学生課、どこが取るのですかね。教育・研究推進科が、卒業式の日アンケートを書かせていました。でも、そのアンケートが最初だったせいもあるのか、ちょっとわけがわからないアンケートでした。熱意のある方の多い課ではあるのですが。「やはり、専門家に作らせないといけないのではないかと」言いましたけど、間に合わないということで、とにかく形だけでもというので。要するに、認証評価書に書けるようにと。

調査者 アンケートは、職員が作ったのですか。

回答者 ええ。カリキュラムのことをもっと勉強してからやらないとできないのではないかと思います。それも、「じゃあ、あんたたちがやってください」と言われたら、アンケートを作るのもこちらの負担になります。それで、事務の方がやり始めたところではあ

りませんか。結果がもう出ているのかどうかはわかりません。

おっしゃるとおりで、学生とのコミュニケーションの時間を減らさないとやっていけなくなりました。私のほうは、授業の質が落ちるよりは、学生との時間を極力減らす方向に動いています。やむを得ません。いちいち学生と対話をしていたら、とてもではありませんけども・・・。

話したほうがいいですけど、出てこない学生とか、出てきているけど今ひとつの学生に関しては、目配りをして、呼び出して話をしたほうがいいでしょうけども、その時間も取れません。特に、学科主任をしていたらとてもではありませんけども、そんなゆとりはありません。

そして、授業はきちんとやらなければいけないので、そちらのほうが一番優先だと思っています。そうすると、コミュニケーションの時間が取れません。でも、これは、小学校でも同じでしょう。ペーパーワークばかりで、その時間を生徒と使いたいと思うのに使えないと嘆いていました。そういうのが多くなってしまったようです。

コンパも学生任せです。ところが、やりません。「僕は、最初だけやるよ。でも、あとは君たちに任せるよ」と。というのは、私がやって失敗したことがありました。2回目も私がオーガナイズしたら、出てきません。自分のサークルとか、何か別のところがあるのかもしれない。わざわざゼミのところで仲よくしなくてもと冷めています。

私が、酒が好きならまだいいですけど、私は飲めません。そうすると、とにかく学生任せです。学生の中でそういうのが好きで、リーダーシップを取ってというのが出てくれば、そういうときにはやります。そういうのがあったというか、比較的元気なのが集まっていた年の学生たちは、その後も連絡を取り合ったりしています。たまたまばったり出会ったりすると、近況を教えてくれたりという感じで連絡をくれたりします。

中には、ノルウェーに派遣留学に行った子が、ノルウェーの人と結婚をするというので、誰々さんとか、その子の仲のいい子も交えて、「福岡に来たときには一度お話ししたいんですけど、時間はありますか」みたいなものもありました。10年教えていましたけども、連絡をくれる子もだんだん少なくなってきました。これは、私の性格もあるかもしれません。

個人的には、記憶力・・・。10年前は顔も名前もずっと覚えておけるものだと思っていました。これが違うとわかって、しまったと思って、プリクラでもいいので残しておけばよかったと思うぐらいです。私は、卒業記念アルバムはこんなに分厚いし、高いし、いちいち買いません。ゼミの写真ぐらいは撮って残しておくべきだったと。

だんだん顔が浮かばないようにになりました。メールアドレスは残しているので整理をして、今度、一度一斉に送って、変わっていただけようがありませんけど、確認してみようと思っています。そういう感じにつながりもちょっと弱いのかと。

調査者 文学部に限らず、もともと西南学院大学の学生のカラーがそういう感じですか。

回答者 どうでしょうね。カラーとしてはおとなしい感じの・・・。福岡大学は、覇気があるというか、エネルギー感があります。エネルギーはあまりないけども、まだスマートかもしれないけど、英文学科の学生という体質もあるかもしれません。

外国語学科英語専攻のほうは、セルフエクスペリメンテーションを推奨されるので、むしろセルフエクスペリメンテーションを推奨されるのが嫌いな子がついていけなくなっていくと聞いて

います。わかりますか。そういう子は、むしろ英文学科に入るべきだったと思います。だから、学科の特質から言うと、それなりに内向きな、おとなしい子が来ているのかと。そういう意味でもおとなしいです。うちのゼミは全体的にはおとなしいと思います。

調査者 卒業論文あるいはゼミ論を書き始める時期は、大体どれくらいの時期に・・・。
就活の時期と重なっていたり・・・。

回答者 重なっています。だから、4月ぐらいの時点から何にするかと、テーマから、本選からさせていって、4月の最初の時点で1年間のスケジュールを渡します。今回に関しては、学生のほうがだいぶ遅れています。一番理想的なのは4月からで、7月の夏休み前の時点でテーマとかが決まって、夏休みにもいろいろリサーチをして、10月ぐらいには中間発表をするということになります。一応、10月上旬ぐらいからさせるつもりですけども、今のところ、どのくらいできているかが疑問です。

4、5年前に卒業した08期生（2008年卒業）の学生は優秀でした。3人が派遣留学にも行きました。ですから、活発でした。行かない学生の中でも、私は大した指導をしませんでしたが、でも、「指輪物語」（J・R・R・トールキン著・評論社）が好きだと全部読んで、自分で論点を見つけて、すばらしい論文を書いた子は、どこに就職をしたかは忘れましたが、大学院に来てよかったと思うぐらいのセンスがある子でした。そういう子もいて、すごく活発なゼミのときには、みんなが早く取り掛かってうまくいきました。

うまくいかない学生に関しては、それこそ私が忙しかったり、私自身の勉強不足もあって、うまく指導してやれないもどかしさみたいなものがありました。こんなだったら卒業をなくしてもいいと思ったのはそういうときです。やはり時間が取れません。学生がやっているテーマをどう展開すべきかを、私自身がもうちょっと勉強しなければいけないのにできないというのがありました。

だから、本当に役職者になってから、学生とのコミュニケーションが徐々に少なくなってしまいました。ただ、いい学生が集まっていればそれなりに活発なゼミになって、卒業後も、彼ら自身の間では、細々ながらコミュニケーションを取り合っているみたいだし、たまには連絡がきたりもします。活発でないときの学生は、あまり連絡をよこしません。そんな感じです。

調査者 いくつかお話を伺っている中で、卒業するときには比較的それなりに教育効果もあって、満足度もあるのではないかという話がありました。先生からご覧になって、英文学科の卒業生が社会に出て、あるいは大学院への進学もあると思いますけれども、そういう卒業生に対して期待するもの、それに対して実際はどうだろうみたいところを、もしご意見があればお伺いできればと思います。特にカリキュラムについて、今回だと新しくカリキュラムを変えたこともあるので、その点と照らし合わせながら、期待・実際の姿みたいところのコメントをいただければと思います。

回答者 英文学科でこういう英語を中心としてやって卒業していくので、今後、国内にいるにせよ、国外に出ていくにせよ、さまざまなトラブルに立ち向かっていって、社会をインプルーブすることにかかわっていくような学生に育ててほしいというのはあります。

なかなか難しいですけど、特に、学生にばかりそのように要求していながら、大学内部ではいがみ合いが多かったりします。コミュニケーション能力を学生には要求しているのに、先生方同士では全然ないという問題が、多忙になると出てきます。もともとあったも

のが、ものすごく増幅されてきます。それもよくないと思います。もっと余裕があれば余裕を持って対応できるのに、ぎすぎすしてしまうところがあります。

でも、学生にはそれはそれで、今後、海外に出なくても、東南アジアから来ている人が高齢化社会で増えると思うので、そのときに、異文化のことを勉強してきている、また英語も使えるはずなので、そういう学生が仲介役で、いろんな摩擦とか、トラブルを処理できる能力を発揮してもらったらいいと思います。

ロボットに介護を任せるというのもあるらしいですけども、おそらくそれだけでは無理だと思います。生身の人間で若い人が少ないので、海外から、東南アジア方面から来てもらうしかないと思います。そうすると、いろんな意味での文化摩擦みたいなものが生じてくると思います。そのときに、うちの学生は、それなりに他文化を勉強しているのので、英語でやり取りもできるはずで、その辺では活躍できると思います。

調査者 ありがとうございます。卒業論文あるいはゼミ論は、選択で何かしら書いて卒業していくということですが、改めて伺いたいのは、卒業論文あるいはゼミ論を書かせる意義・意味というところでご意見をいただければと思います。

回答者 どう言ったらいいですかね。やはり、問題発見能力、そして、問題発見から問題解決に至るまでのプロセスがどういうものかを自分なりに認識させて、社会に出てから役立たせることではありませんか。問題発見は自己発見につながるのので、その過程では、もしかしたら自己発見、そして自己表現能力を高めたりできると思います。言語能力を高めることは、自己表現能力も高まります。そんなところですよ。

調査者 ありがとうございます。質問としては最後になります。先生が思いを悪くされたら申し訳ありませんが、ごく世間一般的な表現として、文学部は、社会に出るにあたってあまり役に立たないという表現もあると思います。実際に、「文学部がなくなる日～誰も書かなかった大学の『いま』」（倉部史記著・主婦の友社）という本を書いたとか、ちょっと売れたりというのもありました。そういう表現、コメントに対して、ご意見を伺いたいです。感想でも結構です。

回答者 文学部が役に立つとか、立たないとかというのは、むしろそれは短期的なものです。一步譲って言えば、中期的なものです。それから言ったらそのとおり、役に立たないのではありませんか。ただ、人間は、「もうかりまっか」だけでは生きていけないのではないかと。私も関西にいたのでよくわかります。やはり、文化活動がなくならないのは、お金を稼ぐための活動以外のものを何か必要としているのが人間だからではないかと。

私が印象深く思っているのは、私の恩師が、戦中は禁じられていたダンスが終戦後すぐはやったと。要するに、禁じられていた文化活動にわっと人が飛びついていきました。そのお話はすごく印象に残っています。それとか、オーストリアの人が、もしかしたら国を間違えているかもしれませんが、第二次大戦後、最初に望んだのは、「破壊された家を建ててくれ」ではなくて、「まず、コンサートホールを造ってくれ」でした。

その辺を見ると、役に立たないものが持つ長い目で見たときの必要性は、目には見えないものがあるのではないかと。経済活動は社会が中心にあって、本当に生きていかなければいけないということで短期的になりがちです。文学部みたいな、100年、200年単位でものを見る目を養うというか、そういう長期的な目でもって書かれた本を読むとか、あるいはそういう長期的な目で見る学問の分野は、1分1秒を争う自然科学とは違います。

文学の場合は20年前でも、100年前の本でも役立ちます。経済は違いますね。経済史家は別ですけど、経済も一番最近のデータでなければ役に立ちません。経済史になると文学部と重なってきます。要するに、歴史は文学部の領域です。長期的な視野でもって、社会から一步距離を置いて冷静に眺めてコメントを加えることができる分野の学部は、やはり必要ではないかと。

猪突猛進でお金をもうけるのに必死になっている人たちが見えないところを指摘して、問題点を言ってあげるのは必要ではないでしょうか。こちらもお金を稼ぐことは必要です。両方必要ではないかと。そういう意味では必要だという感じは受けます。

実際に卒業をして、ほとんど、8割、9割は、既に就職をしていると思いますけど、いろんなところに就職していくのを見ていて、民間系とか、公務員とか、いろいろあると思います。特に、最近の何年かぐらいを見たときに、公務員系に行く子と、民間の会社に行く子でタイプの差みたいなのはあるのかどうなのかと。割合を見ていると、どこの私立大学も大体同じような感じの率になっていて、西南も同じような感じなのかと思っています。

不景気なので、公務員もしくは教員は増えてきました。更新講習は教員には結構厳しいです。うまく採用されたからといっても10年ごとに再審査のようなことをされてきついの、安定しているということで教員をめざす、そういう人はあります。だから、そういう子は、多分慎重な子ではありませんか。日本人自身が慎重なところがあります。

調査者 慎重な子ですか。さきほど西南さんの学生は全般的におとなしいというお話でしたが、先生のゼミ生には積極的な子というお話もありました。

回答者 でも、積極的な子でも慎重な子と同じように中学・高校の教員になる人もいます。積極的な子で、今、大阪のほうで、中学か高校かはわかりませんが、教員をやっている子はいます。

もう一つは転職する子が多いです。1年で辞めたり、すぐに辞めたり。民間から教員になっても、非常勤で採用されてそのまま専任になったとか。聞いていると、耳に入ってくるのは転職の話が多いです。随分と変わってきます。やはり、自分と合わない、自分にもっと合うところを求めて変わるのかと。ちょっとびっくりするくらい変わります。

先ほどのノルウェーで勉強した子は、大手の電機会社の、要するにヤマダ（電機）とか、ヨドバシ（カメラ）とか、あの類の会社に入って、1年で辞めて、教員を2年、非常勤でやってという感じでした。ほかに、民間で働いていて、教員になった子もいるし、もともと教員で、結婚をして大阪で教員に。これは場所が移動しただけですが、転職するケースが多いという印象です。ほかにもいるのではないかと。今日、すぐには思い出せませんが、私の印象としては、みんな、転職を結構軽い感じでやっていると。自分で求めているものをやるのだったら早いうちのほうが、若いうちのほうが、替わるにはいいと思っています。

調査者 長い時間、本当にありがとうございました。

付録 4

学科長インタビュー調査②

(2012年9月19日実施)

福岡国際大学 国際コミュニケーション学部 国際コミュニケーション学科

学科長 竹熊 真波 教授

インタビュアー 篠田 雅人 (学習院大学人文科学研究所客員所員)

日下田 岳史 (東京大学大学院教育学研究科博士課程)

調査者 今日はお忙しい中お時間をいただき、ありがとうございます。では、初めに、こちら国際コミュニケーション学科のこれまでの歴史とか、カリキュラム、学科の特徴を簡単にお話しいただけるようでしたらお願いします。

回答者 パンフレットの最初にあると思いますが、もともと、この大学は、福岡女子短期大学というのがあり、4年制を作ろうということになって設立しました。できてまだ14、5年の大学です。

これは言っているのかどうかわかりませんが、新設大学を作るときは、結構はやりすぎがありまして、その当時は、国際とか、国際科、情報科というのがあり、国際コミュニケーションというものでいくことになったそうです。

その国際コミュニケーションというのは、語学と情報をツールとして、国際社会に羽ばたく人材を育成しようというもので、コアカリキュラムというのはご存じだと思いますが、国際コミュニケーションをコアにして、語学、情報、国際的な知識、国際法、そういう国際関係、人間関係を学ぼうといったかたちで作られています。

私は教育学で教職課程を担当していますが、先生方も、法学部の先生、経済学部の先生、もちろん語学の先生と、本当に雑多な、幅広い人たちが集まって、コミュニケーションを色々な分野、色々な視点から考えるというのが、大学の特徴です。

ただ、なかなか一般の方にはわかりにくい。「何やるの？」みたいなところがあります。調査者 実際に、コースとして、現代英語コース、アジア言語文化コース、国際社会コース、ビジネス経済コースと四つのコースを設けているということですが、コースごとに大体の学生の所属する人数、割合はどのくらいですか。

回答者 実は、これは来年度からのカリキュラムで、今は、メディア情報コースというものもあります。1回、2学科に広げたのですが、文化系でメディアは結構厳しいということもあって1学部に統合されて、メディアコースということにしましたが、さらにそれもまた、それでも厳しいということで、一つ減らしてアジアに特化しようというかたちになっています。最近、毎年のように変動があります。

そうですね・・・。大体、現代英語30人、アジア20人、国際社会が一番多くて40人、ビジネス、メディアが20人・20人ぐらいです。現代英語コースは、二年次にコース分けがありますが、最低でも準2級を持っていないと、そのあとの授業が付いていけないというのがあって、結構レベルは維持しています。ですから、「英語はしたいけど、現代英語コースに行けない」という子が国際社会とかに行ったりするので、そこが一番多いです。

調査者 わかりました。先生方はいろいろ分野の方がいらっしゃるということですが、そ

の皆さんを総合してというか、学科の先生方の雰囲気、特に教育に対する考え方とか学科全体として何か特徴がありますか。

回答者 すぐ隣に共同研究室というのがありますが、大体ここでお昼ご飯を食べたりします。学生自体も120人が定員なので少ないですし、教員も二十何人ぐらいです。元はもっと多かったのですが、どんどん減っているというのもあって、アットホームな雰囲気があるので、多分、学生と先生の距離とか、教員同士の親密性というのはすごくあると思います。

最近多いじゃないですか。どの大学でも、ADHD（注意欠陥・多動性障害）だったり発達障害の学生とかがいるので、ご飯を食べながら、「あの子、最近、学校来ている？」とか、「じゃあ、自分の授業にも出ているはずだから。ちょっと注意してみよう」とか、そういう話題はいつもやっていて、それこそコミュニケーションはしっかりとれているのではないかと思います。

調査者 昨日、とある大学にお邪魔をしたときに、いろいろな忙しさが増してきたので、先生方同士のコミュニケーションが非常に不足してきているという話がありました。こちらではそういう感じはありませんか。

回答者 全員と言われるとちょっと問題がありますが、大体は、コミュニケーション学科の先生たちは、すごく仲がいいです。

調査者 風通しがいいのは、すばらしいことだと思います。

回答者 実は、私は今月で終わるのですが、昨日、お別れ会をお昼にランチを食べながらしていただきました。花束とかもいただき、「残念です」とかも言ってもらいました。

調査者 先生は、こちらにいらしたのはいつ頃ですか。

回答者 2000年なので、ここができて2、3年後です。

調査者 それで、10年ちょっと。

回答者 12年です。

調査者 ありがとうございます。先生の専門は、ホームページで紹介されている比較教育学ということで、見させていただいています。先生個人の話として、出身大学が九州大学ということで紹介されていますが、普段どういう勉強をしていたとか、どういう学生生活をしてきたとか、学部時代に教育を受けた側としての感想とか、多くなってしまうのですが、あと、何で大学の先生になったのか、そういうことをちょっとお話しいただければと思います。

回答者 私は、もともと・・・筑豊という所をご存じですか。

調査者 炭田があるエリア。

回答者 炭鉱がある町ですが、福岡県の真ん中ぐらいの飯塚市という、大きな声では言えませんが麻生太郎の出身地ですが、そこの出身です。本当に不登校の生徒がいっぱいいるようなところだったので、カウンセラーになりたいと思っていました。それで、九州大学の教育学部に入りました。

そして、「カウンセラーになりたいなら、マスターは出ておかないといけない」と言われたので大学院に行きたいと考えていました。大学に入ったら、九州大学国際親善会という留学生と日本人が交流するサークルがあって、実は私の親戚がタイに住んでいるのですが、そのタイの留学生から勧誘されたので、「お、タイ人じゃん」と思ってそこに入部し

ました。

私が入ったのは1982年か1983年でしたが、「留学生10万人受け入れ計画」がちょうど出された年で、中国人の国費留学生とか、ルックイーストのマレーシアの留学生とかが、どどどと入ってきました。

当時、イスラムの知識も全くないままに過ごしていたのですが、ある日いたずらでムスリム留学生のジュースにお酒を入れたバカがいて、その学生がそれと知らずに口に付けた瞬間に「ガンッ」と手でグラスをかちわって、「おまえらを全員殺す」みたいな、そういう事件があったりして、そこからイスラムって何だろうとか、実体験でそういうことを学びました。みんないろいろな学部から来ていますが、結局進学すればそれで終わりじゃないですか。私は折角教育学部にいるので、何で留学生が多いのかを深く研究してみようと思って、卒論は日本の留学生受け入れ政策をやりました。そのあと、修士ではマレーシアからの留学生について、博士課程では、マレーシア中国系学生の台湾留学などを研究しました。

マレーシアってマレー系と中国系がいるじゃないですか。チャイニーズは漢字ができるので、日本に私費留学する子が多いですが、マレーシアの中国系の方は、日本が第一の留学先ではないのです。実は、台湾のほうがたくさん行っています。

台湾は、華僑の僑に生まれると書いて「僑生（チャオジャン）」と言いますが、僑生として受け入れているので、留学生ではなく帰国子女扱いみたいになっています。そういうのを調べたりして、学位は取っていませんが、ドクター課程はずっと留学生のことをやっていました。

でも、大学院が終わってからは、結婚したり何だりで、非常勤ばかりやっていました。主人はマレーシアのボーディングスクールのことをやっていて、サバティカルでマレーシアに行くことになって、自分もルックイーストなので一緒に行って、戻ってくるときにこの職場を紹介されました。

私は、本当は留学生のアドバイザーになりたいと思っていましたが、なかなかその職がなくて、教職でいいやというか、せっかく職があるならということで、ここに着任しました。でも、ちょうど国際コミュニケーションということだったので、自分自身の専門にも近かったし、留学生もどんどん増えてきているので、お役に立てるかなと思いました。

調査者 ありがとうございます。学部時代に九大で受けた学部教育そのものに対して、こういうところはよかったとか、ちょっといまいちだったとかいう感想はありますか。特に、授業とか、先生から受けた卒業論文の指導とか、そういったカリキュラムについて、今振り返ってみたらどうだったかというところはいかがでしょう。

回答者 私ときは、教養部があって、1年半勉強をして専門教育を受けるというタイプでしたので、よく言われるように、確かに早めに専門をやりたいということで、「何で教育学部に入ったのにチョウチョの体の構造とか、行列とかをせないかんのやろ」みたいなのがありました。英語とかも、長文読解をさせられましたが、必ず誰かが訳本を見つけてきて、みんなですべてを活用しました。

そのときは無駄だと思っていましたが、今振り返ったら、あの無駄がすごくよかったと思います。もし、すぐカウンセラーになったら今の道が多分なかったと思います。いろいろやってみて、文化人類学とかも勉強して比較をやろうみたいな気持ちになったので、そ

それはそれでよかったですと思います。

大学で専門に移ってからは、教育学部は、うちの大学によく似ていますが、そのときは定員が40人ぐらいでした。小規模学科だったので、それこそ、友達同士で旅行に行ったり、結構仲よくやっていました。ただ、心理系と教育学系に分かれていて、私は教育学系に行ったので、「心理崩れ」と言われていました。

その頃は、心理の人气がすごく高かったので、大学院に行くとなったら、私たちは通る確率が結構高いけど、心理の子は落ちる確率が高いので、大丈夫かなとみんな心配していました。

卒論指導はそんなに受けた覚えはありません。先生の指導はもちろんありましたが、どちらかという、研究室の先輩とかでした。だから、今、学生に、卒論指導は、引用の仕方とか、論文的な、「『なので』ではなく『従って』と書け」とか、そんな細かいことまで、小笠原喜康先生の卒論の書き方みたいな単行本をまず読ませてみたいなのをやりますが、自分はそんなのを習った覚えがないです。

何でわかるんだろうと自分で思うぐらいです。多分、先輩とかに叱られたり、「これ、読め」と言われて読んだ中で、こういうふうに書くんだと自分で学んだのでしょうか。そういう思いがあります。

調査者 先生は、学部から大学院に絶対行こうと。

回答者 そうですね。頭の中でカウンセラーになりたいと思っていたので、「修士までは行かないかん」みたいなのがありました。

調査者 大学院に進学後は、比較教育学にという感じですか？

回答者 はい、そっちのほうに変わって。専門は、本当は、異文化理解をやりたいかったのですが、九大にはその専門の先生がちょうどいませんでした。教育文化人類学はあったので、文化人類学的なことをするか、制度として比較教育学をするかいろいろ悩んで、いろんな先生とか先輩にアドバイスをいただき、「比較がいいよ」と勧められました。

調査者 これから先は、こちらの学部、学科の教育に関する内容に入っていきたいと思えます。いま、研究室の先輩からの指導という経験があったということでしたが、そのような経験があって、かつ、現在、こちらの大学で学生に対する指導にあたられていて、自分の経験は今の指導に役立っているかどうか、その辺りの率直な感想はいかがでしょう。

回答者 うーん・・・、どういう意味で言えばいいですかね。大学院時代とかに得た人間関係は、ここに着任してすごく役に立ちました。実は、C大学に移るというのは、玉突き事故みたいであれですが、すごくお世話になった先輩がいて、ここに新人として着任したときに、小規模校なので、教育学系の先生と心理系の先生が教職で2人担当なのです。

来て1年目はよかったのですが、2年目に、「さあ、うちの学生を初めて教育実習に送り出すぞ」というときに、この心理系の先生が、サバティカルでアメリカに行ってしまいました。

ですから、来て2年目で、私1人で教育実習生を世話しないといけないことになってすごく困っていたら、****学園大学の先輩であった方が、やり方とかを、「模擬授業をしたらいいよ」とか、「こういうところにポイントを置いたらいいよ」といろいろ教えてくれて何とか乗り切ることができました。その先輩が、今度移られるので、福岡国際大学は大好きですが、私もお世話になった先輩への恩返しと思って異動することにしました。そ

うというのがあって、そこで培った人間関係というのは、案外、就職したあともすごく役に立っています。

ほかにもいろいろ、この大学は、来たときには、国際大学であるにもかかわらず、高校の公民の免許しかなかったのです。「おかしい、英語じゃん」と思いました。でも、1学科は1教科という基本があるのです。F大学の先輩のところに行って、「こう言われているんですけど」「いや、いろいろやり方があるよ」ということでいろいろ教えてもらって、教職課程として、英語と社会を置くことができました。だから、そういう意味では、いろんな人脈とか、そういうのがすごく役に立っているかなと思います。

指導自体は、私は大学院まで行ったのですが、学部しかない大学なので、先輩・後輩の関係はなく、教師が直接指導する形です。学生の印象ですが、何か、素直なんですよ。訳本があるやつで、わかっているんです。ベストセラーになった本があって、私はその原文をわざわざアメリカから取り寄せて、「これを訳せ」と言うと、必死で訳すのです。「もっと本屋に行け」みたいな。そういうズルは絶対にできないんです。九大生はみんなやっていたのに。

調査者 学生は、タイプの的には素直な子が多いという感じになりますか。

回答者 そうですね。

調査者 何かほかに学生の特徴を表すようなフレーズがあれば、伺いたいです。回答者 学年によって違います。コミュニケーションに興味があるので、積極的な子が比較的多いです。

調査者 例えば、どういう場面で、この学生は積極的だとか、この子はちょっとおとなしいとか、もし何か具体的なエピソードがありましたら。

回答者 少数クラスなのでどんどん減っていきませんが、今、教職を取る子たちが1年生でも30人ぐらいです。だから、大体、名前と顔がわかるようになるので、学生も心を開きやすいのかもしれない。

ちょっとジョークを言うじゃないですか。佐賀大学も教えているのですが、国立系は男の子が多いので、「しーん」です。それで、感想に、「先生のあのジョークは面白かった」みたいなことを書きます。

調査者 その場で反応するわけではないのですね。

回答者 「じゃあ、笑えよ」とか思います。中村学園大学とか、女子ばかりの幼児教育科とかに行くと、ちょっと言うと、わーっと笑ってくれます。うちの学生は、言ったら必ず突っ込んできます。「先生、おもしろねー」とか、そんな感じで言ったりとか。そういう立場で、授業の中でも結構掛け合いが多いです。

調査者 いい環境というか。

回答者 全部が全部ではないかもしれませんが。

調査者 学生の話が出ましたので、今度は、学生にかかわることでいくつか伺います。まず、入試のことについてです。事前にホームページでいくつか状況を見させていただきました。いろんな形態の入試が行われていると思います。一般入試とか、推薦とか、AOとか、たくさんの種類の入試がある現状について、学科長先生の感想、所見がありましたらお聞かせいただけますか。

回答者 これは、私学はもうどこでも仕方がないというか、学生確保をいかにするかとい

うことです。ただ、下のほうをごそごとではなくて、できるだけ優秀な学生を確保したいということもあるので、いろいろ手を替え品を替えということです。

私は出題者にはなっていないのでそんなに大変ではないけど、出題の先生は、国語の先生は1人で何問も作られているので、本当にそれだけでもかわいそうな気がします。もちろん、入試なのでチェックも必要です。でも、これは致し方ないと思います。

調査者 学生は、九州から来る方がほとんどでしょうか。

回答者 そうですね。もちろん、福岡県が一番多いですが、面白いのは、福岡国際大だけではないですが、福岡県の大学は沖縄県から来る学生が多いです。「東京までは怖くていけないけど、ちょっと都会を4年間味わいたい」みたいなかたちで来る子が多いです。

調査者 沖縄県でしたら、もう飛行機に乗るのですから、福岡県でも東京でも同じではないかと、私なんかは思ってしまうけど。

回答者 そこは、東京は怖いらしいです。福岡県ぐらいなら来られると。天気予報とか、地方地方でありますよね。九州地方の天気予報も沖縄県も含めてもちろん流れますが、そのとき、天神の街並みの夜景が必ず出るのです。「あそこに行ってみたい」というのがあるみたいです。

うちは、ちょうど、大宰府にあるなので、修学旅行で行ったことがあるという感じで、ここを選ぶ学生が結構多いです。沖縄県の学生は、卒業後は地元に戻りたいということで、公務員志向で教職を取る子もとても多いです。

調査者 沖縄県出身の学生にとっては、ニーズに合致しているといったところでしょうか。

回答者 そうですね。どこの大学に聞かれても、多分、沖縄県は結構多いですよと思います。

調査者 それはすごく面白いですね。

回答者 熊本県とかはそんなにないと思います。「どうせ来るなら福岡」みたいな感じですよ。

調査者 入試を経て、実際に学生生活が始まると思います。福岡市内の出身の方でしたら地元から通うのでしょうかけれども、寮生活の人とか、アパートの人とかいると思います。適応上の課題であるとか、何か感じていることがもしありましたらお願いします。

回答者 女子の場合は女子寮がありますが、男子はありません。でも、大丈夫じゃないですかね。留学生が多くて、その子たちがちょっと大変かなと思います。物価が高いとか。

調査者 留学生に対する入試は、主にどのようなやり方で実施されているのでしょうか。

回答者 留学生の特別入試は、12月期と1月期かな、年に2回ぐらいあります。それとは別に、うちの大学は、大連民族学院と大連外国語学院と共同育成をやっています。最近では随分他の大学に取られています。三年次編入生として来ます。年2回向こうに行って入試をして、試験を持ち帰って合否判定を出すということをやっています。

その子たちは、共同育成なので、一応、こちらでアパートを用意して、「ここに住みなさい」みたいな感じですよ。やはり、一人っ子が多いので、ここはあまり日差しが当たらないとか、もっと都会に住みたいとか、ちょっと適応できない場合があります。

調査者 「国際」の名を冠するだけあって、外国人学生が多いなという第一印象がありました。90人と回答いただきましたが、出身国は、中国の方がほとんどですか。

回答者 そうですね。しかも、大連が多いです。共同育成で。一年、二年生は10人もいな

いです。三年生になって、その編入生ががばっと入ってくるので急に、トータルは90人ぐらいになります。韓国からは、今、10人弱です。1年間だけの交換留学生もいます。うちからも派遣しています。そういうので、広州とかもいます。あと、韓国も提携しているところから来ています。

調査者 学生が、留学生の入試、日本人の入試を経て、実際に学生生活を初めて、例えば、日本人学生の長所・短所、あるいは一般入試で入ってきた学生の特徴、A0で入ってきた学生の特徴、そういった、入試のやり方と実際の学生生活の特徴の関連で、もし何かお気づきの点がありましたら。

回答者 よく言われるのが、A0入試は中退率が非常に高いです。やる気、やる気と言いますが、あまりなかったり、学生生活そのものに適応できなかつたりします。指定校推薦とかそういうのは、経済的な問題とかは別にしてそんなに……。A0は、やはり、ちょっと問題があるかなとは感じています。

調査者 A0入試の選抜のプロセスの中で、普段、どういう学生を採りたいという、入試のポリシーとでも言うべきでしょうか、そういった辺りはどのようになっていますか。

回答者 私は、入試そのものの専門家ではありませんが、A0入試は、2回ぐらい面接します。最初に1回面接して、課題作文の宿題みたいなのを与えて、それを出して、もう1回面接みたいなことをするので、結構ふるいにかけています。A0に来たから全員通すというわけではありません。でも、結構だらだらやるので……。

A0入試だからみんな悪いというわけではもちろんなくて、やる気があって頑張っている学生もいますが、割合的には、入試のときにはやる気満々でも、始まってしまうとできないとか、そういうことが多いです。

最近の若者の特徴というのは、やはり、生活リズムが自分でコントロールできないというのが確かにあって、夜型になります。大学生活で一人暮らしをして、コンビニでバイトを始めたりすると、もうだめです。一年の終わりから二年生ぐらいまでは気を付けられない時期です。

だから、カリキュラムも、一時期、二年生は何もなくて、三、四年でゼミナールをやっていましたが、この二年生の時期が中退率が一番厳しいので、カリキュラム改正のときに、一、二、三、四年全部ゼミを持つというふうに変えました。三、四年のゼミを、一旦、二、三年に前倒しにしましたが、今度、四年生は、中退はもうしないのですが、就職のことなんかの指導や把握ができなくて、では、全部やろうという感じになりました。

調査者 なるほど。少し話題が飛びますが、今、就職活動の話題が出ましたので、その点についてお願いします。

三年生の秋から冬にかけて始まるのかと思いますが、こちらの大学での学生の就職活動の特徴や全般的な傾向など、お気づきの点がありましたら教えていただけませんか。

回答者 就職活動ですね。九州は本当に厳しい状況があります。多分、それ自体は他の大学とあまり変わらないと思いますが、大人や親が心配するほど本人たちが心配していないというのがあります。

私も就職活動はしていないのですが、われわれの時代とは全然違って、千社ぐらいにメールでエントリーをして、やっとなつ、二つ、何とか面接に引っ掛かるというふう

なっているので、私たちも指導には困っています。

私は教職なので、教員なんかも勧めるのですが、非常勤や常勤は最近すごく楽に見つかりますが、その先が続かなかったりするので、悲しいかな、だんだん、「一般企業に行きなさい」みたいな指導をしています。本人は、先生になりたいと言うけど、やはり、ぎりぎりになると、できないかもみたいなのがあります。

一応、一昨年ぐらいからカリキュラムを変えて、一年生からキャリア基礎ということで、就職意識を高めさせようというカリキュラムにしています。今まではしていませんでしたが、プレゼミと就活のオリエンテーションみたいなのをドッキングさせて、「こっちも出ないと必修のゼミの単位はあげないよ」みたいな感じにして勉強をさせています。

「自分は銀行は関係ないから、この授業には出ない」とか言うけど、結局は共通することもたくさん教えられるので、そういうふうにガイダンスの出席率を上げようと。

調査者 なるほど。一般論としては、就職活動が大学の授業のさまたげになっていると、しばしば報道でも耳にします。今の話を伺っていると、就職活動をうまく授業に絡めていこうという取り組みなのかなと受け止めました。

回答者 そうです。

調査者 就職活動と授業、特に卒業論文の指導ですが、その関連について何か気を付けていることとか、学生の実態などを教えていただけないでしょうか。

回答者 はい。卒業論文は選択になっています。ご覧になったと思いますが、もともと、ゼミ論（文）はずっと各ゼミで書いていました。でも、うちの大学は雑多な先生方が多いので、私たち教育学部は絶対に卒論を書かないといけないのですが、経済学部や法学部の場合、卒論は書かなくてもいいということで、統一できませんでした。各ゼミにお任せで、ゼミ論が必要と思えばゼミ論を卒論として書くし、必要ないという先生は書かないということでした。

ですが、大学院に行きたいという学生もいますし、特に留学生はそういう気持ちが高いので、大学院に行きたいという人向けに、選択として導入しました。

特に私が指導した学生がこれぐらいいますが、教職は、やはり、卒論を書かないと学校の先生になった後で大変なので、書くように指導しています。だから、「一般企業に行くけど卒論も書く」という学生は少ないと思います。大体、卒論は書く時期が後期じゃないですか。前期のうちにもう内定が一つ二つ決まっている学生が、卒論に取り組むというかたちになります。卒論があるから就職活動に影響があるというのは、逆じゃないです。

調査者 少し話がさかのぼりますが、そもそも、こちらの学科では卒論の設置がなかったと。これは、国際コミュニケーション学科が、たくさんのバックグラウンドの先生が来ていて意思統一が難しかったということが大きな理由ですか。

回答者 そうです。だから、ゼミ論としては、今までもずっと書かれていた先生もあります。卒論というかたちになってからは、ページ数とか、大体これぐらいの分厚さみたいなのを統一して、それが書ける自信があるようなゼミの学生は卒論を申請して書く。その代わりに、主査・副査が付いて、普通の大学と同じように審査して、卒論発表会があって、そこで合格になったら単位をあげるという感じです。

でも、そこでもし単位がもらえなくても、ゼミ論としては成立するので、卒業ができないということはないです。

調査者 それは卒業研究という科目ですか？

回答者 卒業研究はまた違います。「特別研究」という授業の科目になります。

調査者 別の科目なのですね。

回答者 はい。

調査者 そうすると、卒論としては、単位は2単位とお答えいただいています。また、平成22年度の卒論の選択者は135人中2人という回答をいただきました。先ほど、教職の履修者とか、大学院に行きたい学生、あるいは留学生に卒論を勧めているという話がありましたが、実際に平成22年度については2人という数が出ています。

回答者 そうです。大体それぐらいしかしません。つまり、卒業にはあまり関係なくて、四年の後期にはやらないといけないので、よっぽどやる気のある学生でないと思わないです。留学生だったり、このうちの1人も教職を取っていた子ですが、教職生だったりです。

この2人は、藤岡（寛己）ゼミという歴史・社会・政治学のゼミに入っていますが、政治学の先生は卒論を書くのを前提にゼミに入らせるので、もう本人たちは、二年生でそのゼミを選んだ時点から卒論は書くものと思っています。その代わり、そのゼミを選ぶ子は少ないです。卒論を書かなくていいという先生のところにどっど行く傾向があります。

調査者 でも、基本的に、学生は全員、どこかのゼミには所属するのですよね。

回答者 ええ、ゼミ論は書かなくてはならないことになっています。ただ、その場合は、あまり規定がありません。簿記・会計ゼミとかもあります。その子たちは、簿記検定に受かることが至上命題なので、ゼミ論というのはその奮闘記みたいな感じになったりとかもあるじゃないですか。英語ゼミだったら、論文ではないけど、ガイドブックを訳すとか、「一応かたちにはしなさい」と言っていますが、何文字何行以上とか、そういう教育学部なりのものとかはなかなか出せません。

引用の仕方も、私なりに指導しても、私の副査になった先生は文学部の先生で、脚注と引用を分けなければいけないとか、いろいろ細かく違うので、なかなかそれが統一できません。

調査者 わかりました。今、卒論の話に入ってきていますが、先ほど、選択制で科目を変えたということについては歴史を伺いました。卒業論文を書かせる、書かせないという意味でも、書いたほうがいいということ伝えるけれども、その中で実際に書く学生は限られている。政治学のゼミは例外ということでしょうけれども。

自由記述にもいただいていますように、先ほどから繰り返し出ていますが、とにかく、バックボーンがばらばらなので制度として統一したものはなかなか難しいということですね。このご回答をいただいているとき、あるいはその後、この辺の卒論の扱いというものの扱いについて、一つの基準を作って、卒論というものをもっとしっかりやろうという感じといった意見交換等はされていますか。

回答者 結局、卒論を書かせるというと、コマ数と関係なく指導しなければいけないので、教員の負担が増えます。だから、どれだけ意欲のある先生が付いてきているかみたいなことになります。政治学の先生とか、私は教職の学生にはいつも言っていますが、それは強制はできないから、結構書かせましたけど、そうでない先生とかは、「ゼミ論でいい」みたいな感じになります。

手続きが面倒というのもあります。いつまでに申込書を出さないといけないとか、レジ

ュメを書かないといけないとか、副査も立てないといけない、審査も厳しくなるみたいな
があるので。

調査者 アンケートに回答いただいている中で、数年前にカリキュラムの改正をして卒論
を設置した理由として、「教育水準の向上を目指すため」と、「卒業時における学生満足
度の向上を目指す」という二つの選択肢に「○」を付けられています。

今の話ですと、どちらかという、卒論の制度とか、数が実際に増えないという意味で
は教員の負担が大きいということですが、教育水準の向上を目指す、卒業時の学生満足度
の向上を目指すという回答をいただいていることそのものについては、今までの話と違う
観点があったのですか。

回答者 本当のことを言うと、大学院を作りたいという希望がありました。大学院に行く
ためには必ず卒論が付き物です。土台が土台なのでまだ作れていませんが、そういう気持
ちがあったので、教育水準を向上させる、大学院に至る学生を作りたいということです。

一期生で教職を取っていた学生を、九大の大学院に進学させたりとかもしていました。
その当時は選択もなかったですが、その子には、卒論を一応、ゼミ論として書かせました。
卒論を書かないと大学院には行けないじゃないですか。学生たちが、卒業したあと、「苦
しいけれど、書いてよかった」と言ってくれていたもので、制度化しようということになっ
たわけです。

そのときは先生方もみんな燃えていたので、「おお」とか言っていたけど、実際に、自
分が何人に卒論を書かせるかとなると、なかなかです。大体決まっていて、政治学の先生
か、教育心理学の大里（栄子）先生か、私かみたいな感じです。他の先生でもあと何人か、
教職を取っている先生は卒論を書かせました。

調査者 そういう意味で、教育水準の向上を目指すとか、卒業時の学生満足という話だと
いうことですね。ありがとうございます。ちなみに、先ほどの、先生たちの負担が増える
のは嫌だという話に関連してですが、先生方は、授業の事実上のノルマは何コマぐらいで
すか。

回答者 専任と特任がいますが。

調査者 専任の方は。

回答者 半期で7コマです。

調査者 特任の方は。

回答者 大体5から6コマです。

調査者 仮に卒論の指導を頑張ろうとすると、コマ数とは別にプラスとなる・・・。

回答者 そうです。それプラス、高校訪問とか、いろいろあるからです。

調査者 先生方は、そういうもろもろの仕事を引くくめてですが、「忙しいな」という
感じは持っていないですか。

回答者 皆さん、持っています。

調査者 その辺について、もしコメントを、実態について話を伺えればと思います。

回答者 ただ授業を流すだけで済むのなら、そんなに忙しくないかもしれません。特に私
は教育学をやっているので、授業にだけは手を抜きたくないわけです。学生も、90分間寝
かしたくないじゃないですか。では、授業の準備も周到にしないといけないし、レポート
も、書かせたらそれをチェックしないといけない。私は、学生より、一番予習・復習をし

ているのではないかと思うぐらいです。

ゼミ形式の授業もあります。私は、小学校の認定試験の勉強会というのをキャリア演習の授業の中でやっていますが、それも、当然、私も一緒に解かないといけないのです。ただ、解いて「○」を付けるだけではなくて、説明をしないとイケないです。そこまで勉強したうえでやって、私より点が悪い学生がいるとむかつきます。それで、また、尻をたたいて、「来週までにはちゃんと調べていいから、解いてきなさい」みたいな。

そういう手の掛かる学生は、どちらかという、増えていく一方です。前は5コマでよかったのが、6コマになり、7コマになり、もうそろそろ8コマになるかもみたいな状況になっています。学科長の仕事とか会議もいっぱいありますよね。

調査者 そうですね、管理系のお仕事が。

回答者 教職は2人ですけど、お一方の心理の方は学生相談室で取られているので、基本、私1人でしないといけない。国際教育だから、日本事情の授業も私がやっていますが、留学生の日記を毎週20名分、赤でチェックを入れて返しています。しなくてはイケないことではないですが、やはり、留学生の最初の半年は私が面倒を見るので、きちんとさせたいという気持ちもあって、そういうことをしているとキリなく忙しくなるというのがあります。

調査者 そうすると、先生方の中でも、ある意味の負担感というのは結構差があるのですか。留学生の面倒を見るとか、ボランティアベースのお仕事をやられているとなると、そういう差はありますか。

回答者 あります。やはり、やっている人、やらない人。どこにもあるように、やっている人にいっぱい仕事 comes という構造があります。私は、実際、学科長ですよ。でも、年齢的に見て、学科長はもっと年上だと思いますよね。なぜ私が学科長をするかというのを察していただければ、わかると思います。もっと年上の先生がいらっしたんですよ。そういうことです。でも、やらないと回らないからというところがあります。

調査者 なるほど、わかりました。卒論絡みの話に戻ります。数年前にカリキュラム改革をしたということです。話を伺っていると、先生方の中で、「やったほうがいいのではないか」ということでおそらく検討されているとは思いますが、実際に、「カリキュラムを変えよう」という提案とか、履修の規定のようなものを作ったりとか、そういう発案、具体化、それを決定するプロセスにおいて、ほとんどの仕事は先生方だけでやられているのでしょうか？よく最近、職員側で言われている、「教職協働」のようなかたちで、職員からの提案とか、協働の作業をしたりとか。もっと別に、経営者からのある意味の圧力のようなものがあってそれを進めていたのか。そういう種類というか、実際のところ、どういうかたちで進められてきたかを伺いできればと思います。

回答者 最後です。

調査者 経営者からの。

回答者 はい、全部そうです。

調査者 具体的に伺ってもよろしいですか。どういうかたちでのアプローチが？

回答者 新設大学は、4年間はカリキュラムをいじれないですよ。まず、4年済んだときに、もともと、うちの大学は、国際コミュニケーション学部国際コミュニケーション学科で、国際文化系と国際ビジネス系に分かれていて、この国際ビジネス系を学科に立ち上げ

ようということでした。ビジネス学科みたいなのを作ろうと思ったのですが、それが頓挫してしまって、学長が辞めて、今度は福祉系を入れようとなりました。

心理系の先生方が中心になって、アメリカに行かれた先生ですが、臨床福祉とかをやろうということになりましたが、それも、理事会が、「だめ」と言って、最終的になぜか、メディアで行くということになって、メディア情報学科ができました。

教員は、結構反対していました。違和感がありました。「文化系の学部になぜ？」という感じです。実際に立ち上げてみると、やはり、情報系の大学が近くにあることもあって、そんなに集まりませんでした。また、文化系のメディアということでしたが、なぜか理科系の先生ばかり来られたので、学生も入ったら、「何か違う？」みたいな感じになっていました。それで、最終的にメディアをなくすという判断を、また理事会がしました。

私たちはずっと反対していたけれど、定員割れとは言いながら、結構コンスタントに学生は来ていたので、これでもいいかと思っていましたが、「いや、統合する」ということになりました。その上、「統合するのだったら、英語だけをさせなさい。もう中国語、韓国語は要らない」と言われて、「あれ？」みたいな。「でも、ここは福岡だから、中国語、韓国語で売らしましょう」みたいに言って、すごくもめました。私も、そのとき、作業部会の一員でしたが、結構、事務局長から怒鳴られて、「でも、中国語、韓国語は要る」と固守しました。今、韓国ブームになったので、韓国語を勉強したいという学生が一番多く来ています。

結局「アジアを重視しろ」と言ったのも理事会ですし、「メディアを作るぞ」と言ったのも、「メディアを廃止するぞ」と言ったのも全部理事会の意見です。

調査者 理事会には、教員の方は参加しているのですか。理事で教員の方はいますか。

回答者 学長がいます。

調査者 他の学長は入られているんですかね。

回答者 短大の学長もメンバーの一人です。今回の学長は、初めてうちの教授がなりました。それまでは遠くから理事長の知人とかを連れてきているので、全部、ほぼ理事会寄りの方です。留学生はすごく多いのですが、理事会は、「留学生は赤字になるから入れるな」と言われました。

調査者 学校というか、法人の歴史としては結構古くからある学校でのようで・・・。

回答者 そうですね。短大が長い。短大は、音楽とか、食物栄養で結構有名でした。でも、短大もやはりなかなか厳しいので、4大を作ろうというふうになって、九大の経済学部の学部長だった方を呼んで、国際ビジネスというかたちで立ち上げました。そのあと、ちょっと決裂された。尖閣諸島と同じで、上のほうのあれで下々が翻弄されているという感じです。

カリキュラム改革は、そういうふうには上意下達ですけれども、具体的なところは、もちろん、教員にもまかされている部分はありますが、語学も、本当はフランス語とか、ロシア語とか、イタリア語とかもありましたが、そういうのも非常勤で雇うから無駄だと削られました。「英語を中心にしなさい。韓国語、中国語はもう要らないだろう」みたいに言われて、「いいえ、必要です」と言って頑張りました。

今は、英語は12単位ありますが、韓国語、中国語は、一応、10単位ずつで、残り2単位はどこかから取らないといけないことになっています。今回の改革で次回からは全部12単

位です。つまり、英語も中国語も韓国語も同列に学べるようになります。

もちろん、現代英語コースがあるので、専門的なところは、英語の子はしっかり勉強するけど、アジアは、教員数が少ないというのがあって、アジア、言語、文化まで入れないとコースとして成り立たないというのがあります。それでも、大学から勉強して結構よく話せるようになります。少人数のいいところですよ。

ここで韓国語を学ぶ、中国語を学ぶじゃないですか。（大宰府）天満宮の参道で、中国人観光客とか韓国人観光客に梅ヶ枝餅を売るわけです。ここで習ったのをそこですぐ使えます。留学生も、中国人、韓国人なので、そういう意味では、中国語、韓国語のほうが使うチャンスが多いです。結構びっくりするぐらいにレベルが上がります。中国の大学院に進学した子もいます。

調査者 そうですか。ホームページ等を見ると、実学系とか語学教育をうたわれているということで、今、英語、韓国語、中国語という話がありましたが、カリキュラムの表を見ると、いわゆる外国語科目は選択必修の括りに。

回答者 そうです。中国語か、韓国語か、英語を第一外国語として選ぶことができます。

調査者 そういう意味で、選択必修ということですね。

回答者 そうです。英語を選んだ子は、英語を12単位みたいな感じですよ。

調査者 そうすると、必ずや、第一外国語、第二外国語的なものをしっかり身に付けて卒業していくという解釈でよろしいですね。

回答者 そうです。多分、よその大学よりは必修の単位数は多いと思います。他は8単位ぐらいでいいと思いますが、12単位もあります。

調査者 そうですね、語学としては多いですね。わかりました。先ほど、カリキュラム改革は、ある意味、上意下達、理事会の動きが相当強いということですが、職員は、そのプロセスにおいて何か実務とか、提案とか、そういう動きがありますか。

回答者 職員？

調査者 ええ、事務職員ですね。

回答者 事務職の方は、教員ほどあからさまに理事会に盾突くことはないです。教員は、先ほども言ったように、結構結束が固いので、嫌というときは、「嫌」と教授会でも言います。教授会で言おうと、理事会のほうが上なので、どうせ流されてしまいますけど。

調査者 現場のカリキュラムを作るときに、例えば、今回、「英語あるいは第二外国語は選択必修にしましょう」という形で話が進むようなときに、「こういうこともやられたらどうですか」という提案が職員からありますか。例えば、語学で、うちの学習院大学の例だと、文学部の学科改編をするときに、自分が実務をしていましたが、事実上、ある語学の科目が取れないと、形としては進級するけれども4年で卒業できないことが決まってしまうという、履修規定上の見えない部分なんかがあったりして、それでは、やはり学生はかわいそうだし、「どうせだったら、進級条件みたいなものを明らかにしていきませんか」みたいな提案をして、実際のカリキュラムに反映させたことがあります。そういうようなレベルでの事務職員のかかわりみたいなものはありますか。あまりないですか。

回答者 私は教務委員もしているので、教務の中ではそういう話をお互いにしています。でも、私から上げるかな。もしあったとすれば、教員から上げる。

調査者 どちらかという、コミュニケーションを取る会議単位の手前のレベルかと思

ますが、そういうところでのやり取りという意味では、職員との協働というのがありますか。

回答者 もちろんあります。こういうふうにしたのを、例えば、教職の申請とかだったら、ある程度私が固めたのを出して、それをフォーマットにきちんと入れたりするのは職員の仕事だったりします。

調査者 はい、わかりました。何でそんなことを聞いているかという説明が足りなかったと思います。今、教職協働が、SD（スタッフ・ディベロップメント）なんかでの一つのテーマでありますけど、実際のところどうかなというのを違う角度で確認したかったので質問させてもらいました。

回答者 理事会に所属するのが、うちは学長ですが、事務局長も入られています。

調査者 もう1人、事務局の方が、参与とかいう肩書の方が入られています。だから、2人入られているのでしょうか？

回答者 ああ、はい。だから、どっちかという、うちの大学は、事務局員は強いです。カリキュラム全般のこととか、細かいことは言われなくても、理事長には教員より印象がいいので、時々意見が通るようです。中国語や韓国語をなくして英語のみを強調するという話になった時に「うちの学生のレベルとかニーズからしても、それは嫌だ。同列に並べたい」と言いました。その際、事務局の方が「でも、絶対に英語は勉強させたい」とおっしゃるので、「では、12単位中何単位ぐらい勉強させればいいのか」と伺うと「そうですね、4単位ぐらいかな」と言われました。

調査者 それは、事務局の職員に？

回答者 事務局の職員に。そんな、アバウトな、理論もへったくれも何もないところで言われても困るじゃないですか。でも、どうしようもないので、2単位分だけ絶対に英語をこなさいということにして、10単位ずつは確保しました。今度、その2単位も戻そうとしています。

その次の年からは、向こうは気が付かないんですけど、残りの2単位は、中国語の子は絶対に英語を取らないといけなかったんですけど、韓国語を取ってもいいというふうに変えました。英語であろうと、韓国語であろうと、「残りの2単位は好きなものを取れ」みたいに変えました。今度は、12単位は全部一つの外国語で、ただし、2単位分ぐらいは別の外国語を取ってもいいようにしようと、今思っています。

事務的に、「これはこういうふうにされるとちょっと困ります」みたいなことはあります。教員は、どうしても新しくカリキュラムを変えとなると、たくさん、これもやりたい、あれもやりたいとなるので、「こんなにされると困ります」みたいな、そういうネゴシエーションとかはあるかなと思いますが、具体的に、「これはどう？」という提案はないです。「先生が考えられて、でも、先生が責任を持って」みたいな感じです。

調査者 なるほど、わかりました。ちょっとこれは抽象的な質問の仕方になってしまうと思いますが、大学を卒業するには、「学士（何々）」という学位名が付きますね。こちらですと、学位名が調べている限り登場しなかったのですが・・・。

回答者 コミュニケーション学士になります。珍しいです。これを売りにしています。

調査者 実際の教育、あるいは卒業していく姿を見たときに、学士というその学位そのものに何か特別な意味を持たせているかということとか、あるいは、それに対する課題、つ

まり、学士課程教育、学部教育をしているの現状での課題とか、そういう学位名との関連で意味付けとか、実態にそういう課題があるとか、そういうご意見をいただければと思います。

回答者 うーん・・・、これは、私は教職課程なのでちょっと違うかもしれませんが。教職課程はみんなまじめに頑張っているし、最終的に教育実習も行くので、コミュニケーション力は学士を与えるに足る資質は備えて卒業すると思います。

一番感動するのが、「先生として実習をやって先生の苦労がわかった。竹熊先生、今までありがとう」みたいに言ってくれると、「おお、4年間よく頑張った」みたいなことになります。全員が全員、そうなっているかと言われると、私もちょっと自信がないです。

もともと、コミュニケーションをやりたいと思って来た子が多いので、資質の差はあります。「どうしても、心にいろいろあるから、人と全然話せないけど、何とか話せるようになりたい」という形で来る子がいたり、もうそんなのへっちゃらで、「外国の人とも恋人になりたい」みたいなオープンな子もいたりするので、それぞれですが、それぞれに合った形です。

もともと、「コミュニケーション」に関する科目をたくさん用意したうえで、自由に選択させていました。けれどもそうするとやはり、4年間何をやったかといったら、「いろいろやったけど、何やったっけ？」みたいなことになってしまうじゃないですか。いろんな、いわゆるアメリカ式の「お好きなのをどうぞ」みたいになると、いろいろつまみ食いをするけれども、自分の興味・関心でつまみ食いをするのではなくて、何曜日の何限にこれがあるから取るみたいになって、いつの間にか、何のためにという形になるから、コースを作ることになりました。できるだけ英語を頑張りたいとか、アジアに特化したいと。

それもコースなので、学科と違うので、38単位とか取らないといけないのですが、トータル124単位の中の38単位なので、実際は別のコースもつまみ食いできるわけじゃないですか。だけど、「僕はアジアを頑張った」とか、「自分は国際社会コースで公務員試験の勉強をした」とか、「ビジネスで簿記検定を頑張った」という自分の頑張りの一つでもあるようにしたいと思って、コースを作っています。

だから、いろいろな形のコミュニケーション学士がいます。これもまた、一口では言えないけれども、そういうことを目指しています。それがどうなるかはわかりません。

調査者 語学教育は比較的順調にしているという話が、先ほどありましたし、簿記のような子もいて、資格を取ることが至上命題になっているという意味では、カリキュラムに照らし合わせると、大学が与える学士という学位そのものとしての評価はあってもいいだろうというふうには？

回答者 そうですね。そう思います。これが文学士とかになると、ちょっと違うかもしれないですけど。ただ、どうしてもわかりにくいし、いつでも、高校訪問をしたら、「コミュニケーションって何するんですか」と言われて、一言で答えにくい部分もたくさんあります。直訳すると、ただ単に、「人と人との意思疎通」ということにしかならない感じですね。

だから、今回は、ライフスキルというWHOが出したものを持ってきて、「ライフスキル教育だ」みたいなことで言っていて、サバイバルスキルみたいなものですよ。そういう、社会人になっても使える、人と人との交流のノウハウを教えるみたいな。

体験的に、カリキュラム、授業だけではなくて、要するに、エクストラカリキュラムも含めて一貫して4年間教えるみたいなのをやろうとしています。今までしていなかったかという、していましたが、意識してやろうと。

調査者 その、やろうという、ライフスキル教育をしようというのは、教員の皆さんの発案ですか？

回答者 そうです。教員の発案です。だから、来年度、新カリキュラムになったらもうどんどん導入されますが、今年から前倒しで、例えば、先生とのつながりです。もともとあるのですが、授業を教えてないと、なかなかつながりませんよね。今年、スタンプラリーというのをやって、「4人ぐらいの先生と話してスタンプをもらってこい」と。私の部屋にも期限の7月末には列を作って、「先生、スタンプください」と、そんな感じで来ていました。

調査者 学生との接点を増やそうという意味での努力は、いろいろされているということですね。

回答者 はい。合宿があったりとか。

調査者 ゼミ単位での合宿とかそういうイメージですか？

回答者 一年生の人たちに、6月ぐらいに泊まり込みの合宿を。

調査者 新入生に。

回答者 はい。グループの。プレゼミというのがあるのですが、そのクラス内のグループを崩して、それ以外の人間関係も作ってもらおうみたいな取り組みをしてみたりとか。成功したかどうかは、まだ成果が出ていないです。学生たちは、「楽しかった」とは言っていましたけど、「楽しかった」イコール「成果」とも言えないので。

調査者 ありがとうございます。比較的わかりやすくお話をいろいろいただいて、なかなか学校や学科によってのカラーの違いもあって、今日の話で言うと、どちらかというと、経営者側の意向が比較的強く反映されている中で、皆さん方が、おそらく、学生の教育を考えていろいろ努力されていることがよくわかりました。

回答者 そうですね。

調査者 実際に、特に先ほどの理事会という話を踏まえてですが、学科改編等があつて、国際コミュニケーション学科という1学科になっているということ踏まえると、学科として、もともとが短大のいろいろな専攻というか、学科があつて、発展的に大学を作られたと。過去の歴史を考えるとですけども。

おそらく、4大に期待するところは、もちろん経営側としてはあると思いますが、コミュニケーション学科的なカリキュラムとしては、いわゆる文学部とはちょっと離れているので、場違いな質問かもしれませんが、学科名として見たときに、文部科学省の学校教育調査のジャンルで言うと、こちらの学科は、人文科学系というところにまとめられています。学科名の名称上ですが。そういう実態と、世間一般で言う、「文学部が役に立たない」という話に対してご意見ご感想があれば伺いたいなど。実際の学科の現状とはちょっと違うかもしれませんが。

回答者 人文科学系というと、現代英語コースとアジア言語文化コースかなと思います。いわゆる、シェイクスピアを読むとか、そういうことはしていなくて、通訳演習であるとか、リスニングとか、ディスカッションスキルとか、使う英語を中心に教えています。

アジアのほうも、もちろん通訳もありますし、文化とか、アジア経済とかも教えるかたちでのアジア言語文化コースなので、そういう意味では、より実学志向の教育を行っているということがあります。

就職に関して言えば、アジアが今一番あります。英語が使えるのは当たり前すぎて、TOEICも、うちの大学の目標は600点で、本当に準2級ぐらいのレベルから入って600点というところ結構すごいです。ただ、伸び的にはすごく伸びていますけれども、600点だと英語での就職は普通あり得ないのです。最低でも700点とか、900点とかが求められます。

でも、アジアというと、少しでも話せると、結構、貿易関係とか、旅行社とかがあります。フライトアテンダントとかそういうのも、中国のエアラインに就職したとかいうのがあります。JALなんかはあり得ないじゃないですか。パンパシフィックとかはもっとあり得ないです。けれども、そういうのがあるので、結構、自分の専門を生かした職種というのでも可能性的にはあるのかと思います。

調査者 ありがとうございます。事実上単科大学になっているということ踏まえたうえでの話ですが、大学全体の経営というか、学生数の確保とかというところを見ると、正直言うと、短大も含めてですが、定員割れが続いている状況にあるようです。

その辺で、また、先ほどの話と同じように、経営側から、「何かしろ」というような圧力が今後あり得るかだと思います。逆に、先生方が、職員もある意味そうあってほしいのですが、定員割れをしていることに対する現状をどのように考えていて、今後、改善を図ろうと。

改善策も、頑張って入学者を増やそうという発想もあり得るでしょうし、あるいは、定員を一度減らすというような、縮小均衡を考えるというのでも経営的には考えられると思います。ある意味、そこは先生方の生活がかかわるわけですが。

そういうことに関しては、先生方の立場から、何かご意見とか、実際の行動とかいうのが、具体的に何か出てきていますか。

回答者 入学定員は年々減少しています。開学当初は365人の定員でしたが、今は120人です。また、入試広報課に若手の職員が入ってからfacebookを立ち上げ、頻繁に更新するなど新しい試みも行うようになり、とても好評です。ただ、それがどれだけ入学者増につながるかはわかりません。

調査者 募集停止も絡んでいるでしょうが、4大のほうは、毎年、収容定員そのものは下がってきているようです。

回答者 そうですね。

調査者 短大も若干減っているようです。昨年の事業報告書を読むと、短大の食物栄養科をベースに学部を作ったらいいのではないかというコンサル結果が出たものの、結局そこには手を付けられずというようなコメントが載っています。

回答者 そのとおりです。

調査者 そうすると、先ほど話に出てきた、当初、4大を作るときに似たような話があって、また、もう1回やってみたら、やはり、短大の食物栄養科がある程度売れているので、それをベースにいかがですかという、同じような提案が十数年たってまた出てきたような感じでしょうね。

回答者 そうです。最初から何でしなかったんだと、みんな怒っていました。だから、福

岡国際大学ではなくて福岡農業大学にしておけばよかったのにと、みんな揶揄していました。

結局、農学部系の先生なので、文学系のことを全くご存じなくて、教員はのんびりしているとか、働いていないから高校訪問ぐらい行かせろとか言われます。でも、私たちの研究というのは本と向き合うものなので、もちろん研究室で本と向き合ってもいいですけど、学生がいっぱい来るから、自分の研究があるときは図書館に行くとか、自分の自宅でとか、それは当然権利としてはいいと思いますが、だけど、論文は書けというわけです。経費節減で、夏休みは来るとか。

調査者 冷房代とかですか。

回答者 そういうのもあるし。「では、どこで研究すればいいんですか」みたいなことがいろいろありました。もちろん、理科系は、来て研究して初めてということがあります。

もう一つ、卒論も絡むのですが、私たちはコミュニケーション学科なので、卒業論文が選択ですが、デジタルメディア学科というのがあります。今、四年生が最後の学生ですが、彼らは卒業制作というのが必修で、4単位分確保されています。彼らは、必ずコンピュータを使ったいろいろなものを作らないといけない。だから、うちの大学のホームページの中国語バージョンとかは、学生が作ったものをそのまま……。先生がチェックして作ったり、「FIU通信」とか、新聞を作ったりとかやっています。

調査者 話を聞いている限りでは、現場の先生方は頑張っているのに、理事会がいまいちな感じですかね。

回答者 全く協力的でないという印象ですね。学生の実態を見て、中国語や韓国語も必要だと思ってくれているわけではなくて、「やっぱり、英語が世界共通語じゃない？」みたいな。それはそうです。だけど、うちの学生に、「英語を絶対に学べ」と言うと、今、中国語、韓国語を第一外国語にしている4、50人の学生が全く来なくなるわけです。どうするんだと。

「どうしても英語が全く苦手という子たちは、中国語や韓国語を第一外国語にしていいよ」と言って、勉強させる。やってみると、面白い。すぐそこにあるので、船に乗って韓国に遊びに行行って使ってみた。「ああ、面白い」と。韓国人は英語をよく話す。「じゃあ、やっぱり英語も勉強しよう」みたいなかたちで英語に戻ってきてくれるというのが、私たち教員としての理想です。

そういうので、今まで、大学で学んで初めて自信がついて、ほかの科目も、もう1回勉強し直したいと思うところです。結構そういう学生も多いです。

調査者 そういう中で、先生方が、ある意味、ボランティアベースのものも含めて頑張られているというところで、教育効果全体が担保されているだろうということが今日よくわかりました。

回答者 あ、そうですか。

調査者 でも、なかなか厳しいですかね。いろいろと。

回答者 小さな大学の中で。逆に、そういうふうに理事会が反面教師としているので、教員が結束するというのがあるかもしれません。「自分たちで頑張らないと。潰したくないから」みたいなものもあるのかなと。

だから、学生から、教員に対してあまり悪い評価はないです。食堂が汚いとか、この坂

道を何とかしろとかいう批判はよくありますが。あと、事務職員に対しても、特に会計とかは、お金を払っても、「ふん」みたいな態度で取ったりするのは、よく文句が出ていますけど、学生課とか、教務課とか、一番接するところの職員は、さすがに私たちと同じ気持ちを持ってくれているので、すごく好評です。

調査者 なるほど。本日は、お忙しい中、本当にどうもありがとうございました。

付録 5

学科長インタビュー調査④

(2013年10月25日実施)

藤女子大学 文学部 文化総合学科 学科長 渡邊 浩 教授
インタビューアー 篠田 雅人 (学習院大学人文科学研究所客員所員)
日下田 岳史 (東京大学大学院教育学研究科博士課程)

調査者 まず、こちらの文化総合学科さんの歴史を簡単に振り返りたいと思っているのですが、学校の沿革のほうとか、先ほどこちらでいただいたパンフレットと、ホームページの情報も見ました。簡単に、2000年に短大から改組されたときにできあがった学科と確認していますが。

回答者 短大というよりも、短大もかかわっているんですけども、一般教養を廃止して専門へっていう時期がありましたよね。

一般教養の解体ということで、一般教養の教養部の改組っていうかたちで誕生したのが文化総合学科です。私自身は改組と同時に来たものですから、それ以前の事情はよくわかっていないですけども、私が来たときに、短大の最後の学年が残っている状況でした。

私の1年目で短大の学生が卒業して、短大はそれで廃止というかたちになりましたので、恐らく、一般教養のほうは、短大・4年制含めてという組織だったのかもしれないです。ですので、一般教養の改組に伴ってできた新学科と考えていただいても構構だと思います。

調査者 2000年ということなので、1990年以降の、短大から4年制大学という時代の流れと同じ感じだったということですね。

現在、いろいろなタイプの学生さんがいらっしゃると思うんですけども、あるいは、いろいろ変化はしてきていると思うんですけども、先生からご覧になって、学科の学生の特徴というのをお感じになるところをお話いただければと思います。

回答者 そうですね、今の学生にある程度当てはまることかもしれないですけども、まじめに大学に来る学生が多いです。出された課題については比較的一生懸命取り組む、けれども、その枠を超えて、自分で何かもっと発展的なこととかということになると、少し弱いのかなという。「こうしなさい、ああしなさい。こういう課題をやりなさい」ということに対しては、比較的まじめに取り組む学生が多いという気がしています。

調査者 地元の方に伺ったら、こちらはお嬢様大学だという話を聞きまして、そういったところはどうかでしょうか。雰囲気っていう意味で言うと、のんびりした学生さんが多い、お嬢様大学というところもそういう話もありますけど。

回答者 確かに、カトリックの大学で、かつてはそういう傾向があって、今も、きっと、今通っている学生よりもそのお父さん・お母さん、保護者の方の世代だと、そういうイメージがより強いのではないのかと思うんですね。

正直な話、レベル的にもかなり高い時期がありましたので、そこから見ると、学生の気質は随分変わっていると思うんですけども、それでも、どちらかというところ、まじめにこつこつとって感じの学生が多いかなと。あるいは、女子大ということもあるのかも

しれませんけど、学内でも挨拶をしてくれる学生が比較的多いかなという印象ですかね。
調査者 一方、学科の先生方の雰囲気はどのような感じか、ざっくばらんなお話を聞かせていただければと思います。

回答者 そうですね、恐らく、文化総合学科のメンバー構成が反映しているんだろうと思うんですけども、言ってみれば、文学部の場合は、英語文化学科と日本語・日本文学科がありますけども、もちろん、厳密に言えば違うわけですが、外から見ると、「皆さん英語の専門家ですよ」とか、「皆さん文学とか日本語の専門家ですよ」と言えるわけです。

それに対して、文化総合学科の場合は専門分野が違いますので、いろいろな先生が、むしろわからないことを互いに聞き合うようなところがあります。ですので、比較的協調関係のいい学科ではないかなと思います。何かを進めるといったときに、比較的意思統一がしやすい学科ではないかというふうに思います。

調査者 理想的ですね。

回答者 恐らく、学生のほうも、外から見てそういうことをわかっているのかなと。ですから、「文化総合学科の先生方って仲がいいですよ」とかっていうことをよく聞きます。

調査者 なるほど。では、今、皆さんのお話をお伺いしましたけれども、回答者先生ご自身の経歴、学生時代の経験等をお伺いしたいと思います。ホームページにプロフィールが若干紹介されていて、青山学院大学出身ということで読ませていただきましたけれども、もう少し具体的に、特に学部生時代に限定して、学習、課外活動等の経験や感想等、どのような学生生活を送られたか簡単にお話しただければと思います。

回答者 大学院は青山学院なんですけれども、私の専門は、西洋史のキリスト教史とか教会史の分野なんです。当時、今野國雄先生とおっしゃる教会史の草分け的な方がいらっしゃいまして、それで大学院は青山学院に行ったのですが、学部は埼玉大学だったんです。

そちらでも、岡崎勝世先生という、講談社の現代新書とかを書かれている先生なんですけれども、その方にお世話になって、比較的、西洋史の割と広い視野を教わって、さらに、教会史であればということで青山学院に進んだということなんですけど、学部時代といいますが、今の学生とはだいぶ違っていて、あまり大学へは行かないほうだったと、恐らく周りもそうだったと思います。

比較的、図書館等で自分で勉強しているというか、授業の中でも選んで出て、自分でそれに関するような本を読んでいるとか、そういうことのほうが多かったと思います。

調査者 非常に研究嗜好が強い学部生時代だったと。

回答者 といいますか、好き嫌いで、好きなことしかやらなかったっていうほうかもしれないです。

調査者 そのような学部あるいは大学院に進まれて、今は大学教員になられていますが、なぜ大学教員になったのか、何かターニングポイントですとか、これをやりたいというのがあってなられたということでしょうか。

回答者 そうですね、西洋史を勉強して、中世という時代に関心を持ってということもあって、ラテン語とか・・・。ラテン語は中世の時代の史料の言葉なんですけども、学部生の時代から履修していたわけです。大変難解な語学で、どうしてこんなものが読めるようになるんだろう、読めるわけじゃないじゃないかと思っていたんですけども、接しているう

ちに少しずつ読めるようになって、となると、千年前に書かれたものとかが読めるわけです。そうすると、そういうものをもう少し読んでみたいというのが大学院に行くきっかけだったと思うんです。

ですので、最初から研究者を志望していたっていうよりも、もう少し何かやってみたい、せっかくなにかラテン語なので、当時の人がほんとに書いたものを読んでみたいというところが研究に進むきっかけだったろうと思います。

調査者 大学院に進まれたあと、そのあとはすぐ大学の先生になられたのでしょうか。

回答者 そうでもないです。マスターで3年、ドクターのほうは最低年限3年で6年までいられますので、籍は6年間あると思います。そのあとに、研究生としても2年あると思います。その頃から、高等学校、大学等の非常勤をやりながら、学会発表とか、あるいはそれを論文化したりして、評価してくれる方がぼちぼち出てきて、それで、そういう方たちから非常勤の世話をいただいたり、研究職に入っていったのはそういう人たちです。

調査者 こちらに赴任されたときは？

回答者 専任としては最初です。ですので、文化総合学科が始まったのが2000年ですから、専任として、今14年目になるのかな。それまでに、非常勤のほうは、出身校である埼玉大学、青山学院大学のほかに、東京学芸大学とか、千葉大学、あとは敬愛大学かな、いくつかかせていただいて。

調査者 藤女子大学で言えば、正確な呼び方はわかりませんが、学科主任、学科長という役職に就かれるまでは、いわゆる学内行政や〇〇委員といったいろいろ細かいお仕事もあっただろうと思いますけど・・・。

回答者 そうですね、一つは、カトリックの大学ですので、キリスト教文化研究所っていう研究所があります。それは学科と違って、教授会の下にあるような組織ではなくて全学的な組織なんです。私の専門がキリスト教史っていうこともありますので、こちらに着任してからずっと研究所のメンバーになっています。ですので、学科主任になって、掛け持ちは厳しいということでやめさせていただいたんですが、学内業務としては、その前の3年間は所長というかたちでやっていました。

それから、学科の業務としては、ずっと忙しいところをやってきましたんですけども、こまごまとしたいろいろなことはありますけれども、メインなところだと、教務部の委員と入試部の委員ですかね。恐らく、どちらも4年ずつはやっていたと思います。

調査者 着任されて、比較的、そういうものをずっとやっているような感じですか。

回答者 そうです。着任して最初の2年ぐらいは、学内の事情もわからないだろうということで、紀要委員とか、比較的楽といいますか、そういう仕事だったんですけども、学内のことがわかるためには一般的に教務の仕事をしなさいと、それから、外との関係がわかるためには入試のことをというような。大体2年ぐらいで交代するのが通例なんですけど、主任の交代とか、連続性ということがあって、どちらの場合も異例の状況で2期ずつやることになっちゃったんです。

調査者 ちょうど入試という話も出ましたので、ここから先は、調査者のほうから入試がらみの話を質問させていただきたいと思います。

回答者 はい。

調査者 すみません、入試の話の少し前に、今、教務であるとか、学内のさまざまご

経験をされたということでした。教務、教育、研究の三つが、大学の先生としての主たる業務かなと考えています。教育研究と大学の学内分担は、現状ではどういった時間配分の比率になっていますか。

回答者 恐らく、学内業務、教育、研究っていう順番だと思います。

調査者 学内業務が一番多い。

回答者 そうですね。今、たまたま主任っていう立場にありますから、特に学内業務というところが大きな割合を占めることがあるかもしれませんが、全体的に言って、学科のほかの先生を見ても、研究が一番上に行くっていう方は今はないんじゃないかと思うんです。三つ同じぐらいですよっていう方はいるかもしれません。

でも、学内の業務は、入試とかそういう問題になれば、入試日程とか年間のスケジュールで動いていきますので絶対にやらなければいけないし、それから、教育について言えば、卒論が必修になっていますし、目の前に学生がいますので、そちらもおろそかにはできないと。どこにしわ寄せが来るかっていうと、やはり研究分野が一番来ているっていうのが現状かなと思います。

調査者 理想的にはどういった時間配分を希望されていますか。

回答者 そうですね、研究と教育はどちらも同等であるべきだと思っているんです。そうすると、例えば全体を「10」とすると、研究・教育が「4」・「4」、学内業務が「2」くらいが理想なのではないかっていう感じです。

調査者 それでは、先ほどお話のあった入試についてお伺いしたいと思います。

2011年にいただいたアンケートでは、1ページ目の「問1-E」のところで、さまざまな入試の形態を実施されているということでした。この入試によって、藤女子大学が期待する学力を持った学生の選抜にうまく成功しているのかどうか、アドミッションポリシーのと通りの学生が確保できているのかといった辺りのご所見について、差し支えのない範囲でご意見をお伺いしたのですが。

回答者 2011年の段階ですよ。

調査者 はい。

回答者 そうですね、このときは、センターはまだ入っていなかったのかな。

調査者 そうですね、回答としては空白だったので、なかったかと思います。

回答者 ちょうどセンター入試が決まって、このあとにすぐ始まったくらいかもしれませんね。

調査者 ホームページの情報で見ますと、センターを利用した入試は2011年度スタートのようです。この回答をいただいたときが2010年でしたので、その後からということのようですね。

調査者 替わり目のところだったんですね。

回答者 そうかもしれませんね。そうですね、比較的、それまでの制度で学生は集まっていたと思うんです。希望する学生から大きくはずれることはなかったと思います。

ただ、全体的に少子化の問題が進んでいましたから、高校さんのほうからすれば、特に推薦入試のようなものは、きっと、その線でぎりぎり入れるか入れないかっていう受験生を入れたっていうのが本音でしょうし、あるいは、受験生の数が減ってきますので、だんだん倍率が少なくなってくるっていうか、そういう傾向がありました。

センター試験を導入したのも、うちなどはセンターの導入は遅いほうですから、一つは、ほかの大学に倣って受験の多様化しているということもあるし、あるいは、国公立を受験する受験生はセンターを受けていますので、もともと併願はありましたけれども、そういうことも考えてセンターを導入したってということがあると思うんです。センターを導入してからは、比較的センターでも生徒は確保できていると思います。

調査者 推薦A0を巡りまして、高校からの要望についてお話があったかと思います。推薦入試、A0入試はさまざまな意見が出てるところかなと思います。例えば、肯定的な意見としては、高校生の多様な活動を評価できると。他方で、批判的な意見としては、学力が低い、あるいは青田買いになって勉強しなくなると、結果、大学でも期待されるほどのパフォーマンスが獲得できていないのではないかと。甲乙両論、いろいろあると思います。

特に、この推薦系の生徒に限って言えば、先生自身はどういった考えをお持ちでしょうか。

回答者 A0も、やり方によってはいいのかもしれませんが、きっと、教員の負担がかなり大きくなると思うんですよね。そういう意味では、私たちはA0まではできないだろうと。

推薦ですけれども、推薦入試のほうは試験が間もなくあります。受験生側からすれば、早く行き先が決まるっていう状況になりますよね。北海道には（北海道）高大連携フォーラムっていうのがあるんですけど、そういうところで高校の先生のお話を聞いたり、あるいは、教育実習で学生がお世話になったときにお話を聞く機会もあつたりします。

そのときに、早く決まってしまった生徒さんは、学習意欲がそんなに高くない、モチベーションが維持できない。けれども、同じクラスの中に、2月の本入試に向けて、あるいは1月のセンター試験に向けて勉強する生徒がいると。

そういった意見を聞いていることもありまして、前々から、推薦入試制度が始まったときから課題というものは出していたんですけども、今度で3年目ぐらいになりますかね、特に、文化総合学科だけだと思うんですが、そちらに少し力を入れるっていう方向を取っています。

一つは、高校によっては、推薦入試である程度決まってしまう生徒もかなりの比率でいらっしゃる。大学側としては、推薦入試によって、受験生といいますか、学生を早く確保できるっていうメリットがあるんです。ところが、推薦入試で入った学生、一般入試で入った学生、センター入試で入った学生、全くはっきりというわけではないけれども、やはり学力差はあります。

特に、推薦入試で入った学生は、第一志望で入ってくるっていう点はいいいんですけれども、学力にばらつきがあるんです。ですので、課題を出すことに力を入れると申し上げましたが、入試は、日本語、国語に当たる試験と、英語に当たる試験で選抜をしているんです。それで英語と日本語両方の課題っていうことなんですが、日本語についてはブックリポートを書かせるっていうかたちで行っているんですけども、ただ出せばいいというものではなくて、提出させて、それを返却して、書き直させるっていうことを2回やっています。

調査者 それは、大学入学前ですか。

回答者 大学入学前です。私が言い出しっぱなしなものですから、私がこういうふうにと

言った手前やることになったんですが、大変は大変です。

ただ、ブックリポートといっても、高校生のほうからしますと、リポートといっても要領がわからないんですね。それで、結局、ある本の一部だけを読んできたり、ちんぷんかんぷんなものを書いてきたりするのであれば、最初から本のリストを渡して選ばせようということになりました。

各教員が1冊ないし2冊挙げて、そのリストを渡して、各教員の指定した本について、例えば、章ごとに質問事項を付けたりして、それでその章を理解させるようなかたちです。言ってみれば、ヒントを与えたいうで、章ごとに内容を把握させて、全体を紹介させるというような感じです。それを踏まえたいうで、単なる誤字の訂正だけでもいいんですけども、できるだけ「ここが足りません」というようなコメントを付けて返すようにしています。

ただ出せばいいんだというのではなくて、とにかく大学に入ったら勉強しなければいけないんだ、そういうところなんだっていうことを、初年次教育との関係っていうのもあるんですけど、そういう気持ちでリポートを出しているんです。英語の課題も、一定の水準をクリアしないものについては再提出というかたちを取っています。

調査者 大変よくわかりました。従来であれば、大学入学後にリポート、試験の答案を提出して終わりという状況が長く続いてきたのかなと思っています。これが、最近になって、学生に添削の結果を返すということが出てきたところだと思っていました。ところが、大学入学前に、そういった双方向の取り組みをされているということは非常に印象的でした。

大学入学前の高校生とのやり取りは、物量的にもかなり大変かと思います。例えば、ティーチングアシスタントですとか、何らかの制度的な支援があるのかどうかということ、そして、その取り組みを開始されてから、大学入学後の変化が何かあったかどうか、その効果の実感ですね、この二点についてご所見をお聞きしたいです。

回答者 大学院とかがあれば、大学院生にティーチングアシスタントとして手伝っていただくってことはあり得るんですけども、現在、文学部のほうに大学院はありませんので、そういうような制度的な手助けっていうか、補助はない状況です。また、推薦入試が11月の2週目ぐらいに終わりますね。合格発表があつて、最終的には、入学手続きがあつて初めて来年度4月から入ってくる学生だって確定するわけです。それが、大体12月の頭ぐらいなんです。

その段階で文献のリストを送るわけです。それで、例えば、こんなふうに書いてくださっていい、先ほどのヒントみたいなものを与えて、そうしますと、1回目に戻ってくるのが1月の半ばとかで、それを見て、さらに、1回目のを返すと同時に2回目のリスト・・・。

2回目も同じ文献なんですけれども、実は、教員の負担がなるべく均等になるように、1回目の負担が多かった教員のリストを2回目は除くとか、そういうことをやったりしているんです。その2回目に戻ってくるのが、今度は3月の半ばとかです。それで、新学期が始まったときに2回目を返却するということなんです。

実際には、学生にとっては、春休み期間中ってというのは授業がなくて比較的楽な時期なんだろうけども、私たちにとって、ちょうど入試がまともにかぶっている時期なんです。ですから、かなり忙しい思いをしてやっているのが現状です。

もちろん、レポートを書くとか、人前で話す、プレゼンテーションを行う、あるいは文献を探すとかいう初年次教育に当たるものは、基礎演習という一年生の時間でやっています。ですから、推薦で入ってくる子たちは、それを少し先取りしたようなかたちでやっていることになるんです。

大変な思いまでしてなぜそこに力を入れるかってというと、実は、卒論が必修ですから、いずれやらなければあとに付けが回ってくるわけです。そういうことがありますので早めに対処っていうことと、勉強するところだと、自分が勉強すれば、4年間で、自分で実現するような自分にある程度なっていけるんだという気持ちを持たせたいというのが大きな理由ですかね。ですから、それをやることによって、一年生の意識は徐々に変わってきているような気がします。

調査者 先ほど、いわゆる一般入試組と推薦入試組では若干の差があるというお話でしたけれども、それは、単純に言ってしまうと学力みたいなことなんでしょうか。

回答者 そうですね。

調査者 今も、推薦組には、事前に課題を課すという誘導で、初年次教育の先取りをしてやっている。そういうことをやってみて、いざ4月にスタートしてみて、半年ぐらいはいろいろあるかもしれませんが、1年を通して結果を見たときに、その差といいますか、学問への取り組み方といったものについては、おおむね同じようになるんですか。

回答者 そうですね、やはり、多少の学力差はあるとは思うんですよね。むしろ学年が上がるほど縮まってくるのではないかっていう気がします。入学から卒業までの追跡調査っていうのはシステムの的に始まったところなので、まだ印象でしか言えませんが、モチベーション的にはそうですね。推薦の子はもともと第一志望で来ますので、ただ一生懸命やるんだけど、ちょっととんちんかんな方向を向いていたり、そういう子はいたりするんだけど、逆に、いろいろ面白い子もいるっていうのはあるんです。

学力差は、一年生の間は多少残っているとは思いますが、いろいろな取り組みで、総合的に見ると、少しは縮まっているのかなっていう面もあるかもしれません。

調査者 なるほど。入試の話から、入学後の基礎演習から始まるカリキュラム的なものも少しお伺いしましたけれども、もう少し実際の中身に移らせていただきます。こちらの学科では、四年生のときに卒論を必修で提出するというご回答をいただいています。

カリキュラムは、ホームページで簡単に見てはいますが、改めて、ホームページだけではうかがえない部分も含めて、一年生の基礎演習から始まって、四年生の演習、ゼミ、卒論というところに至るまでの学科のカリキュラムの構成のようなものを、簡単にお話いただければと思うんですが。

回答者 これがカリキュラム表です。

調査者 ありがとうございます。

回答者 一応、科目自体は「180」ぐらいあるのかな。系列は、一応四つになっているんですが、コースではありませんので、たくさんある授業を整理すると、この授業は異文化コミュニケーション系列の授業であると、これは社会と制度系列、歴史・思想系列というふうに、学生はどこか一つの系列の授業をやるっていうのではないんです。

一年生のときには、語学と、藤女子大学はキリスト教の学校ですので、聖書・キリスト教関係の宗教科目の必修があります。それから、文化総合学科の場合は、各系列から入門

科目というものに該当する一年生開講のものが4単位ずつと、それから、他学科のクラスター科目っていうのがあるんですが、ちょっとややこしいんですけど、それを取りなさいと。そのほかは、大体自由選択になっていると思います。

基礎演習については、前期・後期別々のセメスターの2単位・2単位になっているんですが、これは、前期と後期の担当の教員を代えることになっています。一つは、いろんな専門分野に触れてほしいと。それから、もう一つは、基礎演習っていうのは、表の目的としては、基礎的な事柄、大学に入って勉強していくための基本的なスキルを身につけることです。先ほど申し上げた、レポートを書くとかプレゼンテーションをするとか、あるいは文献を検索するとかレジュメを作るとか、一応、それが表向きなんですけど、教員の側からすると、学生ケアっていう問題があります。つまり、一年生にゼミがありますので、来ていない学生はすぐわかります。ある意味では、高校のホームルームに当たるような機能を果たすっていうことになって、前期・後期で担当教員を代えますと、1人の学生を複数の教員が知ることになるし、逆に学生のほうからすると、何か悩み、学習上、勉学上のこと、あるいは学生生活のこと、そういうパイプ役を、前期・後期の先生どっちかでも果たせるっていう意味がありますので、そういう意図で基礎演習っていうのを置いているっていう面があります。

大体、やる内容については、専任が全員持っていますので、均等に割れば、一つのゼミに8人ぐらいっていうことになるんですが・・・。

調査者 今先生が12人いらっしゃるの、そうですね。

回答者 しかし、教職の先生もいらっしゃる、持っていませんので、そうですね、10人弱ぐらいになりますかね。教員10人で、学生は定員が「80」ですけども、「85」から「95」ぐらいの間で落ち着くことが多いので、そうすると、均等でいって、一つのゼミに10人弱です。

しかし、実際には偏るわけですね。モチベーションが下がってしまってもいけないので、なるべく希望どおりにしています。

そういうこともあって、実は、前期・後期で入れ替わってもらうことがありますよ。つまり、前期・後期入れ替わることによって、少し均等化するっていうことをやっているんです。専門は、それぞれ教員が違いますので、あくまでもその先生の専門に合わせたものを素材に、さっき言った、基本的なスキルを勉強しましょうっていうのが基礎演習の狙いです。

それから、二年生、三年生ですけども、ここがちょっと他大と違うかもしれませんが、実は、二年生・三年生が合同のゼミになっています。四年生が、卒論のための独立したゼミになっています。そうすると、二年生、三年生については2学年に及びますので、ゼミによってはどうしても人数が多くなるっていうことがあります。

あとは、履修上の特徴としては、時間割が重なっていない限り、複数のゼミが取れるというかたちにしています。例えば、一年生のときに、基礎演習は前期・後期で別な授業を取っていますよね。そうすると、学生にとっては、日本史がやりたいから、前期に日本史のゼミに登録して、でも、後期は別なことをやろうかなと思って国際関係論のゼミを取ったと。二年生になって、どっちをやっているかわからないし、両方にも興味があるとか、場合によっては、何かテーマを持っていて、生命倫理みたいな問題とか、安楽死みたいな

問題とかに関心があるといったときに、倫理のほうにもかかわるし、法学のほうにもかかわるなんていった場合には両方のゼミをかけるとか、そのほうが望ましいんですけども、そういう学生がいないわけではない。

そうすると、二年生のときには、複数に関心がある、あるいはどっちで行こうかわからないとか、両方にかかわるとか、そういう場合には複数のゼミを取りなさいっていう指導をしています。

それで、三年生くらいからは、卒論に向けて自分のテーマを絞っていくっていうことを考えてくださいねっていうことで、三年生のほうではなるべく一つに。四年生になると、三年生の1月に、あくまで仮なんですけど、卒論の仮題目っていうものを提出します。そうすると、実質、四年生のゼミがそこで決まるっていうことになります。

調査者 ありがとうございます。卒論の話に入らせていただくんですが、1枚ページをめくっていただいて、ご回答いただいています「問2」で、「必修ですか、選択制ですか」っていうことをお伺いさせていただきました。

こちらの学科では必修ということをお答えをいただきまして、「サブクエスチョン6」という下のところにお進みいただきたいんですが、90年以降、卒論という科目の設置状況の変化として当てはまるものとして、設置なしから必修にされたというご回答をいただいています。2000年に学科ができたときには、そこは必修ではなかった、ということでしょうか？

回答者 必修です。

調査者 そうしますと、この「設置なし」というご回答は・・・。

回答者 学科がなかったからっていうことではないかと思えます。

調査者 もし、なかったものを途中で必修にしたんだっていうことであると、そこにも何か理由があったらうっていうこともありまして一度お伺いしたかったのですが、そういうことですね、わかりました。

では、なぜ学生に必修で卒論を書かせるかっていうことなんですけども、今までにいくつかのエッセンスはお話しいただいていますが、なぜ必修で頑張ろう、書かせようとお考えになられているのかをお聞かせいただきたいと思えます。

回答者 自分で課題を見出して、自分で解決策を探していくっていうんですか、その力をつけてもらうってのが一番の目的です。文学部ですから、実学的なものではないし、ここで勉強して、まさしくぴったりこの職業に当てはまるってようなものがないと思うんです。だけれども、あまり言葉はよくないかもしれないけれども、汎用性っていうことを言われます。汎用性、つまり、どういった状況にあっても、自分で課題を見つけて取り組んでいける学生を育てたいという意図ですかね。

あとは、卒論があるってことは、学生にとってはモチベーションを高める意味があります。全員必修としてありますので、1年生のときからゼミもありますし、卒論を書かないと卒業できない、一応、自分は卒論に向けてテーマを見つけていくんだというモチベーションをみんな持っています。ですので、何のために卒論を書かなきゃいけないんだっていう声はほとんど聞いたことがないですね。

調査者 なるほど。2000年に学科ができて14年目ですけど、大きな意味でのカリキュラム改革っていうのはあったんでしょうか。

回答者 何年だったか、一度、カリキュラム改革を行いました、内容はそんなに変わっていないと思います。

調査者 基本的には同じカリキュラムでやられていると。

回答者 そうですね。先ほど申し上げましたような、一年生基礎ゼミの前期・後期、2単位・2単位でやるとか、あるいは二年生、三年生が4単位・4単位で、あるいは複数ゼミ履修科でやるとか、卒論が四年生で独立してあるとか、そういうところは変わっていませんね。むしろ、変わったのは枠組みかな。これは制度的な話なんですけど、いろいろな学内事情とかなんですが、要は、大変多くの非常勤の先生に来てもらっています。それに、大変ぜいたくなカリキュラムです。

文化総合学科は、開講している授業数、単位数が突出して多いのではないかとということがあって、減らしなさいっていう方向に動いたことがあるんです。そのために、例えば歴史の基礎演習でしたらば、かつては「西洋史の基礎演習」、「日本史の基礎演習A」、「日本史の基礎演習B」ってあって、そうすると単位数が「4」、「4」、「4」、計「12」ですよ。それを、「歴史基礎演習」という一つの科目にまとめちゃうと「4」と少なくなるんですね。

そんなことをやったり、あとは、文化総合学科の非常勤率が高いんじゃないとか、開講数が多すぎるんじゃないかという学内事情があったんですが、実は、文学部はオープンカリキュラム制で、他学科の学生が受けられるんですよ。文化総合学科の開講科目を、ほかの学科の学生がどういうふうに履修しているのかっていうことを見ていったときに、確かに文化総合学科では非常勤の先生も大変多いし、開講科目も多い。でも、蓋を開けてみると、他学科の学生も非常に多く取っていて、これは文学部全体に役立っている面があるなっていうのがわかって、文学部としても、そのことを了解したっていうんですかね。

それで、テクニカルな面をちょっといじったくらいで、何も変わっていないのが実情です。ですから、基本内容はほぼ変わっていないとさせていただいて結構です。

調査者 ちょっとナーバスな部分ですが、経営的な観点で、非常勤が多いとか、科目数、単位数が多いんじゃないか、というお話は誰から指摘が入ったのでしょうか？

回答者 そうですね、やっぱり学長側ですね。しかし、先ほど話したような事情で納得いただいたっていうかね。もともと、ただ非常勤率が高いっていうんじゃないくて、学科間で格差があるとか、均等にそろえたほうがいいんじゃないかとか、そういう配慮だったのかなと思うんですよ。

調査者 法人の理事長といった経営サイドではなく、学長の指摘だったというのは・・・。

回答者 学長も経営サイドと考えていいと思います。でも、経営的っていう話ではないですね。つまり、経費がかさむので減らしてくださいっていう話は、これまではなかったと思います。ですので、大学によっては、例えば、開講して、履修者数が少ない場合、何人以下は開講しないということも聞いたこともあるんですけども、今のところ、藤女子大学ではないですね。

調査者 比較的、理想に近いようなかたちで、現場でやりたいカリキュラム・授業をできている。

回答者 そうですね。

調査者 それはうらやましい環境かなと思います。はい、ありがとうございます。4年間、

こういう学習をして、卒論を書いて卒業していく学生は、最後に学士という学位を取得するわけですが、こちらの学科では、「学士」という学位が何を意味するかっていうところについて、何かお考えがございませうか。

回答者 そうですね、難しいですね。ただ、先ほど申し上げたように、4年間で学ぶことによって、自分で課題を見つけて取り組んでいけるっていう、つまり、私たちとしては、学生たちが、皆それぞれ意欲的に生きていける力をつけてほしいなど。そういう意味では、大学の4年間で学ぶっていうのは、将来にかかわる関心、興味、将来にわたって持ち続けるような知的な関心っていうんですかね、そういったものを身につけてもらいたい。

だから、そういう意味では、学士っていうのは、自分で生きていく力とか、あるいは自分で学問的な関心を育てていく素養といったものを身につけましたっていうことなのかなと。あるいは、卒論を書くということがありますので、少なくとも、自分で取り組んだ課題はやり遂げたと。

調査者 意欲的に生きていくというのは、私もそのとおりでなと思ったところです。学生は、大学を卒業すると就職が控えていると思います。藤女子大学の中での学生の就職活動、いわゆる就活の取り組みの一般的な傾向、特徴についてご所見をお伺いできないでしょうか。

回答者 そうですね、就職課の方に聞いたほうがいいのかもしれないけれども、どうなんですかね。就職課がいろいろなサポートをしていますので、それに従って、こつこつとそれに取り組んでいるのかなっていう印象は受けますね。

調査者 就職課のサポートがかなり手厚いということは、裏を返しますと、教員の方々、先生方が何かケアしなければいけないだとか、学生が授業に出てこなくて困るとか、そういった不都合は特段生じないんでしょうか。

回答者 そうですね。教員は、就職のことまではなかなか面倒は見られないし、そういうことがもともと不得手な人たちの集まりっていうところもありますので、就職については就職課に任せているところが多いですね。

ただ、もちろん、ゼミが独立してありますので、卒論のゼミですので、7人、8人とか、多くても13人、14人とか、年によって、多いゼミはもっと多くなったりする場合もありますけれども、そういう中での話ですので、もちろん、うまくいかないという話を聞くことはあります。でも、過去の例から見て、最終的によかったっていう学生は、それでも10社、20社と落ちていることもあります。落とされると、「自分は必要とされていないんじゃないか」と言うので、「そういうことはないから」って励ましたりっていうことはあります。

あとは、実は、欠席して困るっていうことについては、四年生が独立したゼミなので対応がしやすいんですよ。例えば、私のほうのゼミであれば、一応、報告の順番を回していくっていうかたちでゼミの運営をしています。ところが、就活がありますので、突然来られなくなったりということがあるので、最初から複数の報告者を入れておいて、最初から2人来られなくなるとか、そういうことは織り込み済みの状況で運営していきます。

それが、三年生・四年生のゼミだったらそうはいかないと思うんですよ。場合によっては、誰も来られなくなりましたといったらば休講にします。補講という対応を取ります。だから、四年生の卒論を独立したゼミっていうのは、そういう就活には比較的対応しやすいかなと。

それで、カリキュラムを1回変えたときに、三年生・四年生に卒論とといいますか、今は二年生・三年生が一緒ですけども、三年生・四年生のほうがいいんじゃないかと。つまり、三年生・四年生のメリットっていうのは、卒論を書く勉強をしている先輩の姿を見る、それも大事だろうという考え方もあったんですけど、最終的には四年生を独立する方法で落ち着きました。

調査者 もともとの状態でいようっていうことですね。

回答者 そうです。

調査者 そのような四年生を独立させたゼミの運営と就職活動が、欠席する学生が多少いるにせよ、全体としては円滑に運営できているというご認識なんではないでしょうか。

回答者 そうです。あとは、ゼミの中での友人関係とか、それも大きいんじゃないですかね。

調査者 就職活動といえ、これほど時間に伴って変化してきたものもないというのは、多くの方が思っているところかなと私は思っています。先生が学部生のときは、周りの同期のご友人と、就職活動をしながら、卒業論文を書きながらという時代だったかと想像するんです。先生が学部生の頃の就活と卒論との関係の雰囲気をご記憶の範囲で教えていただけないでしょうか。

回答者 私も友人も、就活ってほとんどしていないんですよ。少なくとも、今言っているような就活、就活という時代ではなかったような気がしますね。もちろん、企業さんからダイレクトメールが来たりはしていました。ですから、恐らく、普通に就職しよう。私は、どういう道に進むにしても、もうちょっと勉強してみたいなっていうのがあったので就活はしなかったんですけども、今とはだいぶ違うという印象と、あとは、先ほども、「先生、就活をしていないから、学生にアドバイスできることはないよ」という状況で、ちょっと経験がないので、なかなかお話できないです。

調査者 お話を伺っていると、ゼミの運営と就職課のサポートと、非常に適切に連携が取れているのかなという印象を受けまして、よい組織だと思いました。

回答者 ただ、一応、卒論を書くためのゼミなので、少なくとも、卒論のことを聞かれたら、何が面白いのかをちゃんと説明できるようにしなさいということには言っていますね。

教員の立場からすれば、大学っていうのは、アルバイトをする場ではなくて勉強する場なので、とにかく、勉強については、卒論のテーマっていうのは仮題目で出して、それに向けて動いている段階ですから、今どういうことを自分の課題としていて、今どういうことをやっているのかとか、それが人事担当の人にわかるように言いなさいと。細かい話をしても、きっと、おじさんたちに何を話すかっていうことになるよって。

でも、直接は結び付かないことが多いんだけど、エジプト史とか古代のことに關して調べていた子は、人事の方と大変盛り上がったと言って、JTBに入っていた子がいます。そういうことはまれにあるかもしれません。

調査者 なるほど。これはデータがあるわけではないかと思いますが、就職活動の面接で、「卒論、何やっているの、何勉強しているの？」っていうような質問は、比較的聞かれるという声は多いですか。

回答者 どうでしょうね、そこまでは聞いていないです。でも、恐らく、大学で何をやっているかっていうことと、就職課の方の話だと、大学の4年間で何に取り組んだとか、あ

るいは勉強以外で何に取り組んだかということは聞かれますよと、ちらちらと入ってくることはあります。

調査者 実は、今回のこの調査ではなくて、同じプロジェクトで、学習院大学の文学部の卒論を出したあとの四年生に調査を行ったところ、「就職活動で何を勉強しているか、卒論のことを聞かれましたか」という質問をしたのですが、結果としては、半数以上が「聞かれなかった」という回答でした。

回答者 そうですか。

調査者 確かに、自分は文学部ではないですけども、何を勉強しているのかっていうのを聞かれた面接はそんなに多くなかったと記憶しているんです。そうすると、大学で勉強したことが、社会に出るにあたって何を評価されているのか、あるいは企業は何を知りたいのかっていうところで、自分はさほど思わなかったんですけど、今の学生は、そういうギャップをすごく感じている部分があると思います。

そういうお話を学生から聞いたことがあるということであれば、モチベーションを維持させるために、どういうふうなアドバイスをしますか。

回答者 テーマ自体は、就職につながるテーマではないですよ。けども、その過程で学ぶことが大事だと思っていますので、どういう職種に進んでも、そこの仕事に就いたら、仕事で解決しなきゃいけない課題とか、あるいは、逆に、こういうところを意欲的に改善していけばこうなるんじゃないかっていう問題を見いだしていく力とか、卒論に取り組むことでそういうものがつくと思うんです。

ですから、千年前のヨーロッパのことをやって、それが企業で直接生きるなんていうことはまずありません。逆に言うと、そういうことをやっている子たちが私のゼミには多いので、就職との関係で言うと、むしろ、資料集めの方法だとか、そこから何を考えていくかとか、そういうことも勉強だと思っている子が多いかもしれないですね。

調査者 先生のゼミの出身、卒業生に関して言うと、おおむね就職をして、その後、働き続けている子が比較的多いのですか？

回答者 そうですね。

調査者 女子大出身というと、将来的には結婚等々のターニングポイントはあると思うんですけども、今のところは働き続けている学生が比較的多いのですか？

回答者 多いんじゃないですかね。ただ、うちの学科ですと、まだ最初の卒業生が今いくつだろう、そでも30歳くらいになるのかな。そうすると、もちろん結婚している学生もいますけれども、働いて、社会で一生懸命活躍している学生もいますね。

調査者 藤女子大学の全体を見たときでも、すぐはないにしても家庭に入りますっていうような旧来型の発想ではなく、働いていきましょう、社会に出ていきましょうという傾向は比較的強いんでしょうか。

回答者 どうでしょうね。統計的にどうなっているのかっていうのは、藤女子大学の場合どうなっているのかって、なかなかわからないですけども、でも、うちのゼミについて見ると、結婚してからも同じ職場で働いている学生はいますし、とにかく仕事でっていう学生もいます。

北海道の場合どうなのでしょう、統計的に見ても結婚年齢が遅かったような気がするんですけど・・・。

調査者 わかりました。今、少し話が出ていた部分ではありますが、こちらの学科を卒業していく学生に対しての期待と、実際に、4年間授業を通して学習していったところで、カリキュラムに沿って勉強をしっかりとやらしてもらおうっていうことをされていると思うんです。そういったところとの関係性を見ながら、卒業生に対する期待というものと、実際についてお話をお願いします。

回答者 そうですね、なかなか難しいのは卒業してからのコンタクトっていいですか、こちらから積極的にコンタクトを取っているわけではないので。むしろ、コンタクトを取ってくる学生のほうからすると、そういう子たちは、自分なりに充実した生活を送っている子たちなのかもしれないなっていう気がしますね。

調査者 学生の頃も頑張っていたような。

回答者 ええ。卒業して、就職して、学生と教員だった付き合いが、今度は企業と大学っていう付き合い方になったりする場合もあるんですね。例えば、一期生で大日本印刷に入った子なんかは、こちらのいろいろな同窓会報みたいなものを作ったり、そういうことで来たり、あるいは、彼女の場合は必ずしも印刷だけではなくて、むしろ、大日本印刷で広告代理店的な仕事をしている者で、例えば、資生堂と組んで就活メークというものを企画しているんですけども、どうですかというふうに持ってきてくれたりね。

そういう意味では、学生時代、ここで学べたっていうことが、ある程度自分にとってよかったっていうのがあっていろいろな話を持ってきてくれるということがあるのかなと。

ただ、就職がうまくいく子、いかない子っていうのはどうしてもいますよね。能力もあるし、ただ、卒業するときの経済状況なんていうのが大きくかかわってきますので。そうすると、どの子は今どうしているかなとって心配するような子がいないわけではないですね。

調査者 長い時間ありがとうございました。これで最後の項目にさせていただければと思います。一般論として、「文学部は役に立たない」という意見は巷にあふれているところかと思えます。「文学部は役に立たない」という意見に対して、回答者先生の所感を最後にお伺いしたいと思います。いかがでしょうか。

回答者 そうですね、それは何をもって役に立つか立たないかっていう、きっと、仕事に直結するようなものがないってことで役に立たないっておっしゃる方が多いんだろうと思うんですね。ただ、法学部を出てすぐ弁護士になるとか、経済学部を出てみんな会計士になるとか、そんなことはないわけです。もちろん、お医者さんになるとか、薬剤師になるとか、栄養士になるとか、そういう方は、大学に入ったところで仕事がほぼ決まるってことがあると思うんですけれども、文化系に関して言えば、文学部でも法学部でも経済学部でもそう変わらないだろうと。

つまり、大事なのは、大学を出て、ある部署、ある職種に就いたときに、いかに応用力が利く能力を持つのかと考えたときに、文学部が不利だっていうことはないと思います。だから、大事なのは、むしろ、どの学部に限らず、卒論という経験をやっているかやっていないかっていうことが大きいような気がします。

あとは、抽象的になってしまうんですけれども、大学において知的な関心を持ってもらいたいんです。仕事にかかわる以外の生活っていうものがあるわけですから、そういったときにそれが自分の励みになるようなものが、それこそ生きる力なのかなと思うんですよね。

そういうものを身につけてほしいですね。そういう意味では、文学部は決して劣っていないし、むしろ、将来にわたって自分はどういうふう生きていこうかとか、そういうモチベーションを作っていくのには、悪い学部とは思いませんね。

調査者 実は、最後の「問10」に卒論の現状ですとか、今後の在り方について差し支えなければご意見を、という自由記述欄がありまして、（当時の学科長の）イシダ先生がこう書かれているんです。一番最後のほうです。「今後も卒論は必要だ。しかし、一方で、1人にかかる時間は増加する傾向にあって、負担は増大している。でも、やむを得ないか」ということです。

今、先生からもお話がありましたように、それでもなお卒論の意義は大きいというお話がありましたので、われわれとしてもそう考えて研究を進めていますが、皆様の教育の現場でもぜひ頑張ってくださいと思います。今お話をお伺いしていて、卒論がときますか、卒論を書くに向けてのプロセスとか経験が大きいのかなと思います。

また、このあと、ご縁がありましたらいろいろ教えていただくこともあればというふうに思っておりますので、その節はよろしくお願ひしたいと思います。当初予定していた時間よりも長くなっているのではないかと思います、ほんとに申し訳ございません。ありがとうございました。

調査者 ありがとうございました。

回答者 はい、こちらこそ、どうもありがとうございました。

（終了）

文学部卒業予定者の学生生活と卒業論文・卒業研究に関する調査

2012年1月

学習院大学人文科学研究所共同研究プロジェクト
「人文系学士課程教育における卒業論文がもたらす学習効果の検証」

- 本調査は、皆さんのこれまでの学生生活や卒業論文・卒業研究への取り組み方をお聞きし、本学部の今後の教育のあり方を考えるための基礎的データを得ることを目的としています。
- 学習院大学文学部の本年度の卒業予定者全員を調査対象としています。
- 回答はすべて統計的に処理され、他の目的で使われることはありません。
- 本調査の結果は、学術的な観点から一部公表される場合があることをご了承ください。

【提出方法】2月13日（月）までに、次のうちいずれかの方法で提出してください。

- ①学科事務室に設置している専用の提出箱に提出する。（この場合は、返信用封筒は使わないでください。）
- ②専用の返信用封筒に入れてポストに投函する（切手代はかかりません）。
※入試期間中（2月7日（火）～10日（金））は学科事務室に入室できないため、②の方法をとってください。

n=603

※以下の結果は訂正されることがあります。なお無回答（NA）の割合の表記は省略しています。

●はじめに、あなたに関する基本的なことがらについてお聞きします。

Q01 あてはまる番号1つに○をつけてください。Cのみ（ ）内に数字を記入してください。

- A. 性別 27.0 男性 72.6 女性
- B. 所属学科 15.9 哲学科 14.8 史学科 19.9 日本語日本文学科 18.1 英語英米文化学科
6.8 ドイツ語圏文化学科 10.4 フランス語圏文化学科 14.1 心理学科
- C. 入学年 西暦（ 3.3 ～2006年 6.1 2007年 88.1 2008年 2.5 2009・2010年）
- D. 本学部入学にあたっての入試方式
- 57.0 一般入試 6.1 男女高等科からの進学 24.9 指定校推薦入試 7.5 公募制推薦入試
0.8 海外帰国生入試 0.5 外国人学生特別入試 0.5 社会人入試 2.2 編入学試験

●大学入学時点までのことがらについてお聞きします。

Q02 高校時代のあなたについて、あてはまる番号1つに○をつけてください。

	とてもあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
A. 積極的に本を読んでいた（マンガを除く）	22.9	35.7	28.4	12.9
B. 作文や小論文など文章を書くことが得意だった	11.9	33.8	34.5	19.7
C. 勉強方法は暗記中心だった	28.9	44.3	21.4	5.5
D. どの科目でも学校の授業内容は理解できていた	14.4	50.2	28.5	6.5
E. 授業で分からなかったところは自分で考えたり調べたりした	17.4	50.4	27.0	4.8
F. 大学進学後の学費や生活費のまかない方について親と話し合った	15.3	29.0	31.8	23.9

Q03 大学に入学した時のあなたについて、あてはまる番号1つに○をつけてください。

	とてもあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
A. 今の学科を強く志望して入学した	53.2	31.3	11.4	2.3
B. 今の学科にどのような教員がいるか調べて入学した	14.1	26.7	32.3	26.7

●大学入学後の学習（卒業論文・卒業研究への取り組みを除く）や課外活動等についてお聞きます。

Q04 あなたは大学の授業にどのくらい意欲的に取り組みましたか。授業時間外の予習や復習の時間も考慮して、科目分類ごとにあてはまる番号1つに○をつけてください。

	とても 意欲的だった	やや 意欲的だった	あまり 意欲的でなかった	全く 意欲的でなかった	経験しなかった
A. 基礎教養科目（総合基礎科目）	16.1	53.1	24.0	5.1	0.8
B. 自学科の専門科目（講義）	31.0	55.7	10.0	2.5	-
C. 自学科の専門科目（演習）	37.6	50.4	10.1	0.8	-
D. 他学科の専門科目（講義）	10.6	40.6	26.2	4.8	16.6
E. 他学科の専門科目（演習）	6.5	24.2	18.4	3.5	46.1
F. 外国語科目	25.7	44.1	22.4	5.8	0.8
G. キャリアデザイン関係の科目	3.3	13.6	15.9	6.6	58.4

Q05 あなたは大学入学後、どのような学び方をしてきましたか。各項目についてあてはまるもの1つに○をつけてください。

	とても あてはまる	やや あてはまる	あまり あてはまらない	全く あてはまらない
A. 学術的な論文・書籍や文学作品を積極的に読んだ	13.9	43.3	36.2	5.6
B. 授業で課されたレポート等はしっかり準備して書いた	30.5	46.3	21.2	1.0
C. 暗記によって試験を乗り切るような学習が多くを占めた	10.0	36.0	45.4	7.1
D. 授業内容が自分なりに理解できるまで考えたり調べたりした	12.1	56.7	27.9	2.2
E. 授業をきっかけにして自分なりの関心を形成していった	34.8	53.7	9.1	1.5

Q06 あなたは、課外活動等にどのくらい意欲的に取り組みましたか。各活動について、あてはまる番号1つに○をつけてください。

	とても 意欲的だった	やや 意欲的だった	あまり 意欲的でなかった	全く 意欲的でなかった	経験しなかった
A. 部活動（部・同好会・愛好会）	33.2	16.1	7.0	2.5	39.3
B. サークル活動	21.6	17.9	9.3	2.8	45.8
C. 就職を希望していた業界と関わりが深いアルバイト	11.9	13.6	11.8	5.1	54.4
D. 上記C以外のアルバイト	28.0	36.5	16.4	4.1	11.1
E. 資格や検定のための勉強	16.1	34.3	20.4	8.3	18.4

●卒業論文・卒業研究にすることがらについてお聞きます。

仏文除く n=540

Q07 あなたの卒業論文・卒業研究の執筆経験について、あてはまる番号1つに○をつけてください。

	とても あてはまる	やや あてはまる	あまり あてはまらない	全く あてはまらない
A. 書きたいテーマがみつからなくて苦労した	7.8	27.8	42.6	20.7
B. 教員に指導を受ける機会は十分あった	48.0	39.8	10.0	0.9
C. 就職活動に時間を取られ卒論・卒研どころではなかった	8.9	28.1	33.5	28.1
D. 自分のテーマについて納得いくまで考えたり調べたりした	19.8	52.4	24.6	1.7
E. 卒論・卒研のテーマは卒業後の進路と関係している	10.9	11.5	17.8	58.1
F. 卒論・卒研の執筆に真剣に取り組んだ	44.4	41.3	12.2	0.9
G. 卒論・卒研のできに満足している	8.5	44.6	34.6	11.1

Q08 あなたは、卒業論文・卒業研究を書くときに、以下の点をどのくらい意識しましたか。あてはまる番号1つに○をつけてください。

	とても意識した	やや意識した	あまり意識しなかった	全く意識しなかった
A. 問題設定の適切性	19.8	58.5	19.8	0.9
B. 先行研究をきちんとふまえること	26.7	44.4	25.9	2.0
C. 引用の仕方、文献表の作り方	26.5	48.1	21.1	3.1
D. 一次データ（原典、史料も含む）の利用	24.3	46.9	24.6	3.1
E. 独創性	18.3	41.1	35.0	4.4
F. 論理的な文章構成	21.9	54.8	20.4	2.0
G. 文章の分かりやすさ	27.2	55.0	15.2	1.7

Q09 あなたにとって、卒業論文・卒業研究の執筆はどのような意義をもっていたと思いますか。あてはまる番号1つに○をつけてください。

	とてもあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
A. 学術論文を書くという体験	49.4	41.3	7.0	1.1
B. 学問の奥深さに触れる体験	39.6	42.2	15.9	1.3
C. 専門教育の総仕上げ	32.4	44.4	20.2	1.9
D. 専門分野の知識の深化	34.3	48.1	15.2	1.3
E. 困難なことを最後までやり遂げる経験	49.4	36.1	11.9	1.5
F. 自分の主張を分かりやすく伝える方法を学ぶ経験	32.0	47.2	18.1	1.1
G. 主体的な学習態度を養う経験	33.5	46.9	17.0	1.5

●就職活動の経験や進路についてお聞きします。

Q10 あなたは、就職活動をしたことがありますか。あてはまる番号1つに○をつけてください。

82.3 ある 16.3 ない → 2に○をつけた人は、Q13に進んでください。

Q11 (Q10で1を選んだ人) 就職活動を始めたのはいつですか。	n=496	
	3.0	2010年3月以前
	19.6	2010年4月～9月
	56.0	2010年10月～12月
	13.9	2011年1～3月
	6.5	2011年4月以降

Q12 (Q10で1を選んだ人) 就職活動中、以下のことについて、あなたはどのくらい経験したことがありますか。あてはまる番号1つに○をつけてください。n=496

	よくあった	ときどきあった	あまりなかった	全くなかった
A. エントリーシートに、大学の学習内容をたずねる項目があった	51.0	38.1	8.5	1.4
B. エントリーシートで、あなたが大学で学習した内容をアピールした	31.3	37.3	25.0	5.4
C. 採用面接で、大学の学習内容について聞かれた	32.5	43.5	17.1	6.3
D. 採用面接で、あなたが大学で学習した内容をアピールした	23.2	36.3	30.2	9.7
E. 採用面接で、その企業等は即戦力となる新人を求めていると感じた	18.1	33.7	37.5	10.1
F. 就職活動中、あなたの人格が試されているようだと感じた	56.0	32.9	8.9	1.6
G. 採用面接やOB訪問時に、「大学の勉強は役に立たない」と言われた	4.6	10.1	29.6	54.8
H. どの業種（企業の事業内容）や業界を志望したらいいか分からなくなった	26.8	32.3	22.2	18.1
I. 就職活動を始めた頃から、有名でない企業の会社説明会に積極的に参加した	23.4	34.7	27.6	13.7
J. 良い就職先が決まらなければ、留年してもよいと思った	8.1	15.9	26.6	48.6
K. 就職活動はつらいと感じた	44.6	33.5	14.9	6.5

Q13 あなたの卒業後の進路を教えてください。あてはまる番号1つに○をつけてください。

- 52.4 民間企業に就職（正社員として）
- 5.6 公務員・教員（正職員として）
- 3.0 民間企業に就職（派遣社員または契約社員として）
- 2.0 公務員・教員（非常勤または臨時職員として）
- 0.8 自営業または家業を継ぐ 1.3 パート・アルバイト
- 1.5 専門学校へ進学 7.0 大学院へ進学
- 17.4 未定 7.3 その他（具体的に

3～10に○を
つけた人は、
Q15に進んで
ください。

Q14 (Q13で1または2を選んだ人) 次の時期について、
() 内に数字を記入してください。 n=350

	9.4	2011年3月以前		
A. 企業等から初めて採用内定を受けた時期	16.6	4月	1.4	2011年3月以前
	21.1	5月	6.9	4月
	12.9	6月	16.6	5月
	10.0	7月	19.7	6月
	8.9	8月	14.9	7月
	5.4	9月	12.6	8月
B. 就職活動を終了した時期	9.4	10月以降	8.3	9月
			13.1	10月以降

Q15 あなたは、卒業後の進路についてどのくらい納得していますか。あてはまる番号1つに○をつけてください。

- 43.9 とても納得している 34.8 やや納得している 8.3 あまり納得していない 5.8 全く納得していない

●大学時代にあなたが身につけた知識や能力についてお聞きします。

Q16 これまでの大学生活で、あなたは以下に示すような知識・能力をどのくらい身につけることができましたか。あてはまるもの1つに○をつけてください。

	かなり身についた	やや身についた	あまり身につかなかった	全く身につかなかった
A. 専門分野の知識	21.6	65.5	10.6	1.0
B. 専門分野以外の幅広い知識	14.3	57.4	25.4	1.7
C. 常識にとらわれることなく批判的に考える力	18.7	50.9	27.4	1.7
D. 他者と協力してものごとを進める力	37.1	44.8	13.9	2.7
E. 自分の考えを他者に文章で伝える力	22.2	58.5	16.6	1.0
F. 自分の考えを他者に口頭で伝える力	22.1	53.7	21.9	0.8
G. 自分の適性や能力を把握する力	21.1	56.6	19.9	1.0
H. 目標を立てて計画的に行動する力	26.5	45.8	23.2	3.0
I. 広い視野から人間を探究する力	31.5	51.9	13.6	1.3

質問はこれで終わりです。ご協力いただき、ありがとうございました。

追跡調査へのご協力をお願い

皆様の卒業後のご経験・ご意見をお聞きするアンケート調査を、来年以降に実施する予定です。アンケート用紙をお送りしますので、ご協力いただける方は、下欄にご記入をお願いします。なお、郵便番号と住所は、1～2年後でもできるだけ確実に連絡が取れる見込みのものをご記入ください。（ご記入いただいた個人情報は、当該調査以外の目的では一切使用しません。）

氏名	協力者の割合 29.2% (176名)	郵便番号	
住所			

		全体	性別		学科							
			男性	女性	哲学	史学	日文	英文	独文	仏文	心理	
n		603	163	438	96	89	120	109	41	63	85	
Q1	性別	男性	27.1	100.0	0.0	31.3	48.3	24.4	18.3	22.0	14.3	27.4
		女性	72.9	0.0	100.0	68.8	51.7	75.6	81.7	78.0	85.7	72.6
	学科	哲学	15.9	18.4	15.1	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
		史学	14.8	26.4	10.5	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
		日文	19.9	17.8	20.5	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0
		英文	18.1	12.3	20.3	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0
		独文	6.8	5.5	7.3	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0
		仏文	10.4	5.5	12.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0
		心理	14.1	14.1	13.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0
	入試方式	一般	57.0	74.8	50.7	56.3	53.9	70.0	61.5	43.9	25.4	67.1
		男女高等科からの進学	6.1	4.3	6.8	4.2	11.2	3.3	1.8	2.4	4.8	15.3
		指定公推薦	24.9	13.5	29.0	16.7	15.7	20.8	29.4	36.6	54.0	16.5
		公募制推薦	7.5	3.1	9.1	19.8	11.2	0.0	4.6	14.6	7.9	0.0
		海外帰国生入試	0.8	0.6	0.9	0.0	1.1	0.0	0.9	0.0	3.2	1.2
外国人学生特別		0.5	0.6	0.5	0.0	2.2	0.8	0.0	0.0	0.0	0.0	
社会人		0.5	1.2	0.2	1.0	1.1	0.0	0.0	2.4	0.0	0.0	
編入学		2.2	1.2	2.5	1.0	3.4	3.3	1.8	0.0	4.8	0.0	
無回答		0.5	0.6	0.2	1.0	0.0	1.7	0.0	0.0	0.0	0.0	
Q2 高校時代のあなたについて		A. 積極的に本を読んでいた(マンガを除く)	とてもあてはまる	22.9	20.2	23.7	18.8	31.5	29.2	11.9	24.4	28.6
	ややあてはまる		35.7	33.1	36.8	44.8	33.7	46.7	30.3	24.4	36.5	23.5
	あまりあてはまらない		28.4	29.4	28.1	25.0	24.7	20.0	38.5	29.3	28.6	34.1
	全くあてはまらない		12.9	17.2	11.2	11.5	9.0	4.2	19.3	22.0	6.3	23.5
	無回答		0.2	0.0	0.2	0.0	1.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	B. 作文や小論文など文章を書くことが得意だった	とてもあてはまる	11.9	10.4	12.3	10.4	9.0	16.7	6.4	14.6	11.1	16.5
		ややあてはまる	33.8	32.5	34.5	36.5	33.7	40.0	36.7	19.5	38.1	22.4
		あまりあてはまらない	34.5	35.6	34.0	35.4	31.5	30.0	38.5	31.7	39.7	35.3
		全くあてはまらない	19.7	21.5	19.2	17.7	25.8	13.3	18.3	34.1	11.1	25.9
		無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	C. 勉強方法は暗記中心だった	とてもあてはまる	28.9	35.6	26.3	26.0	32.6	29.2	27.5	46.3	27.0	22.4
		ややあてはまる	44.3	35.6	47.7	40.6	42.7	46.7	47.7	22.0	46.0	51.8
		あまりあてはまらない	21.4	20.2	21.9	24.0	19.1	17.5	22.9	24.4	23.8	21.2
		全くあてはまらない	5.5	8.6	4.1	9.4	5.6	6.7	1.8	7.3	3.2	4.7
		無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	D. どの科目でも学校の授業内容は理解できていた	とてもあてはまる	14.4	13.5	14.6	12.5	9.0	11.7	13.8	24.4	27.0	12.9
		ややあてはまる	50.2	43.6	52.7	47.9	55.1	49.2	54.1	39.0	57.1	44.7
		あまりあてはまらない	28.5	32.5	27.2	30.2	30.3	30.0	28.4	26.8	12.7	35.3
		全くあてはまらない	6.5	10.4	5.0	9.4	5.6	9.2	2.8	9.8	3.2	5.9
		無回答	0.3	0.0	0.5	0.0	0.0	0.0	0.9	0.0	0.0	1.2
	E. 授業で分からなかったところは自分で考えたり調べたりした	とてもあてはまる	17.4	14.7	18.3	7.3	15.7	20.8	22.9	31.7	22.2	8.2
		ややあてはまる	50.4	41.1	54.1	52.1	53.9	47.5	49.5	39.0	60.3	48.2
		あまりあてはまらない	27.0	33.7	24.7	33.3	25.8	24.2	26.6	24.4	14.3	36.5
		全くあてはまらない	4.8	9.8	3.0	6.3	4.5	7.5	0.9	4.9	3.2	5.9
無回答		0.3	0.6	0.0	1.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.2	
F. 大学進学後の学費や生活費のまかない方について親と話し合った	とてもあてはまる	15.3	17.8	14.4	21.9	13.5	15.0	17.4	26.8	11.1	4.7	
	ややあてはまる	29.0	33.1	27.4	33.3	27.0	31.7	25.7	19.5	28.6	31.8	
	あまりあてはまらない	31.8	26.4	34.0	20.8	36.0	34.2	38.5	22.0	34.9	30.6	
	全くあてはまらない	23.9	22.7	24.2	24.0	23.6	19.2	18.3	31.7	25.4	32.9	
	無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
てたQ3 時のあなたに入学し	A. 今の学科を強く志望して入学した	とてもあてはまる	53.2	57.7	51.6	49.0	76.4	50.0	56.9	56.1	36.5	44.7
		ややあてはまる	31.3	26.4	33.1	29.2	18.0	33.3	30.3	31.7	49.2	32.9
		あまりあてはまらない	11.4	14.1	10.5	16.7	5.6	12.5	8.3	7.3	9.5	17.6
		全くあてはまらない	2.3	1.8	2.5	4.2	0.0	0.8	0.9	2.4	4.8	4.7
	無回答	1.7	0.0	2.3	1.0	0.0	3.3	3.7	2.4	0.0	0.0	
	B. 今の学科にどのような教員がいるか調べて入学した	とてもあてはまる	14.1	14.7	13.7	25.0	20.2	12.5	6.4	19.5	17.5	2.4
		ややあてはまる	26.7	27.6	26.5	26.0	32.6	29.2	20.2	39.0	31.7	16.5
		あまりあてはまらない	32.3	25.8	34.7	27.1	27.0	27.5	47.7	19.5	27.0	41.2
全くあてはまらない		26.7	31.3	25.1	20.8	20.2	30.8	25.7	22.0	23.8	40.0	
無回答	0.2	0.6	0.0	1.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0		

		性別		学科								
		全体	男性	女性	哲学	史学	日文	英文	独文	仏文	心理	
n		603	163	438	96	89	120	109	41	63	85	
Q4 あなたは大学の授業にどのくらい意欲的に取り組みましたか。	A. 基礎教養科目 (総合基礎科目)	とても意欲的だった	16.1	11.7	17.8	14.6	19.1	15.8	10.1	22.0	33.3	7.1
		やや意欲的だった	53.1	46.6	55.7	52.1	55.1	59.2	57.8	43.9	44.4	48.2
		あまり意欲的でなかった	24.0	30.7	21.5	24.0	18.0	21.7	27.5	24.4	17.5	34.1
		全く意欲的でなかった	5.1	8.0	3.9	5.2	5.6	1.7	4.6	4.9	4.8	10.6
		経験しなかった	0.8	1.8	0.5	1.0	2.2	0.8	0.0	2.4	0.0	0.0
		無回答	0.8	1.2	0.7	3.1	0.0	0.8	0.0	2.4	0.0	0.0
	B. 自学科の専門科目(講義)	とても意欲的だった	31.0	27.6	32.4	24.0	42.7	36.7	27.5	39.0	36.5	15.3
		やや意欲的だった	55.7	49.1	58.2	53.1	43.8	55.0	62.4	46.3	60.3	64.7
		あまり意欲的でなかった	10.0	16.0	7.5	13.5	10.1	7.5	9.2	9.8	1.6	16.5
		全く意欲的でなかった	2.5	6.1	1.1	6.3	3.4	0.0	0.9	2.4	1.6	3.5
		経験しなかった	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
		無回答	0.8	1.2	0.7	3.1	0.0	0.8	0.0	2.4	0.0	0.0
	C. 自学科の専門科目(演習)	とても意欲的だった	37.6	42.3	36.1	35.4	51.7	32.5	34.9	48.8	52.4	20.0
		やや意欲的だった	50.4	39.3	54.3	45.8	41.6	55.8	57.8	39.0	42.9	58.8
		あまり意欲的でなかった	10.1	15.3	8.2	14.6	4.5	10.8	7.3	9.8	4.8	17.6
		全く意欲的でなかった	0.8	1.8	0.5	1.0	2.2	0.0	0.0	0.0	0.0	2.4
		経験しなかった	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
		無回答	1.0	1.2	0.9	3.1	0.0	0.8	0.0	2.4	0.0	1.2
	D. 他学科の専門科目(講義)	とても意欲的だった	10.6	8.0	11.6	7.3	14.6	11.7	5.5	19.5	22.2	2.4
		やや意欲的だった	40.6	35.0	42.9	32.3	43.8	52.5	34.9	46.3	47.6	29.4
あまり意欲的でなかった		26.2	29.4	24.9	34.4	21.3	31.7	21.1	24.4	25.4	22.4	
全く意欲的でなかった		4.8	9.2	3.2	3.1	9.0	2.5	3.7	4.9	3.2	8.2	
経験しなかった		16.6	16.6	16.4	18.8	11.2	0.8	34.9	0.0	1.6	37.6	
無回答		1.2	1.8	0.9	4.2	0.0	0.8	0.0	4.9	0.0	0.0	
E. 他学科の専門科目(演習)	とても意欲的だった	6.5	3.7	7.5	4.2	7.9	4.2	3.7	19.5	14.3	2.4	
	やや意欲的だった	24.2	22.1	25.1	20.8	22.5	24.2	24.8	39.0	30.2	17.6	
	あまり意欲的でなかった	18.4	20.9	17.4	22.9	10.1	16.7	22.0	19.5	17.5	20.0	
	全く意欲的でなかった	3.5	3.7	3.4	3.1	3.4	2.5	5.5	2.4	1.6	4.7	
	経験しなかった	46.1	47.9	45.4	45.8	55.1	50.0	44.0	17.1	36.5	55.3	
	無回答	1.3	1.8	1.1	3.1	1.1	2.5	0.0	2.4	0.0	0.0	
F. 外国語科目	とても意欲的だった	25.7	22.1	27.2	20.8	24.7	15.0	37.6	53.7	39.7	8.2	
	やや意欲的だった	44.1	36.8	47.0	46.9	38.2	50.0	46.8	31.7	44.4	41.2	
	あまり意欲的でなかった	22.4	29.4	19.6	25.0	28.1	26.7	12.8	12.2	7.9	35.3	
	全く意欲的でなかった	5.8	8.6	4.6	3.1	5.6	6.7	2.8	0.0	6.3	14.1	
	経験しなかった	0.8	1.8	0.5	1.0	3.4	0.0	0.0	0.0	0.0	1.2	
	無回答	1.2	1.2	1.1	3.1	0.0	1.7	0.0	2.4	1.6	0.0	
G. キャリアデザイン関係の科目	とても意欲的だった	3.3	3.1	3.2	0.0	3.4	4.2	3.7	2.4	7.9	2.4	
	やや意欲的だった	13.6	10.4	14.8	7.3	9.0	17.5	12.8	26.8	15.9	12.9	
	あまり意欲的でなかった	15.9	17.2	15.5	20.8	13.5	13.3	13.8	9.8	20.6	18.8	
	全く意欲的でなかった	6.6	7.4	6.4	5.2	5.6	2.5	9.2	17.1	7.9	5.9	
	経験しなかった	58.4	60.1	57.8	62.5	67.4	59.2	59.6	39.0	47.6	58.8	
	無回答	2.2	1.8	2.3	4.2	1.1	3.3	0.9	4.9	0.0	1.2	
Q5 あなたは大学入学後、どのような学び方をしましたか。	A. 学術的な論文・書籍や文学作品を積極的に読んだ	とてもあてはまる	13.9	17.2	12.8	15.6	24.7	17.5	3.7	22.0	12.7	5.9
		ややあてはまる	43.3	41.1	44.1	39.6	43.8	51.7	46.8	29.3	46.0	35.3
		あまりあてはまらない	36.2	34.4	37.0	38.5	29.2	25.8	45.9	36.6	33.3	44.7
		全くあてはまらない	5.6	5.5	5.5	3.1	2.2	4.2	2.8	9.8	7.9	14.1
		無回答	1.0	1.8	0.7	3.1	0.0	0.8	0.9	2.4	0.0	0.0
	B. 授業で課されたレポート等はしっかり準備して書いた	とてもあてはまる	30.5	25.8	32.4	26.0	31.5	32.5	28.4	36.6	46.0	20.0
		ややあてはまる	46.3	41.7	48.2	38.5	41.6	43.3	57.8	39.0	41.3	56.5
		あまりあてはまらない	21.2	28.8	18.0	32.3	24.7	21.7	12.8	22.0	12.7	21.2
		全くあてはまらない	1.0	1.8	0.7	0.0	2.2	1.7	0.0	0.0	0.0	2.4
		無回答	1.0	1.8	0.7	3.1	0.0	0.8	0.9	2.4	0.0	0.0
	C. 暗記によって試験を乗り切るような学習が多くを占めた	とてもあてはまる	10.0	8.6	10.5	6.3	4.5	5.8	7.3	26.8	22.2	11.8
		ややあてはまる	36.0	39.3	34.7	22.9	24.7	30.8	56.0	26.8	44.4	42.4
		あまりあてはまらない	45.4	41.7	47.0	56.3	53.9	52.5	35.8	39.0	30.2	41.2
		全くあてはまらない	7.1	8.6	6.4	9.4	15.7	9.2	0.9	4.9	3.2	4.7
		無回答	1.5	1.8	1.4	5.2	1.1	1.7	0.0	2.4	0.0	0.0
D. 授業内容が自分なりに理解できるまで考えたり調べたりした	とてもあてはまる	12.1	9.8	13.0	14.6	11.2	10.0	7.3	14.6	22.2	10.6	
	ややあてはまる	56.7	55.2	57.3	52.1	58.4	58.3	61.5	53.7	61.9	49.4	
	あまりあてはまらない	27.9	30.7	26.7	29.2	27.0	29.2	30.3	26.8	14.3	32.9	
	全くあてはまらない	2.2	2.5	2.1	1.0	2.2	1.7	0.9	0.0	1.6	7.1	
	無回答	1.2	1.8	0.9	3.1	1.1	0.8	0.0	4.9	0.0	0.0	
E. 授業をきっかけにして自分なりの関心を形成していった	とてもあてはまる	34.8	36.8	34.2	38.5	36.0	43.3	28.4	39.0	34.9	23.5	
	ややあてはまる	53.7	48.5	55.7	47.9	52.8	50.0	58.7	53.7	55.6	58.8	
	あまりあてはまらない	9.1	11.0	8.2	10.4	10.1	5.0	11.9	4.9	4.8	14.1	
	全くあてはまらない	1.5	2.5	1.1	0.0	1.1	0.8	0.9	0.0	4.8	3.5	
	無回答	0.8	1.2	0.7	3.1	0.0	0.8	0.0	2.4	0.0	0.0	

		全体	性別		学科							
			男性	女性	哲学	史学	日文	英文	独文	仏文	心理	
	n	603	163	438	96	89	120	109	41	63	85	
Q6 あなた、課外活動等にどのくらい意欲的に取り組みますか。	A. 部活動(部・同好会・愛好会)	とても意欲的だった	33.2	36.8	31.5	33.3	32.6	35.0	35.8	29.3	36.5	27.1
		やや意欲的だった	16.1	16.6	16.0	19.8	14.6	16.7	15.6	2.4	4.8	28.2
		あまり意欲的でなかった	7.0	8.0	6.6	8.3	7.9	6.7	4.6	9.8	7.9	5.9
		全く意欲的でなかった	2.5	3.1	2.3	4.2	3.4	0.0	2.8	0.0	4.8	2.4
		経験しなかった	39.3	33.7	41.6	31.3	40.4	38.3	39.4	53.7	46.0	36.5
		無回答	2.0	1.8	2.1	3.1	1.1	3.3	1.8	4.9	0.0	0.0
	B. サークル活動	とても意欲的だった	21.6	23.3	21.0	16.7	15.7	28.3	23.9	26.8	17.5	21.2
		やや意欲的だった	17.9	12.3	20.1	18.8	18.0	17.5	15.6	12.2	25.4	17.6
		あまり意欲的でなかった	9.3	8.6	9.6	11.5	10.1	5.8	10.1	4.9	17.5	5.9
		全く意欲的でなかった	2.8	3.7	2.5	2.1	6.7	0.8	1.8	4.9	3.2	2.4
		経験しなかった	45.8	50.9	43.6	45.8	48.3	45.8	46.8	46.3	31.7	51.8
		無回答	2.7	1.2	3.2	5.2	1.1	1.7	1.8	4.9	4.8	1.2
	C. 就職を希望していた業界と関わりが深いアルバイト	とても意欲的だった	11.9	8.6	13.0	18.8	7.9	13.3	11.0	7.3	19.0	4.7
		やや意欲的だった	13.6	14.7	13.2	10.4	19.1	15.0	16.5	7.3	12.7	9.4
		あまり意欲的でなかった	11.8	12.3	11.6	18.8	4.5	9.2	14.7	12.2	12.7	10.6
		全く意欲的でなかった	5.1	6.7	4.6	2.1	6.7	5.0	3.7	4.9	11.1	4.7
		経験しなかった	54.4	55.2	54.1	44.8	59.6	55.0	51.4	63.4	41.3	68.2
		無回答	3.2	2.5	3.4	5.2	2.2	2.5	2.8	4.9	3.2	2.4
	D. 上記以外のアルバイト	とても意欲的だった	28.0	21.5	30.6	20.8	24.7	25.8	27.5	26.8	44.4	31.8
		やや意欲的だった	36.5	26.4	40.2	44.8	23.6	43.3	37.6	39.0	27.0	35.3
		あまり意欲的でなかった	16.4	20.9	14.6	16.7	24.7	19.2	15.6	12.2	11.1	10.6
		全く意欲的でなかった	4.1	9.2	2.3	6.3	4.5	0.8	3.7	2.4	3.2	8.2
		経験しなかった	11.1	17.2	8.9	7.3	19.1	8.3	12.8	9.8	6.3	12.9
		無回答	3.8	4.9	3.4	4.2	3.4	2.5	2.8	9.8	7.9	1.2
E. 資格や検定のための勉強	とても意欲的だった	16.1	14.1	16.4	12.5	12.4	15.8	19.3	22.0	23.8	11.8	
	やや意欲的だった	34.3	25.2	37.9	31.3	30.3	36.7	39.4	41.5	30.2	31.8	
	あまり意欲的でなかった	20.4	19.6	20.8	20.8	13.5	18.3	27.5	14.6	25.4	20.0	
	全く意欲的でなかった	8.3	12.3	6.8	9.4	12.4	5.0	4.6	2.4	6.3	16.5	
	経験しなかった	18.4	27.0	15.3	21.9	29.2	21.7	7.3	14.6	11.1	20.0	
	無回答	2.5	1.8	2.7	4.2	2.2	2.5	1.8	4.9	3.2	0.0	
Q7 あなたの卒業論文・卒業研究の執筆経験について	A. 書きたいテーマが見つからなくて苦労した	とてもあてはまる	7.8	9.7	7.0	9.4	7.9	10.0	1.8	4.9	11.8	
		ややあてはまる	27.8	33.1	25.5	20.8	33.7	25.8	30.3	29.3	28.2	
		あまりあてはまらない	42.6	35.1	45.6	41.7	40.4	45.0	44.0	36.6	43.5	
		全くあてはまらない	20.7	20.1	21.1	24.0	18.0	18.3	23.9	26.8	16.5	
		無回答	1.1	1.9	0.8	4.2	0.0	0.8	0.0	2.4	0.0	
		無回答	1.1	1.9	0.8	4.2	0.0	0.8	0.0	2.4	0.0	
	B. 教員に指導を受ける機会は十分あった	とてもあてはまる	48.0	51.3	46.6	43.8	61.8	41.7	56.0	51.2	35.3	
		ややあてはまる	39.8	35.7	41.4	37.5	31.5	43.3	35.8	34.1	54.1	
		あまりあてはまらない	10.0	9.7	10.2	13.5	5.6	12.5	8.3	9.8	9.4	
		全くあてはまらない	0.9	1.3	0.8	1.0	1.1	0.8	0.0	2.4	1.2	
		無回答	1.3	1.9	1.0	4.2	0.0	1.7	0.0	2.4	0.0	
		無回答	1.3	1.9	1.0	4.2	0.0	1.7	0.0	2.4	0.0	
	C. 就職活動に時間を取られ卒業論文・卒研どころではなかった	とてもあてはまる	8.9	9.1	8.9	10.4	10.1	10.0	3.7	9.8	10.6	
		ややあてはまる	28.1	22.7	30.2	18.8	23.6	40.8	29.4	17.1	29.4	
		あまりあてはまらない	33.5	30.5	34.9	40.6	40.4	28.3	37.6	26.8	23.5	
		全くあてはまらない	28.1	35.1	25.3	26.0	25.8	19.2	29.4	43.9	36.5	
		無回答	1.3	2.6	0.8	4.2	0.0	1.7	0.0	2.4	0.0	
		無回答	1.3	2.6	0.8	4.2	0.0	1.7	0.0	2.4	0.0	
	D. 自分のテーマについて納得いくまで考えたり調べたりした	とてもあてはまる	19.8	15.6	21.6	25.0	19.1	20.0	21.1	22.0	11.8	
		ややあてはまる	52.4	53.2	52.3	50.0	55.1	48.3	56.9	58.5	49.4	
		あまりあてはまらない	24.6	25.3	24.2	20.8	20.2	29.2	21.1	17.1	35.3	
		全くあてはまらない	1.7	3.2	0.8	0.0	3.4	1.7	0.9	0.0	3.5	
		無回答	1.5	2.6	1.0	4.2	2.2	0.8	0.0	2.4	0.0	
		無回答	1.5	2.6	1.0	4.2	2.2	0.8	0.0	2.4	0.0	
E. 卒論・卒研のテーマは卒業後の進路と関係している	とてもあてはまる	10.9	13.6	9.6	12.5	13.5	8.3	4.6	24.4	11.8		
	ややあてはまる	11.5	11.7	11.5	13.5	10.1	9.2	10.1	19.5	11.8		
	あまりあてはまらない	17.8	17.5	18.0	14.6	18.0	16.7	23.9	9.8	18.8		
	全くあてはまらない	58.1	55.2	59.4	55.2	57.3	64.2	61.5	41.5	57.6		
	無回答	1.7	1.9	1.6	4.2	1.1	1.7	0.0	4.9	0.0		
	無回答	1.7	1.9	1.6	4.2	1.1	1.7	0.0	4.9	0.0		
F. 卒論・卒研の執筆に真剣に取り組んだ	とてもあてはまる	44.4	50.0	42.4	50.0	62.9	43.3	40.4	31.7	31.8		
	ややあてはまる	41.3	31.8	44.8	33.3	24.7	43.3	47.7	53.7	50.6		
	あまりあてはまらない	12.2	15.6	10.9	10.4	11.2	12.5	11.0	9.8	17.6		
	全くあてはまらない	0.9	0.6	1.0	2.1	1.1	0.0	0.9	2.4	0.0		
	無回答	1.1	1.9	0.8	4.2	0.0	0.8	0.0	2.4	0.0		
	無回答	1.1	1.9	0.8	4.2	0.0	0.8	0.0	2.4	0.0		
G. 卒論・卒研のできに満足している	とてもあてはまる	8.5	7.1	8.9	9.4	3.4	8.3	9.2	9.8	11.8		
	ややあてはまる	44.6	38.3	47.4	31.3	39.3	47.5	58.7	56.1	37.6		
	あまりあてはまらない	34.6	38.3	33.3	42.7	38.2	30.0	27.5	24.4	42.4		
	全くあてはまらない	11.1	14.3	9.6	12.5	19.1	13.3	4.6	7.3	8.2		
	無回答	1.1	1.9	0.8	4.2	0.0	0.8	0.0	2.4	0.0		
	無回答	1.1	1.9	0.8	4.2	0.0	0.8	0.0	2.4	0.0		

		全体	性別		学科							
			男性	女性	哲学	史学	日文	英文	独文	仏文	心理	
	n	603	163	438	96	89	120	109	41	63	85	
Q8 あなたはいかに意識しましたか。 卒業論文・卒業研究を書くときに、以下の点をどのくらい意識しましたか。	A. 問題設定の適切性	とても意識した	19.8	21.4	19.3	24.0	20.2	20.8	21.1	26.8		8.2
		やや意識した	58.5	52.6	60.9	57.3	59.6	62.5	57.8	48.8		58.8
		あまり意識しなかった	19.8	22.7	18.5	12.5	18.0	15.8	21.1	22.0		32.9
		全く意識しなかった	0.9	1.9	0.5	3.1	2.2	0.0	0.0	0.0		0.0
		無回答	0.9	1.3	0.8	3.1	0.0	0.8	0.0	2.4		0.0
	B. 先行研究をきちんとふまえること	とても意識した	26.7	28.6	26.0	31.3	34.8	34.2	16.5	24.4		16.5
		やや意識した	44.4	40.3	46.1	35.4	52.8	45.0	45.9	34.1		48.2
		あまり意識しなかった	25.9	26.0	25.8	26.0	12.4	20.0	36.7	34.1		30.6
		全く意識しなかった	2.0	3.9	1.3	4.2	0.0	0.0	0.9	4.9		4.7
		無回答	0.9	1.3	0.8	3.1	0.0	0.8	0.0	2.4		0.0
	C. 引用の仕方、文献表の作り方	とても意識した	26.5	27.3	26.0	28.1	28.1	25.0	30.3	46.3		10.6
		やや意識した	48.1	37.7	52.6	38.5	47.2	52.5	51.4	31.7		57.6
		あまり意識しなかった	21.1	28.6	18.2	24.0	22.5	21.7	14.7	17.1		25.9
		全く意識しなかった	3.1	4.5	2.3	6.3	2.2	0.0	3.7	0.0		5.9
		無回答	1.1	1.9	0.8	3.1	0.0	0.8	0.0	4.9		0.0
	D. 一次データ（原典、史料も含む）の利用	とても意識した	24.3	27.3	23.2	29.2	34.8	25.8	21.1	29.3		7.1
		やや意識した	46.9	41.6	48.7	38.5	42.7	47.5	56.9	36.6		51.8
		あまり意識しなかった	24.6	27.3	23.7	27.1	18.0	21.7	21.1	31.7		34.1
		全く意識しなかった	3.1	1.9	3.6	1.0	4.5	4.2	0.9	0.0		7.1
		無回答	1.1	1.9	0.8	4.2	0.0	0.8	0.0	2.4		0.0
	E. 独創性	とても意識した	18.3	17.5	18.8	18.8	15.7	20.8	15.6	17.1		21.2
		やや意識した	41.1	39.6	41.7	38.5	40.4	42.5	46.8	31.7		40.0
		あまり意識しなかった	35.0	37.0	34.1	36.5	38.2	29.2	34.9	41.5		35.3
		全く意識しなかった	4.4	4.5	4.4	2.1	5.6	6.7	2.8	7.3		3.5
		無回答	1.1	1.3	1.0	4.2	0.0	0.8	0.0	2.4		0.0
	F. 論理的な文章構成	とても意識した	21.9	28.6	19.3	22.9	23.6	25.0	17.4	24.4		18.8
		やや意識した	54.8	43.5	59.6	55.2	50.6	56.7	64.2	46.3		48.2
		あまり意識しなかった	20.4	25.3	18.0	16.7	22.5	16.7	17.4	22.0		30.6
全く意識しなかった		2.0	1.3	2.3	2.1	3.4	0.8	0.9	4.9		2.4	
無回答		0.9	1.3	0.8	3.1	0.0	0.8	0.0	2.4		0.0	
G. 文章の分かりやすさ	とても意識した	27.2	29.9	26.3	29.2	24.7	32.5	24.8	26.8		23.5	
	やや意識した	55.0	49.4	57.3	54.2	46.1	55.0	62.4	48.8		58.8	
	あまり意識しなかった	15.2	18.2	13.8	11.5	25.8	10.8	12.8	17.1		16.5	
	全く意識しなかった	1.7	1.3	1.8	2.1	3.4	0.8	0.0	4.9		1.2	
	無回答	0.9	1.3	0.8	3.1	0.0	0.8	0.0	2.4		0.0	
Q9 あなたにとって、卒業論文・卒業研究の執筆はどのような意義をもっていたと思いますか。	A. 学術論文を書くという体験	とてもあてはまる	49.4	50.6	48.7	50.0	53.9	57.5	45.9	39.0		42.4
		ややあてはまる	41.3	39.6	42.2	39.6	40.4	35.8	46.8	41.5		44.7
		あまりあてはまらない	7.0	7.1	7.0	4.2	4.5	5.8	6.4	17.1		10.6
		全くあてはまらない	1.1	1.3	1.0	2.1	1.1	0.0	0.9	0.0		2.4
		無回答	1.1	1.3	1.0	4.2	0.0	0.8	0.0	2.4		0.0
	B. 学問の奥深さに触れる体験	とてもあてはまる	39.6	40.9	39.1	41.7	51.7	50.0	35.8	36.6		16.5
		ややあてはまる	42.2	40.9	42.7	36.5	34.8	34.2	49.5	39.0		60.0
		あまりあてはまらない	15.9	14.9	16.4	14.6	12.4	15.0	13.8	22.0		22.4
		全くあてはまらない	1.3	1.9	1.0	4.2	1.1	0.0	0.9	0.0		1.2
		無回答	0.9	1.3	0.8	3.1	0.0	0.8	0.0	2.4		0.0
	C. 専門教育の総仕上げ	とてもあてはまる	32.4	31.2	32.8	25.0	32.6	37.5	31.2	31.7		35.3
		ややあてはまる	44.4	37.7	47.4	39.6	51.7	43.3	47.7	41.5		41.2
		あまりあてはまらない	20.2	26.0	17.7	25.0	12.4	18.3	20.2	24.4		23.5
		全くあてはまらない	1.9	3.9	1.0	6.3	3.4	0.0	0.9	0.0		0.0
		無回答	1.1	1.3	1.0	4.2	0.0	0.8	0.0	2.4		0.0
	D. 専門分野の知識の深化	とてもあてはまる	34.3	37.0	33.3	32.3	43.8	35.8	33.0	36.6		24.7
		ややあてはまる	48.1	40.9	51.0	45.8	41.6	47.5	57.8	46.3		47.1
		あまりあてはまらない	15.2	18.8	13.5	13.5	13.5	15.0	9.2	14.6		27.1
		全くあてはまらない	1.3	1.9	1.0	4.2	1.1	0.8	0.0	0.0		1.2
		無回答	1.1	1.3	1.0	4.2	0.0	0.8	0.0	2.4		0.0
	E. 困難なことを最後までやり遂げる経験	とてもあてはまる	49.4	48.1	49.7	49.0	62.9	50.0	48.6	41.5		40.0
		ややあてはまる	36.1	34.4	37.0	31.3	31.5	38.3	34.9	36.6		44.7
		あまりあてはまらない	11.9	13.0	11.5	12.5	3.4	10.8	16.5	19.5		11.8
		全くあてはまらない	1.5	3.2	0.8	3.1	2.2	0.0	0.0	0.0		3.5
		無回答	1.1	1.3	1.0	4.2	0.0	0.8	0.0	2.4		0.0
	F. 自分の主張を分かりやすく伝える方法を学ぶ経験	とてもあてはまる	32.0	31.8	32.0	36.5	40.4	33.3	27.5	39.0		18.8
		ややあてはまる	47.2	45.5	48.2	42.7	40.4	50.8	56.0	36.6		48.2
		あまりあてはまらない	18.1	20.1	17.2	15.6	14.6	15.0	15.6	19.5		31.8
全くあてはまらない		1.1	1.3	1.0	1.0	4.5	0.0	0.0	0.0		1.2	
無回答		1.5	1.3	1.6	4.2	0.0	0.8	0.9	4.9		0.0	
G. 主体的な学習態度を養う経験	とてもあてはまる	33.5	33.8	33.1	34.4	43.8	38.3	26.6	43.9		18.8	
	ややあてはまる	46.9	46.8	47.1	44.8	40.4	42.5	53.2	36.6		58.8	
	あまりあてはまらない	17.0	16.2	17.4	15.6	11.2	17.5	20.2	17.1		20.0	
	全くあてはまらない	1.5	1.9	1.3	1.0	4.5	0.8	0.0	0.0		2.4	
	無回答	1.1	1.3	1.0	4.2	0.0	0.8	0.0	2.4		0.0	
Q10 就活経験の有無	ある	82.3	78.5	83.6	74.0	77.5	89.2	88.1	75.6	88.9	77.6	
	ない	16.3	19.6	15.1	22.9	22.5	9.2	11.0	19.5	11.1	21.2	
	無回答	1.5	1.8	1.4	3.1	0.0	1.7	0.9	4.9	0.0	1.2	

			性別		学科							
			全体	男性	女性	哲学	史学	日文	英文	独文	仏文	心理
	n		603	163	438	96	89	120	109	41	63	85
ありQ12すか。(Q10で「ある」を選んだ人)就職活動中、以下のことについて、あなたはどのくらい経験したことが	A. エントリーシートに、大学の学習内容をたずねる項目があった	よくあった	51.0	51.6	50.5	52.1	50.7	47.7	52.1	48.4	57.1	50.0
		ときどきあった	38.1	39.8	37.7	36.6	34.8	38.3	39.6	38.7	30.4	47.0
		あまりなかった	8.5	7.8	8.7	7.0	10.1	11.2	6.3	12.9	10.7	3.0
		全くなかった	1.4	0.0	1.9	0.0	2.9	1.9	2.1	0.0	1.8	0.0
		無回答	1.0	0.8	1.1	4.2	1.4	0.9	0.0	0.0	0.0	0.0
	B. エントリーシートで、あなたが大学で学習した内容をアピールした	よくあった	31.3	27.3	32.5	29.6	37.7	30.8	25.0	45.2	32.1	28.8
		ときどきあった	37.3	46.1	34.2	39.4	39.1	35.5	36.5	45.2	32.1	37.9
		あまりなかった	25.0	21.9	26.2	25.4	14.5	28.0	32.3	6.5	23.2	30.3
		全くなかった	5.4	3.9	6.0	1.4	7.2	4.7	6.3	3.2	12.5	3.0
		無回答	1.0	0.8	1.1	4.2	1.4	0.9	0.0	0.0	0.0	0.0
	C. 採用面接で、大学の学習内容について聞かれた	よくあった	32.5	29.7	33.1	43.7	27.5	32.7	24.0	45.2	37.5	27.3
		ときどきあった	43.5	50.0	41.5	31.0	52.2	40.2	46.9	51.6	37.5	50.0
		あまりなかった	17.1	12.5	18.9	18.3	13.0	19.6	22.9	3.2	12.5	18.2
		全くなかった	6.3	7.8	5.7	4.2	7.2	6.5	6.3	0.0	12.5	4.5
		無回答	0.6	0.0	0.8	2.8	0.0	0.9	0.0	0.0	0.0	0.0
	D. 採用面接で、あなたが大学で学習した内容をアピールした	よくあった	23.2	17.2	25.1	25.4	21.7	21.5	19.8	38.7	30.4	16.7
		ときどきあった	36.3	42.2	34.2	31.0	37.7	37.4	33.3	45.2	30.4	43.9
		あまりなかった	30.2	31.3	30.1	35.2	27.5	31.8	39.6	16.1	25.0	22.7
		全くなかった	9.7	9.4	9.8	5.6	13.0	8.4	7.3	0.0	14.3	16.7
		無回答	0.6	0.0	0.8	2.8	0.0	0.9	0.0	0.0	0.0	0.0
	E. 採用面接で、その企業等は即戦力となる新人を求めていると感じた	よくあった	18.1	19.5	17.8	18.3	20.3	15.9	13.5	12.9	21.4	25.8
		ときどきあった	33.7	33.6	33.9	31.0	40.6	40.2	28.1	29.0	32.1	30.3
		あまりなかった	37.5	33.6	38.8	38.0	27.5	34.6	52.1	51.6	26.8	33.3
		全くなかった	10.1	13.3	8.7	9.9	11.6	8.4	6.3	6.5	19.6	10.6
		無回答	0.6	0.0	0.8	2.8	0.0	0.9	0.0	0.0	0.0	0.0
	F. 就職活動中、あなたの人格が試されているように感じた	よくあった	56.0	57.8	55.7	54.9	52.2	51.4	59.4	51.6	62.5	60.6
		ときどきあった	32.9	27.3	34.4	26.8	36.2	38.3	32.3	41.9	26.8	28.8
		あまりなかった	8.9	13.3	7.4	11.3	11.6	4.7	8.3	6.5	10.7	10.6
		全くなかった	1.6	1.6	1.6	4.2	0.0	4.7	0.0	0.0	0.0	0.0
		無回答	0.6	0.0	0.8	2.8	0.0	0.9	0.0	0.0	0.0	0.0
	G. 採用面接やO日訪問時に、「大学の勉強は役に立たない」と言われた	よくあった	4.6	6.3	4.1	8.5	7.2	3.7	4.2	6.5	1.8	1.5
		ときどきあった	10.1	14.8	8.5	8.5	10.1	8.4	9.4	9.7	16.1	10.6
		あまりなかった	29.6	19.5	33.3	21.1	21.7	30.8	36.5	29.0	33.9	31.8
		全くなかった	54.8	59.4	53.0	59.2	60.9	56.1	49.0	54.8	48.2	56.1
		無回答	0.8	0.0	1.1	2.8	0.0	0.9	1.0	0.0	0.0	0.0
	H. どの業種(企業の事業内容)や業界を志望したらいいかわからなくなった	よくあった	26.8	23.4	28.1	23.9	24.6	28.0	28.1	32.3	25.0	27.3
		ときどきあった	32.3	29.7	33.3	33.8	29.0	32.7	28.1	38.7	33.9	34.8
		あまりなかった	22.2	21.1	22.4	22.5	21.7	17.8	28.1	9.7	25.0	24.2
		全くなかった	18.1	25.8	15.3	16.9	24.6	20.6	15.6	19.4	16.1	13.6
		無回答	0.6	0.0	0.8	2.8	0.0	0.9	0.0	0.0	0.0	0.0
	I. 就職活動を始めた頃から、有名な企業や会社説明会に積極的に参加した	よくあった	23.4	19.5	24.9	23.9	20.3	21.5	24.0	16.1	35.7	21.2
		ときどきあった	34.7	32.0	35.5	33.8	31.9	35.5	38.5	41.9	23.2	37.9
		あまりなかった	27.6	27.3	27.9	23.9	26.1	29.0	25.0	35.5	30.4	28.8
		全くなかった	13.7	21.1	10.9	15.5	21.7	13.1	12.5	6.5	10.7	12.1
		無回答	0.6	0.0	0.8	2.8	0.0	0.9	0.0	0.0	0.0	0.0
	J. 良い就職先が決まらなければ、留年してもよいと思った	よくあった	8.1	18.8	4.4	11.3	4.3	9.3	5.2	12.9	5.4	10.6
		ときどきあった	15.9	20.3	14.2	18.3	14.5	18.7	16.7	19.4	8.9	13.6
		あまりなかった	26.6	22.7	28.1	26.8	24.6	28.0	31.3	19.4	21.4	27.3
全くなかった		48.6	38.3	52.2	40.8	56.5	42.1	46.9	48.4	64.3	48.5	
無回答		0.8	0.0	1.1	2.8	0.0	1.9	0.0	0.0	0.0	0.0	
K. 就職活動はつらいと感じた	よくあった	44.6	35.2	47.8	46.5	50.7	43.0	49.0	35.5	32.1	47.0	
	ときどきあった	33.5	32.8	33.6	29.6	27.5	39.3	29.2	41.9	41.1	30.3	
	あまりなかった	14.9	23.4	12.0	16.9	14.5	11.2	16.7	16.1	19.6	12.1	
	全くなかった	6.5	8.6	5.7	4.2	7.2	5.6	5.2	6.5	7.1	10.6	
	無回答	0.6	0.0	0.8	2.8	0.0	0.9	0.0	0.0	0.0	0.0	
さ後Q1の進3路をあなたに教えてく卒業	進路	民間(正社員)	52.4	47.9	54.3	46.9	33.7	48.3	66.1	61.0	66.7	51.8
		公務員・教員(正職員)	5.6	6.1	5.5	2.1	6.7	7.5	6.4	4.9	3.2	7.1
		民間(派遣・契約)	3.0	0.6	3.7	1.0	3.4	2.5	7.3	0.0	1.6	2.4
		公務員・教員(非常勤)	2.0	3.1	1.6	3.1	3.4	1.7	0.9	0.0	3.2	1.2
		自営・家業	0.8	1.2	0.7	1.0	2.2	0.0	0.9	0.0	0.0	1.2
		パート・アルバイト	1.3	1.2	1.4	2.1	2.2	0.0	0.0	2.4	3.2	1.2
		専門学校	1.5	0.6	1.8	2.1	1.1	0.8	0.0	2.4	1.6	3.5
		大学院	7.0	9.2	6.2	12.5	11.2	3.3	2.8	9.8	4.8	7.1
		未定	17.4	20.2	16.4	14.6	29.2	28.3	6.4	14.6	6.3	16.5
		その他	7.3	8.0	6.8	11.5	6.7	6.7	5.5	2.4	9.5	7.1
		無回答	1.7	1.8	1.6	3.1	0.0	0.8	3.7	2.4	0.0	1.2

		全体	性別		学科							
			男性	女性	哲学	史学	日文	英文	独文	仏文	心理	
	n	603	163	438	96	89	120	109	41	63	85	
Q15 あなたはいくら進路について考えていますか。	進路納得度											
	とても納得している	43.9	42.3	44.3	43.8	49.4	38.3	44.0	39.0	54.0	41.2	
	やや納得している	34.8	31.9	36.1	37.5	28.1	33.3	38.5	39.0	33.3	35.3	
	あまり納得していない	8.3	8.6	8.2	5.2	7.9	11.7	8.3	7.3	4.8	10.6	
	全く納得していない	5.8	8.0	5.0	6.3	11.2	9.2	0.9	2.4	1.6	5.9	
	無回答	7.1	9.2	6.4	7.3	3.4	7.5	8.3	12.2	6.3	7.1	
Q16 これまでの大学生活で、あなたは以下に示すような知識・能力をどのくらい身につけてきましたか。	A. 専門分野の知識	かなり身についた	21.6	28.8	18.9	22.9	38.2	18.3	11.9	29.3	17.5	18.8
		やや身についた	65.5	54.6	69.4	62.5	53.9	74.2	72.5	61.0	73.0	56.5
		あまり身につかなかった	10.6	14.1	9.4	13.5	5.6	5.8	11.9	7.3	7.9	21.2
		全く身につかなかった	1.0	1.2	0.9	0.0	1.1	0.8	0.9	0.0	1.6	2.4
		無回答	1.3	1.2	1.4	1.0	1.1	0.8	2.8	2.4	0.0	1.2
	B. 専門分野以外の幅広い知識	かなり身についた	14.3	20.2	11.9	11.5	21.3	15.8	7.3	26.8	9.5	14.1
		やや身についた	57.4	52.1	59.4	59.4	49.4	60.8	62.4	56.1	60.3	50.6
		あまり身につかなかった	25.4	23.9	26.0	26.0	24.7	21.7	24.8	14.6	28.6	34.1
		全く身につかなかった	1.7	2.5	1.4	2.1	3.4	0.8	2.8	0.0	1.6	0.0
		無回答	1.3	1.2	1.4	1.0	1.1	0.8	2.8	2.4	0.0	1.2
	C. 常識にとらわれない批判的に考える力	かなり身についた	18.7	26.4	15.8	17.7	25.8	19.2	11.9	22.0	15.9	21.2
		やや身についた	50.9	51.5	50.9	56.3	43.8	55.8	55.0	56.1	44.4	42.4
		あまり身につかなかった	27.4	19.6	30.1	24.0	27.0	24.2	28.4	19.5	36.5	31.8
		全く身につかなかった	1.7	1.2	1.8	1.0	2.2	0.0	1.8	0.0	3.2	3.5
		無回答	1.3	1.2	1.4	1.0	1.1	0.8	2.8	2.4	0.0	1.2
	D. 他者と協力してものごとを進める力	かなり身についた	37.1	38.0	36.5	24.0	31.5	42.5	43.1	39.0	41.3	38.8
		やや身についた	44.8	42.3	45.9	52.1	49.4	42.5	41.3	46.3	33.3	47.1
		あまり身につかなかった	13.9	16.0	13.2	17.7	13.5	12.5	11.0	12.2	20.6	11.8
		全く身につかなかった	2.7	2.5	2.7	5.2	4.5	0.8	1.8	0.0	4.8	1.2
		無回答	1.5	1.2	1.6	1.0	1.1	1.7	2.8	2.4	0.0	1.2
	E. 自分の考えを他者に文章で伝える力	かなり身についた	22.2	20.9	22.6	16.7	20.2	27.5	22.0	29.3	17.5	23.5
		やや身についた	58.5	59.5	58.2	62.5	56.2	60.8	59.6	48.8	58.7	56.5
		あまり身につかなかった	16.6	16.6	16.7	18.8	20.2	10.0	14.7	19.5	22.2	16.5
		全く身につかなかった	1.0	1.2	0.9	1.0	2.2	0.0	0.0	0.0	1.6	2.4
		無回答	1.7	1.8	1.6	1.0	1.1	1.7	3.7	2.4	0.0	1.2
	F. 自分の考えを他者に口頭で伝える力	かなり身についた	22.1	22.1	21.9	19.8	20.2	17.5	22.0	24.4	25.4	29.4
		やや身についた	53.7	56.4	53.0	57.3	47.2	59.2	59.6	53.7	47.6	45.9
		あまり身につかなかった	21.9	19.0	22.8	21.9	29.2	21.7	15.6	19.5	23.8	22.4
		全く身につかなかった	0.8	1.2	0.7	0.0	2.2	0.0	0.0	0.0	3.2	1.2
		無回答	1.5	1.2	1.6	1.0	1.1	1.7	2.8	2.4	0.0	1.2
	G. 自分の適性や能力を把握する力	かなり身についた	21.1	23.3	20.1	18.8	19.1	19.2	21.1	31.7	23.8	21.2
		やや身についた	56.6	49.7	59.4	53.1	52.8	57.5	60.6	53.7	60.3	56.5
		あまり身につかなかった	19.9	23.9	18.3	26.0	24.7	21.7	14.7	12.2	14.3	20.0
		全く身につかなかった	1.0	1.8	0.7	1.0	2.2	0.0	0.9	0.0	1.6	1.2
		無回答	1.5	1.2	1.6	1.0	1.1	1.7	2.8	2.4	0.0	1.2
	H. 目標を立てて計画的に行動する力	かなり身についた	26.5	28.2	25.8	20.8	30.3	25.8	26.6	26.8	36.5	22.4
		やや身についた	45.8	42.9	46.8	47.9	42.7	40.0	52.3	51.2	42.9	45.9
		あまり身につかなかった	23.2	22.7	23.5	27.1	22.5	29.2	18.3	14.6	14.3	28.2
		全く身につかなかった	3.0	4.9	2.3	3.1	3.4	3.3	0.0	4.9	6.3	2.4
		無回答	1.5	1.2	1.6	1.0	1.1	1.7	2.8	2.4	0.0	1.2
	I. 広い視野から人間を探究する力	かなり身についた	31.5	32.5	31.1	29.2	34.8	34.2	20.2	36.6	47.6	27.1
		やや身についた	51.9	51.5	52.1	55.2	47.2	51.7	66.1	41.5	39.7	49.4
		あまり身につかなかった	13.6	12.9	13.9	14.6	14.6	12.5	10.1	17.1	9.5	18.8
		全く身につかなかった	1.3	1.8	1.1	0.0	2.2	0.0	0.9	2.4	1.6	3.5
		無回答	1.7	1.2	1.8	1.0	1.1	1.7	2.8	2.4	1.6	1.2
追跡調査への協力について	協力者	29.2	38.0	25.6	31.3	24.7	33.3	21.1	22.0	33.3	36.5	
	無記入	70.8	62.0	74.4	68.8	75.3	66.7	78.9	78.0	66.7	63.5	

学習院大学文学部卒業生の皆様へ

2013年1月
学習院大学人文科学研究所共同研究プロジェクト
「人文系学士課程教育における卒業論文がもたらす学習効果の検証」
研究代表者 日本語日本文学科教授・文学部長 神田 龍身

「学習院大学文学部での学びと卒業後の生活・意識等に関する調査」
ご協力をお願い

謹啓 皆様におかれましては益々ご清祥のこととお喜び申し上げます。

私どもの研究グループは、学習院大学人文科学研究所の助成を受け、共同研究プロジェクト「人文系学士課程教育における卒業論文がもたらす学習効果の検証」（2011年度～2013年度）を進めています。

本プロジェクトは、大学教育の意義や効果が厳しく問われている現代において、日本の文学部教育のあり方と、学習院大学文学部の教育成果について検証・考察することを目的としています。これまでに、(1) 全国の4年制大学に置かれた人文系学科の学科長を対象とした調査、(2) 2011年度の学習院大学文学部4年生を対象とした調査を実施しました。

この度、本プロジェクトの一環として、学習院大学文学部卒業生（1998年度～2004年度）の皆様へ、調査へのご協力をお願いすることとなりました。この調査の目的は、本学文学部での学習や諸経験が、卒業後の生活とどのような関係にあるのかを検証することです。対象者は、当該年度のご卒業者のうち、学習院桜友会に現住所をお知らせいただいている方全員で、すべて郵送法により実施しています。なお、皆様のお名前とご住所は、本調査の内容に関する学習院桜友会の所定の審査を経た上でご提供いただきました。

ご多用のところ大変恐縮ではございますが、本プロジェクトの趣旨をご理解いただき、ご協力を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

<調査票のご返却について>

次ページより始まる調査票にご回答いただき、同封の封筒に入れて、2月25日（月曜日）までにご投函くださいますようお願いいたします。なお、切手は不要です。

末筆ながら、皆様の益々のご発展をお祈り申し上げます。

謹言

本調査についてのお問い合わせ先

〒171-8588 東京都豊島区目白1-5-1

学習院大学人文科学研究所

客員所員 篠田 雅人

E-mail:masato.shinoda@gakushuin.ac.jp

※本共同研究プロジェクトの概要・研究スタッフ等は下記 URL をご参照ください。

http://www.gakushuin.ac.jp/univ/let/rihum/project_kanda.htm

学習院大学文学部での学びと卒業後の生活・意識等に関する調査

2013年1月

学習院大学人文科学研究共同研究プロジェクト

「人文系学士課程教育における卒業論文がもたらす学習効果の検証」

- この調査は、大学在学中の経験と卒業後のキャリアや生活の関係について調査し、学習院大学文学部ならびにわが国の人文系学士課程教育の意義について検討することを目的としています。
- 回答はすべて統計的に処理され、上記以外の目的で使われることはありません。
- 本調査の結果は、学術的な観点から一部公表される場合があることをご了承ください。

N=830 ※各質問において無回答は除外して割合 (%) を計算しています。

●はじめに、あなたに関する基本的なことからについてお聞きします。

Q 1 あてはまる番号1つに○をつけてください。() には数字を記入してください。

- A. 性別 **15.8** 男性 **84.2** 女性
- B. 年齢 (**33.6**) 歳
- C. 所属学科 **13.4** 哲学科 **15.9** 史学科 **18.9** 日本語日本文学科 **16.1** 英米文学科
7.4 ドイツ文学科 **10.3** フランス文学科 **18.0** 心理学科
- D. 本学部入学にあたっての入試方式
52.5 一般入試 **11.2** 男女高等科からの進学 **25.9** 指定校推薦入試 - 公募制推薦入試
2.1 海外帰国生入試 **0.2** 外国人学生特別入試 **1.9** 社会人入試 **5.6** 編入学試験 **0.2** 転部・転科
- E. 卒業年 **西暦** () 年3月卒業 **16.9** ~1999年
26.5 2000年・2001年
27.2 2002年・2003年
29.4 2004年~
- F. 配偶者の有無 **57.4** あり **42.6** なし
- G. 子供の人数 (**59.3** 0人 **23.9** 1人 **15.5** 2人 **1.2** 3人)
- H. 現在のお住まい **36.9** 東京23区 **26.6** 政令指定都市 **36.5** その他

●大学に入学するまでのことからについてお聞きします。

Q 2 高校時代のあなたについて、あてはまる番号1つに○をつけてください。

	とてもあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
A. 積極的に本を読んでいた(マンガを除く)	28.7	32.0	29.1	10.3
B. 作文や小論文など文章を書くことが得意だった	18.6	33.6	32.3	15.5
C. 勉強方法は暗記中心だった	24.7	48.8	23.1	3.4
D. どの科目でも学校の授業内容は理解できていた	17.7	49.9	27.8	4.6
E. 授業で分からなかったところは自分で考えたり調べたりした	21.7	51.8	23.1	3.4
F. 大学進学後の学費や生活費のまかない方について親と話し合った	8.6	17.2	37.0	37.2

Q 3 入学した学科について、あてはまる番号1つに○をつけてください。

	とてもあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
A. 強く志望していた学科に入学した	57.0	26.5	12.8	3.7
B. 学科にどのような教員がいるか調べて入学した	9.4	16.9	31.0	42.6

●大学入学後の学習（卒業論文・卒業研究への取り組みを除く）や課外活動等についてお聞きます。

Q 4 あなたは大学入学後、どのような学び方をしましたか。各項目についてあてはまる番号1つに○をつけてください。

	とても あてはまる	やや あてはまる	あまり あてはまらない	全く あてはまらない
A. 学術的な論文・書籍や文学作品を積極的に読んだ	16.0	34.6	39.8	9.6
B. 授業で課されたレポート等はしっかり準備して書いた	30.7	49.2	17.8	2.3
C. 暗記によって試験を乗り切るような学習が多くを占めた	6.1	33.4	49.6	10.9
D. 授業内容が自分なりに理解できるまで考えたり調べたりした	13.8	53.4	30.1	2.7
E. 授業をきっかけにして自分なりの関心を形成していった	32.2	51.1	13.9	2.8

Q 5 あなたは、課外活動等にどのくらい意欲的に取り組みましたか。各活動について、あてはまる番号1つに○をつけてください。

	とても 意欲的だった	やや 意欲的だった	あまり 意欲的でなかった	全く 意欲的でなかった	経験しなかった
A. 部活動（部・同好会・愛好会）	27.6	17.1	10.7	4.6	40.0
B. サークル活動	15.5	17.5	11.5	7.7	47.7
C. アルバイト	24.6	43.4	23.4	3.5	5.1
D. 資格や検定のための勉強	13.3	30.1	26.3	9.7	20.6

●卒業論文・卒業研究に関することがらについてお聞きます。

※卒業論文・卒業研究を書かずに卒業なさった方は、Q 10にお進みください。

Q 6 あなたの卒業論文・卒業研究の執筆経験について、あてはまる番号1つに○をつけてください。

	とても あてはまる	やや あてはまる	あまり あてはまらない	全く あてはまらない	非該当
A. 書きたいテーマがみつからなくて苦労した	9.0	22.5	41.5	18.9	8.1
B. 教員に指導を受ける機会は十分あった	21.7	35.5	29.8	5.0	8.1
C. 就職活動に時間を取られ卒論・卒研どころではなかった	2.4	13.3	40.8	35.3	8.1
D. 自分のテーマについて納得いくまで考えたり調べたりした	24.3	43.0	22.0	2.6	8.1
E. 卒論・卒研のテーマは卒業後の進路と関係している	10.3	9.1	12.7	59.8	8.1
F. 卒論・卒研の執筆に真剣に取り組んだ	42.9	35.5	11.7	1.8	8.1
G. 卒業時、卒論・卒研のできに満足していた	16.9	37.5	27.7	9.7	8.1

Q 7 あなたは、卒業論文・卒業研究を書くときに、以下の点をどのくらい意識していましたか。あてはまる番号1つに○をつけてください。

	とても 意識した	やや 意識した	あまり 意識しなかった	全く 意識しなかった	非該当
A. 問題設定の適切性	18.4	44.9	25.1	3.4	8.1
B. 先行研究をきちんとふまえること	23.7	38.8	24.7	4.7	8.1
C. 引用の仕方、文献表の作り方	24.6	43.7	20.8	2.8	8.1
D. 一次データ（原典、史料も含む）の利用	25.6	43.3	19.4	3.5	8.1
E. 独創性	14.1	34.2	37.0	6.5	8.2
F. 論理的な文章構成	23.5	48.4	17.8	2.1	8.1
G. 文章の分かりやすさ	24.1	52.2	13.7	1.8	8.1

Q 8 今のあなたにとって、卒業論文・卒業研究の執筆にはどのような意義があったと思いますか。あてはまる番号1つに○をつけてください。

	とても あてはまる	やや あてはまる	あまり あてはまらない	全く あてはまらない	非該当
A. 学術論文を書くという体験	49.1	35.7	5.2	1.8	8.1
B. 学問の奥深さに触れる体験	34.4	37.3	17.4	2.7	8.2
C. 専門教育の総仕上げ	24.1	36.3	26.3	5.2	8.2
D. 専門分野の知識の深化	26.2	40.9	20.9	3.9	8.2
E. 困難なことを最後までやり遂げる経験	42.2	36.7	10.2	2.7	8.2
F. 自分の主張を分かりやすく伝える方法を学ぶ経験	23.4	41.8	23.5	3.2	8.2
G. 主体的な学習態度を養う経験	31.2	41.4	16.8	2.4	8.1

Q 9 卒業時、あなたは卒業論文・卒業研究の執筆にはどのような意義があると思っていましたか。あてはまる番号1つに○をつけてください。

	とても あてはまる	やや あてはまる	あまり あてはまらない	全く あてはまらない	非該当
A. 学術論文を書くという体験	41.0	38.1	9.8	2.9	8.1
B. 学問の奥深さに触れる体験	26.5	41.8	19.4	4.1	8.1
C. 専門教育の総仕上げ	33.2	35.0	19.4	4.3	8.1
D. 専門分野の知識の深化	26.9	44.2	17.7	3.0	8.1
E. 困難なことを最後までやり遂げる経験	38.6	32.8	16.3	4.1	8.1
F. 自分の主張を分かりやすく伝える方法を学ぶ経験	18.8	40.1	28.1	4.9	8.1
G. 主体的な学習態度を養う経験	25.1	40.9	20.9	5.0	8.1

●大学（文学部）時代にあなたが身につけた知識や能力についてお聞きします。

Q 10 大学時代に、あなたは以下に示すような知識・能力をどのくらい身につけることができましたか。あてはまる番号1つに○をつけてください。

	かなり 身についた	やや 身についた	あまり 身につかなかった	全く 身につかなかった
A. 専門分野の知識	17.4	64.3	16.4	1.9
B. 専門分野以外の幅広い知識	11.8	57.7	29.1	1.5
C. 常識にとらわれることなく批判的に考える力	15.5	35.3	44.6	4.6
D. 他者と協力してものごとを進める力	14.7	43.5	35.5	6.3
E. 自分の考えを他者に文章で伝える力	15.9	55.5	26.1	2.4
F. 自分の考えを他者に口頭で伝える力	11.7	45.8	38.7	3.9
G. 自分の適性や能力を把握する力	12.9	46.5	36.8	3.8
H. 目標を立てて計画的に行動する力	17.0	49.1	29.8	4.0
I. 広い視野から人間を探究する力	22.0	46.1	28.3	3.6

●卒業後から現在までのご職業等についてお聞きします。

Q 1 1 文学部を卒業した直後の進路と、現在（2013年1月1日時点）の状況を教えてください。それぞれについて、あてはまる番号1つを（ ）の中に記入してください。あてはまるものが複数思いあたる場合は、主たるもの1つを選んでお答えください。

卒業直後	現在				
62.0	43.7	正社員	2.2	0.4	専門学校に進学（在学中）
4.5	10.3	公務員・教員（正職員として）	10.9	0.7	大学院に進学（在学中）
6.3	8.6	派遣社員・契約社員	0.5	18.9	専業主婦・専業主夫
2.9	3.9	公務員・教員（非常勤または臨時職員として）	2.4	1.2	就職活動（就職活動中）
0.6	3.2	自営業・家族従業者	1.6	0.6	特に何もしていない
4.3	5.1	パート・アルバイト	1.8	3.4	その他

Q 1 2 あなたは大学卒業後、職業とおおよそどのような関わりをしてきましたか。あてはまる番号1つに○をつけてください。

- 30.9 卒業後、就職し、現在まで同じ会社（官庁・学校等含む）で働いている
- 33.5 卒業後、就職し、転職したが、ほぼ継続して働いている
- 16.5 卒業後、就職し、結婚・出産等を機に退職し、現在まで働いていない
- 5.6 卒業後、就職し、結婚・出産等を機に退職したが、現在は働いている
- 13.5 その他（具体的に

Q 1 3 あなたの現在の年収（税引き前）を教えてください。また配偶者がいる場合は、配偶者の年収（税引き前）も教えてください。それぞれについて、あてはまる番号1つを（ ）の中に記入してください。

あなた	配偶者				
18.8	3.9	なし	9.6	16.2	600～800万円
12.6	2.1	200万円未満	2.2	7.4	800～1,000万円
25.1	4.9	200～400万円	1.2	4.4	1,000万円以上
30.5	17.5	400～600万円	43.5		配偶者なし

●現在、あなたが身につけている知識や能力についてお聞きします。

Q 1 4 現在、あなたは以下に示すような知識・能力をどのくらい身につけていますか。あてはまる番号1つに○をつけてください。

	かなり身につけている	やや身につけている	あまり身につけていない	全く身につけていない
A. 常識にとらわれることなく批判的に考える力	25.0	56.3	18.3	0.4
B. 他者と協力してものごとを進める力	37.8	53.0	8.7	0.5
C. 自分の考えを他者に文章で伝える力	32.1	53.1	14.2	0.6
D. 自分の考えを他者に口頭で伝える力	26.3	53.6	19.0	1.1
E. 自分の適性や能力を把握する力	24.7	62.0	12.5	0.8
F. 目標を立てて計画的に行動する力	33.2	50.4	15.8	0.6
G. 広い視野から人間を探究する力	27.6	52.8	18.4	1.2

●あなたの生活や意識・価値観等についてお聞きします。

Q 15 あなたの現在のお仕事に関することについて教えてください。あてはまる番号1つに○をつけてください。お仕事をお持ちでない方はQ 16にお進みください。

	とても あてはまる	やや あてはまる	あまり あてはまらない	全く あてはまらない
A. 仕事に関する知識を十分身につけている	18.0	68.1	13.2	0.6
B. 仕事においてよい成果をあげている	17.5	67.0	14.3	1.2
C. 職場で良好な人間関係を築いている	38.8	55.2	5.0	1.1
D. 仕事に関連した学習を職場以外でも行っている	23.6	32.4	28.5	15.5
E. 仕事の負担が重い	15.3	33.9	39.9	10.8
F. 全体的に見て仕事について満足している	25.0	53.0	17.9	4.1
G. 大学の専門分野での学びが役立っている	13.0	22.9	28.8	35.2
H. 専門分野以外の大学での学びが役立っている	13.2	37.5	31.8	17.4
I. 卒業論文・卒業研究に取り組んだ経験が役立っている	8.8	25.3	31.9	24.2
J. 部活動・サークル活動の経験が役立っている	16.3	31.6	24.2	27.9

非該当
8.1

Q 16 あなたの私生活に関することについて教えてください。あてはまる番号1つに○をつけてください。

	とても あてはまる	やや あてはまる	あまり あてはまらない	全く あてはまらない
A. 知的好奇心が強いと思う	42.3	43.5	13.7	0.5
B. 仕事以外に打ちこめるものがある	42.6	39.8	16.6	1.0
C. 周囲とは良好な人間関係を築いている	45.0	50.7	4.0	0.2
D. 読書や習い事などを行っている	41.5	34.7	16.6	7.2
E. 私生活に十分な時間を確保できている	27.4	36.9	29.5	6.2
F. 全体的に見て私生活に満足している	37.1	48.7	12.4	1.8
G. 大学の専門分野での学びが役立っている	15.0	31.4	34.1	19.4
H. 専門分野以外の大学での学びが役立っている	15.0	38.5	33.7	12.7
I. 卒業論文・卒業研究に取り組んだ経験が役立っている	9.2	26.3	37.4	18.9
J. 部活動・サークル活動の経験が役立っている	20.6	34.4	20.2	24.8

非該当
8.1

Q 17 あなたの日頃の意識や関心について教えてください。あてはまる番号1つに○をつけてください。

	とても あてはまる	やや あてはまる	あまり あてはまらない	全く あてはまらない
A. 将来のことより現在のことを大切にしている	11.4	59.0	28.3	1.3
B. 社会に対して高い関心をもっている	21.6	56.1	21.6	0.7
C. 社会を今よりもよくするために、自分にもできる ことがあると考えている	18.9	46.2	31.2	3.6
D. ボランティアや地域の活動に参加している	6.7	15.0	36.8	41.5
E. 選挙の時は投票に行く	71.1	18.2	6.7	4.1

Q18 あなたは、大学4年生くらいのころ、将来の結婚と仕事について、おおよそどのように考えていましたか。あてはまる番号1つに○をつけてください。

43.6 結婚して子どもができて仕事も続ける

7.6 結婚しないで仕事も続ける

11.6 結婚したら仕事をやめる

12.2 結婚して子どもができたなら仕事をやめる

18.8 結婚して子どもができたなら、一時、仕事をやめ、育児に手がかからなくなったら仕事を始める

6.1 その他 ()

●学習院大学文学部の発展のため、ご意見・ご経験をお聞かせください。

Q19 あなたが文学部での学びから得た知識やスキル、あるいは卒業論文・卒業研究を書いた経験は、卒業後、どのような形で生かされていますか。すでにお答えいただいたこと以外で、思いあたることがあればご自由にお書きください。お仕事に関すること、私生活に関すること、いずれでも結構ですので、具体的に教えてください。

質問はこれで終わりです。ご協力いただき、ありがとうございました。

n		合計	性別		所属学科								
			男性	女性	哲学	史学	日文	英文	独文	仏文	心理		
		830	131	696	111	131	156	133	61	85	149		
Q 1	A. 性別	男性	15.8%	100.0%	0.0%	19.8%	28.2%	14.7%	10.5%	8.2%	10.6%	14.1%	
		女性	83.9%	0.0%	100.0%	80.2%	71.8%	85.3%	89.5%	91.8%	89.4%	85.9%	
		無回答	.4%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	
	B. 年齢	30歳以下	14.8%	11.5%	15.5%	16.2%	16.8%	12.2%	15.8%	18.0%	8.2%	16.8%	
		31~35歳	62.3%	60.3%	62.9%	56.8%	60.3%	65.4%	65.4%	59.0%	65.9%	63.1%	
		36歳以上	21.6%	26.7%	20.7%	26.1%	22.1%	22.4%	18.0%	23.0%	23.5%	18.8%	
		無回答	1.3%	1.5%	0.9%	0.9%	0.8%	0.0%	0.8%	0.0%	2.4%	1.3%	
	C. 所属学科	哲学	13.4%	16.8%	12.8%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	
		史学	15.8%	28.2%	13.5%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	
		日文	18.8%	17.6%	19.1%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	
		英文	16.0%	10.7%	17.1%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	
		独文	7.3%	3.8%	8.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	
		仏文	10.2%	6.9%	10.9%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	
		心理	18.0%	16.0%	18.4%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	
			無回答	.5%	0.0%	.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
		D. 入試方式	一般入試	52.2%	78.6%	47.4%	44.1%	58.8%	57.1%	57.9%	68.9%	54.1%	35.6%
			男女高等科からの進学	11.2%	6.1%	12.2%	15.3%	12.2%	8.3%	9.8%	1.6%	3.5%	20.1%
	指定校推薦入試		25.9%	12.2%	28.6%	26.1%	18.3%	24.4%	21.1%	19.7%	34.1%	36.9%	
	公募制推薦入試		0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	
	海外帰国生入試		2.0%	1.5%	2.2%	1.8%	1.5%	0.0%	6.0%	1.6%	2.4%	1.3%	
	外国人学生特別入試		.2%	.8%	.1%	0.0%	.8%	.6%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	
	社会人入試		1.9%	0.0%	2.3%	3.6%	.8%	1.3%	1.5%	0.0%	2.4%	2.7%	
	編入学試験		5.5%	.8%	6.5%	9.0%	6.9%	8.3%	3.0%	6.6%	2.4%	2.7%	
	転部・転科		.2%	0.0%	.3%	0.0%	.8%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	.7%	
			無回答	.7%	0.0%	.4%	0.0%	0.0%	.8%	1.6%	1.2%	0.0%	
	E. 卒業年	~1999年	15.8%	16.0%	15.8%	11.7%	14.5%	17.3%	18.0%	23.0%	15.3%	14.1%	
		2000年・2001年	24.8%	32.8%	23.4%	28.8%	30.5%	25.0%	18.8%	21.3%	24.7%	23.5%	
		2002年・2003年	25.4%	19.8%	26.6%	23.4%	22.1%	22.4%	30.1%	23.0%	30.6%	27.5%	
		2004年~	27.5%	26.7%	27.7%	27.0%	29.8%	28.8%	24.1%	29.5%	23.5%	29.5%	
		無回答	6.5%	4.6%	6.5%	9.0%	3.1%	6.4%	9.0%	3.3%	5.9%	5.4%	
	F. 配偶者有無	あり	57.0%	55.7%	57.5%	54.1%	47.3%	55.8%	65.4%	59.0%	57.6%	61.1%	
		なし	42.3%	44.3%	42.0%	45.0%	52.7%	44.2%	33.1%	41.0%	42.4%	38.3%	
		無回答	.7%	0.0%	.6%	.9%	0.0%	0.0%	1.5%	0.0%	0.0%	.7%	
G. 子供の人数	0人	57.5%	61.8%	56.9%	57.7%	65.6%	62.8%	53.4%	60.7%	57.6%	48.3%		
	1人	23.1%	16.8%	24.4%	24.3%	14.5%	21.2%	25.6%	26.2%	25.9%	27.5%		
	2人	15.1%	15.3%	15.1%	13.5%	13.7%	12.8%	15.0%	9.8%	14.1%	22.1%		
	3人	1.2%	2.3%	1.0%	1.8%	1.5%	2.6%	1.5%	0.0%	0.0%	.0%		
	無回答	3.1%	3.8%	2.6%	2.7%	4.6%	0.6%	4.5%	3.3%	2.4%	2.0%		
H. 現在のお住まい	東京23区	36.1%	31.3%	37.2%	33.3%	32.1%	36.5%	38.3%	36.1%	37.6%	39.6%		
	政令指定都市	26.0%	23.7%	26.6%	25.2%	27.5%	26.9%	24.8%	26.2%	21.2%	28.2%		
	その他	35.8%	44.3%	34.3%	37.8%	39.7%	35.9%	33.8%	37.7%	40.0%	30.2%		
		無回答	2.0%	.8%	1.9%	3.6%	.8%	.6%	3.0%	0.0%	1.2%	2.0%	
	Q 2 高校時代のあなたについて	A. 積極的に本を読んでいた(マンガを除く)	とてもあてはまる	28.6%	31.3%	28.2%	32.4%	32.1%	42.9%	19.5%	31.1%	15.3%	22.8%
ややあてはまる			31.8%	32.8%	31.8%	33.3%	33.6%	33.3%	30.8%	27.9%	36.5%	28.2%	
あまりあてはまらない			28.9%	20.6%	30.5%	23.4%	22.1%	19.9%	40.6%	29.5%	38.8%	31.5%	
全くあてはまらない			10.2%	15.3%	9.3%	9.9%	12.2%	3.2%	9.0%	11.5%	9.4%	17.4%	
無回答			.5%	0.0%	.3%	.9%	0.0%	.6%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	
B. 作文や小論文など文章を書くことが得意だった		とてもあてはまる	18.6%	17.6%	18.8%	26.1%	13.7%	23.1%	14.3%	27.9%	12.9%	16.1%	
		ややあてはまる	33.5%	31.3%	34.1%	30.6%	29.8%	46.8%	29.3%	31.1%	32.9%	30.9%	
		あまりあてはまらない	32.2%	33.6%	32.0%	27.0%	42.0%	23.7%	34.6%	26.2%	34.1%	35.6%	
		全くあてはまらない	15.4%	17.6%	14.9%	15.3%	14.5%	6.4%	21.8%	14.8%	20.0%	17.4%	
		無回答	.4%	0.0%	.1%	.9%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	
C. 勉強方法は暗記中心だった		とてもあてはまる	24.5%	29.0%	23.6%	27.0%	29.0%	21.2%	23.3%	21.3%	22.4%	25.5%	
		ややあてはまる	48.4%	41.2%	50.0%	45.0%	48.9%	47.4%	50.4%	50.8%	49.4%	49.0%	
		あまりあてはまらない	22.9%	22.9%	23.0%	23.4%	16.8%	26.3%	21.8%	26.2%	27.1%	22.1%	
		全くあてはまらない	3.4%	6.9%	2.7%	3.6%	4.6%	4.5%	4.5%	0.0%	1.2%	2.7%	
		無回答	.8%	0.0%	.7%	.9%	.8%	.6%	0.0%	1.6%	0.0%	.7%	
D. どの科目でも学校の授業内容は理解できていた		とてもあてはまる	17.6%	10.7%	19.0%	16.2%	13.0%	16.0%	22.6%	24.6%	21.2%	15.4%	
		ややあてはまる	49.8%	38.9%	52.0%	43.2%	50.4%	48.1%	51.1%	50.8%	49.4%	55.0%	
		あまりあてはまらない	27.7%	37.4%	26.0%	35.1%	32.1%	29.5%	22.6%	24.6%	21.2%	26.8%	
		全くあてはまらない	4.6%	13.0%	2.9%	5.4%	4.6%	6.4%	3.8%	0.0%	8.2%	2.0%	
		無回答	.4%	0.0%	.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	.7%	
E. 授業で分からなかったところは自分で考えたり調べたりした		とてもあてはまる	21.7%	15.3%	23.0%	16.2%	16.8%	28.2%	30.8%	23.0%	22.4%	14.8%	
		ややあてはまる	51.7%	45.8%	53.0%	47.7%	48.9%	51.3%	45.9%	68.9%	56.5%	54.4%	
		あまりあてはまらない	23.0%	32.1%	21.4%	29.7%	29.8%	19.2%	20.3%	8.2%	16.5%	28.2%	
		全くあてはまらない	3.4%	6.9%	2.6%	6.3%	4.6%	1.3%	3.0%	0.0%	4.7%	2.7%	
		無回答	.2%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	
F. 大学進学後の学費や生活費のまかない方について親と話し合った		とてもあてはまる	8.6%	9.2%	8.5%	6.3%	6.1%	10.9%	8.3%	8.2%	8.2%	10.7%	
		ややあてはまる	17.1%	19.8%	16.7%	11.7%	12.2%	18.6%	19.5%	14.8%	24.7%	18.8%	
		あまりあてはまらない	36.7%	35.9%	37.1%	41.4%	38.2%	41.0%	32.3%	37.7%	29.4%	35.6%	
		全くあてはまらない	37.0%	35.1%	37.4%	40.5%	43.5%	29.5%	38.3%	39.3%	37.6%	34.2%	
		無回答	.6%	0.0%	.4%	0.0%	0.0%	0.0%	1.5%	0.0%	0.0%	.7%	
Q 3 入学した学科について		A. 強く志望していた学科に入学した	とてもあてはまる	55.7%	58.8%	55.3%	42.3%	75.6%	60.9%	47.4%	32.8%	29.4%	75.2%
			ややあてはまる	25.9%	22.1%	26.7%	35.1%	16.0%	21.2%	36.8%	32.8%	32.9%	16.8%
			あまりあてはまらない	12.5%	14.5%	12.2%	18.0%	6.9%	12.2%	9.8%	27.9%	22.4%	4.7%
	全くあてはまらない		3.6%	3.8%	3.4%	.9%	.8%	2.6%	4.5%	6.6%	12.9%	1.3%	
	無回答		2.3%	.8%	2.3%	3.6%	.8%	3.2%	1.5%	0.0%	2.4%	2.0%	
B. 学科にどのような教員がいるか調べて入学した	とてもあてはまる	9.4%	11.5%	9.1%	7.2%	18.3%	16.0%	2.3%	11.5%	2.4%	5.4%		
	ややあてはまる	16.9%	16.0%	17.1%	18.0%	22.9%	16.0%	8.3%	14.8%	22.4%	17.4%		
	あまりあてはまらない	31.0%	26.7%	31.9%	27.9%	26.0%	30.8%	33.8%	24.6%	32.9%	37.6%		
	全くあてはまらない	42.5%	45.8%	42.0%	46.8%	32.8%	37.2%	55.6%	49.2%	42.4%	39.6%		
	無回答	.2%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%		

Q 4 大学入学後の学習 (卒業論文・卒業研究への取り組みを除く) について	A. 学術的な論文・書籍 や文学作品を積極的に 読んだ	とてもあてはまる	15.9%	19.8%	15.1%	27.0%	17.6%	21.2%	12.8%	9.8%	10.6%	8.1%
		ややあてはまる	34.5%	29.8%	35.5%	31.5%	36.6%	42.3%	34.6%	34.4%	24.7%	32.9%
		あまりあてはまらない	39.6%	40.5%	39.7%	29.7%	38.9%	31.4%	41.4%	41.0%	49.4%	49.7%
		全くあてはまらない	9.5%	9.9%	9.5%	11.7%	6.9%	5.1%	10.5%	13.1%	15.3%	9.4%
		無回答	5%	0.0%	.3%	0.0%	0.0%	.8%	1.6%	0.0%	0.0%	
	B. 授業で課されたレ ポート等はしっかり準 備して書いた	とてもあてはまる	30.6%	19.8%	32.8%	29.7%	27.5%	41.7%	30.1%	31.1%	24.7%	26.2%
		ややあてはまる	49.0%	47.3%	49.4%	45.0%	54.2%	43.6%	47.4%	44.3%	49.4%	57.0%
		あまりあてはまらない	17.7%	26.7%	16.1%	18.9%	15.3%	14.1%	20.3%	23.0%	22.4%	16.1%
		全くあてはまらない	2.3%	6.1%	1.6%	6.3%	3.1%	.6%	1.5%	1.6%	3.5%	.7%
		無回答	.4%	0.0%	.1%	0.0%	0.0%	0.0%	.8%	0.0%	0.0%	0.0%
	C. 暗記によって試験を 乗り切るような学習が 多くを占めた	とてもあてはまる	6.0%	6.1%	6.0%	4.5%	3.8%	4.5%	6.8%	13.1%	11.8%	4.0%
		ややあてはまる	33.3%	29.8%	34.1%	26.1%	25.2%	22.4%	36.8%	45.9%	48.2%	40.3%
		あまりあてはまらない	49.4%	47.3%	49.9%	50.5%	53.4%	62.2%	46.6%	36.1%	31.8%	50.3%
		全くあてはまらない	10.8%	16.8%	9.8%	18.9%	17.6%	10.9%	9.0%	4.9%	7.1%	5.4%
		無回答	.5%	0.0%	.3%	0.0%	0.0%	0.0%	.8%	0.0%	1.2%	0.0%
	D. 授業内容が自分なりに 理解できるまで考え たり調べたりした	とてもあてはまる	13.7%	13.7%	13.8%	13.5%	12.2%	14.7%	17.3%	14.8%	7.1%	14.8%
		ややあてはまる	53.3%	44.3%	55.0%	46.8%	45.8%	56.4%	52.6%	55.7%	61.2%	57.0%
		あまりあてはまらない	30.0%	35.9%	29.0%	34.2%	38.2%	25.0%	27.8%	29.5%	29.4%	27.5%
		全くあてはまらない	2.7%	6.1%	2.0%	5.4%	3.8%	3.8%	1.5%	0.0%	2.4%	.7%
		無回答	.4%	0.0%	.1%	0.0%	0.0%	0.0%	.8%	0.0%	0.0%	0.0%
E. 授業をきっかけにして 自分なりの関心を形 成していった	とてもあてはまる	32.2%	34.4%	31.9%	44.1%	33.6%	34.0%	27.8%	24.6%	23.5%	32.2%	
	ややあてはまる	51.0%	48.9%	51.4%	46.8%	50.4%	52.6%	49.6%	45.9%	55.3%	54.4%	
	あまりあてはまらない	13.9%	13.0%	14.1%	4.5%	13.0%	12.8%	20.3%	27.9%	15.3%	10.7%	
	全くあてはまらない	2.8%	3.8%	2.6%	4.5%	3.1%	.6%	2.3%	1.6%	5.9%	2.7%	
	無回答	.2%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	
Q 5 大学での課外活動等について	A. 部活動(部・同好 会・愛好会)	とても意欲的だった	27.3%	35.9%	25.9%	28.8%	29.0%	26.9%	24.8%	32.8%	17.6%	31.5%
		やや意欲的だった	16.9%	19.1%	16.4%	20.7%	16.8%	20.5%	13.5%	14.8%	21.2%	11.4%
		あまり意欲的でなかった	10.6%	6.9%	11.4%	12.6%	9.2%	10.3%	14.3%	8.2%	9.4%	9.4%
		全く意欲的でなかった	4.6%	3.8%	4.7%	2.7%	5.3%	4.5%	3.8%	6.6%	5.9%	4.7%
		経験しなかった	39.5%	33.6%	40.8%	35.1%	38.9%	37.2%	42.1%	37.7%	43.5%	42.3%
	B. サークル活動	とても意欲的だった	1.1%	.8%	.9%	0.0%	.8%	.6%	1.5%	0.0%	2.4%	.7%
		やや意欲的だった	15.3%	15.3%	15.4%	16.2%	13.7%	17.3%	19.5%	14.8%	12.9%	12.1%
		あまり意欲的でなかった	17.2%	12.2%	18.1%	16.2%	14.5%	16.7%	17.3%	18.0%	24.7%	16.1%
		全く意欲的でなかった	11.3%	9.2%	11.8%	15.3%	6.9%	14.1%	15.0%	4.9%	11.8%	8.7%
		経験しなかった	7.6%	7.6%	7.6%	8.1%	10.7%	5.1%	5.3%	8.2%	8.2%	8.7%
	C. アルバイト	とても意欲的だった	47.0%	53.4%	46.0%	41.4%	52.7%	46.2%	41.4%	54.1%	40.0%	53.7%
		やや意欲的だった	1.6%	2.3%	1.1%	2.7%	1.5%	.6%	1.5%	0.0%	2.4%	.7%
		あまり意欲的でなかった	24.3%	26.7%	23.9%	18.9%	22.1%	23.1%	34.6%	21.3%	24.7%	22.8%
		全く意欲的でなかった	43.0%	37.4%	44.3%	44.1%	41.2%	44.9%	30.8%	47.5%	50.6%	47.7%
		経験しなかった	23.1%	22.1%	23.4%	23.4%	22.9%	24.4%	24.8%	23.0%	16.5%	24.8%
	D. 資格や検定のための 勉強	とても意欲的だった	3.5%	7.6%	2.7%	6.3%	5.3%	2.6%	3.0%	3.3%	3.5%	1.3%
		やや意欲的だった	5.1%	4.6%	5.2%	5.4%	7.6%	4.5%	6.8%	4.9%	3.5%	2.7%
		あまり意欲的でなかった	1.0%	1.5%	.6%	1.8%	.8%	.6%	0.0%	0.0%	1.2%	.7%
		全く意欲的でなかった	13.1%	6.1%	14.5%	9.9%	6.1%	13.5%	18.8%	16.4%	11.8%	16.1%
		経験しなかった	29.8%	16.8%	32.3%	24.3%	29.0%	32.7%	32.3%	39.3%	31.8%	24.8%
Q 6 卒業論文・卒業研究の執筆 経験について	とても意欲的だった	26.0%	22.9%	26.7%	22.5%	26.0%	26.3%	27.8%	21.3%	34.1%	24.8%	
	やや意欲的だった	9.6%	13.7%	8.8%	10.8%	12.2%	9.6%	7.5%	9.8%	8.2%	8.7%	
	あまり意欲的でなかった	20.4%	38.9%	17.0%	30.6%	26.0%	17.3%	12.8%	13.1%	12.9%	24.8%	
	全く意欲的でなかった	1.1%	1.5%	.7%	1.8%	.8%	.6%	.8%	0.0%	1.2%	.7%	
	経験しなかった	13.1%	6.1%	14.5%	9.9%	6.1%	13.5%	18.8%	16.4%	11.8%	16.1%	
Q 6 卒業論文・卒業研究の執筆 経験について	A. 書きたいテーマがみ つからなくて苦労した	とてもあてはまる	8.9%	10.7%	8.6%	10.8%	6.1%	9.0%	11.3%	4.9%	5.9%	11.4%
		ややあてはまる	22.4%	23.7%	22.3%	18.0%	27.5%	23.1%	24.1%	14.8%	16.5%	26.2%
		あまりあてはまらない	41.2%	35.1%	42.5%	50.5%	40.5%	45.5%	46.6%	23.0%	22.4%	45.0%
		全くあてはまらない	18.8%	22.9%	18.0%	19.8%	26.0%	22.4%	16.5%	6.6%	12.9%	17.4%
		非該当・無回答	8.7%	7.6%	8.6%	0.9%	0.0%	0.0%	1.5%	50.8%	42.4%	0.0%
	B. 教員に指導を受ける 機会は十分あった	とてもあてはまる	21.6%	19.1%	22.1%	24.3%	32.8%	25.6%	26.3%	14.8%	4.7%	13.4%
		ややあてはまる	35.3%	29.8%	36.5%	36.9%	33.6%	42.3%	35.3%	14.8%	25.9%	43.0%
		あまりあてはまらない	29.6%	35.1%	28.7%	31.5%	29.0%	28.8%	29.3%	16.4%	22.4%	40.3%
		全くあてはまらない	4.9%	8.4%	4.2%	7.2%	4.6%	3.2%	7.5%	3.3%	4.7%	3.4%
		非該当・無回答	8.6%	7.6%	8.5%	0.0%	0.0%	0.0%	1.5%	50.8%	42.4%	0.0%
	C. 就職活動に時間を取 られ卒論・卒研どころ ではなかった	とてもあてはまる	2.4%	2.3%	2.4%	1.8%	3.1%	2.6%	1.5%	6.6%	1.2%	2.0%
		ややあてはまる	13.3%	9.2%	14.1%	12.6%	12.2%	10.9%	18.8%	14.8%	12.9%	12.1%
		あまりあてはまらない	40.6%	33.6%	42.0%	47.7%	39.7%	51.3%	45.9%	19.7%	22.4%	39.6%
		全くあてはまらない	35.1%	47.3%	32.9%	37.8%	44.3%	35.3%	32.3%	8.2%	21.2%	46.3%
		非該当・無回答	8.7%	7.6%	8.6%	0.0%	0.8%	0.0%	1.5%	50.8%	42.4%	0.0%
	D. 自分のテーマにつ いて納得いくまで考え たり調べたりした	とてもあてはまる	24.1%	26.0%	23.7%	30.6%	29.8%	28.2%	28.6%	9.8%	11.8%	18.1%
		ややあてはまる	42.7%	33.6%	44.5%	45.0%	48.9%	44.9%	44.4%	21.3%	23.5%	52.3%
		あまりあてはまらない	21.8%	28.2%	20.7%	20.7%	18.3%	24.4%	24.1%	13.1%	17.6%	27.5%
		全くあてはまらない	2.5%	4.6%	2.2%	3.6%	3.1%	2.6%	1.5%	3.3%	3.5%	1.3%
		非該当・無回答	8.9%	7.6%	8.9%	0.0%	0.0%	0.0%	1.5%	52.5%	43.5%	0.7%
E. 卒論・卒研のテーマ は卒業後の進路と関係 している	とてもあてはまる	10.2%	16.0%	9.1%	12.6%	15.3%	10.3%	3.8%	3.3%	5.9%	14.8%	
	ややあてはまる	9.0%	13.7%	8.2%	12.6%	9.2%	10.3%	5.3%	3.3%	1.2%	15.4%	
	あまりあてはまらない	12.7%	7.6%	13.6%	12.6%	10.7%	12.8%	12.0%	8.2%	8.2%	18.8%	
	全くあてはまらない	59.5%	55.0%	60.6%	62.2%	64.9%	66.7%	77.4%	34.4%	42.4%	51.0%	
	非該当・無回答	8.6%	7.6%	8.5%	0.0%	0.0%	0.0%	1.5%	50.8%	42.4%	0.0%	
F. 卒論・卒研の執筆に 真剣に取り組んだ	とてもあてはまる	42.7%	38.9%	43.4%	52.3%	58.8%	47.4%	43.6%	13.1%	22.4%	38.9%	
	ややあてはまる	35.3%	33.6%	35.8%	28.8%	32.1%	35.9%	42.1%	24.6%	23.5%	48.3%	
	あまりあてはまらない	11.7%	17.6%	10.6%	14.4%	7.6%	16.0%	12.0%	11.5%	9.4%	10.1%	
	全くあてはまらない	1.8%	2.3%	1.7%	4.5%	1.5%	.6%	.8%	0.0%	2.4%	2.7%	
	非該当・無回答	8.6%	7.6%	8.5%	0.0%	0.0%	0.0%	1.5%	50.8%	42.4%	0.0%	
G. 卒業時、卒論・卒研 のできに満足していた	とてもあてはまる	16.9%	18.3%	16.5%	17.1%	22.1%	14.1%	27.1%	4.9%	9.4%	14.1%	
	ややあてはまる	37.3%	30.5%	38.8%	41.4%	39.7%	45.5%	45.1%	16.4%	18.8%	36.9%	
	あまりあてはまらない	27.6%	29.0%	27.4%	27.9%	28.2%	30.8%	19.5%	19.7%	18.8%	39.6%	
	全くあてはまらない	9.6%	14.5%	8.8%	13.5%	9.9%	9.6%	6.8%	8.2%	10.6%	9.4%	
	非該当・無回答	8.6%	7.6%	8.5%	0.0%	0.0%	0.0%	1.5%	50.8%	42.4%	0.0%	

Q 7 あなたは、卒業論文・卒業研究を書くときに、以下の点をどのくらい意識していますか。	A. 問題設定の適切性	とても意識した	18.3%	18.3%	18.4%	21.6%	20.6%	21.2%	18.0%	9.8%	5.9%	21.5%	
		やや意識した	44.6%	41.2%	45.3%	44.1%	47.3%	47.4%	49.6%	19.7%	28.2%	55.0%	
		あまり意識しなかった	24.9%	27.5%	24.6%	29.7%	29.8%	28.8%	26.3%	14.8%	17.6%	20.8%	
		全く意識しなかった	3.4%	5.3%	3.0%	4.5%	2.3%	2.6%	3.8%	4.9%	5.9%	2.0%	
		非該当・無回答	8.8%	7.6%	8.8%	0.0%	0.0%	0.0%	3.0%	50.8%	42.4%	0.7%	
	B. 先行研究きちんとふまえること	とても意識した	23.5%	19.8%	24.3%	34.2%	42.7%	29.5%	12.8%	6.6%	4.7%	20.1%	
		やや意識した	38.4%	44.3%	37.4%	30.6%	38.2%	44.9%	45.9%	13.1%	24.7%	49.0%	
		あまり意識しなかった	24.5%	22.1%	25.0%	29.7%	14.5%	21.2%	35.3%	23.0%	20.0%	26.8%	
		全く意識しなかった	4.7%	6.1%	4.5%	5.4%	4.6%	4.5%	3.0%	6.6%	8.2%	3.4%	
		非該当・無回答	8.9%	7.6%	8.9%	0.0%	0.0%	0.0%	3.0%	50.8%	42.4%	0.7%	
	C. 引用の仕方、文献表の作り方	とても意識した	24.5%	20.6%	25.3%	37.8%	38.2%	26.3%	23.3%	11.5%	10.6%	15.4%	
		やや意識した	43.4%	38.9%	44.3%	39.6%	41.2%	50.0%	50.4%	21.3%	24.7%	54.4%	
		あまり意識しなかった	20.6%	27.5%	19.4%	18.9%	19.1%	22.4%	21.1%	16.4%	16.5%	25.5%	
		全く意識しなかった	2.8%	5.3%	2.3%	3.6%	1.5%	1.3%	3.0%	0.0%	5.9%	4.0%	
		非該当・無回答	8.8%	7.6%	8.8%	0.0%	0.0%	0.0%	2.3%	50.8%	42.4%	0.7%	
	D. 一次データ（原典、史料も含む）の利用	とても意識した	25.4%	29.0%	24.9%	34.2%	43.5%	27.6%	21.1%	11.5%	12.9%	17.4%	
		やや意識した	42.9%	37.4%	44.0%	44.1%	42.7%	50.6%	55.6%	24.6%	24.7%	40.9%	
		あまり意識しなかった	19.3%	19.8%	19.3%	17.1%	11.5%	19.2%	17.3%	13.1%	14.1%	35.6%	
		全く意識しなかった	3.5%	6.1%	3.0%	4.5%	2.3%	1.3%	3.8%	0.0%	5.9%	6.0%	
		非該当・無回答	8.9%	7.6%	8.8%	0.0%	0.0%	1.3%	2.3%	50.8%	42.4%	0.7%	
	E. 独創性	とても意識した	14.0%	21.4%	12.6%	13.5%	13.0%	19.9%	18.8%	4.9%	5.9%	12.8%	
		やや意識した	33.9%	30.5%	34.5%	40.5%	32.1%	35.9%	33.8%	21.3%	22.4%	40.3%	
		あまり意識しなかった	36.6%	32.8%	37.5%	38.7%	45.0%	40.4%	39.8%	19.7%	20.0%	38.3%	
		全く意識しなかった	6.4%	6.9%	6.3%	5.4%	9.9%	3.8%	4.5%	3.3%	9.4%	8.1%	
		非該当・無回答	9.2%	8.4%	9.1%	1.8%	0.0%	0.0%	3.0%	50.8%	42.4%	0.7%	
	F. 論理的な文章構成	とても意識した	23.4%	26.0%	23.0%	34.2%	21.4%	26.3%	27.1%	9.8%	10.6%	24.2%	
		やや意識した	48.1%	50.4%	47.7%	48.6%	55.7%	50.6%	51.9%	26.2%	29.4%	54.4%	
		あまり意識しなかった	17.7%	13.0%	18.7%	15.3%	19.8%	22.4%	17.3%	13.1%	11.8%	18.8%	
		全く意識しなかった	2.0%	3.1%	1.9%	1.8%	3.1%	6.6%	1.5%	0.0%	5.9%	2.0%	
		非該当・無回答	8.8%	7.6%	8.8%	0.0%	0.0%	0.0%	2.3%	50.8%	42.4%	0.7%	
	G. 文章の分かりやすさ	とても意識した	24.0%	16.8%	25.4%	31.5%	22.1%	31.4%	30.1%	11.5%	14.1%	18.1%	
		やや意識した	51.9%	51.9%	52.0%	60.4%	54.2%	52.6%	54.1%	29.5%	28.2%	63.8%	
		あまり意識しなかった	13.6%	21.4%	12.2%	8.1%	20.6%	14.1%	12.8%	8.2%	10.6%	16.1%	
		全く意識しなかった	1.8%	2.3%	1.7%	0.0%	3.1%	1.9%	1.5%	0.0%	4.7%	1.3%	
		非該当・無回答	8.7%	7.6%	8.8%	0.0%	0.0%	1.5%	1.5%	50.8%	42.4%	0.7%	
	Q 8 今のあなたにとって、卒業論文・卒業研究の執筆にはどのような意義があったと思いますか。	A. 学術論文を書くという経験	とてもあてはまる	48.7%	42.0%	50.0%	57.7%	62.6%	57.1%	45.1%	29.5%	27.1%	44.3%
			ややあてはまる	35.4%	42.7%	34.2%	35.1%	26.7%	35.3%	45.9%	18.0%	22.4%	49.7%
			あまりあてはまらない	5.2%	5.3%	5.2%	6.3%	5.3%	5.1%	6.8%	0.0%	3.5%	6.0%
			全くあてはまらない	1.8%	1.5%	1.9%	9.9%	4.6%	1.3%	8.8%	1.6%	4.7%	0.0%
			非該当・無回答	8.9%	8.4%	8.8%	0.0%	0.8%	1.3%	1.5%	50.8%	42.4%	0.7%
B. 学門の奥深さに触れる経験		とてもあてはまる	34.1%	27.5%	35.3%	42.3%	47.3%	44.2%	34.6%	16.4%	17.6%	21.5%	
		ややあてはまる	37.0%	38.2%	36.9%	40.5%	38.9%	36.5%	40.6%	18.0%	23.5%	46.3%	
		あまりあてはまらない	17.2%	21.4%	16.5%	14.4%	10.7%	15.4%	21.1%	11.5%	9.4%	30.9%	
		全くあてはまらない	2.7%	4.6%	2.3%	2.7%	2.3%	2.6%	2.3%	3.3%	5.9%	1.3%	
		非該当・無回答	9.0%	8.4%	8.9%	0.0%	0.8%	1.3%	1.5%	50.8%	43.5%	0.0%	
C. 専門教育の総仕上げ		とてもあてはまる	23.9%	16.0%	25.4%	27.0%	32.1%	30.1%	22.6%	14.8%	17.6%	16.8%	
		ややあてはまる	35.9%	41.2%	34.9%	39.6%	35.9%	39.1%	38.3%	19.7%	17.6%	44.3%	
		あまりあてはまらない	26.0%	26.0%	26.1%	24.3%	26.7%	26.3%	33.8%	9.8%	12.9%	34.2%	
		全くあてはまらない	5.2%	8.4%	4.6%	9.0%	4.6%	3.2%	3.8%	4.9%	8.2%	4.7%	
		非該当・無回答	9.0%	8.4%	8.9%	0.0%	0.8%	1.3%	1.5%	50.8%	43.5%	0.0%	
D. 専門分野の知識の深化		とてもあてはまる	25.9%	22.1%	26.7%	33.3%	32.8%	33.3%	21.1%	13.1%	15.3%	22.1%	
		ややあてはまる	40.4%	45.0%	39.5%	41.4%	42.0%	42.9%	46.6%	21.3%	24.7%	47.0%	
		あまりあてはまらない	20.6%	19.1%	21.0%	20.7%	20.6%	18.6%	28.6%	9.8%	8.2%	27.5%	
		全くあてはまらない	3.9%	5.3%	3.6%	4.5%	3.8%	3.8%	2.3%	4.9%	7.1%	2.7%	
		非該当・無回答	9.3%	8.4%	9.2%	0.0%	0.8%	1.3%	1.5%	50.8%	44.7%	0.7%	
E. 困難なことを最後までやり遂げる経験		とてもあてはまる	41.8%	32.8%	43.7%	48.6%	56.5%	42.3%	51.1%	24.6%	27.1%	30.9%	
		ややあてはまる	36.4%	39.7%	35.8%	38.7%	31.3%	42.3%	38.3%	13.1%	22.4%	49.0%	
		あまりあてはまらない	10.1%	14.5%	9.3%	10.8%	6.9%	11.5%	8.3%	9.8%	3.5%	16.8%	
		全くあてはまらない	2.7%	4.6%	2.3%	1.8%	4.6%	2.6%	8.8%	1.6%	3.5%	3.4%	
		非該当・無回答	9.0%	8.4%	8.9%	0.0%	0.8%	1.3%	1.5%	50.8%	43.5%	0.0%	
F. 自分の主張を分かりやすく伝える方法を学ぶ経験		とてもあてはまる	23.1%	22.9%	23.3%	26.1%	20.6%	33.3%	26.3%	9.8%	10.6%	22.1%	
		ややあてはまる	41.3%	38.2%	42.0%	42.3%	43.5%	41.0%	48.1%	26.2%	23.5%	49.7%	
		あまりあてはまらない	23.3%	27.5%	22.6%	27.0%	32.1%	22.4%	21.1%	11.5%	14.1%	26.2%	
		全くあてはまらない	3.1%	3.1%	3.2%	4.5%	3.1%	1.9%	3.0%	1.6%	7.1%	2.0%	
		非該当・無回答	9.2%	8.4%	9.1%	0.0%	0.8%	1.3%	1.5%	50.8%	44.7%	0.7%	
G. 主体的な学習態度を養う経験		とてもあてはまる	31.0%	29.0%	31.3%	38.7%	38.2%	33.3%	33.1%	14.8%	20.0%	26.8%	
		ややあてはまる	41.1%	41.2%	41.2%	43.2%	40.5%	44.9%	47.4%	21.3%	23.5%	49.7%	
		あまりあてはまらない	16.6%	19.8%	16.1%	13.5%	19.1%	19.9%	15.0%	11.5%	9.4%	21.5%	
		全くあてはまらない	2.4%	2.3%	2.4%	4.5%	2.3%	6.6%	3.0%	1.6%	3.5%	2.0%	
		非該当・無回答	8.9%	7.6%	8.9%	0.0%	0.0%	1.3%	1.5%	50.8%	43.5%	0.0%	

Q9 卒業時、あなたは卒業論文・卒業研究の執筆にはどのような意義があるか、思っていましたか。	A. 学術論文を書くという経験	とてもあてはまる	40.7%	26.7%	43.4%	43.2%	46.6%	50.6%	40.6%	19.7%	31.8%	36.9%	
		ややあてはまる	37.8%	48.1%	36.1%	42.3%	38.2%	37.8%	42.9%	24.6%	16.5%	48.3%	
		あまりあてはまらない	9.8%	14.5%	8.9%	11.7%	9.9%	8.3%	13.5%	1.6%	3.5%	13.4%	
		全くあてはまらない	2.9%	2.3%	3.0%	2.7%	4.6%	2.6%	1.5%	3.3%	5.9%	1.3%	
	B. 学問の奥深さに触れる経験	とてもあてはまる	26.3%	19.8%	27.4%	30.6%	33.6%	32.1%	29.3%	14.8%	14.1%	18.8%	
		ややあてはまる	41.4%	39.7%	42.0%	45.0%	41.2%	44.9%	46.6%	19.7%	28.2%	48.3%	
		あまりあてはまらない	19.3%	22.9%	18.7%	18.9%	18.3%	21.2%	18.0%	11.5%	9.4%	28.9%	
		全くあてはまらない	4.1%	9.2%	3.2%	5.4%	6.1%	1.3%	3.8%	3.3%	5.9%	4.0%	
	C. 専門教育の総仕上げ	とてもあてはまる	32.9%	24.4%	34.6%	33.3%	40.5%	39.1%	35.3%	14.8%	20.0%	32.2%	
		ややあてはまる	34.7%	34.4%	34.8%	36.0%	35.9%	38.5%	39.1%	18.0%	24.7%	37.6%	
		あまりあてはまらない	19.3%	27.5%	17.8%	23.4%	19.1%	19.9%	20.3%	13.1%	3.5%	26.8%	
		全くあてはまらない	4.2%	6.1%	3.9%	7.2%	4.6%	1.3%	3.8%	3.3%	8.2%	3.4%	
	D. 専門分野の知識の深化	とてもあてはまる	26.7%	21.4%	27.9%	28.8%	32.1%	34.6%	26.3%	16.4%	17.6%	22.1%	
		ややあてはまる	43.9%	47.3%	43.2%	49.5%	45.0%	48.7%	47.4%	18.0%	24.7%	52.3%	
		あまりあてはまらない	17.6%	18.3%	17.5%	17.1%	17.6%	14.7%	21.8%	13.1%	8.2%	24.8%	
		全くあてはまらない	3.0%	4.6%	2.7%	4.5%	4.6%	1.3%	3.0%	1.6%	7.1%	.7%	
	E. 困難なことを最後までやり遂げる経験	とてもあてはまる	38.3%	32.8%	39.5%	43.2%	50.4%	41.0%	44.4%	19.7%	25.9%	30.9%	
		ややあてはまる	32.5%	32.1%	32.6%	36.0%	26.7%	35.9%	39.8%	19.7%	22.4%	36.2%	
		あまりあてはまらない	16.1%	20.6%	15.4%	17.1%	17.6%	17.9%	12.0%	8.2%	4.7%	26.2%	
		全くあてはまらない	4.1%	6.1%	3.7%	3.6%	4.6%	3.8%	2.3%	1.6%	4.7%	6.7%	
	F. 自分の主張を分かりやすく伝える方法を学ぶ経験	とてもあてはまる	18.7%	13.7%	19.7%	23.4%	13.7%	26.9%	23.3%	9.8%	10.6%	14.8%	
		ややあてはまる	39.8%	34.4%	40.8%	39.6%	44.3%	43.6%	47.4%	19.7%	27.1%	40.9%	
		あまりあてはまらない	27.8%	34.4%	26.7%	29.7%	34.4%	26.9%	24.8%	13.1%	14.1%	38.9%	
		全くあてはまらない	4.8%	9.2%	4.0%	7.2%	6.9%	1.9%	3.0%	6.6%	4.7%	5.4%	
	G. 主体的な学習態度を養う経験	とてもあてはまる	24.9%	21.4%	25.6%	31.5%	24.4%	32.1%	29.3%	9.8%	12.9%	21.5%	
		ややあてはまる	40.6%	35.9%	41.7%	36.9%	41.2%	46.2%	45.9%	24.6%	29.4%	46.3%	
		あまりあてはまらない	20.7%	26.0%	19.8%	22.5%	26.7%	19.2%	18.8%	9.8%	10.6%	28.2%	
		全くあてはまらない	4.9%	8.4%	4.3%	9.0%	6.9%	1.9%	4.5%	4.9%	4.7%	4.0%	
	Q10 大学時代に、あなたは以下に示すような知識・能力をどのくらい身につけることができましたか。	A. 専門分野の知識	かなり身についた	17.2%	18.3%	17.1%	21.6%	15.3%	23.1%	15.0%	9.8%	17.6%	14.1%
			やや身についた	63.9%	58.8%	64.9%	59.5%	71.0%	62.2%	58.6%	59.0%	60.0%	72.5%
			あまり身につかなかった	16.3%	19.1%	15.8%	14.4%	10.7%	13.5%	25.6%	26.2%	18.8%	12.1%
			全く身につかなかった	1.9%	3.1%	1.7%	4.5%	2.3%	0.0%	.8%	4.9%	2.4%	1.3%
		B. 専門分野以外の幅広い知識	かなり身についた	11.7%	15.3%	10.9%	11.7%	9.9%	11.5%	11.3%	14.8%	8.2%	14.1%
			やや身についた	57.1%	59.5%	56.9%	50.5%	57.3%	59.6%	59.4%	52.5%	62.4%	57.0%
			あまり身につかなかった	28.8%	22.9%	30.0%	35.1%	29.0%	27.6%	27.1%	32.8%	24.7%	28.2%
			全く身につかなかった	1.4%	1.5%	1.4%	1.8%	3.1%	0.0%	2.3%	0.0%	3.5%	0.0%
		C. 常識にとらわれることなく批判的に考える力	かなり身についた	15.4%	26.0%	13.4%	20.7%	18.3%	15.4%	11.3%	18.0%	14.1%	12.1%
			やや身についた	35.1%	37.4%	34.8%	45.9%	35.9%	43.6%	27.8%	26.2%	30.6%	30.2%
			あまり身につかなかった	44.3%	32.8%	46.7%	30.6%	41.2%	35.3%	54.9%	49.2%	49.4%	53.7%
			全く身につかなかった	4.6%	3.8%	4.7%	2.7%	4.6%	4.5%	6.0%	6.6%	4.7%	4.0%
		D. 他者と協力してものごとを進める力	かなり身についた	14.6%	13.0%	14.9%	10.8%	13.7%	16.7%	16.5%	19.7%	15.3%	12.1%
			やや身についた	43.1%	31.3%	45.5%	29.7%	32.1%	47.4%	51.1%	36.1%	43.5%	54.4%
			あまり身につかなかった	35.2%	45.0%	33.3%	45.0%	43.5%	32.1%	26.3%	37.7%	37.6%	29.5%
			全く身につかなかった	6.3%	9.9%	5.6%	14.4%	9.9%	2.6%	6.0%	4.9%	2.4%	4.0%
		E. 自分の考えを他者に文章で伝える力	かなり身についた	15.8%	16.8%	15.5%	19.8%	15.3%	24.4%	7.5%	19.7%	8.2%	13.4%
			やや身についた	55.1%	58.8%	54.6%	53.2%	57.3%	54.5%	66.2%	50.8%	49.4%	51.7%
			あまり身につかなかった	25.9%	19.8%	27.2%	23.4%	24.4%	18.6%	23.3%	27.9%	37.6%	32.2%
			全く身につかなかった	2.4%	3.8%	2.2%	2.7%	2.3%	1.3%	3.0%	1.6%	3.5%	2.7%
F. 自分の考えを他者に口頭で伝える力		かなり身についた	11.6%	14.5%	11.1%	13.5%	10.7%	17.3%	9.0%	14.8%	9.4%	7.4%	
		やや身についた	45.4%	35.9%	47.4%	47.7%	40.5%	47.4%	51.9%	50.8%	40.0%	41.6%	
		あまり身につかなかった	38.4%	43.5%	37.5%	35.1%	40.5%	30.8%	36.8%	32.8%	47.1%	46.3%	
		全く身につかなかった	3.9%	5.3%	3.6%	3.6%	7.6%	3.2%	2.3%	1.6%	2.4%	4.7%	
G. 自分の適性や能力を把握する力		かなり身についた	12.8%	10.7%	13.2%	6.3%	11.5%	15.4%	17.3%	14.8%	11.8%	12.1%	
		やや身についた	46.1%	44.3%	46.6%	37.8%	37.4%	50.0%	50.4%	44.3%	52.9%	49.0%	
		あまり身につかなかった	36.5%	37.4%	36.5%	46.8%	45.0%	31.4%	28.6%	34.4%	34.1%	36.9%	
		全く身につかなかった	3.7%	6.9%	3.2%	8.1%	5.3%	1.9%	3.8%	6.6%	0.0%	2.0%	
H. 目標を立てて計画的に行動する力		かなり身についた	16.9%	11.5%	18.0%	9.0%	19.1%	17.3%	22.6%	24.6%	11.8%	15.4%	
		やや身についた	48.7%	42.7%	50.0%	52.3%	41.2%	48.7%	53.4%	47.5%	44.7%	51.7%	
		あまり身につかなかった	29.5%	36.6%	28.2%	33.3%	32.8%	28.8%	19.5%	24.6%	41.2%	28.9%	
		全く身につかなかった	4.0%	8.4%	3.2%	5.4%	6.1%	2.6%	4.5%	3.3%	1.2%	4.0%	
I. 広い視野から人間を探究する力		かなり身についた	21.8%	27.5%	20.8%	22.5%	19.1%	23.1%	21.1%	24.6%	21.2%	22.8%	
		やや身についた	45.8%	38.9%	47.3%	45.9%	38.2%	40.4%	50.4%	45.9%	43.5%	55.7%	
		あまり身につかなかった	28.1%	29.8%	27.9%	27.0%	36.6%	31.4%	25.6%	26.2%	31.8%	19.5%	
		全く身につかなかった	3.6%	3.1%	3.6%	4.5%	5.3%	3.8%	3.0%	3.3%	2.4%	2.0%	

付録10

卒業生調査クロス表

Q11 文学部を卒業した直後の進路と、現在(2013年1月1日時点)の状況を教えてください。	卒業直後	正社員	61.4%	46.6%	64.4%	53.2%	51.1%	60.3%	75.9%	75.4%	75.3%	52.3%
		公務員・教員(正職員として)	4.5%	6.1%	4.2%	6.3%	3.1%	6.4%	2.3%	3.3%	1.2%	6.7%
		派遣社員・契約社員	6.3%	5.3%	6.5%	8.1%	11.5%	6.4%	5.3%	1.6%	7.1%	2.7%
		公務員・教員(非常勤または臨時職員として)	2.9%	1.5%	3.2%	4.5%	1.5%	5.8%	.8%	1.6%	1.2%	2.7%
		自営業・家族従業者	.6%	0.0%	.7%	.9%	1.5%	0.0%	.8%	1.6%	0.0%	0.0%
		パート・アルバイト	4.2%	5.3%	4.0%	4.5%	9.2%	3.2%	1.5%	4.9%	3.5%	3.4%
		専門学校に進学	2.2%	3.1%	2.0%	4.5%	.8%	2.6%	.8%	0.0%	1.2%	4.0%
		大学院に進学	10.8%	19.1%	9.3%	11.7%	14.5%	9.6%	4.5%	3.3%	3.5%	21.5%
		専業主婦・専業主夫	.5%	0.0%	.6%	.9%	0.0%	.6%	.8%	1.6%	0.0%	0.0%
		就職活動	2.4%	6.1%	1.7%	2.7%	5.3%	1.9%	2.3%	1.6%	0.0%	2.0%
	特に何もしていない	1.6%	5.3%	.9%	.9%	.8%	1.3%	2.3%	1.6%	1.2%	2.7%	
	その他	1.8%	1.5%	1.9%	1.8%	.8%	1.3%	1.5%	3.3%	4.7%	1.3%	
	無回答	.8%	0.0%	.7%	0.0%	0.0%	.6%	1.5%	0.0%	1.2%	.7%	
	現在	正社員	43.4%	48.1%	42.5%	38.7%	41.2%	37.2%	51.1%	59.0%	51.8%	37.6%
		公務員・教員(正職員として)	10.2%	25.2%	7.5%	11.7%	13.0%	13.5%	6.8%	3.3%	2.4%	14.1%
		派遣社員・契約社員	8.6%	5.3%	9.2%	15.3%	9.2%	10.3%	6.8%	6.6%	2.4%	7.4%
		公務員・教員(非常勤または臨時職員として)	3.9%	5.3%	3.6%	2.7%	3.1%	3.2%	3.0%	1.6%	1.2%	9.4%
		自営業・家族従業者	3.1%	5.3%	2.7%	3.6%	3.8%	1.3%	5.3%	0.0%	4.7%	2.7%
		パート・アルバイト	5.1%	3.8%	5.3%	6.3%	5.3%	5.8%	3.8%	4.9%	5.9%	4.0%
		専門学校に在学中	.4%	.8%	.3%	0.0%	.8%	.6%	0.0%	0.0%	1.2%	0.0%
大学院に在学中		.7%	.8%	.7%	0.0%	1.5%	.6%	0.0%	0.0%	1.2%	1.3%	
専業主婦・専業主夫		18.8%	0.0%	22.4%	14.4%	15.3%	22.4%	17.3%	23.0%	24.7%	17.4%	
就職活動中		1.2%	1.5%	1.1%	.9%	3.1%	0.0%	.8%	1.6%	1.2%	1.3%	
特に何もしていない	.6%	1.5%	.4%	1.8%	.8%	.6%	.8%	0.0%	0.0%	0.0%		
その他	3.4%	2.3%	3.6%	4.5%	3.1%	3.2%	3.8%	0.0%	2.4%	4.7%		
無回答	.7%	0.0%	.6%	0.0%	0.0%	1.3%	.8%	0.0%	1.2%	0.0%		
Q12 あなたは大学卒業後、開業を志していましたか。	卒業後、就職し、現在まで同じ会社(官庁・学校等含む)で働いている	30.6%	39.7%	28.9%	27.0%	29.8%	27.6%	36.8%	32.8%	27.1%	32.9%	
	卒業後、就職し、転職したが、ほぼ継続して働き続けている	33.3%	39.7%	32.2%	35.1%	38.9%	34.6%	29.3%	32.8%	32.9%	30.2%	
	卒業後、就職し、結婚・出産等を機に退職し、現在まで働いていない	16.4%	0.0%	19.5%	11.7%	11.5%	21.8%	15.0%	18.0%	23.5%	14.8%	
	卒業後、就職し、結婚・出産等を機に退職したが、現在は働いている	5.5%	0.0%	6.6%	4.5%	2.3%	6.4%	8.3%	3.3%	3.5%	8.1%	
	その他	13.4%	19.8%	12.2%	21.6%	17.6%	8.3%	8.3%	13.1%	12.9%	14.1%	
無回答	.8%	.8%	.6%	0.0%	0.0%	1.3%	2.3%	0.0%	0.0%	0.0%		
Q13 現在の年収(税引き前)	本人	なし	18.2%	.8%	21.6%	16.2%	14.5%	21.2%	16.5%	23.0%	23.5%	16.1%
		200万円未満	12.2%	8.4%	12.9%	15.3%	15.3%	12.8%	9.0%	9.8%	10.6%	11.4%
		200~400万円	24.3%	17.6%	25.7%	26.1%	23.7%	24.4%	21.1%	23.0%	24.7%	27.5%
		400~600万円	29.5%	41.2%	27.3%	31.5%	25.2%	27.6%	31.6%	26.2%	29.4%	33.6%
		600~800万円	9.3%	21.4%	7.0%	.9%	14.5%	7.7%	12.8%	14.8%	4.7%	10.1%
		800~1000万円	2.2%	5.3%	1.6%	2.7%	3.8%	.6%	3.0%	1.6%	2.4%	1.3%
		1000万円以上	1.2%	3.8%	.7%	.9%	1.5%	1.9%	3.0%	0.0%	0.0%	0.0%
	無回答	3.1%	1.5%	3.2%	6.3%	1.5%	3.8%	3.0%	1.6%	4.7%	0.0%	
	配偶者	なし	3.7%	22.9%	.1%	4.5%	6.1%	3.8%	2.3%	1.6%	3.5%	3.4%
		200万円未満	2.0%	8.4%	.9%	2.7%	3.8%	0.0%	1.5%	1.6%	1.2%	3.4%
		200~400万円	4.7%	8.4%	4.0%	2.7%	8.4%	3.8%	3.8%	4.9%	7.1%	3.4%
		400~600万円	16.7%	9.9%	18.1%	13.5%	14.5%	21.2%	22.6%	14.8%	10.6%	16.1%
		600~800万円	15.5%	2.3%	18.1%	11.7%	7.6%	14.1%	18.8%	18.0%	20.0%	20.8%
800~1000万円		7.1%	0.0%	8.5%	8.1%	2.3%	6.4%	6.8%	14.8%	5.9%	8.7%	
1000万円以上	4.2%	0.0%	5.0%	4.5%	2.3%	1.9%	8.3%	3.3%	4.7%	4.7%		
配偶者なし	41.7%	44.3%	41.2%	45.0%	50.4%	44.9%	32.3%	39.3%	41.2%	38.3%		
無回答	4.2%	3.8%	4.0%	7.2%	4.6%	3.8%	3.8%	1.6%	5.9%	1.3%		
Q14 現在、あなたは以下に示すような知識・能力をどのくらい身につけていますか。	A. 常識にとらわれることなく批判的に考える力	かなり身につけている	24.9%	39.7%	22.1%	27.9%	26.0%	25.0%	24.1%	24.6%	20.0%	25.5%
		やや身につけている	56.1%	49.6%	57.6%	55.9%	57.3%	55.8%	56.4%	63.9%	60.0%	51.0%
		あまり身につけていない	18.2%	10.7%	19.7%	15.3%	16.0%	18.6%	18.8%	11.5%	20.0%	23.5%
		全く身につけていない	.4%	0.0%	.4%	.9%	.8%	0.0%	.8%	0.0%	0.0%	0.0%
	無回答	.4%	0.0%	.1%	0.0%	0.0%	.6%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	
	B. 他者と協力してものごとを進める力	かなり身につけている	37.6%	32.1%	38.8%	27.9%	35.1%	26.9%	45.1%	42.6%	45.9%	45.6%
		やや身につけている	52.8%	53.4%	52.9%	56.8%	55.7%	61.5%	45.9%	49.2%	48.2%	49.0%
		あまり身につけていない	8.7%	13.0%	7.8%	15.3%	6.9%	10.9%	7.5%	8.2%	5.9%	5.4%
		全く身につけていない	.5%	.8%	.4%	0.0%	1.5%	0.0%	1.5%	0.0%	0.0%	0.0%
	無回答	.5%	.8%	.1%	0.0%	.8%	.6%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	
	C. 自分の考えを他者に文章で伝える力	かなり身につけている	31.9%	44.3%	29.6%	33.3%	35.9%	35.9%	29.3%	32.8%	25.9%	28.9%
		やや身につけている	52.8%	46.6%	54.2%	51.4%	48.1%	49.4%	54.9%	54.1%	54.1%	59.1%
		あまり身につけていない	14.1%	8.4%	15.2%	12.6%	14.5%	14.1%	15.0%	11.5%	20.0%	12.1%
		全く身につけていない	.6%	0.0%	.7%	1.8%	.8%	0.0%	.8%	1.6%	0.0%	0.0%
	無回答	.6%	.8%	.3%	.9%	.8%	.6%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	
	D. 自分の考えを他者に口頭で伝える力	かなり身につけている	26.1%	29.0%	25.7%	28.8%	22.9%	23.1%	33.8%	24.6%	27.1%	24.2%
		やや身につけている	53.4%	54.2%	53.3%	48.6%	58.0%	50.0%	44.4%	60.7%	56.5%	60.4%
		あまり身につけていない	18.9%	14.5%	19.8%	21.6%	16.0%	25.6%	20.3%	14.8%	16.5%	14.1%
		全く身につけていない	1.1%	1.5%	1.0%	.9%	2.3%	.6%	1.5%	0.0%	0.0%	1.3%
	無回答	.5%	.8%	.1%	0.0%	.8%	.6%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	
E. 自分の適性や能力を把握する力	かなり身につけている	24.6%	26.0%	24.4%	19.8%	20.6%	17.3%	30.1%	34.4%	28.2%	28.9%	
	やや身につけている	61.7%	58.0%	62.5%	64.9%	59.5%	67.9%	57.1%	52.5%	57.6%	65.1%	
	あまり身につけていない	12.4%	13.7%	12.2%	14.4%	16.0%	14.1%	11.3%	13.1%	14.1%	6.0%	
	全く身につけていない	.8%	1.5%	.7%	.9%	3.1%	0.0%	1.5%	0.0%	0.0%	0.0%	
無回答	.5%	.8%	.1%	0.0%	.8%	.6%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%		
F. 目標を立てて計画的に行動する力	かなり身につけている	33.0%	27.5%	34.2%	25.2%	29.8%	28.2%	42.9%	36.1%	29.4%	39.6%	
	やや身につけている	50.1%	48.1%	50.6%	50.5%	48.9%	54.5%	46.6%	57.4%	48.2%	47.7%	
	あまり身につけていない	15.7%	22.9%	14.4%	23.4%	19.1%	16.0%	9.0%	6.6%	22.4%	12.8%	
	全く身につけていない	.6%	.8%	.6%	.9%	1.5%	0.0%	1.5%	0.0%	0.0%	0.0%	
無回答	.6%	.8%	.3%	0.0%	.8%	1.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%		
G. 広い視野から人間を探求する力	かなり身につけている	27.5%	29.8%	27.2%	25.2%	20.6%	28.8%	30.8%	34.4%	23.5%	30.2%	
	やや身につけている	52.5%	48.1%	53.4%	58.6%	47.3%	48.1%	50.4%	45.9%	67.1%	54.4%	
	あまり身につけていない	18.3%	20.6%	18.0%	15.3%	27.5%	21.2%	18.8%	18.0%	9.4%	14.8%	
	全く身につけていない	1.2%	.8%	1.3%	.9%	3.8%	1.3%	0.0%	1.6%	0.0%	.7%	
無回答	.5%	.8%	.1%	0.0%	.8%	.6%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%		

Q15 あなた現在の お仕事について 教えてください。	A. 仕事に関する知識を 十分身につけている	とてもあてはまる	14.5%	18.3%	13.8%	7.2%	20.6%	14.7%	13.5%	16.4%	16.5%	13.4%
		ややあてはまる	54.6%	61.1%	53.4%	59.5%	51.9%	53.2%	58.6%	52.5%	51.8%	54.4%
		あまりあてはまらない	10.6%	16.8%	9.5%	15.3%	8.4%	9.0%	9.0%	6.6%	9.4%	14.8%
		全くあてはまらない	5%	8%	4%	0.0%	8%	0.0%	8%	0.0%	0.0%	7%
	非該当・無回答	19.9%	3.1%	22.8%	18.0%	18.3%	23.1%	18.0%	24.6%	22.4%	16.8%	
	B. 仕事においてよい成 果をあげている	とてもあてはまる	14.0%	16.0%	13.6%	6.3%	16.0%	14.7%	12.0%	16.4%	17.6%	16.1%
		ややあてはまる	53.5%	60.3%	52.3%	57.7%	51.9%	50.0%	58.6%	44.3%	51.8%	56.4%
		あまりあてはまらない	11.4%	18.3%	10.2%	18.0%	10.7%	11.5%	9.8%	11.5%	8.2%	10.7%
		全くあてはまらない	1.0%	2.3%	7%	0.0%	3.1%	0.0%	1.5%	1.6%	0.0%	0.0%
	非該当・無回答	20.1%	3.1%	23.1%	18.0%	18.3%	23.7%	18.0%	26.2%	22.4%	16.8%	
	C. 職場で良好な人間関 係を築いている	とてもあてはまる	31.1%	30.5%	31.3%	24.3%	34.4%	23.1%	41.4%	27.9%	37.6%	30.9%
		ややあてはまる	44.2%	58.0%	41.7%	51.4%	42.7%	50.0%	36.1%	44.3%	36.5%	46.3%
		あまりあてはまらない	4.0%	6.1%	3.6%	6.3%	1.5%	3.8%	3.8%	3.3%	3.5%	5.4%
		全くあてはまらない	8%	2.3%	6%	0.0%	3.1%	0.0%	8%	0.0%	0.0%	7%
	非該当・無回答	19.9%	3.1%	22.8%	18.0%	18.3%	23.1%	18.0%	24.6%	22.4%	16.8%	
	D. 仕事に関連した学習 を職場以外でも行って いる	とてもあてはまる	18.9%	30.5%	16.8%	18.9%	17.6%	20.5%	15.8%	19.7%	14.1%	24.2%
		ややあてはまる	25.9%	28.2%	25.4%	21.6%	22.1%	24.4%	33.8%	23.0%	25.9%	28.2%
		あまりあてはまらない	22.8%	22.9%	22.8%	26.1%	26.0%	19.9%	21.1%	23.0%	22.4%	22.8%
		全くあてはまらない	12.4%	15.3%	11.9%	15.3%	16.0%	12.2%	11.3%	9.8%	14.1%	8.1%
	非該当・無回答	20.0%	3.1%	23.0%	18.0%	18.3%	23.1%	18.0%	24.6%	23.5%	16.8%	
	E. 仕事の負担が重い	とてもあてはまる	12.3%	23.7%	10.2%	9.0%	16.0%	16.7%	11.3%	13.1%	8.2%	10.1%
		ややあてはまる	27.2%	31.3%	26.4%	22.5%	26.7%	20.5%	33.1%	34.4%	27.1%	30.2%
		あまりあてはまらない	32.0%	32.1%	32.2%	38.7%	27.5%	34.0%	30.1%	26.2%	30.6%	34.9%
		全くあてはまらない	8.7%	9.9%	8.5%	12.6%	11.5%	5.8%	7.5%	1.6%	11.8%	8.1%
	非該当・無回答	19.8%	3.1%	22.7%	17.1%	18.3%	23.1%	18.0%	24.6%	22.4%	16.8%	
	F. 全体的に見て仕事に ついて満足している	とてもあてはまる	20.0%	23.7%	19.4%	11.7%	21.4%	23.7%	19.5%	21.3%	23.5%	19.5%
		ややあてはまる	42.4%	44.3%	42.1%	47.7%	39.7%	37.8%	49.6%	39.3%	37.6%	43.6%
		あまりあてはまらない	14.3%	19.1%	13.5%	15.3%	13.7%	12.8%	12.0%	13.1%	16.5%	17.4%
		全くあてはまらない	3.3%	9.9%	2.0%	7.2%	6.9%	2.6%	8%	1.6%	0.0%	2.0%
	非該当・無回答	20.0%	3.1%	23.0%	18.0%	18.3%	23.1%	18.0%	24.6%	22.4%	17.4%	
	G. 専門分野での学びが 役立っている	とてもあてはまる	10.5%	17.6%	9.2%	10.8%	12.2%	13.5%	6.0%	6.6%	2.4%	16.1%
		ややあてはまる	18.4%	19.8%	18.1%	18.9%	14.5%	16.7%	15.0%	9.8%	16.5%	30.9%
		あまりあてはまらない	23.1%	29.8%	22.0%	18.9%	23.7%	26.3%	28.6%	11.5%	27.1%	20.8%
		全くあてはまらない	28.3%	29.8%	28.2%	34.2%	32.1%	20.5%	32.3%	47.5%	31.8%	15.4%
	非該当・無回答	19.6%	3.1%	22.6%	17.1%	17.6%	23.1%	18.0%	24.6%	22.4%	16.8%	
	H. 専門分野以外の大学 での学びが役立ってい る	とてもあてはまる	10.6%	18.3%	9.2%	10.8%	9.9%	14.7%	6.8%	8.2%	3.5%	15.4%
		ややあてはまる	30.1%	39.7%	28.3%	27.0%	29.8%	27.6%	30.1%	34.4%	29.4%	34.2%
		あまりあてはまらない	25.5%	26.7%	25.4%	26.1%	22.9%	25.0%	29.3%	24.6%	31.8%	22.1%
		全くあてはまらない	14.0%	12.2%	14.4%	18.0%	19.8%	9.6%	15.8%	8.2%	12.9%	11.4%
	非該当・無回答	19.8%	3.1%	22.7%	18.0%	17.6%	23.1%	18.0%	24.6%	22.4%	16.8%	
I. 卒業論文・卒業研究 に取り組んだ経験が役 立っている	とてもあてはまる	7.2%	13.0%	6.0%	9.0%	9.9%	12.2%	1.5%	1.6%	3.5%	7.4%	
	ややあてはまる	20.7%	26.0%	19.8%	27.0%	25.2%	19.9%	21.1%	11.5%	5.9%	25.5%	
	あまりあてはまらない	26.1%	25.2%	26.4%	27.9%	31.3%	27.6%	29.3%	13.1%	14.1%	28.9%	
	全くあてはまらない	19.9%	26.0%	18.8%	18.9%	16.0%	17.3%	29.3%	11.5%	20.0%	21.5%	
非該当・無回答	26.0%	9.9%	28.9%	17.1%	17.6%	23.1%	18.8%	62.3%	56.5%	16.8%		
J. 部活動・サークル活 動の経験が役立ってい る	とてもあてはまる	13.0%	19.8%	11.8%	9.9%	11.5%	15.4%	15.8%	11.5%	10.6%	14.1%	
	ややあてはまる	25.3%	32.1%	24.1%	26.1%	26.0%	23.7%	22.6%	27.9%	17.6%	32.2%	
	あまりあてはまらない	19.4%	19.8%	19.3%	21.6%	21.4%	18.6%	20.3%	19.7%	20.0%	15.4%	
	全くあてはまらない	22.3%	26.0%	21.7%	24.3%	24.4%	17.9%	22.6%	16.4%	29.4%	21.5%	
非該当・無回答	20.0%	2.3%	23.1%	18.0%	16.8%	24.4%	18.8%	24.6%	22.4%	16.8%		

Q16 あなたの私生活に関する ことについて教えてください。	A. 知的好奇心が強いと思う	とてもあてはまる	41.9%	48.9%	40.7%	46.8%	42.0%	50.0%	37.6%	42.6%	34.1%	37.6%
		ややあてはまる	43.1%	43.5%	43.2%	43.2%	39.7%	38.5%	45.1%	42.6%	50.6%	46.3%
		あまりあてはまらない	13.6%	6.9%	14.9%	9.0%	15.3%	10.3%	16.5%	14.8%	15.3%	15.4%
		全くあてはまらない	.5%	0.0%	.6%	0.0%	.8%	.6%	.8%	0.0%	0.0%	.7%
		無回答	.8%	.8%	.6%	.9%	2.3%	.6%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
	B. 仕事以外に打ちこめるものがある	とてもあてはまる	42.2%	49.6%	40.8%	52.3%	42.7%	43.6%	42.1%	39.3%	38.8%	36.2%
		ややあてはまる	39.4%	34.4%	40.5%	31.5%	38.2%	41.7%	42.1%	31.1%	43.5%	43.0%
		あまりあてはまらない	16.4%	15.3%	16.7%	13.5%	16.8%	12.8%	15.8%	27.9%	15.3%	18.8%
		全くあてはまらない	1.0%	0.0%	1.1%	1.8%	.8%	0.0%	0.0%	0.0%	2.4%	2.0%
		無回答	1.1%	.8%	.9%	.9%	1.5%	1.9%	0.0%	1.6%	0.0%	0.0%
	C. 周囲とは良好な人間関係を築いている	とてもあてはまる	44.6%	39.7%	45.7%	44.1%	36.6%	39.7%	47.4%	50.8%	50.6%	49.7%
		ややあてはまる	50.2%	50.4%	50.4%	48.6%	53.4%	53.8%	50.4%	47.5%	48.2%	47.7%
		あまりあてはまらない	4.0%	8.4%	3.0%	5.4%	7.6%	5.8%	2.3%	0.0%	1.2%	2.0%
		全くあてはまらない	.2%	.8%	.1%	0.0%	.8%	0.0%	0.0%	1.6%	0.0%	0.0%
		無回答	1.0%	.8%	.7%	1.8%	1.5%	.6%	0.0%	0.0%	0.0%	.7%
	D. 読書や習い事などを行っている	とてもあてはまる	41.2%	35.9%	42.2%	43.2%	44.3%	48.1%	33.1%	45.9%	41.2%	34.9%
		ややあてはまる	34.5%	35.9%	34.3%	36.9%	27.5%	32.7%	42.1%	26.2%	38.8%	35.6%
		あまりあてはまらない	16.5%	20.6%	15.8%	12.6%	18.3%	14.1%	18.8%	18.0%	10.6%	21.5%
		全くあてはまらない	7.1%	6.9%	7.2%	6.3%	8.4%	4.5%	6.0%	9.8%	9.4%	8.1%
		無回答	.7%	.8%	.4%	.9%	1.5%	.6%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
	E. 私生活に十分な時間を確保できている	とてもあてはまる	27.2%	19.1%	28.9%	27.9%	21.4%	28.2%	25.6%	32.8%	29.4%	28.9%
		ややあてはまる	36.6%	40.5%	36.1%	41.4%	38.2%	34.0%	35.3%	34.4%	36.5%	37.6%
		あまりあてはまらない	29.3%	32.1%	28.7%	22.5%	33.6%	30.8%	30.8%	27.9%	30.6%	27.5%
		全くあてはまらない	6.1%	8.4%	5.7%	7.2%	6.1%	6.4%	7.5%	4.9%	3.5%	6.0%
無回答		.7%	0.0%	.6%	.9%	.8%	.6%	.8%	0.0%	0.0%	0.0%	
F. 全体的に見て私生活に満足している	とてもあてはまる	36.9%	25.2%	39.1%	36.0%	29.0%	42.9%	38.3%	36.1%	34.1%	38.3%	
	ややあてはまる	48.3%	48.9%	48.4%	46.8%	52.7%	39.1%	51.1%	50.8%	56.5%	48.3%	
	あまりあてはまらない	12.3%	20.6%	10.8%	15.3%	12.2%	14.7%	8.3%	13.1%	9.4%	12.8%	
	全くあてはまらない	1.8%	4.6%	1.3%	.9%	4.6%	2.6%	2.3%	0.0%	0.0%	.7%	
	無回答	.7%	.8%	.4%	.9%	1.5%	.6%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	
G. 大学の専門分野での学びが役立っている	とてもあてはまる	14.9%	17.6%	14.4%	19.8%	15.3%	16.7%	7.5%	9.8%	14.1%	17.4%	
	ややあてはまる	31.2%	26.7%	32.2%	34.2%	26.7%	35.3%	31.6%	29.5%	20.0%	36.2%	
	あまりあてはまらない	33.9%	37.4%	33.3%	25.2%	34.4%	32.7%	42.9%	27.9%	35.3%	35.6%	
	全くあてはまらない	19.3%	17.6%	19.7%	19.8%	22.9%	14.7%	17.3%	32.8%	30.6%	10.7%	
	無回答	.7%	.8%	.4%	.9%	.8%	.6%	.8%	0.0%	0.0%	0.0%	
H. 専門分野以外の大学での学びが役立っている	とてもあてはまる	14.9%	20.6%	13.8%	15.3%	13.0%	18.6%	10.5%	18.0%	14.1%	14.8%	
	ややあてはまる	38.2%	36.6%	38.6%	35.1%	40.5%	42.3%	39.1%	47.5%	28.2%	36.2%	
	あまりあてはまらない	33.5%	29.8%	34.3%	35.1%	30.5%	28.2%	37.6%	21.3%	38.8%	39.6%	
	全くあてはまらない	12.7%	12.2%	12.8%	13.5%	14.5%	10.3%	12.8%	13.1%	18.8%	9.4%	
	無回答	.7%	.8%	.4%	.9%	1.5%	.6%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	
I. 卒業論文・卒業研究に取り組んだ経験が役立っている	とてもあてはまる	9.2%	13.0%	8.3%	12.6%	10.7%	13.5%	6.0%	4.9%	5.9%	6.0%	
	ややあてはまる	26.1%	20.6%	27.3%	32.4%	30.5%	29.5%	27.8%	13.1%	14.1%	25.5%	
	あまりあてはまらない	37.1%	38.9%	36.9%	38.7%	46.6%	37.2%	39.8%	14.8%	16.5%	47.0%	
	全くあてはまらない	18.8%	19.8%	18.7%	15.3%	10.7%	19.2%	26.3%	16.4%	21.2%	21.5%	
	非該当・無回答	8.8%	7.6%	8.8%	0.9%	1.5%	0.6%	0.0%	50.8%	42.4%	0.0%	
J. 部活動・サークル活動の経験が役立っている	とてもあてはまる	20.4%	23.7%	19.8%	22.5%	14.5%	21.8%	21.1%	23.0%	20.0%	21.5%	
	ややあてはまる	34.0%	30.5%	34.6%	33.3%	35.1%	33.3%	31.6%	41.0%	31.8%	34.9%	
	あまりあてはまらない	20.0%	21.4%	19.8%	17.1%	20.6%	17.9%	24.8%	16.4%	22.4%	20.1%	
	全くあてはまらない	24.5%	23.7%	24.7%	26.1%	29.0%	23.7%	21.8%	19.7%	25.9%	23.5%	
	無回答	1.2%	.8%	1.0%	.9%	.8%	3.2%	.8%	0.0%	0.0%	0.0%	
Q17 あなたの日頃の意識や関心について 教えてください。	A. 将来のことより現在のことを大切にしている	とてもあてはまる	11.3%	10.7%	11.5%	10.8%	13.0%	8.3%	9.8%	9.8%	12.9%	14.1%
		ややあてはまる	58.7%	51.9%	60.2%	65.8%	55.0%	55.1%	59.4%	59.0%	70.6%	54.4%
		あまりあてはまらない	28.2%	35.1%	26.9%	23.4%	27.5%	35.9%	29.3%	31.1%	15.3%	29.5%
		全くあてはまらない	1.3%	1.5%	1.3%	0.0%	3.1%	.6%	1.5%	0.0%	1.2%	2.0%
		無回答	.5%	.8%	.1%	0.0%	1.5%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
	B. 社会に対して高い関心をもっている	とてもあてはまる	21.4%	32.1%	19.5%	22.5%	21.4%	21.2%	24.1%	26.2%	21.2%	17.4%
		ややあてはまる	55.8%	45.8%	57.8%	53.2%	47.3%	57.7%	57.1%	52.5%	60.0%	61.1%
		あまりあてはまらない	21.4%	19.8%	21.8%	23.4%	29.0%	20.5%	18.0%	19.7%	17.6%	20.8%
		全くあてはまらない	.7%	1.5%	.6%	.9%	.8%	0.0%	.8%	1.6%	1.2%	.7%
		無回答	.6%	.8%	.3%	0.0%	1.5%	.6%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
	C. 社会を今よりもよくするために、自分にもできることがあると考えている	とてもあてはまる	18.8%	26.7%	17.4%	19.8%	13.0%	17.3%	22.6%	26.2%	14.1%	20.8%
		ややあてはまる	46.0%	42.7%	46.7%	51.4%	47.3%	51.3%	44.4%	32.8%	42.4%	45.0%
		あまりあてはまらない	31.1%	25.2%	32.3%	26.1%	33.6%	28.2%	28.6%	39.3%	38.8%	30.9%
		全くあてはまらない	3.6%	4.6%	3.4%	2.7%	5.3%	2.6%	4.5%	1.6%	4.7%	3.4%
		無回答	.5%	.8%	.1%	0.0%	.8%	.6%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
D. ボランティアや地域の活動に参加している	とてもあてはまる	6.6%	6.1%	6.8%	9.0%	3.8%	6.4%	8.3%	8.2%	4.7%	6.7%	
	ややあてはまる	14.9%	15.3%	14.9%	11.7%	14.5%	20.5%	12.9%	19.7%	9.4%	14.8%	
	あまりあてはまらない	36.5%	28.2%	38.2%	32.4%	29.8%	41.0%	45.1%	31.1%	31.8%	38.9%	
	全くあてはまらない	41.2%	48.9%	39.8%	46.8%	50.4%	31.4%	33.8%	41.0%	54.1%	38.9%	
	無回答	.7%	1.5%	.3%	0.0%	1.5%	.6%	0.0%	0.0%	0.0%	.7%	
E. 選挙の時は投票に行く	とてもあてはまる	70.7%	80.2%	69.1%	71.2%	71.8%	75.0%	66.9%	73.8%	62.4%	73.2%	
	ややあてはまる	18.1%	11.5%	19.4%	18.0%	16.8%	16.0%	19.5%	23.0%	24.7%	14.8%	
	あまりあてはまらない	6.6%	3.8%	7.2%	8.1%	5.3%	6.4%	9.8%	0.0%	5.9%	6.7%	
	全くあてはまらない	4.1%	3.8%	4.2%	2.7%	4.6%	2.6%	3.8%	3.3%	7.1%	5.4%	
	無回答	.5%	.8%	.1%	0.0%	1.5%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	
Q18 4年生の卒業を考えたとき、あなた自身は、大卒で 結婚して子どもができて仕事を続ける 結婚しないで仕事を続ける 結婚したら仕事をやめる 結婚して子どもができたから仕事をやめる 結婚して子どもができたから、一時、仕事をやめ、育児に手が かからなくなったから仕事を始める その他 無回答	結婚して子どもができて仕事を続ける	43.4%	86.3%	35.5%	45.9%	50.4%	37.2%	42.9%	34.4%	35.3%	51.0%	
	結婚しないで仕事を続ける	7.6%	6.9%	7.6%	9.0%	9.9%	7.1%	6.8%	8.2%	7.1%	5.4%	
	結婚したら仕事をやめる	11.6%	0.0%	13.8%	9.9%	13.0%	16.0%	9.0%	16.4%	15.3%	5.4%	
	結婚して子どもができたから仕事をやめる	12.2%	0.0%	14.5%	9.9%	10.7%	12.2%	15.0%	8.2%	16.5%	12.1%	
	結婚して子どもができたから、一時、仕事をやめ、育児に手が かからなくなったから仕事を始める	18.7%	0.0%	22.3%	18.0%	9.9%	20.5%	17.3%	27.9%	18.8%	22.8%	
	その他	6.0%	6.9%	5.9%	7.2%	5.3%	7.1%	7.5%	4.9%	7.1%	3.4%	
無回答	.6%	0.0%	.4%	0.0%	.8%	0.0%	1.5%	0.0%	0.0%	0.0%		

人文叢書 5

人文系学士課程教育における卒業論文がもたらす学習成果の検証

「人文系学士課程教育における卒業論文がもたらす学習成果の検証」編集委員会編

神田 龍身	鶴間 和幸	佐藤 学
小島 和男	篠田 雅人	日下田 岳史
谷村 英洋	中世古 貴彦	中野 啓太

2015(平成27)年3月31日

発行所 学習院大学人文科学研究所

〒171-8588 東京都豊島区目白1-5-1(北2号館10階)
TEL 03-3986-0221(内線5741) FAX 03-5992-9218
<http://www.gakushuin.ac.jp/univ/let/rihum/>

印刷 新津印刷株式会社

